

熊本県文化財調査報告第 331 集

託麻弓削遺跡群 2

— 白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (6) —

託麻弓削遺跡群 2

熊本県文化財調査報告 第三三一集

二〇一八 熊本県教育委員会

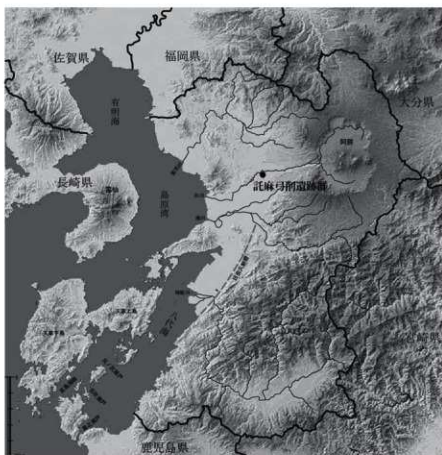
発行者	：	熊本県教育委員会
所 属	：	教育総務局文化課
発行年度	：	平成 29 年度

2018. 3

熊本県教育委員会

託麻弓削遺跡群 2

— 白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (6) —



2018. 3

熊本県教育委員会



調査区全景 5区より白川上流側を望む



託麻弓削遺跡群 全景



4区 全景



5区 全景



出土土器 ㊶ 縄文時代（後期初頭）



出土土器 ㊷ 縄文時代（後期初頭）



出土土器 ③ 縄文時代（後期中葉）



出土土器 ④ 縄文時代（後期中葉）

序 文

平成 24 年 7 月 12 日に発生した熊本広域大水害では未明からの記録的豪雨により甚大な被害をもたらしました。

熊本県教育委員会では、平成 26 年度から 28 年度にかけて白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い、熊本市東区弓削町所在の託麻弓削遺跡群 4 区・5 区の発掘調査を実施しております。

調査の結果、縄文時代後期の土器群や古代の竪穴建物や掘立柱建物など貴重な遺構、遺物が数多く見つかりました。特に、縄文時代後期以降のものと推測される石組炉や土壇墓は、当時の生活の様子を詳しく知ることのできる良好な資料となりました。

本報告が県民の皆様をはじめ、多くの方々手に取られ、埋蔵文化財の保存と活用、ひいては地域の歴史に対する関心と理解、またこの災害の記録を次の世代へ伝える一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導・助言をいただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月 31 日

熊本県教育長 宮尾 千加子

例 言

- 1 本書は、熊本県熊本市東区弓削町に所在する託麻弓削遺跡群 4 区・5 区の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、熊本県県央広域本部土木部の依頼を受け、白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う記録保存のための発掘調査として、平成 26 年度から 29 年度にかけて熊本県教育委員会が実施した。
- 3 現地での発掘調査は、第 1 章第 2 節に記す調査担当者が担当し、現地での遺構実測及び写真撮影も各調査担当者が主に行った。
- 4 現地での 4 級基準点及びメッシュ杭設置業務は、4 区を八洲開発株式会社、5 区を株式会社ワールドコンサルタント、航空写真撮影は、九州航空株式会社熊本営業所にそれぞれ委託した。
- 5 遺物の実測及び製図は、坂井田端志郎、戸田紀美子、中川治、坂本貴美子、藤本香織、宮本康代、中野治美、濱崎清子、立石美代子、嵐英隆、鍋田浩子、園田智子、丸山勉、渡邊いわ子、山本邦子が行い、石器・石製品の一部を株式会社九州文化財研究所に、土器の一部を株式会社イビソク九州支店に委託した。
- 6 自然科学分析は、NPO 法人人類学研究機構に委託して実施した。
- 7 遺物写真撮影は、村田百合子、松本智子、野下智美が行った。
- 8 本書の大扉の地図はカシミールで作成した。周辺遺跡地図で使用した地図は、熊本県・市町村電子自治体共同運営協議会作成の地図を利用した。
- 9 本文の執筆は、坂井田が行った。
- 10 本書は、章、節、項で構成しており、各節の直接的な引用・参考文献については、各節末尾に記載した。本書全体に係る主要参考文献については、本文（第 6 章）末尾に一括記載した。
- 11 発掘資料の整理は、第 1 章第 2 節に記す整理担当者が熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目 1667）において行い、記録及び遺物の保管も同所で行っている。
- 12 本書の編集は、熊本県教育庁教育総務局文化課で行い、坂井田を中心に、戸田、中川が補助した。

凡 例

- 1 調査区座標は、世界測地系（測地成果 2011）に基づくものである。
- 2 本書に記した方位は、方眼北を示す。
- 3 遺構実測図は、現地において遺構配置図 1/20、個別遺構図 1/10、1/20 で作成しているが、本書に掲載した地図、遺構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。
- 4 遺物の実測は原寸で行っているが、本書に掲載した遺物実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。
- 5 土色は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。
- 6 発掘遺構は、遺構の種類を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。
SI（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SL（石組か）、ST（土壇墓）、SX（不明遺構）、P（小穴）
- 7 各調査区ともに、遺構には先頭に S を付けた番号で表示されていた。整理作業の過程で遺構と認められないと判断したものについては、除外したうえで、本書において新たに遺構記号と番号を付している。なお、目次に遺構の新旧対象表を掲載しているので参照されたい。
- 8 出土遺物の実測図において、須恵器については断面を黒で塗色した。土師器喪等の内面の調整で、ヘラケズリは矢印で方向を示した。

本文目次

巻頭図版	
序文	
例言・凡例	
目次	
第1章 序章	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業と整理作業等の体制	1
第3節 発掘作業の経過	3
第4節 整理作業の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法	
第1節 調査方法	9
第2節 整理の方法	9
第3節 層序	9
第4章 調査の成果	
第1節 調査4区	11
第2節 調査5区	17
第3節 遺物観察表	158
第5章 自然科学分析	
第1節 熊本市託麻弓削遺跡群5区出土の縄文人骨	195
第6章 総括	
第1節 調査4区	205
第2節 調査5区	205
第3節 縄文時代の託麻弓削遺跡群	210
参考文献	211
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

- 第1図 熊本市周辺の地質図 熊本市地質図(10万分の1)
- 第2図 周辺遺跡分布図
- 第3図 託麻弓削遺跡群基本土層図(スケール任意)
調査4区
- 第4図 託麻弓削遺跡群4区 遺構配置図(S=1/400)
- 第5図 託麻弓削遺跡群4区 グリッド図(S=1/400)
- 第6図 託麻弓削遺跡群4区 北壁土層断面図(S=1/60)
- 第7図 4区 遺構外出土遺物実測図
調査5区
- 第8図 託麻弓削遺跡群5区 全体図(S=1/400)
[縄文]
- 第9図 託麻弓削遺跡群5区 グリッド図(S=1/600)
- 第10図 託麻弓削遺跡群5区 基本土層図
- 第11図 託麻弓削遺跡群5区 土層断面図(S=1/60)
- 第12図 託麻弓削遺跡群5区 土層断面図(S=1/60)
- 第13図 託麻弓削遺跡群5区 土層断面図(S=1/60)
- 第14図 託麻弓削遺跡群5区 土層断面図(S=1/60)
- 第15図 託麻弓削遺跡群5区 東西トレンチ土層断面
面図(S=1/60)
- 第16図 託麻弓削遺跡群5区 遺構配置図
(S=1/400) - 縄文 -
- 第17図 5区 SLO1 石組跡実測図
- 第18図 5区 SLO1 石組跡 第1面実測図
- 第19図 5区 SLO1 石組跡 第2面実測図
- 第20図 5区 SLO2 石組跡実測図
- 第21図 5区 SLO3 石組跡実測図
- 第22図 5区 SLO4 石組跡実測図
- 第23図 5区 SK33 遺構・出土遺物実測図
- 第24図 5区 SK34 遺構・出土遺物実測図
- 第25図 5区 ST01 人骨出土実測図
- 第26図 5区 ST02 人骨出土実測図
- 第27図 5区 ST03 人骨出土実測図
- 第28図 5区 ST04 人骨出土実測図
- 第29図 5区 SX03 遺構・出土遺物実測図
- 第30図 5区 縄文土器(前期)
- 第31図 5区 縄文土器(後期初頭1)
- 第32図 5区 縄文土器(後期初頭2)
- 第33図 5区 縄文土器(後期初頭3)
- 第34図 5区 縄文土器(後期初頭4)
- 第35図 5区 縄文土器(後期初頭5)
- 第36図 5区 縄文土器(後期初頭6)
- 第37図 5区 縄文土器(後期初頭7)
- 第38図 5区 縄文土器(後期初頭8)
- 第39図 5区 縄文土器(後期初頭9)
- 第40図 5区 縄文土器(後期初頭10)
- 第41図 5区 縄文土器(後期初頭11)
- 第42図 5区 縄文土器(後期初頭12)
- 第43図 5区 縄文土器(後期初頭13)
- 第44図 5区 縄文土器(後期初頭14)
- 第45図 5区 縄文土器(後期初頭15)
- 第46図 5区 縄文土器(後期初頭16)
- 第47図 5区 縄文土器(後期初頭17)
- 第48図 5区 縄文土器(後期初頭18)
- 第49図 5区 縄文土器(後期初頭19)
- 第50図 5区 縄文土器(後期初頭20)
- 第51図 5区 縄文土器(後期初頭21)
- 第52図 5区 縄文土器(後期初頭22)
- 第53図 5区 縄文土器(後期初頭23)
- 第54図 5区 縄文土器(後期初頭24)
- 第55図 5区 縄文土器(後期初頭25)
- 第56図 5区 縄文土器(後期初頭26)
- 第57図 5区 縄文土器(後期初頭27)
- 第58図 5区 縄文土器(後期初頭28)
- 第59図 5区 縄文土器(後期初頭29)
- 第60図 5区 縄文土器(後期初頭30)
- 第61図 5区 縄文土器(後期初頭31)
- 第62図 5区 縄文土器(後期初頭32)
- 第63図 5区 縄文土器(後期初頭33)
- 第64図 5区 縄文土器(後期初頭34)
- 第65図 5区 縄文土器(後期初頭35)
- 第66図 5区 縄文土器(後期初頭36)
- 第67図 5区 縄文土器(後期前葉)
- 第68図 5区 縄文土器(後期中葉1)
- 第69図 5区 縄文土器(後期中葉2)
- 第70図 5区 縄文土器(後期中葉3)
- 第71図 5区 縄文土器(後期中葉4)

- 第72図 5区 縄文土器（後期中葉5）
第73図 5区 縄文土器（後期中葉6）
第74図 5区 縄文土器（後期中葉7）
第75図 5区 縄文土器（後期中葉8）
第76図 5区 縄文土器（後期中葉9）
第77図 5区 縄文土器（後期1）
第78図 5区 縄文土器（後期2）
第79図 5区 縄文土器（後期3）
第80図 5区 縄文土器（後期4）
第81図 5区 縄文土器（後期後半～晩期1）
第82図 5区 縄文土器（後期後半～晩期2）
第83図 5区 土製品 出土遺物実測図
第84図 5区 石鏃 出土遺物実測図
第85図 5区 石匙・十字形石器 出土遺物実測図
第86図 5区 打製石斧 出土遺物実測図(1)
第87図 5区 打製石斧 出土遺物実測図(2)
第88図 5区 打製石斧 出土遺物実測図(3)
第89図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(1)
第90図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(2)
第91図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(3)
第92図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(4)
第93図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(5)
第94図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(6)
第95図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(7)
第96図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(8)
第97図 5区 磨石・敲石 出土遺物実測図
第98図 5区 遺構外出土石器実測図
第99図 5区 石錘 出土遺物実測図
[弥生]
第100図 託麻弓削遺跡群 5区 遺構配置図
(S=1/400)・弥生・
第101図 5区 SI15 遺構・出土遺物実測図
第102図 5区 SI16 遺構実測図
第103図 5区 SI17 遺構・出土遺物実測図
第104図 5区 SI18 遺構・出土遺物実測図
第105図 5区 SI19 遺構・出土遺物実測図
第106図 5区 SI20 遺構・出土遺物実測図
第107図 5区 SK21・22・23・24 遺構実測図
第108図 5区 SK25・26・27・28・29・30 遺構・
出土遺物実測図
第109図 5区 SK31・32 遺構実測図
第110図 5区 SK32 出土遺物実測図
第111図 5区 SX01・02 遺構実測図
第112図 5区 遺構外出土遺物実測図(1)
第113図 5区 遺構外出土遺物実測図(2)
第114図 5区 遺構外出土遺物実測図(3)
第115図 5区 遺構外出土遺物実測図(4)
[古代]
第116図 託麻弓削遺跡群 5区 遺構配置図
(S=1/400)・古代・
第117図 5区 SB01 掘立柱建物跡・出土遺物
実測図
第118図 5区 SI01 遺構・出土遺物実測図
第119図 5区 SI02 遺構・出土遺物実測図
第120図 5区 SI03 遺構・出土遺物実測図
第121図 5区 SI04 遺構・出土遺物実測図
第122図 5区 SI05 遺構・出土遺物実測図
第123図 5区 SI06 遺構・出土遺物実測図
第124図 5区 SI07 遺構実測図
第125図 5区 SI08 遺構・出土遺物実測図
第126図 5区 SI09 遺構・出土遺物実測図
第127図 5区 SI10 遺構・出土遺物実測図(1)
第128図 5区 SI10 出土遺物実測図(2)
第129図 5区 SI11 遺構・出土遺物実測図
第130図 5区 SI12 遺構実測図
第131図 5区 SI13 遺構・出土遺物実測図
第132図 5区 SI14 遺構・出土遺物実測図
第133図 5区 SK01 遺構・出土遺物実測図(1)
第134図 5区 SK01 出土遺物実測図(2)
第135図 5区 SK01 出土遺物実測図(3)
第136図 5区 SK02 遺構・出土遺物実測図
第137図 5区 SK03 遺構・出土遺物実測図
第138図 5区 SK04 遺構・出土遺物実測図
第139図 5区 SK05 遺構・出土遺物実測図
第140図 5区 SK06・07・08・09 遺構・出土
遺物実測図
第141図 5区 SK10・11・12 遺構実測図
第142図 5区 SK13・14・15 遺構実測図
第143図 5区 SK16・17・18・19・20 遺構
実測図

第144図 5区 SDO1・02 溝状遺構実測図
第145図 5区 遺構外出土遺物実測図(1)
第146図 5区 遺構外出土遺物実測図(2)
第147図 5区 遺構外出土遺物実測図(3)
第148図 5区 遺構外出土遺物実測図(4)
第149図 5区 遺構外出土遺物実測図(5)
第150図 5区 遺構外出土遺物実測図(6)
第151図 5区 遺構外出土遺物実測図(7)
第152図 5区 古代以降出土遺物実測図

第153図 5区 3層(磨消縄文系)実測図
第154図 5区 4層(磨消縄文系)実測図
第155図 5区 4層(阿高式系)実測図
第156図 5区 5層(阿高式系)実測図
第157図 5区 6層(阿高式系)実測図
第158図 5区 4層(無文)実測図
第159図 5区 5層(無文)実測図
第160図 5区 5層(中津式・福田KⅡ式)実測図

自然科学分析

第1図 遺跡の位置(1/25,000)
第2図 ST01 人骨の出土状況(埋葬姿勢)
第3図 ST02 人骨の出土状況(埋葬姿勢)
第4図 ST03 人骨の出土状況(埋葬姿勢)

第5図 ST04 人骨の出土状況(埋葬姿勢)
表1 資料数(Table 1. Number of materials)
表2 出土人骨一覧(Table 2. List of skeletons)
表3 年齢区分(Table 3. Division of age)

表目次

表1 新旧対照表
表2 周辺遺跡一覧表
表3 4区土器観察表
表4 4区陶磁器観察表
表5 5区土器観察表-縄文-
表6 土製品観察表
表7 5区土器観察表-弥生-

表8 5区土器観察表-古代-
表9 紡錘車観察表
表10 古代以降土器観察表
表11 玉類・土製品観察表
表12 石器観察表
表13 石製品

写真目次

巻頭図版
託麻弓削遺跡群調査区 全景
4・5区 全景
出土土器① 縄文時代(後期初頭)
出土土器② 縄文時代(後期初頭)
出土土器③ 縄文時代(後期中葉)
出土土器④ 縄文時代(後期中葉)
図版1 4区 調査区 北西
4区 完掘状況 東
4区 完掘状況 南
図版2 4区 完掘状況 南
4区 白色粘土完掘状況 西

図版3 5区 完掘状況 南西
5区 完掘状況 南
図版4 5区 完掘状況 南東
5区 完掘状況 北東
5区 SLO1 石組炉出土状況
図版5 5区 SLO1 石組炉完掘状況 南西
5区 SLO1 当初の石組炉検出状況 北
5区 SLO1・SLO2 石組炉検出状況 南西
図版6 5区 SLO2 半截状況 北
5区 SLO2 石組炉出土状況
5区 SLO2 石組炉完掘状況 北
図版7 5区 SLO3 石組炉検出状況 北東

	5区 SL03 石組炉完掘状況 東	5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SL04 石組炉検出状況 東	図版 21 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 8	5区 SL04 石組炉検出状況 東	図版 22 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SL04・SK33 検出状況 西	図版 23 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SK33 石組炉検出状況 東	図版 24 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 9	5区 SK33 第2面検出状況 南	図版 25 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 ST01 人骨出土状況 東	図版 26 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 ST01 人骨出土状況 北	図版 27 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 10	5区 ST02 人骨出土状況 南西	図版 28 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 ST03 人骨出土状況 東	図版 29 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 ST04 人骨出土状況	図版 30 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 11	5区 人骨出土状況 西	図版 31 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 人骨出土状況 北	図版 32 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 獣骨出土状況	図版 33 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 12	5区 獣骨出土状況	図版 34 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SX03 完掘状況 西	図版 35 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 遺構外 台石出土状況	図版 36 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 13	5区 SI15 完掘状況 西	図版 37 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SI16 完掘状況 東	図版 38 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SI17 遺物出土状況	図版 39 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 14	5区 SI18 完掘状況 東	図版 40 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SI19 完掘状況 南東	図版 41 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SI20 埋土②層上面掘削状況 南東	図版 42 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 15	5区 SK22 完掘状況	図版 43 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SX01 完掘状況	図版 44 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SI01・SI02 完掘状況 南	図版 45 5区 縄文土器 (後期初頭)
図版 16	5区 SI02 (PO21) 遺物出土状況 北西	図版 46 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SI05 埋土②層上面掘削状況 南	図版 47 5区 縄文土器 (後期初頭)
	5区 SI08・SI09 完掘状況	5区 縄文土器 (後期中葉)
図版 17	5区 SI10 遺物出土状況	5区 縄文土器 (後期中葉)
	5区 SI10 埋土③層上面掘削状況	図版 48 5区 縄文土器 (後期中葉)
	5区 SI13 完掘状況	図版 49 5区 縄文土器 (後期中葉)
図版 18	5区 SI14 完掘状況	図版 50 5区 縄文土器 (後期中葉)
	5区 SK01 遺物出土状況	図版 51 5区 縄文土器 (後期中葉)
	5区 SK02・SK14 完掘状況	図版 52 5区 縄文土器 (後期中葉)
図版 19	4区 遺構外出土土器	図版 53 5区 縄文土器 (後期中葉)
	4区 遺構外出土土器 裏	図版 54 5区 縄文土器 (後期中葉)
	4区 出土 龍泉窯系青磁	図版 55 5区 縄文土器 (後期中葉)
図版 20	5区 石組炉周辺及び石組炉出土土器	図版 56 5区 縄文土器 (後期中葉)
	5区 縄文土器 (前期)	5区 縄文土器 (後期)

図版 57 5区 縄文土器(後期)・5区 縄文土器(後期後半～晩期)・5区 縄文土器(晩期)

図版 58 5区 出土 有孔土器片・土器片鏝
5区 出土 土製円盤

図版 59 5区 SI15 (No.512・No.513)・SI18 (No.515) 出土土器 甕・SI17 出土土器 壺・遺構外出土土器 甕

図版 60 5区 出土土器 甕(刻目)・出土土器 甕

図版 61 5区 SI01 出土土器 甕・SI03 出土土器 甕・SI05 出土土器 甕

図版 62 5区 SI06 出土土器・SI10 出土土器 甕・SK04 出土土器 甕

図版 63 5区 SI14 出土土器 鉢・SK01 出土土器・SK08 出土土器 托

図版 64 5区 SK03 出土土器 甕・SK05 出土土器 甕・出土 墨書土器

図版 65 5区 遺構外出土土器・土師器・須恵器

図版 66 5区 支脚または瓶の棧 (No.707)・カマドの庇 (No.709)・遺構外出土土器 甕

図版 67 5区 遺構外出土土器 甕

図版 68 5区 出土土器 石鏝・打製石斧

図版 69 5区 出土土器 打製石斧・磨製石斧

図版 70 5区 出土土器 磨製石斧

図版 71 5区 出土土器 磨製石斧

図版 72 5区 出土土器 台石・石匙・十字形石器・磨石・敲石

図版 73 5区 SK32 出土土器 砥石・出土土器 台石・石皿・石鏝・石庖丁・砥石

表1 新旧対照表

縄文	旧	新
石組跡*	S071	⇒ SL01
	S072	⇒ SL02
	S074	⇒ SL03
	S116	⇒ SL04
土坑	S117	⇒ SK33
	P070	⇒ SK34
土壌墓	S098	⇒ ST01
	S099	⇒ ST02
	S100	⇒ ST03
	S101	⇒ ST04
不明遺構	S064	⇒ SX03

弥生	旧	新
竪穴建物	S061	⇒ SI15
	S048	⇒ SI16
	S050	⇒ SI17
	S036	⇒ SI18
	S067	⇒ SI19
	S047	⇒ SI20
土坑	S054	⇒ SK21
	S053	⇒ SK22
	S057	⇒ SK23
	S052	⇒ SK24
	S056	⇒ SK25
	S055	⇒ SK26
	S060	⇒ SK27
	S059	⇒ SK28
	S058	⇒ SK29
	S065	⇒ SK30
	S051	⇒ SK31
	S038	⇒ SK32
円形周溝	S024	⇒ SX01
不明遺構	S031	⇒ SX02

古代	旧	新
竪立柱建物	S068	⇒ SB01
竪穴建物	S008	⇒ SI01
	S009	⇒ SI02
	S042	⇒ SI03
	S043	⇒ SI04
	S039	⇒ SI05
	S026	⇒ SI06
	S027	⇒ SI07
	S046	⇒ SI08
	S040	⇒ SI09
	S021	⇒ SI10
	S045	⇒ SI11
	S041	⇒ SI12
	S023	⇒ SI13
	S001	⇒ SI14
土坑	S004	⇒ SK01
	S013	⇒ SK02
	S017	⇒ SK03
	S016	⇒ SK04
	S015	⇒ SK05
	S010	⇒ SK06
	S018	⇒ SK07
	S007	⇒ SK08
	S011	⇒ SK09
	S002	⇒ SK10
	S029	⇒ SK11
	S019	⇒ SK12
	S006	⇒ SK13
	S014	⇒ SK14
	S020	⇒ SK15
	S028	⇒ SK16
	S066	⇒ SK17
	S034	⇒ SK18
	S005	⇒ SK19
	S062	⇒ SK20
溝状遺構	S003	⇒ SD01
	S022	⇒ SD02

第1章 序章

第1節 調査に至る経緯

熊本県教育委員会では、白川水系河川激甚災害対策特別緊急事業等に伴い平成24年9月21日付け河第534号で河川課長から「埋蔵文化財の予備調査について(依頼)」の提出を受け、平成25年8月5日～7日・21日～22日及び平成26年6月11日～12日・19日に託麻弓削遺跡群とその周辺で埋蔵文化財の試掘・確認調査を実施した。

試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、平成25年10月3日付け教文第1448号、平成26年9月1日付け教文第1101号「白川水系河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財確認調査結果について」で熊本県知事に対して、予備調査成果と発掘調査の必要性を通知した。

その後、白川水系河川激甚災害対策特別緊急事業予定地について、平成26年4月14日付け央土災対第4号の2で文化財保護法第94条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」が熊本県知事から熊本市教育委員会を経由して熊本県教育委員会に通知された。

熊本県教育委員会では、河川課・県央広域本部土木部と記録保存を目的とした発掘調査の期日等の協議を進めた結果、平成26年度分(4区)は平成27年2月25日付け央土災対第99号、平成27年度分(4区・5区)は平成27年4月3日付け央土災対第2号の2、平成28年度分(5区)は平成28年4月1日付け央土災対第2号で県央広域本部土木部から埋蔵文化財発掘調査の依頼と承諾書の提出を受けた。それぞれ、平成27年3月6日付け教文第2304号、平成27年4月9日付け教文第69号、平成28年4月12日付け教文第50号で文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を熊本県教育長あて提出し、発掘調査を実施した。

記録保存のための発掘調査は、4区は平成27年3月9日～同年3月31日及び平成27年6月19日～同年10月9日、5区は平成27年2月2日～同年2月26日、同年4月14日～平成28年3月31日及び平成28年6月4日～同年8月31日の期間で行った。

整理・報告書作成業務は、平成28年4月1日から開始し、平成30年3月31日に終了した。

なお、白川水系河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に至る詳細な経緯については、熊本県文化財調査報告第320集『新南部遺跡群(10次・11次) 吉原遺跡』を参照されたい。

第2節 発掘作業と整理事業等の体制

1 発掘作業及び整理事業の体制

(1) 予備調査(平成24・25年度)

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	小田 信也(文化課長)、西住 欣一郎(課長補佐)
調査総括	岡本 真也(主幹兼文化財調査第二係長)
調査事務局	廣石 啓成(主幹兼総務・文化係長)、有馬 綾子・松尾 康延(参事)、天草 英子(主任主事)
調査担当	古城 史雄(主幹)、山下 義満・廣田 静学(参事)

(2) 本調査(平成26年度)

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	手島 伸介(文化課長)、西住 欣一郎(課長補佐)
調査総括	岡本 真也(主幹兼文化財調査第二係長)、古城 史雄(主幹)

調査事務局 廣石 啓哉（主幹兼総務・文化係長）、有馬 綾子・松尾 康延（参事）、天草 英子（主任主事）
調査5区担当 中村 幸弘（参事）、土野 雄貴・菺田 博隆（非常勤職員）

(3) 本調査（平成27年度）

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 手島 伸介（文化課長）、村崎 孝宏（課長補佐）
調査総括 岡本 真也（主幹兼文化財調査第二係長）、古城 史雄（主幹）
調査事務局 廣石 啓哉（主幹兼総務・文化係長）、有馬 綾子・天草 英子（参事）、竹馬 牧子（主事）
調査4区担当 宮本 大（文化財保護主事）、師富 聖香（臨時調査補助員）
調査5区担当 廣田 静学（主幹）、山下 義満（参事）、宮川 建二・田尻 龍信（文化財保護主事）、
多賀 晴司（臨時調査補助員）

(4) 本調査（平成28年度）

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 平井 貴（文化課長）、村崎 孝宏（課長補佐）
調査総括 岡本 真也（主幹兼文化財調査第二係長）
調査事務局 左座 守（主幹兼総務・文化係長）、稲本 尚子・天草 英子（参事）、竹馬 牧子（主事）
調査5区担当 古城 史雄（主幹）、坂井田 端志郎（参事）、池田 潔（文化財保護主事）

(5) 整理作業（平成28年度）

整理主体 熊本県教育委員会
整理責任者 平井 貴（文化課長）、村崎 孝宏（課長補佐）
整理総括 岡本 真也（主幹兼文化財調査第二係長）、古城 史雄（主幹）
整理事務局 左座 守（主幹兼総務・文化係長）、稲本 尚子・天草 英子（参事）、竹馬 牧子（主事）
整理担当 坂井田 端志郎（参事）、戸田 紀美子・中川 治（臨時整理補助員）

(6) 整理作業（平成29年度）

整理主体 熊本県教育委員会
整理責任者 岡村 郷司（文化課長）、村崎 孝宏（課長補佐）
整理総括 岡本 真也（主幹兼文化財調査第二係長）、古城 史雄（主幹）
整理事務局 左座 守（主幹兼総務・文化係長）、稲本 尚子・津田 光成（参事）、竹馬 牧子（主事）
整理担当 坂井田 端志郎（参事）、戸田 紀美子・中川 治・島浦 萌（臨時整理補助員）

平成27年度

調査作業員（4区）：石田美知子、稲本佳子、奥村信博、川上修、河添均、栗崎強、笹木薫、田上征郎、土島敏治、鶴本雄司、中村和彦、浜松五夫、浜松富世女、春野宗敏、福永成一郎、松井昭子、水本泰之、村上國誠、吉永孝夫、米光司朗
調査作業員（5区）：上村久子、牛丸敦政、岡本勝吉、甲斐福義、神谷守、川上薫、神崎博、木林忠司、木村崇、草野賢一部、坂梨學、白石美智子、高本勝美、田中鳴美、塚本勇、富永俊房、永井健一、中石隆一、永松昌剛、西山雅廣、平井直美、藤本龍三、藤原英敏、増村富貴子、三島多恵子、森直人、森本紀代子、山下民生、山崎知津子、渡邊由佳利

平成28年度

整理作業員：嵐英隆、井王直蔵、内山香織、笠置英一、河津洋伶、勸米良浩喜、木村ゆり子、近藤広子、
笹原英子、重永照代、白木はる乃、立石美代子、田中洋子、中尾規子、鍋田浩子、西田法子、橋本由美子、
濱崎清子、前田憲一郎、松本加代子、松本直枝、渡邊巧

調査作業員：岩瀬ひとみ、上村久子、牛丸数政、緒方久美子、笠秀子、神崎博、木林忠司、白石美智子、
田中鳴美、富永俊房、中村和彦、西山雅廣、早田咲百合、藤本龍三、松井昭子、三島多恵子、森直人、森
田幸雄、森本紀代子、渡辺恵子、渡邊由佳利

平成29年度

整理作業員：河津洋伶、木村ゆり子、近藤広子、坂口悦子、坂本貴美子、白木はる乃、東條博恵、中野治
美、中村正子、西田法子、橋本由美子、藤本香織、前田憲一郎、松本直枝、宮本康代

2 謝辞

現地での発掘調査及び整理作業においては、下記の機関及び多くの方々から御指導御協力をいただきました。ここにその御芳名を記して深く感謝の意を表します（順不同、敬称略）。

地域の方々、熊本市立託麻北小学校児童と先生方、甲元 眞之（熊本大学名誉教授）、小畑 弘己（熊本大学文学部教授）、山野 ケン陽次郎（熊本大学埋蔵文化財調査センター助教）、水ノ江 和同（文化庁文化財部記念物課）、荒木 隆宏（玉名市役所）、後藤 愛弓（奈良県御所市教育委員会文化財課）、師富 国博（熊本市役所文化振興課）、木村 龍生（熊本県立装飾古墳館分館温故創生館・鞠智城）、熊本県県史広域本部土木部、熊本市役所文化振興課、熊本市教育委員会、熊本東警察署

第3節 発掘作業の経過

1 調査4区

平成27年4月から発掘調査のための資料収集、調査事務所の準備、熊本県土木部河川課並びに県史広域本部土木部と協議を重ねるなど、事前準備作業を行い、平成27年6月より調査4区の発掘調査を開始した。

調査対象地の除草終了後、重機（バックホー）を用いて1層～3層（表土層）を除去し、調査区内に10m×10mのグリッドを設定した。その後、人力により4層（暗褐色土層）以下、最も深いところで5層（黄褐色土層）まで順次掘り下げた。人力による掘削作業は、遺物包含層の掘削後、当時の生活痕跡である遺構の検出作業を行った。次に、検出した遺構と想定されたものについて、その性格を把握するため観察作業、断面図・平面図等の実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。調査区全体を含む高所からの各層での完掘状況及び遺跡周辺地形の写真撮影作業は、セソナ機を用いて実施した。平成27年10月に現地調査を終了した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、世界測地系を使用している。

2 調査5区

平成26年4月から発掘調査のための資料収集、調査事務所の準備、熊本県土木部河川課並びに県史広域本部土木部と協議を重ねるなど、事前準備作業を行い、平成27年2月より調査5区の発掘調査を開始した。

調査5区の発掘調査は、まず重機（バックホー）を用いて表土層を除去し、調査区内に10m×10mのグリッドを設定した。その後、人力により3層（黒褐色土層）以下、最も深いところで6層下部（灰色シルト）まで順次掘り下げた。

次に、検出した各遺構について、その性格を把握するため観察作業、平面図・断面図等の実測図作成作業、写真撮影作業等の各記録作業を実施した。平成28年8月末に現地調査を終了した。

なお、4級基準点設置及びグリッド杭設置作業については外部委託を行うことで、作業の効率化・迅速化を図った。平面直角座標は、4区同様世界測地系を使用している。

調査日誌抄

託麻弓削遺跡群調査4区 2015年(平成27年度)

5月22日 4級基準点、メッシュ杭打設

6月19日 託麻弓削遺跡群調査4区発掘作業開始

8月6日 調査4区及び調査5区において基本土層の検討実施

8月19日 調査区内に重機を入れ、一部で重機掘削を行う。

9月14日 完掘状況写真撮影

10月8日 空中写真撮影実施(調査5区と併せて)

10月9日 託麻弓削遺跡群調査4区発掘作業終了

託麻弓削遺跡群調査5区 2014年(平成26年度)

2月2日 託麻弓削遺跡群調査5区発掘作業開始

2月17日 4級基準点、メッシュ杭打設

2月26日 平成26年度発掘作業終了

託麻弓削遺跡群調査5区 2015年(平成27年度)

5月7日 敷地再整備

5月22日 4級基準点、メッシュ杭打設

6月4日 平成27年度発掘作業再開

8月1日 「夏休み現場公開」発掘体験実施

8月21日 熊本市立託麻北小学校教職員研修 参加者26名

10月8日 空中写真撮影実施(調査4区と併せて)

10月17日 くまもと教育の日「秋の遺跡発掘調査現場公開」実施 参加者30数名

10月27日～11月5日 調査区内に重機を入れ、一部で重機掘削を行う。

11月19日 メッシュ杭再打設

1月26日 熊本大学文学部甲元眞之名誉教授、小畑弘己教授現地指導

2月15日 NPO法人人類学研究機構松下孝幸先生 土壌調査

2月24日 空中写真撮影実施

3月24日 平成27年度発掘作業終了

託麻弓削遺跡群調査5区 2016年(平成28年度)

6月6日 平成28年度発掘作業再開

8月1日 熊本大学文学部小畑弘己教授現地指導

8月8日 「夏休み現場公開」開始(8月13日まで実施 参加者89名)現場公開期間中、熊本大学松田光太郎准教授(当時)、玉名市役所荒木隆宏氏、熊本市役所師富国博氏、熊本県立装飾古墳館分館温故創生館鞠智城木村龍生氏から石組炉について、御教示をいただく。

8月18日 熊本大学文学部甲元眞之名誉教授現地指導

8月31日 託麻弓削遺跡群調査5区発掘作業終了

第4節 整理作業の経過

整理作業は、託麻弓削遺跡群調査4区及び5区を併せて実施している。

平成28年4月11日より整理作業を開始した。熊本地震により一時中断を余儀なくされたが、5月1日から再開している。

一次整理は遺物の洗浄、注記、接合、石膏入れの順に実施した。平成28年度調査分については、現地から随時熊本県文化財資料室に搬入し、当初の一次整理に合流させている。二次整理作業は、遺構実測図の検討から行い、順次製図作業に移行した。平成28年6月6日からの調査再開までに一旦図面の検討を終え、調査再開後、現地で改めて検討を行っている。遺構実測図の検討には非常に時間を要した。遺物実測は、平成28年12月から実施した。石器類及び弥生時代以降の土器・土製品から取り掛かった。平成29年度に入り、大量の縄文土器の実測を開始した。実測・製図については、かなりの時間を要することとなった。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

託麻弓削遺跡群が所在する熊本県熊本市は、北緯32度48分、東経130度42分に位置する。面積は約390.32㎡を測り、九州そして熊本県のほぼ中央に位置する。平成25年に政令指定都市となった九州を代表する県庁所在地である。

西は有明海を挟んで長崎県諫早市、東は上益城郡益城町、阿蘇郡西原村、南は宇土市、宇城市、上益城郡嘉島町、御船町、甲佐町、北は玉名市、山鹿市、菊池市、合志市、菊池郡菊陽町と接している。北西部には、金峰山（標高665m）、三ノ岳（682m）、東部には、神岡山（183m）、小山川（189.6m）、南部には木原山（雁回山314m）などが山塊を形作る。西部には広大な熊本平野が広がっている。

本遺跡群は、阿蘇カルデラを源流とし、西南西に向かって蛇行を繰り返しながら有明海に注ぐ白川の中流域左岸に位置している。白川流域の地質は、上流域では阿蘇の火山活動によって形成された阿蘇溶岩を基盤とし、地表にはヨナと呼ばれる火山灰が厚く堆積している。中流域一帯には、A S O-4火砕流堆積物が広く堆積している。この堆積物は、白川をはじめ、坪井川、井芹川などの諸河川によって浸食され、その結果、各地に火砕流台地や河成段丘（河岸段丘）が形成された。本遺跡群は熊本県地質図によると沖積層上に立地しており、標高約53～54mを測る。

第2節 歴史的環境

託麻弓削遺跡群は、熊本市東部、白川によって形成された沖積層上に立地する、縄文時代前期～晩期、弥生時代中期～後期、古代に至るいわゆる複合遺跡である。西側の部分が弓削宮原遺跡、東側の部分が弓削上古閑遺跡とされていたが、その中間付近でも遺物が出土することから、昭和56年の熊本市遺跡地図では、弓削宮原遺跡と弓削上古閑遺跡を併せて託麻弓削遺跡群として把握されている（熊本市教育委員会編1983）。

本遺跡群では、熊本市教育委員会による発掘調査及びこの度の白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う県教育委員会の一連の発掘調査により、多くの遺構・遺物が確認されている（以下、市調査分は「市〇次」、県調査分は「県〇区」と記す）。本節では周辺に立地する遺跡について、今回報告する県5区で縄文時代の遺物が多量に出土したことから、縄文時代を中心に概観することとした。

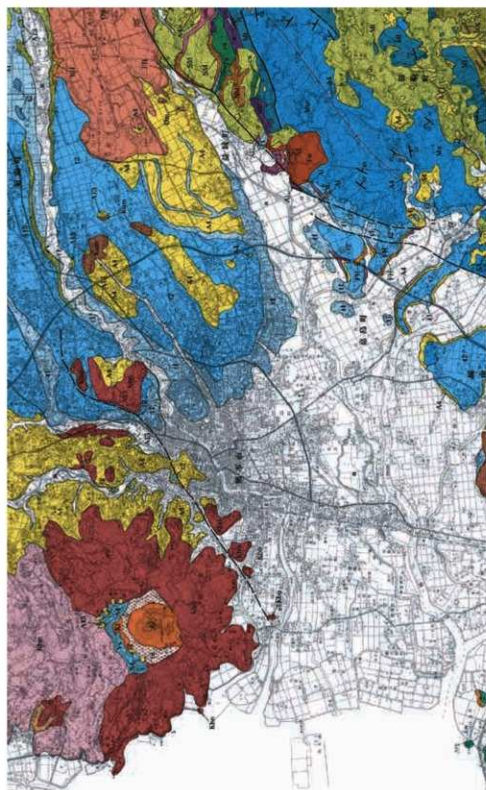
なお、託麻弓削遺跡群のこれまでの調査状況については、『託麻弓削遺跡群・中江遺跡』（古城編2016）において詳しくまとめられているので、併せてそちらも参照していただきたい。

（1）旧石器時代

本遺跡群周辺では、旧石器時代の遺構・遺物が確認された遺跡が少数ながら存在している。本遺跡群の西側、白川左岸に位置する石原町遺跡ではナイフ形石器が1点出土している。南側の小山川東麓に位置する石の本遺跡群では、後期旧石器時代の遺物が豊富に出土するとともに、炭化物集積域や礫群が検出されている。県内を代表する後期旧石器時代の重要な遺跡である。

（2）縄文時代

本遺跡群周辺には縄文時代早期から晩期の遺跡が数多く存在している。本遺跡群と同じく白川左岸側に立地する遺跡では、鹿嶋瀬遺跡で後期・晩期の遺物が、吉原遺跡では後期・晩期の遺物が、石原町遺跡では晩期の遺物が、供合松ノ上遺跡では早期・後期の遺物が、神岡遺跡では晩期の遺物が、石の本遺跡群では早期の遺構、前期・中期の遺物、後期・晩期の集落跡が、神岡田淵屋敷遺跡では後期・晩期の集落跡が、中江遺跡では中期・晩期の遺物が、それぞれ確認されている。一方、白川右岸に立地する遺跡では、法王館遺跡で



凡例

- A4: 阿蘇-4火山系堆積物 Koo: 金峰火山古期噴出物 A13: 阿蘇-1~3火山系堆積物 t1: 低位丘陵堆積物 K1: 金峰火山新期堆積物 Ys: 芳野層
 A5: 阿蘇-5火山系堆積物 Kuo: 金峰火山中期噴出物 Kum: 熊本層 A1: 赤井火山 (風川段岩) Ma: 御船層群上部層 P1: 布田層・花房層 M1: 御船層群下部層 K2: 赤井火山段岩
 A6: 阿蘇-6火山系堆積物 Kms: 御船層群下部層 Gs: 扇山層 O1: 大岳新期礫石火山岩段岩 O13: 大岳新期礫石火山岩段岩 A1: 赤井火山 (風川段岩)
 O2: 大岳新期礫石火山岩段岩 O2c: 大岳新期礫石火山岩段岩 O2c: 沖積層 Oa: 大峰火山 (赤連野段岩) S2c: 下保藏層・茂藤山層 Ca: 尾箕岩・若狭火山岩類 (鎌貫沖岩)
 M1: 御船層群下部層(基底部を含む)

■の範囲は調査地

第1図 熊本市周辺の地質図 熊本県地質図 (10万分の1) 説明書 (2008) より引用

後期・晩期の遺物が、梅ノ木遺跡で早期から晩期の遺物、後期・晩期の集落跡が確認されている。

本遺跡群では、県2区では後期天城式を中心に後晩期の遺構・遺物が主体的に、県3区では後期・晩期の遺物が少量出土している。平成26年の送電線の鉄塔建設に伴う熊本市による市1次では、縄文時代の小穴を検出したが出土遺物は少なく、明確な時期を特定することができる遺構はみられなかったとされる。

なお、昭和49年には本遺跡群一帯で圃場整備事業が実施されたが、事前の分布調査及び包含層の深さの調査により、設計段階でほとんど遺跡に影響を与えないよう配慮されたとされている（熊本市教育委員会編1983）。

(3) 弥生時代

周辺では、弥生時代の遺跡も数多く確認されている。法王鶴遺跡では、後期の竪穴建物が18軒、環濠と考えられる溝を2条検出しており、後期の土器群が多量に出土している。また梅ノ木遺跡では中期から後期の多くの竪穴建物による集落跡及び墓域が確認されている。吉原遺跡で中期の竪穴建物、甕棺墓、土墳墓が、中江遺跡では中期の遺物がそれぞれ確認されている。石の本遺跡群では後期の建物跡が確認されている。また、神園山の北側に位置する山尻遺跡群では中期から後期の環濠集落跡が、南西側に位置する神園田淵屋敷遺跡では後期の竪穴建物や土墳墓と考えられる遺構がそれぞれ確認されている。

本遺跡群では、県1区から県3区で、中期の甕棺墓、竪穴建物12軒、後期の竪穴建物4軒が検出されている。市1次では中期を主体とする土器群と竪穴建物12軒が検出されている。

(4) 古墳時代

縄文時代、弥生時代の遺跡が数多く確認される一方、古墳時代の遺跡は数箇所確認されるのみである。吉原遺跡では後期から終末期の竪穴建物が7軒検出されており、その内6軒はカマドを持つ。石の本遺跡群では中期の集落跡が確認されている。白川右岸に位置する今石横穴群では9基の横穴が確認されているとされる。

本遺跡群では、県1区で古墳時代後期の須恵器が確認されるのみである。

(5) 古代

神園山南麓に立地する神園山遺跡群や小山山南麓に立地する椋谷寺瓦窯跡からは、軒平瓦や丸瓦等が出土しており、波鹿廃寺や国分寺に瓦を供給したことが明らかとなっている。神園田淵屋敷遺跡では竪穴建物2軒、梅ノ木遺跡では竪穴建物6軒がそれぞれ検出されている。

本遺跡群では竪穴建物を県1区で2軒、県2区で9軒、計11軒検出している。また県1区での布目瓦、石帯、墨書土器の出土が特筆される。



表2 周辺遺跡一覧表

第2図 周辺遺跡分布図

熊本県 (43) 熊本市 (201)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
373	法王廟	北区龍田町	縄文・弥生	包蔵地
374	弓削統領	北区龍田町弓削小坂屋敷	縄文～中世	包蔵地
677	託麻弓削遺跡群	東区弓削町	縄文	包蔵地
678	鹿野斎	東区鹿野瀬町西原	縄文・弥生	包蔵地
679	弓削庵寺跡	東区龍田町弓削	中世	寺社
680	古原	東区古原町殿田	縄文～平安	包蔵地
681	石塚町	東区石塚町	縄文～中世	包蔵地
682	山尻遺跡群	東区龍田町弓削山尻	弥生	包蔵地
683	石塚瀬々井	東区石塚町瀬々井	縄文	包蔵地
684	北上遺跡群 (須古西ノ上遺跡)	東区上南原町、石塚町	縄文・古代	包蔵地
686	須古松ノ上	東区上南原町	縄文～中世	包蔵地
687	神岡	東区長福町上西原	縄文～平安	包蔵地
688	神岡瀬々井	東区長福町	縄文～中世	包蔵地
689	神岡山西麓	東区長福町下の山	古代	包蔵地
690	神岡山城跡	東区長福町下の山	中世	城

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
691	平山原埋蔵	東区平山町	古代・中世	包蔵地
692	平山石ノ本	東区平山町	旧石器～縄文	集落
694	神岡山頂屋敷	東区平山町、長福町	平安・中世	包蔵地
695	神岡山遺跡群	東区長福町、小山町	奈良・平安	包蔵地
697	小山城跡	東区小山町	中世	城
698	小山上の山	東区小山町	縄文～中世	包蔵地
703	櫻子寺瓦窯跡 (小山瓦窯跡群)	東区小山町	奈良・平安	生産
924	中江	東区中江町	縄文～古代	包蔵地

熊本県 (43) 菊陽町 (404)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
014	今石	津久礼、今石	縄文～中世	包蔵地
015	今石城跡	津久礼、今石	中世	城
019	梅ノ木	津久礼、梅の木	弥生	包蔵地
020	今石城穴群	津久礼、今石	古墳	古墳

第3章 調査の方法

第1節 調査方法

発掘調査区は、試掘・確認調査で遺構・遺物が確認された敷地内に設定した。平成27年3月に発掘作業が終了した3-2区側（白川下流側）を4区、上流側を5区とした。調査面積は、4区が約1.890㎡、5区が約1.573㎡である。

発掘作業は、重機により表土剥ぎを行い、表土除去作業終了後、直ちに作業員により人力で遺構検出作業を行った。

4級基準点及びメッシュ杭設置作業は、4区は八洲開発株式会社、5区は株式会社ワールドコンサルタントにそれぞれ委託して実施した。メッシュ杭は平面直角座標系にのせ、10m単位とした。この10m四方の区画をひとつのグリッドとし発掘作業の基準とした。各グリッドの中心からみて北東側のX軸、Y軸の交点の数値を、X座標の百の位と十の位、つづいてY座標の百の位と十の位を並べて表示し、そのグリッドの名称としている。すなわち、2757グリッドの場合、27はX座標の百の位と十の位、57はY座標の百の位と十の位となる。一の位は切り捨てている。

遺構検出作業終了後、簡易な遺構配置図を作成した。遺構掘削は人力により行った。検出作業時に遺構と判断したのものについては、半截もしくは四分割し、土層断面図等を作成したうえで完掘した。遺構は完掘したのち完掘平面図を作成し、写真撮影を行った。写真撮影は中判の白黒フィルムとカラーリバーサル、35mmの白黒フィルムとカラーリバーサルを用いて行った。航空写真撮影は、九州航空株式会社熊本営業所に委託して実施した。

第2節 整理の方法

4区・5区ともに、遺構には先頭にSをつけた記号で表示されていた。個別に平面図・断面図が作成されているもので、その後、整理作業担当者が遺構ではないと判断したものを以外は掲載している。

一方、遺物については、弥生時代から古代以降の遺物は遺構出土のものを優先して選択している。そのため、遺構から小片のみが出土している場合は、図化可能なものはできる限り掲載することとした。また、基本土層4層から6層にかけて出土した縄文時代の多量の土器は、時期ごとに万遍なく掲載できるよう心掛けて選定している。現地での取り上げ方針に一貫性がなかったようだが、一部で点上げを行っているため、ドットマップを作成し掲載した。ある程度の参考にはなるものと推測される。

第3節 層序

試掘・確認調査の結果を元に作成した託麻弓削遺跡群基本土層は、第3図のとおりである。

『託麻弓削遺跡群・中江遺跡』（古城編2016）の基本層序を基準とする。

- 1層 平成24年の熊本広域大水害時の洪水層であり、ほぼ全域にわたり存在していた。
- 2層 現在の耕作土である。
- 3層 昭和49年頃の圃場整備時の客土である。場所によっては、昭和28年6月26日水害の洪水層が存在する場合もある。
- 4層 黒褐色土 場所により、暗褐色、茶褐色で表現される。砂質が弱い場所・強い場所がある。古代から弥生時代の遺物包含層とされているが、出土量は少ない。
- 5層 暗褐色土 場所により砂質が弱い場所・強い場所がある。弥生時代の遺物包含層である。
- 6層 黄褐色土 場所により褐色土、ぶい黄褐色、明褐色、灰褐色などと表現している場合がある。また

砂質が弱い場所・強い場所がある。この層が地山となる場合もある。縄文時代後期・晩期の遺物包含層と考えられている。遺構確認面としている層である。

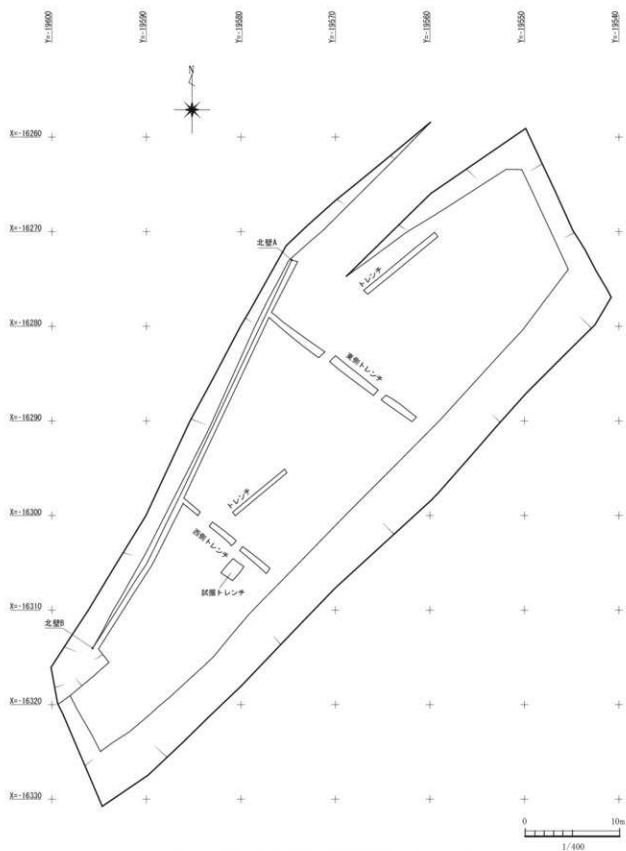
7層 硬質砂質土 堆積の厚いところでは1mを超える箇所がある反面、10cm未滿の薄い所もある。すべての地域で存在するわけではない。

1層 表土	1層 表土(洪水層)
2層 耕作土	2層 耕作土
3層 客土	3層 客土等 場所によっては、昭和49年頃の圃場整備時の客土がある。 また昭和28年6月26日水害の洪水層が残存している場合もあり、 その場合はその下に旧耕作土がある。
4層 黒褐色土	4層 黒褐色土 場所により、暗褐色・茶褐色の表現。砂質が弱い場所、強い場所がある。 古代から弥生遺物包含層とされているが、出土量は少ないようである。
5層 暗褐色土	5層 暗褐色土(遺物包含層) 場所により砂質が弱い場所、強い場所がある。 弥生遺物包含層。
6層 黄褐色土	6層 黄褐色土 他に表現は、褐色土、にぶい黄褐色土、明褐色土、灰褐色土等の表現がある。 砂質が強い、弱い場所がある。 この層が地山となる場合もある。 遺構検出面、縄文後晩期遺物包含層と考えられている。
7層 硬質砂質土	7層 硬質砂質土 すべての地域で存在するわけではない。 堆積が薄い、強い所がある。ブロックで存在する場合もある。
8層 褐色砂質土	8層 褐色砂質土 他に明黄褐色砂質土の表現 縄文遺構検出面だが、地山の場合もある。
9層 砂礫層	9層 砂礫層 地山

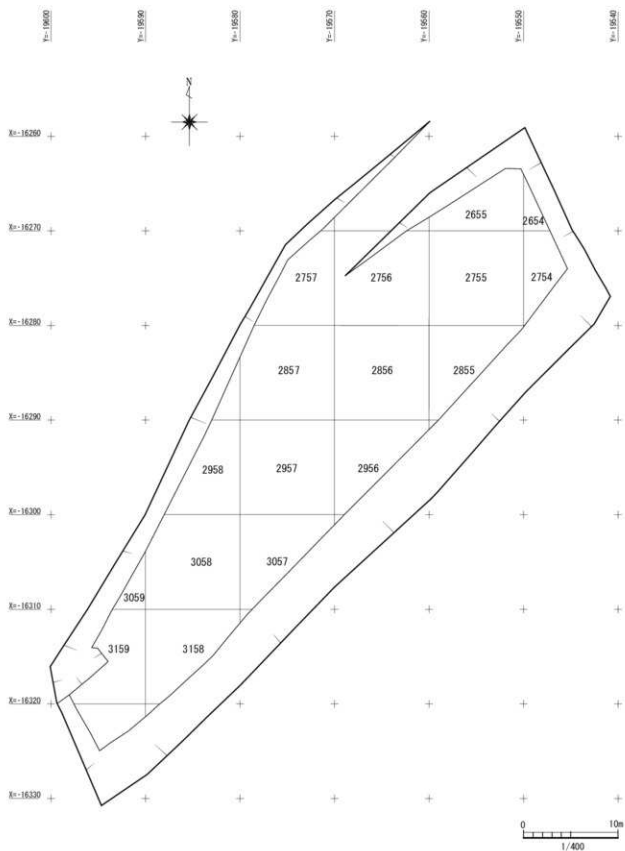
第3図 託麻弓削遺跡群基本土層図(スケール任意)

第4章 調査の成果

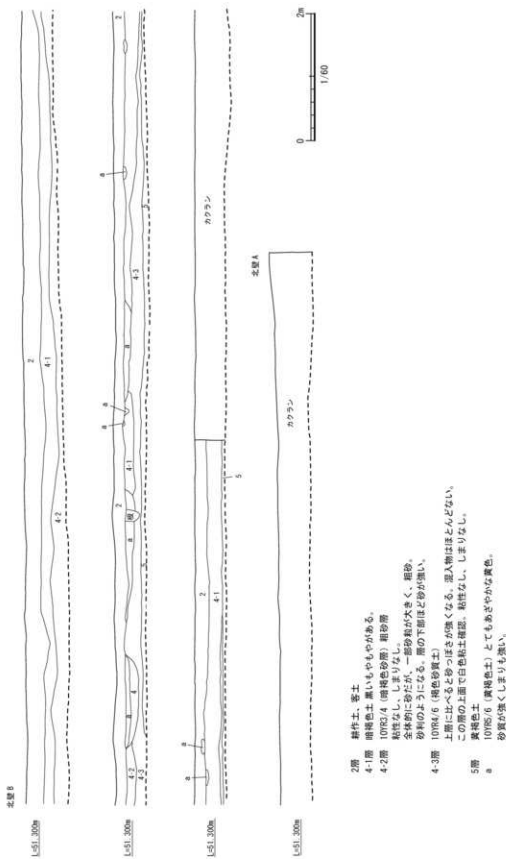
第1節 調査4区



第4図 託麻弓削遺跡群4区 遺構配置図 (S=1/400)



第5図 託麻弓削遺跡群4区 グリッド図 (S=1/400)



第6図 託麻町預選跡群4区 北壁土層断面図 (S-1/60)

(1) 遺構 (第4図)

4区においては明確な遺構は検出されなかった。現地では、集石遺構の可能性のある箇所、土坑の可能性のある箇所、柱穴の可能性のある箇所、畑の畝の可能性ある箇所、白色粘土が集中する箇所をそれぞれ調査している。しかし、平成27年度4区調査担当者によれば、最終的にいずれも流れ込み、樹痕もしくは攪乱の一部との判断がなされている。

なお、本報告では遺構内出土として取り上げた遺物は、すべてグリッド別、層位別に振り替えている。

(2) 遺物 (第7図)

4区では明確な遺構が検出されなかった一方、古代を中心に図化に耐えうる遺物が出土している。ここでは、グリッド別、層位別に取り上げた遺物のなかで、残存状況が比較的良好であったものを掲載し、その所見を述べることにした。

1～3は土師器の杯である。1は体部から底部が残存していた。内外面ともに回転ナデにより調整されている。全体的にすこし歪みがある。2は口縁部から底部まで残存していた。口縁部がわずかに外反する。内外面ともに回転ナデにより調整されている。底部はヘラ切り後未調整のようである。3は口縁部から底部が残存していた。口縁部はほぼ直線的に開く。内外面ともに回転ナデにより調整されている。いずれも当初は遺構の可能性のある地点から出土したものであり、最終的に2755グリッド一括として記録したものである。9世紀中葉から後半の所産と思われる。

4は黒色土器の椀である。口縁部から高台の接合部まで残存していた。体部は内湾する。内面はヘラミガキが施される。体部外面下半は回転ヘラケズリが施されている。内面に黒化処理が施され、その範囲は外面の一部にまで及んでいる。その特徴から、いわゆる九州系の黒色土器A類である。9世紀後半の所産と思われる。

5～6は土師器の椀である。高台部から体部下半が残存していた。高台はいずれも貼り付け高台。5の高台はやや開く。回転ナデにより調整されている。9世紀代のものであると思われる。

7～10は土師器の甕である。7は口縁部から胴部の一部が残存していた。口縁部はやや屈曲気味に開く。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部内面にヘラケズリが施されている。8～9は口縁部から胴部上半の一部が残存していた。口縁部は屈曲気味に開く。口縁部は内外面ともにヨコナデ。外面はやや粗いハケメ調整、胴部内面はヘラケズリ。口縁部から頸部は厚手である。9は口縁部内面から胴部外面にかけて煤が付着している。10は口縁部から胴部下半、底部付近まで残存していた。口縁部は上向きに開く。7～9に比べて薄手である。内面にはナデ調整、指頭王痕がみられる。外面はハケメ調整。口縁部は内外面ともにヨコナデが施されている。口縁部内面及び頸部外面に煤が明瞭に付着している。いずれも9世紀前半代の所産と思われる。

11は須恵器の杯である。口縁部から底部まで、ほぼ1/2が残存していた。内外面ともに回転ナデにより調整されている。底部はヘラ切り後ほぼ未調整のようである。9世紀中葉から10世紀初頭の所産か。

12～13は龍泉窯系青磁の椀である。口縁部が残存していた。いずれもヘラ彫りにより鎊のある蓮弁文が施文されている。弁の中心線は稜をなす。蓮弁文の施文後、施軸されている。12は軸が青味を帯びた緑色を呈する。胎土は灰色。13は軸が黄色味を帯びた緑色を呈する。胎土は灰色。大宰府編年龍泉窯系青磁椀IV類の可能性も捨てきれないが、いずれも、大宰府編年龍泉窯系青磁椀II-b類、E期(XVI～XVII期)、13世紀前後から後半の所産と考えた。



第7图 4区 遗物出土实物实测图

表3 4区土器観察表

標記 番号	種別	器物 番号	種別	出土地点	法量(cm)			調整		色調			胎土	備考	図録 番号
					グリッド	層位	口径 (高さ)	口径 (幅)	高さ (厚さ)	外壁	内壁	外壁			
1	土師器	杆	2755	-	-	6.3	-	回転ナデ 底唇：ヘラ切り後ナデ	外壁 回転ナデ、ナデ	内壁 回転ナデ、ナデ	外壁 にぶい黄褐色10YR6/4	内壁 にぶい黄褐色10YR6/4	黒石、石英、角閃石	全体に赤しきみあり	
2	土師器	杆	2755	-	10.7	6.3	4.9	回転ナデ、底唇：ヘラ 切り後半部調整	外壁 回転ナデ	内壁 回転ナデ	黄褐色	黄褐色	黒石、石英	全体に赤しきみあり	
3	土師器	杆	2755	-	(11.8)	(6.6)	4.9	回転ナデ、底唇：ヘラ 切り後、ナデ	外壁 回転ナデ	内壁 回転ナデ	にぶい黄褐色10YR6/4	にぶい黄褐色10YR6/4	黒石、茶褐色を含む		
4	黒色土器	瓶	2958, 2957, 2956, 2957, 2956, 2756 (旧4-12層)	4-2層 4-3層	-	16.5	-	回転ヘラケズリ、ヘラ ミカキ	外壁 ヘラミカキ	内壁 ヘラミカキ	黒 2.5Y2/1 にぶい黄 2.5Y6/3	黒 2.5Y2/1	-	黒色土器A類	
5	土師器	瓶	2756, 2856	4-1層 (旧4層)	-	(8.0)	-	回転ナデ、ナデ	外壁 回転ナデ、ナデ	内壁 回転ナデ、ナデ	明部黄 2.5YR5/6	明部黄 2.5YR5/6	-	胎付黄紺	
6	土師器	瓶	2856, 2956, 2957	2層 4-1層 (旧4層)	-	(7.4)	-	ナデ	外壁 ナデ	内壁 ナデ	にぶい黄 7.5YR7/4	にぶい黄 7.5YR6/4	黄母、黒石	胎付黄紺	
7	土師器	甕	-	4-3層 (旧4層)	-	-	-	ヨコナデ、ハケミ後 ヨコナデ	外壁 ハケミ後ヨコナデ、 ヘラケズリ	内壁 ハケミ後ヨコナデ、 ヘラケズリ	にぶい黄 7.5YR6/4	にぶい黄 7.5YR6/4	黒石、石英、角閃石、 黄母		
8	土師器	甕	2958	4-1層	-	-	-	ヨコナデ、ハケミ後 ズリ	外壁 ヨコナデ、ヘラケ ズリ	内壁 ヨコナデ、ヘラケ ズリ	黄褐色 5YR6/6	黄褐色 5YR6/6	黒石、石英、黄母、 黒色胎を含む		
9	土師器	甕	2958	4-3層	-	-	-	ハケミ、ヨコナデ	外壁 ヨコナデ、ヘラケ ズリ	内壁 ヨコナデ、ヘラケ ズリ	にぶい黄 7.5YR6/4	にぶい黄 7.5YR6/6	黒石、黄母	口縁部内面～一部外周面付着	
10	土師器	甕	2755	-	(23.4)	-	-	ヨコナデ、ハケミ	外壁 ヨコナデ、ヘラケ ズリ、筋部調整	内壁 ヨコナデ、ヘラケ ズリ	にぶい黄 7.5YR6/6	にぶい黄 7.5YR6/3	黄母、黒石	口縁部内面～一部外周面付着	
11	須器	杆	2957	5層	No.1	(12.5)	(7.6)	3.1	回転ナデ、回転ヘラケ ズリ、底唇：ヘラ切り 後半部調整	外壁 回転ナデ、ナデ	灰オリーブ 5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	黄母		

表4 4区陶磁器観察表

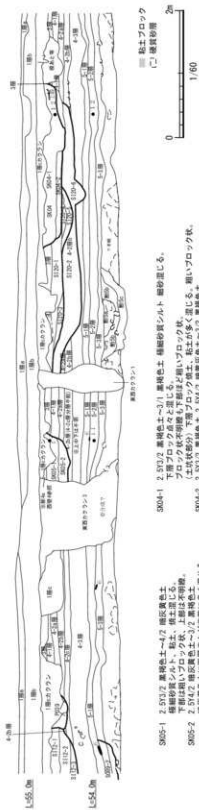
標記 番号	種別	器物 番号	種別	出土地点	法量(cm)			調整		色調			胎土	備考	図録 番号	
					グリッド	層位	口径 (高さ)	口径 (幅)	高さ (厚さ)	外壁	内壁	外壁				内壁
7	青磁	瓶	2958, 2957, 2856, 2857	2層	-	-	-	-	ヘラ彫りによる薄洋文 →一帯輪	外壁 回転ナデ→一帯輪	内壁 回転ナデ→一帯輪	灰青緑	灰青緑	灰色	大宰府福生館東部系青磁類IIb類	
13	青磁	瓶	2958	-	-	-	-	-	ヘラ彫りによる薄洋文 →一帯輪	外壁 回転ナデ→一帯輪	内壁 回転ナデ→一帯輪	灰白、黄緑色	灰白、黄緑色	灰色	大宰府福生館東部系青磁類IIc類	

託麻弓削5区西壁断面4



- S113-1 2,513.2 黒褐色土、粘細砂質シルト
細いブロック状の所多し。
- S113-2 2,513.2 黒褐色土、粘細砂質シルト
下部にて下部の混じり多くなり、下部とのブロック状の所あり。
- S103(1) 2,513.2 黒褐色土、粘細砂質シルト
下部は混じり多くなり、下部とのブロック状の所あり。
- S103 10764.2 黒褐色土
シルト、粘細砂質、下部の所多し。

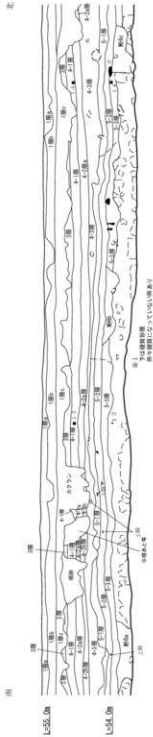
託麻弓削5区西壁断面5



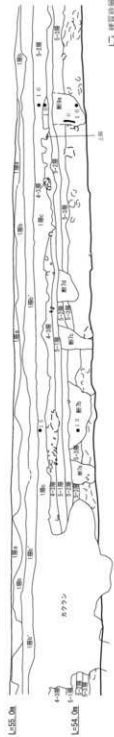
- S904-1 2,513.2 黒褐色土、粘細砂質シルト、粘細砂質シルト
下部の所多し。
- S904-2 2,513.2 黒褐色土、粘細砂質シルト、粘細砂質シルト
下部の所多し。
- S905-1 2,513.2 黒褐色土、粘細砂質シルト、粘細砂質シルト
下部の所多し。
- S905-2 2,514.2 黒褐色土、粘細砂質シルト、粘細砂質シルト
下部の所多し。

第12図 託麻弓削遺跡群5区 土層断面図 (S-1/60)

託麻弓削5区西壁断面図



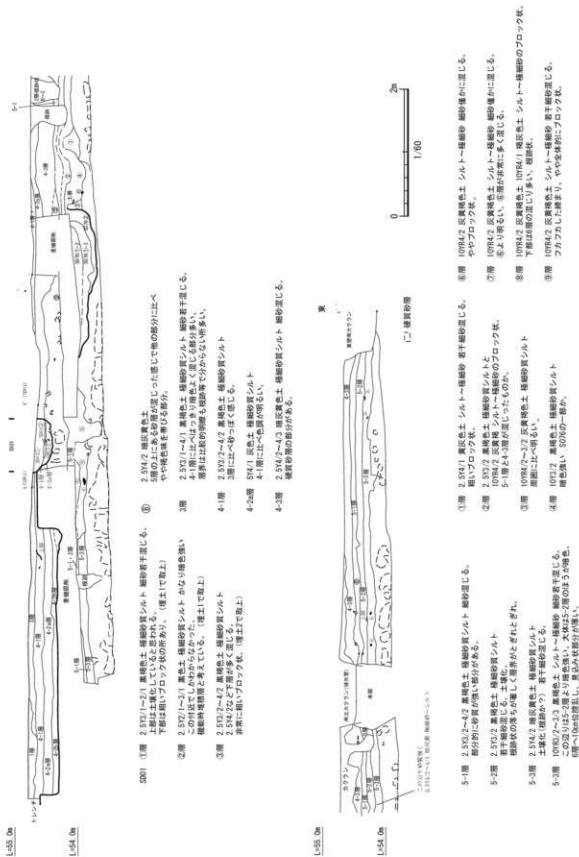
託麻弓削5区西壁断面7



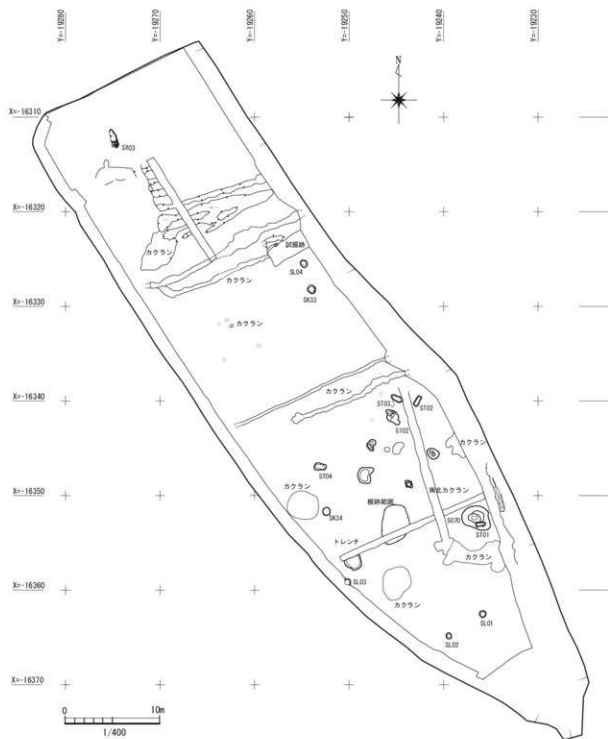
- 1節⑦ 2.573.2 黄褐色土 堆積砂じりシルト
 2.574.1 黄褐色土 堆積砂じりシルト
 10762.1 黄褐色土シルト(印地のローム4のようなもの)
 10762.2 黄褐色土シルト(印地のローム5のようなもの)
 堆積して黒いブロック状(赤土)
 下層には2-5cm、堆積→堆積質シルト、574/180がある所がある。
- ⑦ 10764.1 黄褐色土→2.1 堆積砂→シルト わずかに堆積砂になる。
 2.574.1 黄褐色土→2.2 黄褐色土 堆積砂→シルト
 2.574.2 黄褐色土→2.3 黄褐色土 堆積砂→シルト
 ⑧ -2 2.574.1 黄褐色土→2.7 黄褐色土 堆積砂→シルト
 堆積質になる。全体的によく混じる。
 ⑧ -1には比べない。断面は比較的単純。

- 節7a 10764.2 黄褐色土シルト→堆積砂、堆積質になる。
 6層がそれぞれに混じる。堆積と等か?
 節7b 10764.2 黄褐色土シルト→堆積砂、若干堆積質になる。
 6層がそれぞれに混じる。堆積と等か?
 節7c 10764.2 黄褐色土→2.2 堆積質シルト
 細かいブロック状でやや灰色のある層土。
 上は4層以上の堆積と等か?
 節7d 2.574.1 黄褐色土→2.1 堆積砂じりシルト
 堆積砂
 2.574.2 黄褐色土→2.2 堆積砂じりシルト
 若干混在するもの。

第13図 託麻弓削遺跡群5区土層断面図 (S=1/60)



第15図 託麻弓削遺跡群5区 東西トレンチ土層断面図 (S=1/60)



第16図 託麻弓削遺跡群5区 遺構配置図 (S=1/400) - 縄文 -

①石組炉 (第17図～第22図)

SLO1 (第17図～第19図)

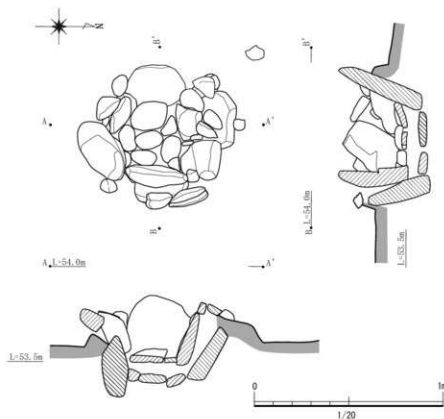
SLO1は3623グリッドに位置している石組炉である。遺構の規模は径約80cm、検出面からの深さは約50cmを測る。検出時、石組炉内には石が詰まった状態であった。よって、発掘作業では、詰まった石を取り外し、全体の状態を確認している。

石組炉は、人頭程度の石を敷石とし、扁平な大形の石で周囲を円形に囲んでいる。大形の石は6個あり、やや斜めに立て並べられていた。立てられた大形の石の表面には剥離が見られるものがある一方、裏面に剥離はみられなかった。石の表面は赤色や黒色に変色していた。平成27年度5区調査担当者によれば、石組炉の上位から炭化物を検出したとのことだが、正確な位置はわからない。石組炉を解体したところ、敷石の5cmほど下位から更に敷石が見つかり、扁平な大形の石で円形に囲んでいることもわかった。

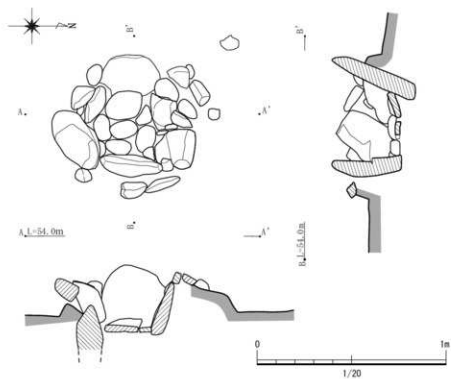
したがって、本遺構は、①断面が台形状の土坑を掘削し、人頭程度の石を敷石とする。敷石の周囲に扁平な大形の石をやや斜めに立て円形に配して構築し、石組炉として使用する。②そののち、やや上位に新たな石を敷石とし、周囲を囲む扁平な大形の石は一部を再利用、一部を新たに追加して使用した石組炉と考えられる。

なお、発掘作業では石組炉周辺の遺構検出作業は入念に行い、竪穴建物の検出に努めたが、見つけることはできなかった。

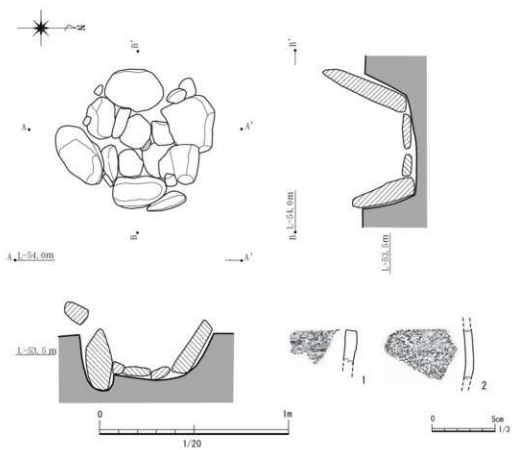
石組炉内からの出土遺物はなかったが、上記の検出作業時に周辺から縄文土器の小片が2点出土したため、図示している。1は口縁部破片である。無文。内外面ともにナデ、口唇部は丁寧に仕上げられている。胎土に細かな雲母や滑石を含んでいる。2は胴部破片である。無文。内面はナデ、外面はケズリ後ナデ。胎土に細かな雲母や滑石を含んでいる。いずれも縄文時代後期のものと思われる。



第17図 5区 SLO1 石組炉実測図



第18图 5区 SLO1 石組炉 第1面実測図



第19图 5区 SLO1 石組炉 第2面実測図

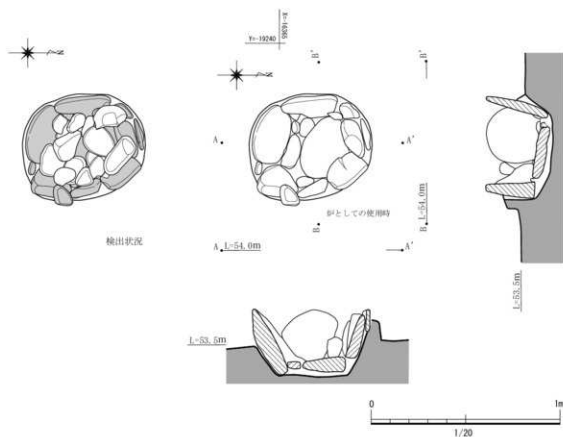
SL02 (第20図)

SL02は3623グリッドに位置している石組炉である。遺構の規模は径約65cm、検出面からの深さは約35cmを測る。検出時、石組炉内には石が詰まった状態であった。よって、発掘作業では、詰まった石を取り外し、全体の状態を確認している。

石組炉は、人頭程度の石と扁平な大形の石を敷石としている。一方、周囲を円形に囲む石は扁平な大形の石である。大形の石は5個あり、やや斜めに立て並べられていた。立てられた大形の石の表面には剥離が見られるものがあるが、裏面に剥離はみられなかった。石の表面は赤色や黒色に変色していた。

なお、発掘作業では石組炉周辺の遺構検出作業は入念に行い、竪穴建物の検出に努めたが、見つかることはできなかった。

石組炉内からの出土遺物はなかったが、検出面、遺構の構造等から当該期の遺構と考えている。



第20図 5区 SL02 石組炉実測図

SL03 (第21図)

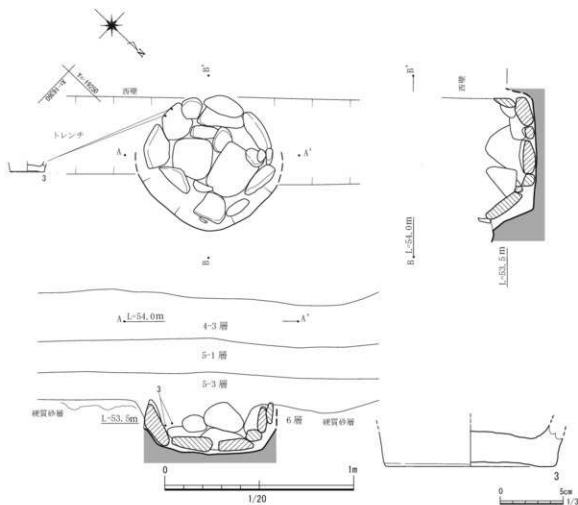
SL03は3525グリッドに位置している石組炉である。南西側が調査区外に広がるため、推測ではあるが遺構の規模は径約80cm、検出面からの深さは約30cmを測る。SL01・SL02に比べると浅い。検出時、石組炉内には22個の石が詰まった状態であった。よって、発掘作業では、詰まった石を取り外し、全体の状態を確認している。

石組炉は、拳二つ程度の大きさの石や扁平な大形の石を敷石とし、周囲を円形に囲んでいる。やや大形の石は9個程あり、やや斜めに立て並べられていた。立てられた扁平な石の表面には剥離が見られもがある一方、裏面には剥離はみられなかった。石の表面は赤色や黒色に変色していた。石材はSL01・SL02に比べると小振りであり、丸味のある石が多い。

調査区西壁に掛るため、断面の観察を入念に行うことができた。しかし、調査最終面の硬質砂層を掘り込んで構築していることは確かだが、さらに上層に掘り込み面があるかについては捉えることができなかった。

断面観察と併せて、石組炉周辺の遺構検出作業は入念に行い、竪穴建物の検出に努めたが、見つけることはできなかった。

石組炉の上位、調査区西壁断面から縄文土器片が出土しているため、図示している。本遺構に伴うものの可能性がある。3は底部破片である。底部外面には、鯨背椎骨痕が見られる。縄文時代後期のものと思われる。



第21図 5区 SL03 石組炉実測図

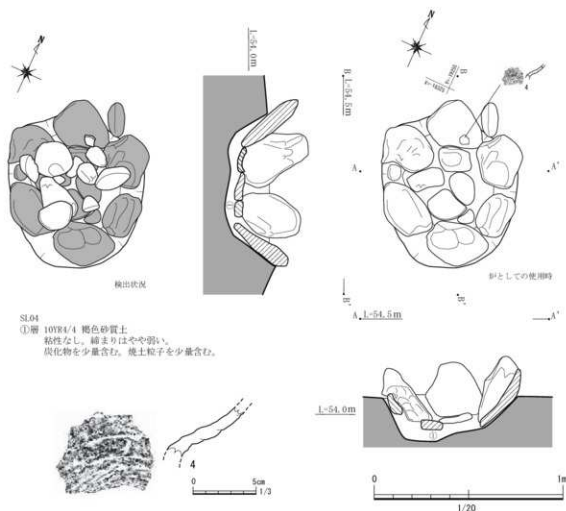
SL04 (第22図)

SL04は3225グリッドに位置している石組炉である。遺構の規模は径約90cm、検出面からの深さは約40cmを測る。検出時、石組炉内には21個の石が詰まった状態であった。よって、発掘作業では、詰まった石を取り外し、全体の状態を確認している。

石組炉は、拳一つから二つ分程度の大きさの石を敷石とし、扁平な大形の石で周囲を花卉状に囲んでいる。大形の石は6個あり、やや斜めに立て並べられていた。立てられた6個の大形の石の内、5個の石の表面には剥離が見られるが、裏面に剥離はみられなかった。剥離は石の中心から下位におよび、ほぼ同じ高さで揃っていた。石の表面は赤色や黒色に変色している。埋土には微量の炭化物や焼土の粒、剥離したと思われる石片が含まれていた。

なお、発掘作業では石組炉周辺の遺構検出作業は入念に行い、竪穴建物の検出に努めたが、見つかることはできなかった。

石組炉内、花卉状に囲む北側の石の1cm程上位から縄文土器の小片が1点出土したため、図示している。4は胴部から底部と思われる破片である。無文。内面はナデ、外面は粘土帯の積み上げ痕が明確に残る。縄文時代後期のものと思われる。



第22図 5区 SL04 石組炉実測図

②土坑（第23図・第24図）

SK33（第23図）

SK33は3225グリッドに位置している。遺構の規模は径約90cm、検出面からの深さは約40cmを測る。

平面形態はほぼ円形、断面形態は台形状を呈する。遺構内には20個の石が詰まった状態であった。発掘作業では、石組炉の可能性のある遺構と考え、調査を進めている。

遺構内から出土した石は小石や拳大の石から人頭大の石までを含む。4基の石組炉に比べ厚みのある石が多い。扁平な石でも表面に剝離はみられなかった。また、石は石組炉のように整然と配置した状態ではなく、遺構内に投げ込まれたような状態で出土している。埋土に炭化物や焼土粒は含まれない。したがって、本遺構は石組炉ではなく、石を廃棄した土坑の可能性はある。

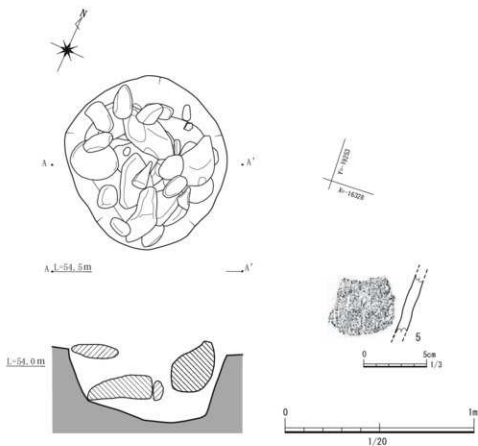
土坑内からは、土坑底面よりやや浮いた位置で縄文土器の胴部と思われる小片が1点出土している。

SK34（第24図）

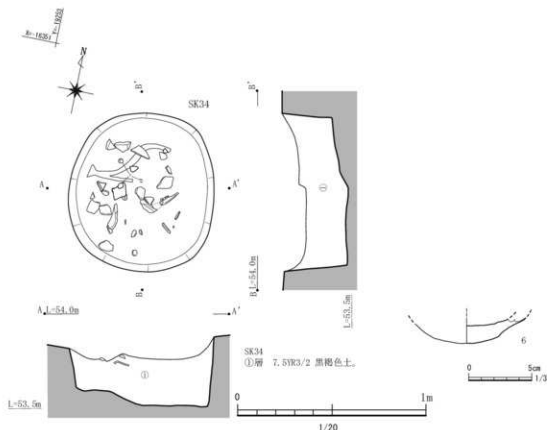
SK34は3525グリッドに位置している。遺構の規模は径約85cm、検出面からの深さは約38cmを測る。

平面形態はほぼ円形、断面形態はほぼ長方形を呈する。

土坑内からは、検出面に近い位置より獣骨と縄文土器の小片が出土している。ここでは縄文土器1点を図示した。



第23図 5区 SK33 遺構・出土遺物実測図



第24図 5区 SK34 遺構・出土遺物実測図

③土墳墓 (第25図～第28図)

ST01 (第25図)

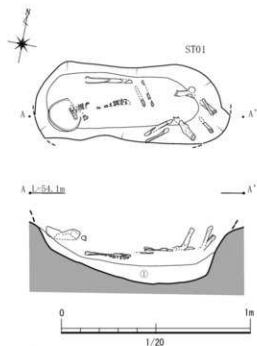
ST01は3523グリッドに位置している土墳墓である。遺構の規模は長軸約1.03m、短軸約0.42m、検出面からの深さは約32cmを測る。平面形態は長楕円形、断面形態は緩やかに傾斜した台形状を呈する。遺構内には人骨が残っていた。残存していた部位は、頭蓋、上腕骨(左)、前腕の骨(両側)、寛骨(両側)、大腿骨(右)、脛骨(両側)、腓骨(左)である。埋葬姿勢は仰臥で、頭は西を向いていた。性別は男性と推定されているが、年齢は不明である。

土墳墓内から、土器等の遺物は出土しなかったが、検出面、埋葬人骨の状況、遺構周辺での出土遺物等から当該期の遺構と考えている。詳細は第5章を参照されたい。

ST02 (第26図)

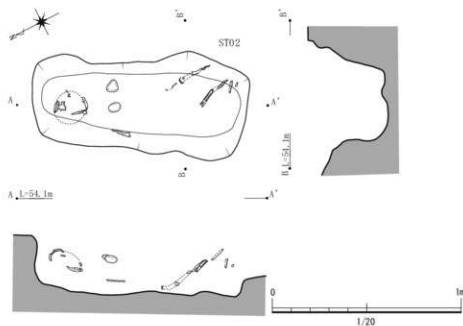
ST02は3424グリッドに位置している土墳墓である。遺構の規模は長軸約1.13m、短軸約0.55m、検出面からの深さは約32cmを測る。平面形態は長方形に近い長楕円形、断面形態は方形を呈する。遺構内には人骨が残っていた。残存していた部位は、頭蓋、上腕骨(右)、大腿骨(両側)、脛骨(右)である。埋葬姿勢は仰臥で、頭は北東を向いていた。性別は女性と推定されているが、年齢は不明である。

土墳墓内から、土器等の遺物は出土しなかったが、検出面、埋葬人骨の状況、遺構周辺での出土遺物等から当該期の遺構と考えている。詳細は第5章を参照されたい。



ST01
 ①層 10YR5/3 暗褐色土 砂質土 しまりなく、粘質なし。
 灰褐色の砂層が若干、混じる。
 炭化物は、少量含まれる。

第25図 5区 ST01人骨出土実測図



第26図 5区 ST02人骨出土実測図

ST03 (第27図)

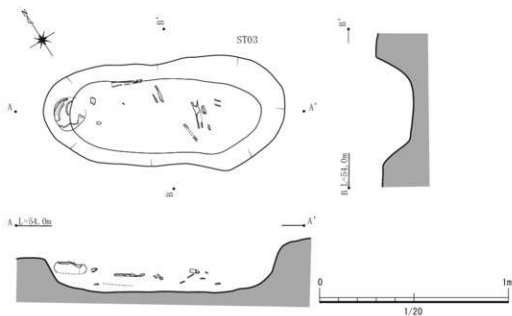
ST03は3424グリッドに位置している土壌墓である。遺構の規模は長軸約1.28m、短軸約0.61m、検出面からの深さは約27cmを測る。平面形態は長楕円形、断面形態は緩やかな台形状を呈する。遺構内には人骨が残っていた。残存していた部位は、頭蓋、上腕骨(両側)、前腕の骨(左)、大腿骨、脛骨である。埋葬姿勢は仰臥で、頭は西を向いていた。下肢骨は解剖学的姿勢を保っておらず、人為的に集骨されていた、とされる。性別、年齢ともに不明である。

土壌墓内から、土器等の遺物は出土しなかったが、検出面、埋葬人骨の状況、遺構周辺での出土遺物等から当該期の遺構と考えている。詳細は第5章を参照されたい。

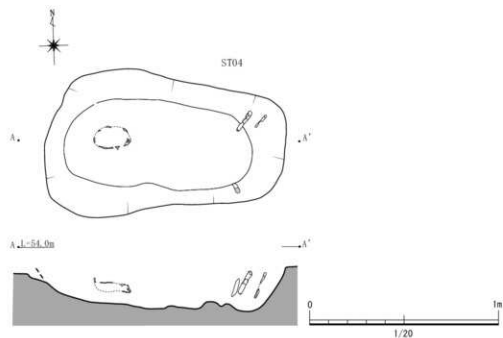
ST04 (第28図)

ST04は3425グリッドに位置している土壌墓である。遺構の規模は長軸約1.27m、短軸約0.78m、検出面からの深さは約24cmを測る。平面形態は長楕円形、断面形態は緩やかな台形状を呈する。遺構内には人骨が残っていた。残存していた部位は、頭蓋と左右の大腿骨のみである。埋葬姿勢は仰臥で、頭は西を向いていた。性別、年齢ともに不明である。

土壌墓内から、土器等の遺物は出土しなかったが、検出面、埋葬人骨の状況、遺構周辺での出土遺物等から当該期の遺構と考えている。詳細は第5章を参照されたい。



第27図 5区 ST03人骨出土実測図



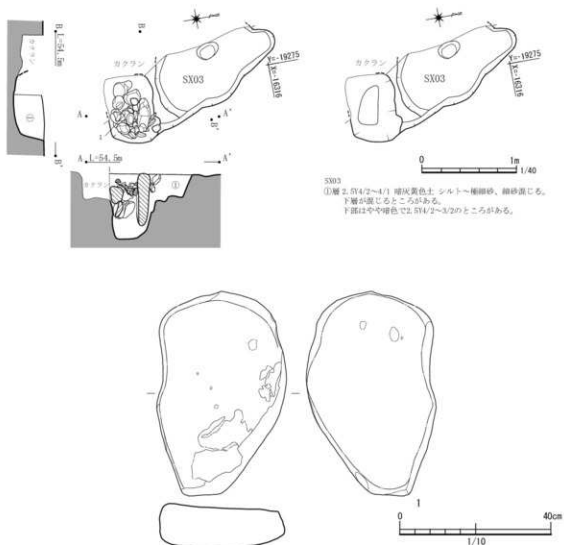
第28図 5区 ST04人骨出土実測図

④不明遺構（第29図）

SX03（第29図）

SX03は3127グリッドに位置している。西側が破壊されており、全体の形態および規模がわからない。実測図を見ると、北側は皿状に浅く、南側が極端に深くなる。南側には多くの石が詰まっていたようである。土坑内からは1が縦に突き刺さるような状態で出土している。遺構認定に疑問がないわけではないが、南側については、SK33と同様に石を廃棄した土坑とも考えられるため、不明遺構として掲載することとした。

1は長さ54.0cm、重さ37kgと大きく、表面・裏面・側面とも使用により磨かれている。石皿や台石として使用されたものと思われる。石材は安山岩である。



第29図 5区SX03遺構・出土遺物実測図

⑤縄文土器（第30図～第82図）

調査5区では基本土層3層から6層、とりわけ4層から5層において大量の縄文土器が出土している。その量はコンテナ200箱を超える量である。発掘作業では、平成27年度調査途中から出土位置の三次元情報を記録し取り上げているが、対象は全点ではないようである。したがって、層位だけ記録されているものやグリッドだけ記録されているものが多数存在する。そのため、ドットマップの掲載は見送り、総括において、報告書に図示した資料のみ、その出土層位とグリッドを掲載することとしている。

ここでは、これまでの先行研究（荒木2003）（石田2007・2008）（乙益・前川1969）（小林1939）（堂達2008）（富田1986）（水ノ江1993・2008・2009）（田中1979・1981・1988）（富井2008）（宮地2008）（九州縄文研究会2010・2011・2017）を参考に出土した土器を時間軸にそって大枠で群に大別し、さらに以下のように類に細分した。

大量の土器に悩まされ、また解らないことも非常に多かった。事実誤謬も多々あるものと思われる。不十分な内容であるが御容赦願いたい。

第I群 前期

- 1類 曾畑式に比定できるもの

第II群 後期初頭から中葉

- 1類 中津式・福田KⅡ式に比定できるもの
 2類 阿高式系（阿高式・南福寺式・出水式）に比定できるもの
 凹線や沈線によるS字状文・逆S字状文・羽状文・斜線文・弧文・長楕円文、凹点文などを主体に施文されたもの。または、これらに伴うと想定される無文の土器。
 3類 御手洗A式に比定できるもの
 4類 北久根山式に比定できるもの
 5類 辛川式に比定できるもの
 概ね辛川式と想定されるが前後の時期を含む可能性がある土器。

第III群 後期の土器

- 1類 明確な帰属時期が不明のもの
 おそらく阿高式系、辛川式に伴うと想定されるが、明確にできなかった土器群。

第IV群 後期後半から晩期

- 1類 古閑式から黒川式に比定できるもの

第I群 前期

- 1類 曾畑式に比定できるもの（第30図）
 7～8は深鉢の口縁部破片である。口縁部はやや外反する。内外面に沈線が施される。曾畑式と思われる。



第30図 5区 縄文土器（前期）

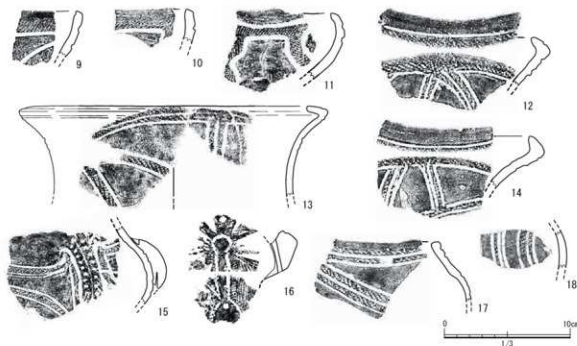
第Ⅱ群 後期初頭から中葉

1類 中津式・福田KⅡ式に比定できるもの(第31図)

9～11は鉢の口縁部破片である。9・10は縄文施文後、沈線で区画する。縄文は撚り戻しのように見える。内外面ともに丁寧にミガキが施されている。中津式の可能性がある。11は口縁部が内湾し、外面に2段の縄R Lを施文後、沈線で区画する。中津式と思われる。

12～14は鉢の口縁部から胴部破片である。12・13は外面に2段の縄R Lを施文後、3本沈線で区画する。外面は赤彩が施されているようである。内外面ともに煤が付着している。同一個体の可能性がある。14は外面に2段の縄R Lを施文後、3本沈線で区画する。器面が磨滅している。12・13とは胎土が異なる。いずれも福田KⅡ式と思われる。

15は鉢の胴部破片と思われる。胴部には突起が付く。外面に2段の縄R Lを施文後、3本沈線で区画する。突起上には竹管文が2列施されている。福田KⅡ式に伴うものか。16は鉢の胴部破片の突起部分と思われる。2段の縄R Lが施文されている。突起部には刺突文が施される。上部から下部に穿孔されている。後期初頭としたが時期は下るかもしれない。17・18も外面に2段の縄R Lを施文後、3本沈線で区画する。



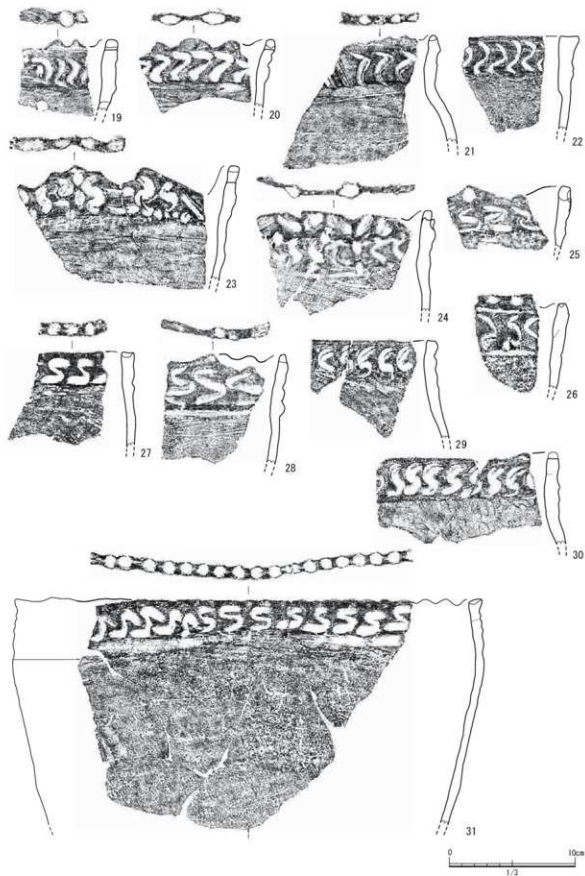
第31図 5区 縄文土器(後期初頭1)

2類 阿高式系(阿高式・南福寺式・出水式)に比定できるもの(第32図～第66図)

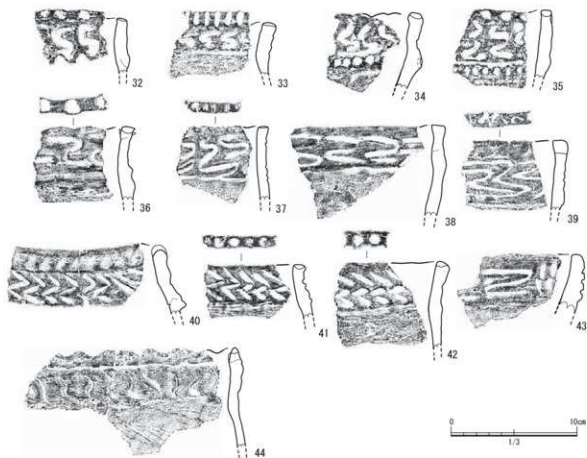
19～30は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部破片である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。19～22は逆S字状文が施され、口縁部に突起が付く。19は文様帯直下に穿孔されている。23・24はS字状文、逆S字状文、凹線、凹点が施されている。

27～31はS字状文が施されている。31は深鉢の口縁部から胴部下半まで残存していた。口縁部文様帯は帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されている。S字状文は平行なS字状文とやや斜めのS字状文である。口唇部は凹点が施されており、内面には粘土の輪積み痕が明瞭に残っている。

32～44は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部破片である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。32・34・35はS字状文もしくは逆S字状文の直下および口唇部に凹点が施される。33は口唇部に刻目が施されている。36～39はやや流れたような逆S字



第32図 5区 縄文土器（後期初頭2）



第33図 5区 縄文土器（後期初頭3）

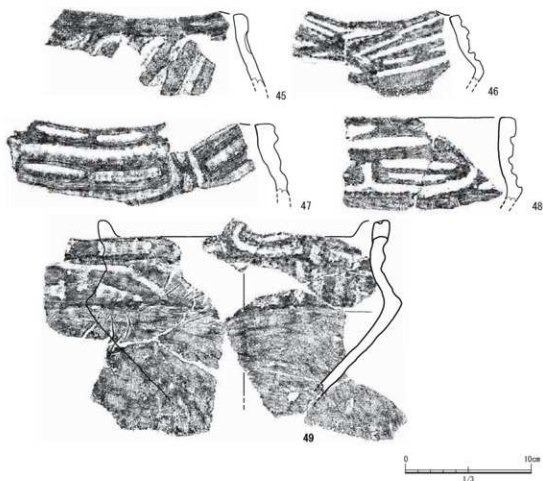
状文もしくはS字状文が施されている。40～42は角張った斜線により逆S字状文のように施文している。

43はやや流れたような逆S字状文と刺突状の文様が施されている。胎土に滑石を含む。44は浅い沈線で逆S字状文を施文している。口唇部に粘土紐を帯状に貼り付け、凹点を施している。

45～49は浅鉢の口縁部から胴部下半である。いずれも口唇部から胴部外面に赤彩されている。45は斜めの太い凹線が施されている。46は細い凹線と粘土紐による隆帯が施される。47・48は横位と縦位の太い凹線文で区画している。49は底部から直線状に開き、胴部中位で内側に屈曲し、真っ直ぐ立ち上がる。口唇部には突起が付く。横位と斜位の太い凹線文が施されている。内外面ともに丁寧なミガキ。胎土には滑石を含んでいる。

50～52は浅鉢の口縁部から胴部下半である。いずれも赤彩されている。胴部下半から直線状に開き、胴部中位で内側に屈曲し、やや内傾し立ち上がる。50は胎土に雲母と思われる鉱物を含む。51は口唇部および肩部に突起が付く。胎土には角閃石、滑石を多く含む。52は口唇部に突起が付く。53は浅鉢である。底部から外反ぎみに開き、胴部中位からやや内湾ぎみに立ち上がる。胴部外面から内面の口縁部直下まで赤彩されている。胴部外面には太い凹線により施文されている。口唇部には突起が三つ付く。欠損部があるため本来は四つの可能性もある。突起には凹点や沈線により施文されている。

54～71は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下は、ケズリの後ナデが施されているものが多い。文様は凹線による逆くの字の羽状文が施文される。54～60・62は文様帯直下が太い凹線で区画される。口唇部には凹点が施される。59は羽状文と区画する太い凹線の間に短い凹線が入る。65は羽状文と胴部の間に凹点が施されている。口唇部にも凹点が入る。



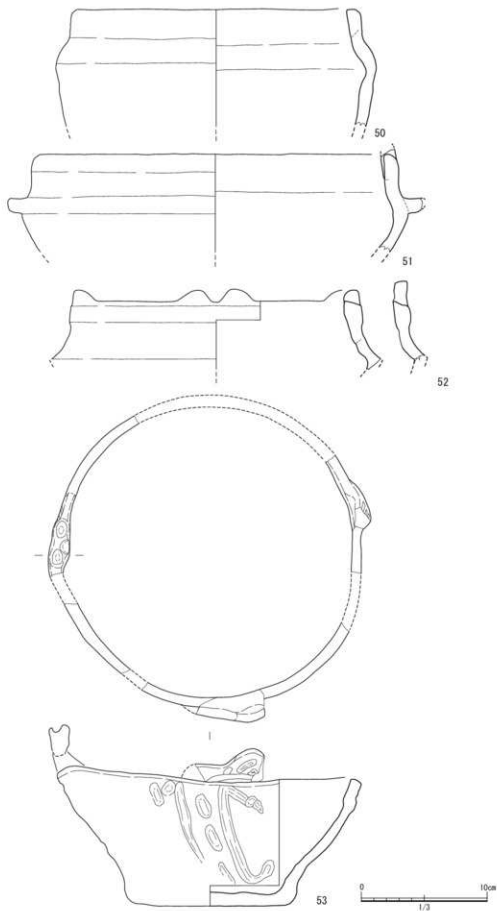
第34図 5区 縄文土器（後期初頭4）

67・68は文様帯の幅が狭い。69～71は羽状文が崩れたようになる。

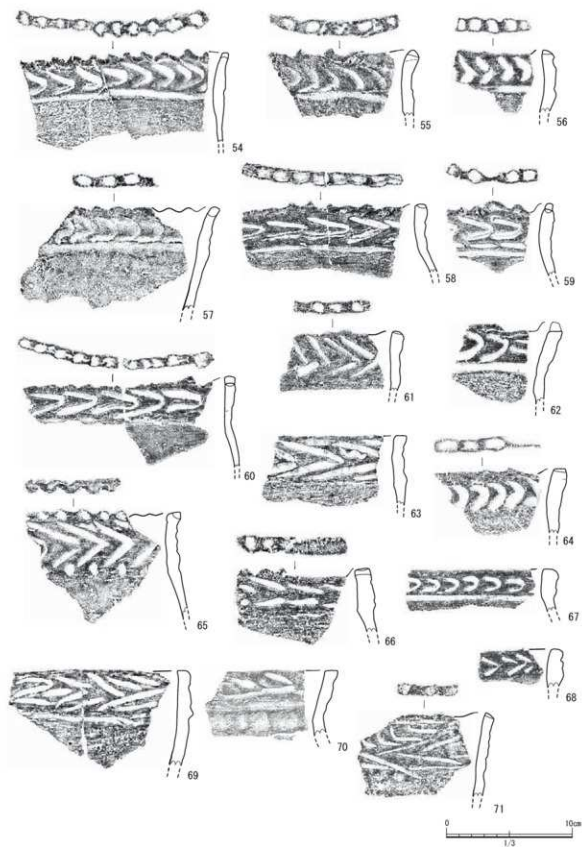
72～80は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下は、ケズリの後ナデが施されているものが多い。文様は凹線によるくの字の羽状文が施文される。口唇部に凹点が施されるものが多い。73は口縁部文様帯の直下から器面を深くケズリ、文様帯と胴部の境を明確にしている。74・76は文様帯直下が凹線で区画される。77～80は胴部からやや直線的に開き、口縁部との境で内傾し、口縁部は直線的に立ち上がる。77は胴部のケズリは粗く口縁部文様帯との区別が明瞭である。80は口縁部文様帯直下が凹線で区画される。81は深鉢の口縁部から胴部下半である。口唇部には山形状の突起が2箇所残存しており、おそらく4箇所付くものと思われる。口縁部文様帯は帯状に肥厚する。文様帯直下は、ケズリの後ナデが施されている。口縁部文様帯には、くの字状の羽状文が施文される。突起直下には、くの字を二つ続けたような羽状文を施している。胴部には2箇所穿孔されている。

82～84は深鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。胴部下半から直線的に開き、口縁部との境付近で内傾し、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部文様帯と胴部の境は明瞭で、82はくの字状の羽状文が施文されており、胴部はケズリの後ナデとミガキが施されている。83・84は羽状文というよりは半月状の文様が施文されている。胴部は粗いケズリの後多少ナデているようである。口唇部には凹点が施されている。84は口縁部文様帯直下が凹線で区画される。なお、83と84は同一個体の可能性がある。

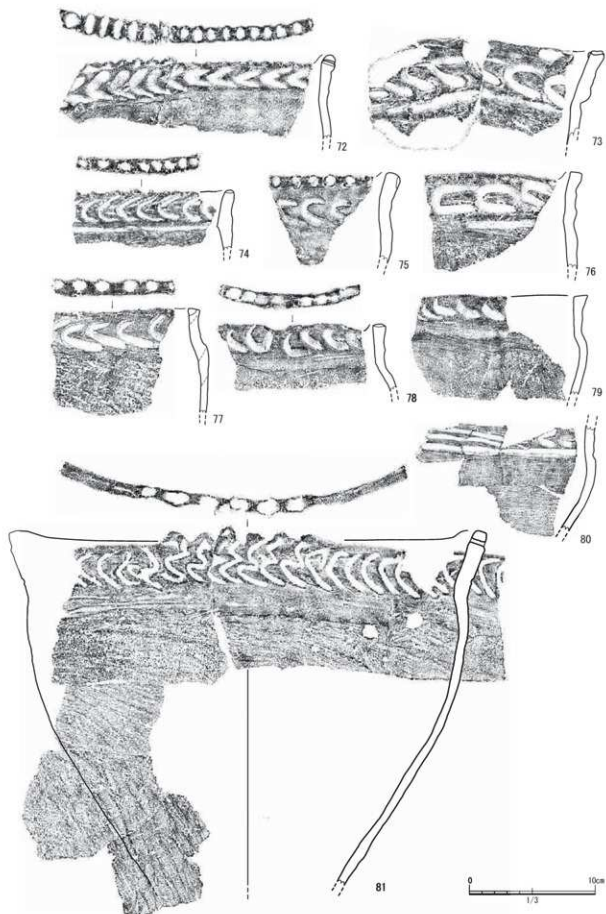
85～100は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯



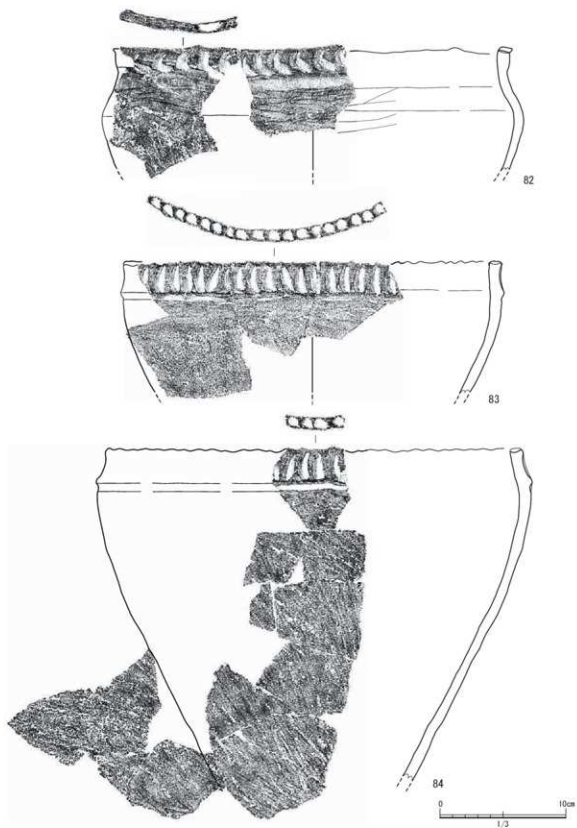
第35図 5区 縄文土器（後期初頭5）



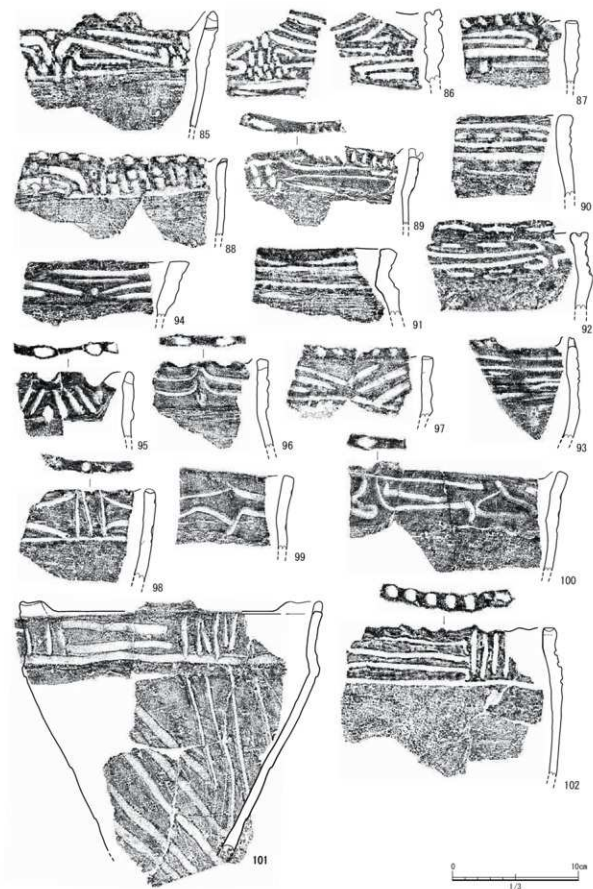
第36图 5区 縄文土器(後期初頭6)



第37図 5区 縄文土器(後期初頭7)



第38図 5区 縄文土器（後期初頭8）

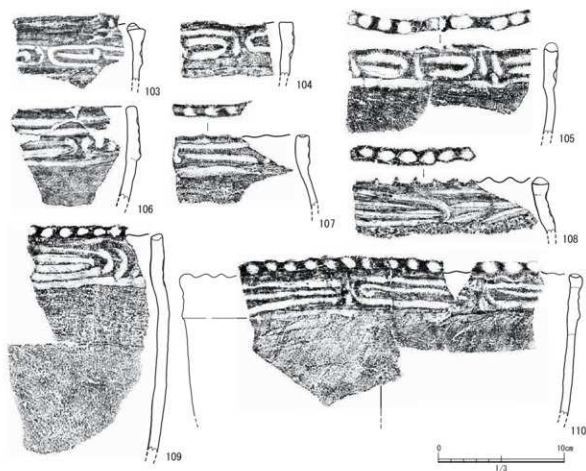


第39図 5区 縄文土器 (後期初頭9)

直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。文様は凹線、凹点が施文される。86は内面にも同様に施文されている。101は口縁部から胴部下半が残存していた。胴部下半から直線的に開き、口縁部文様帯との境でやや屈曲し外反ぎみに立ち上がる。口唇部には突起が付く。胴部はケズリの後ナデ。口縁部文様帯直下が凹線で区画される。口縁部には横位の太い凹線と縦位のやや細い凹線が施文されている。胴部には斜位の太い凹線と縦位の細い凹線が施される。胎土には滑石を多量に含んでいる。102は口縁部から胴部である。口縁部文様帯が帯状に肥厚する。口縁部文様帯直下が凹線で区画されており、胴部のケズリは明瞭である。口縁部には深い横位の凹線と縦位の凹線が施文されている。口唇部には凹点が施される。胎土には角閃石や雲母のような鉱物を含む。

103～110は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。ナデの後ミガキが施されているものもある。103は凹線を長楕円形に施文し、間を横位の凹線で埋めている。口唇部に突起が付く。104～105はコの字状の凹線と短直線の凹線を施文している。105は口唇部に粘土紐を貼り付け突起としつつ凹点を施す。106は横位の凹線、コの字状の凹線で施文している。108～110はいずれも口唇部に凹点を施している。108は横位の凹線、長楕円形の凹線、羽状文を施文。109は逆くの字状の凹線と横位の凹線を施文。110は長楕円形の凹線、横位の凹線、凹点を施文している。

111～117は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。111・116は凹点を平行に施文した下に、横位の凹線を施している。111は口唇部に突起が付く。112は口唇部に突起を付け、突起には凹点、口縁部には横

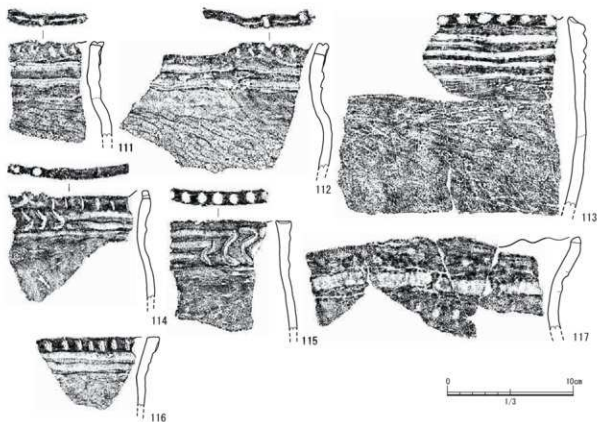


第40図 5区 縄文土器（後期初頭10）

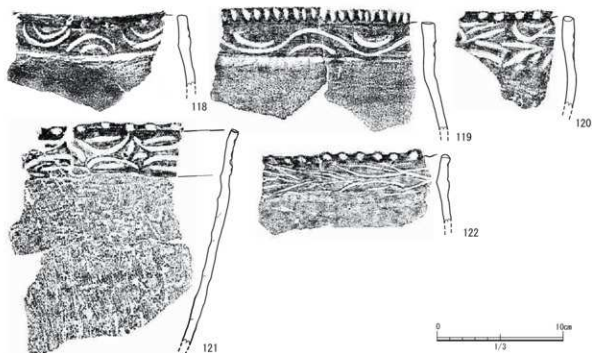
位の凹線を施文している。113は横位の凹線を5条施文し、口唇部には凹点を施す。胎土には角閃石を多く含む。114は口唇部に突起を付け、凹点、逆くの字状の羽状文、横位の凹線を施している。115は横位の凹線とくの字状の羽状文が一体化している。口唇部には凹点を施す。117は横位の太い凹線を短く施す。凹線と凹線の間は盛り上がる。胎土には、雲母と思われる鉱物を含む。

118～122は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。118は弧状の凹線を巡らし、様帯直下が凹線で区画されている。119は波状の凹線を巡らし、間に短い弧状の凹線を施す。口唇部には刻みが入る。120は逆くの字状の羽状文とくの字状の凹線で羽状文が施文され、口唇部に凹点が施される。121は横位の凹線、上向き下向きの弧状の凹線、横位の凹線が施文され、間を短い凹線で埋めている。口唇部には凹点が施される。口縁部文様帯と胴部の境は明瞭で、胴部のケズリは粗い。胎土には雲母と思われる鉱物や白色粒子を多く含む。122は逆くの字状の羽状文と弧状の沈線が施文され、口唇部に凹点が施される。

123～132は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。123・124は凹線の平行斜線文が施され、胴部との境には凹点と横位の凹線が施文されている。口唇部には凹点が施される。125・126は上から短い凹線の平行斜線文、やや長い凹線の斜線文・直線文、凹点が施される。口唇部には刻みが入る。127は短い横位の凹線、長い横位の凹線、凹点を2段施している。口唇部には凹点。128は凹線の平行斜線文が施され、胴部との境には凹点。口唇部には凹点が施される。129はやや弧状の凹線と横位の凹線、凹点を施している。口唇部には山形状の突起が付く。130は短い凹線の平行斜線文が施され、胴部との境には凹点が施文される。131・132は横位の凹線、弧状の凹線、凹点が施される。胴部のケズリは粗い。同一個体の可能性があ



第41図 5区 縄文土器（後期初頭 11）



第42図 5区 縄文土器（後期初頭 12）

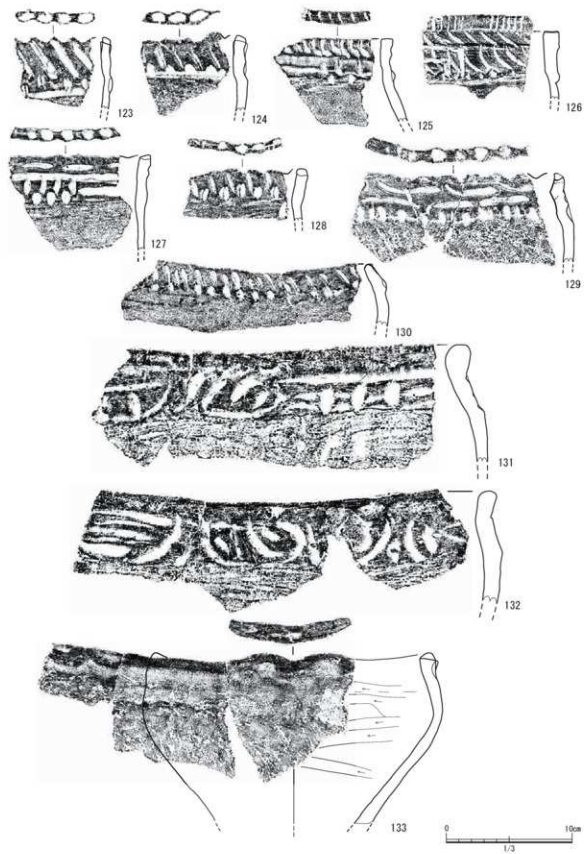
る。133は鉢の口縁部から胴部下半が残存していた。胴部下半から直線的に開き、緩やかに内側に屈曲する。胴部外面はケズリ。口縁部はナデの後ミガキが施されているようである。口唇部に4箇所突起が付く。突起には指で押したように窪む箇所が2箇所ずつある。

134～138は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデとミガキが施されているものが多い。口縁部には短い凹線が136は3段、ほかは2段施されている。口唇部には凹点が入るものがあり、136は突起上に凹点が施されている。137・138は胎土に角閃石、ほかは雲母と思われる鉱物を含む。

139～141は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデとミガキが施されている。139・140は斜線文とT字状の凹線が施されている。口唇部には刻みもしくは直線文が入る。141は凹線が菱形形状に施され、内面には斜線文が施される。胎土には雲母もしくは滑石と思われる鉱物を多量に含む。

142～152は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデとミガキが施されているものが多い。142・145・146・149は凹点が2段施されている。143・144・147・148・151・152は凹点が3段施される。胎土には滑石を含むものが多い。142・148は口唇部に突起が付く。153は深鉢の口縁部から胴部下半が残存していた。口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデ。内面は工具によるナデが施される。凹点は3段施されている。口唇部には突起が付き、胎土には滑石を多量に含む。

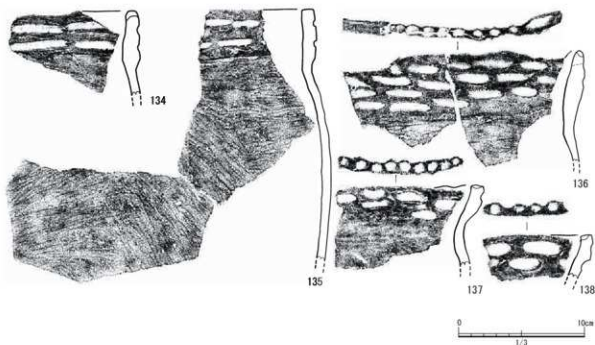
154～159は深鉢もしくは鉢の口縁部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデとミガキが施されているものが多い。凹点が2段施されている。胎土には雲母もしくは滑石と思われる鉱物を含む。160～163は鉢もしくは深鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。角張った凹点もしくは刺突が2段ないし3段施されている。胎土に、160は角閃石、161は滑石、163は雲母と思われる鉱物を多量に



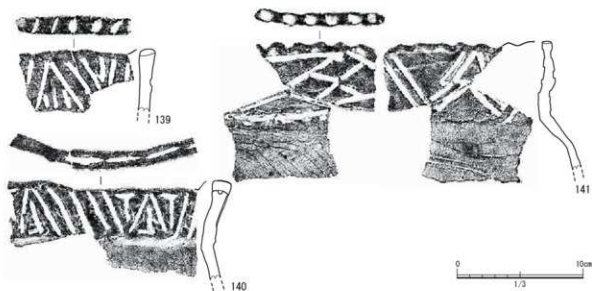
第43図 5区 縄文土器 (後期初頭 13)

含んでいる。161・162は口唇部に突起が付く。

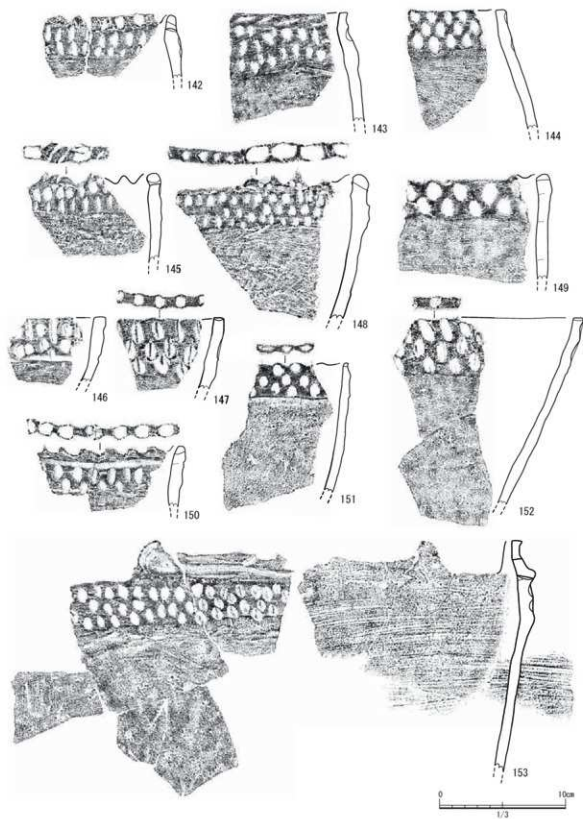
164～172は深鉢もしくは鉢の口縁部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデとミガキが施されているものが多い。胎土には雲母もしくは滑石と思われる鉱物を含むものが多い。164・165・167～172は短い凹線による平行斜線文が2段施文されている。凹線は太いものと細いものがあり、164・165・168・171・172は工具の痕跡が明瞭である。166は凹点状の短い凹線が4段施文される。工具の痕跡は明瞭。167は凹点に近い。169は短い凹線2段と長い凹線が交互に施文されている。170は短い凹線による平行斜線文が2段施文される。口唇部には粘土粗による山形状の突起が付く。胴部のケズリは粗い。171は口縁部文様帯直下が太い凹線で区画されている。173～183は深鉢もし



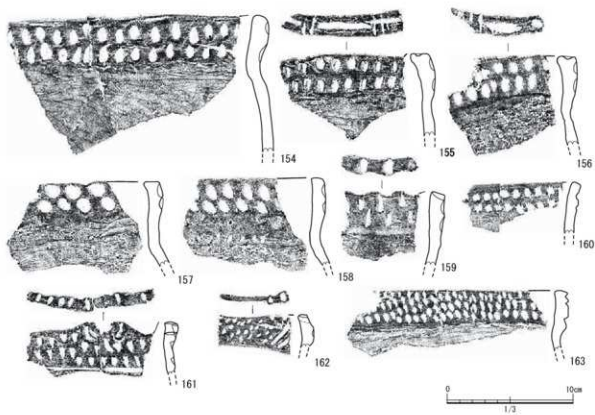
第44図 5区 縄文土器（後期初頭 14）



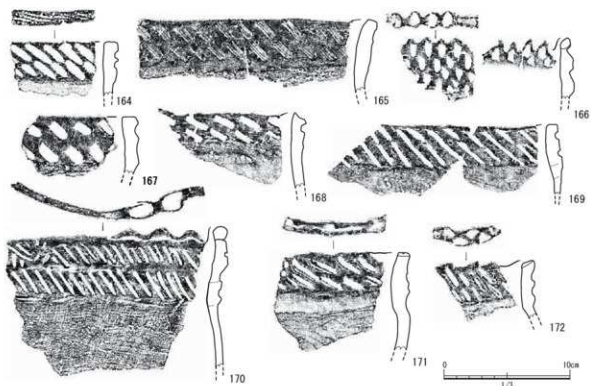
第45図 5区 縄文土器（後期初頭 15）



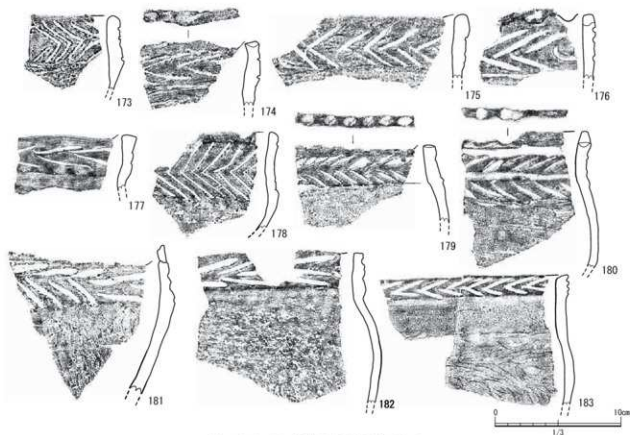
第46図 5区 縄文土器（後期初頭16）



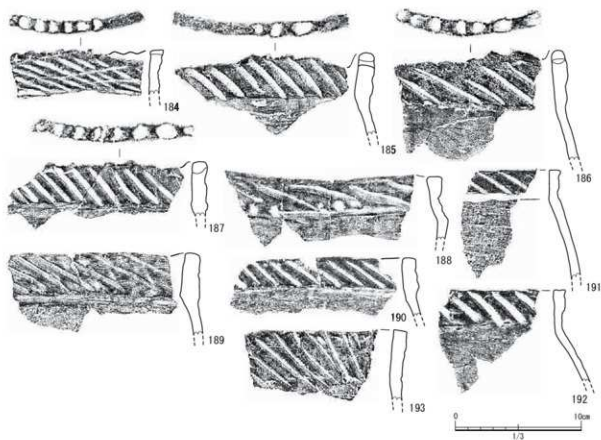
第47図 5区 縄文土器（後期初頭17）



第48図 5区 縄文土器（後期初頭18）



第49図 5区 縄文土器 (後期初頭19)



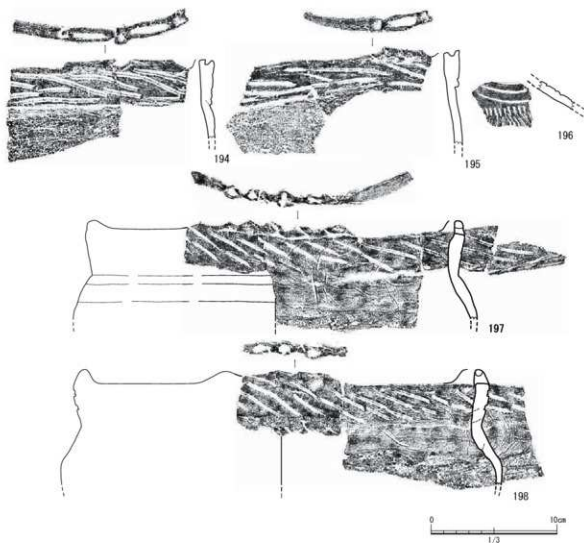
第50図 5区 縄文土器 (後期初頭20)

くは鉢の口縁部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。くの字状の羽状文が施文されている。羽状文は細く、凹線というよりは沈線である。180は横位の凹線、斜線文、横位の凹線、斜線文で羽状にしている。174・176・180・181は口唇部に突起が付く。173・174・178・183は胎土に雲母と思われる鉱物を含む。

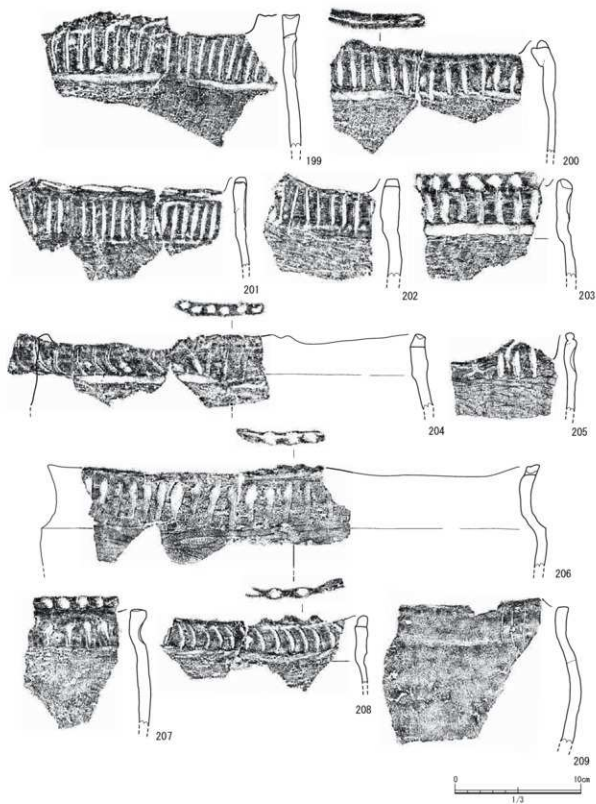
184～193は深鉢もしくは鉢の口縁部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。凹線による平行斜線文が施文されている。188は平行斜線文と胴部の境に横位の凹線、凹点が施文される。184～186は口唇部に突起が付く。

194・195・197・198は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。凹線による平行斜線文が僅に施されている。凹線は工具痕が明瞭で、太い沈線といった方が適切かもしれない。いずれも口唇部に突起をもつが、197・198の突起は2本の粘土紐を振って作っている。194と195、197と198は同一個体の可能性がある。194・195の胴部のケズリは粗い。197・198は胎土に雲母と思われる鉱物を多量に含む。196は胴部破片である。細い沈線が施されている。出水管の胴部破片の可能性があるが判然としない。

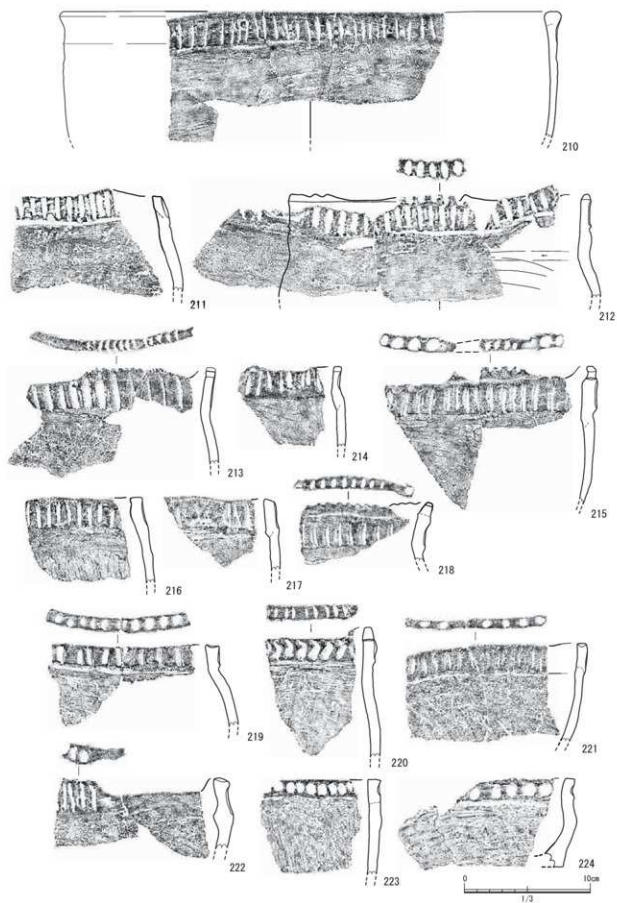
199～209は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。縦位の凹線もしくは沈線のように細い凹線が施され



第51図 5区 縄文土器（後期初頭21）



第52図 5区 縄文土器（後期初頭22）

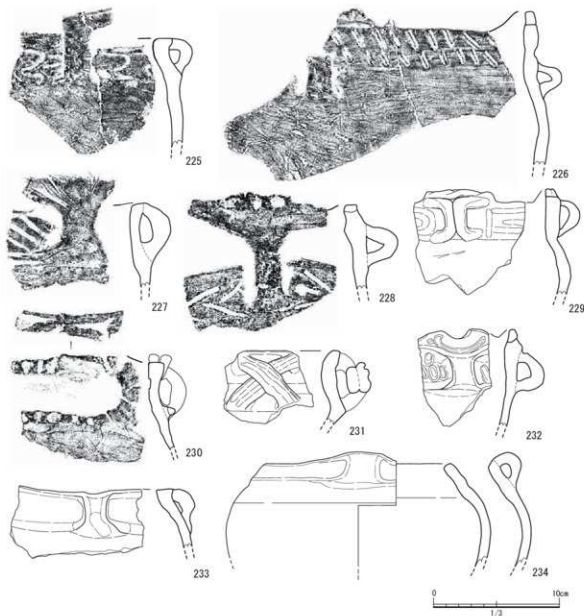


第53図 5区 縄文土器 (後期初頭 23)

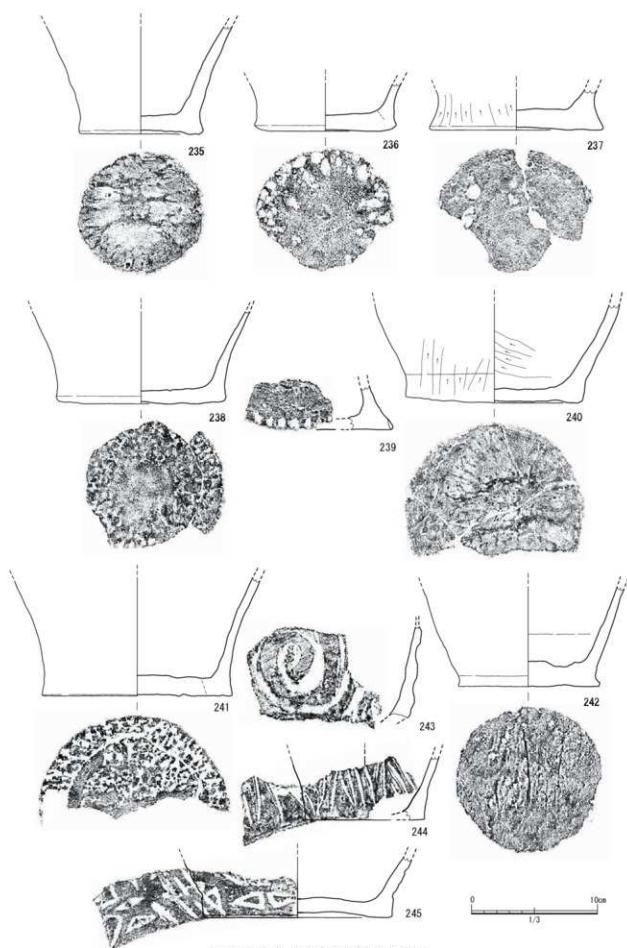
ている。199～201・203・204は文様帯直下が横位の凹線で区画される。207・208の凹線はやや弧状。207は凹線というよりは沈線といった方が適切。199～202・204～206・208は口唇部に突起が付く。201は胎土に雲母と思われる鉱物を多量に含んでいる。

210～223は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデが施されているものが多い。縦位の短い凹線もしくは細い凹線が施文されている。212～215・218は口唇部に突起を持ち、突起上には刻みが施されている。220は凹線が直線文というよりはやや羽状文、223は凹点に近い。224は小型の鉢である。口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はナデが施されている。凹点に近い縦位の短い凹線が施文される。

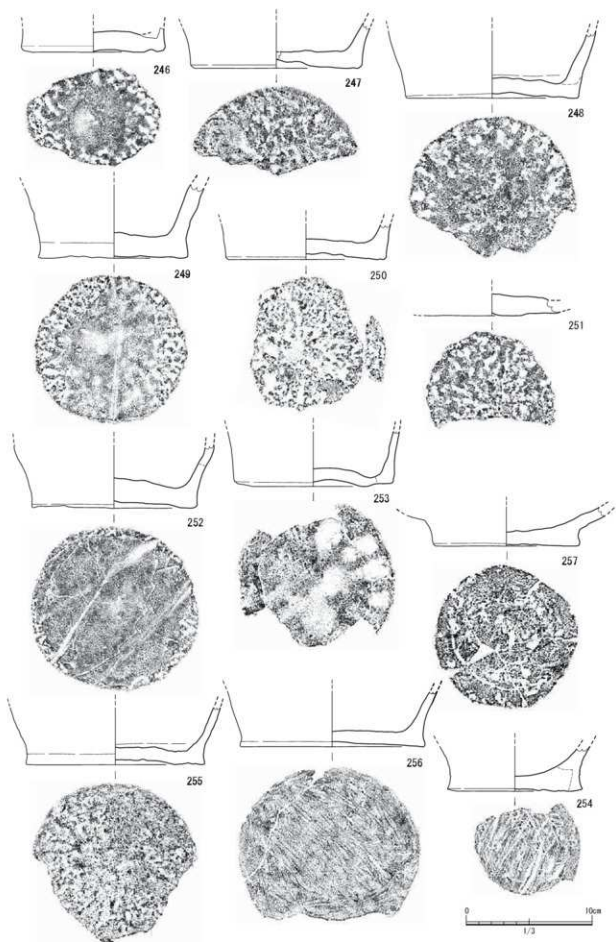
225～234は口縁部に橋状の把手を持つ鉢の口縁部から胴部である。いずれも口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリの後ナデとミガキが施されているものが多い。225は逆S字状文と羽状文が施されている。226は短い凹線による平行斜線文が2段施文されている。工具の痕跡が明瞭である。227は凹線による平行斜線文が施文されている。228は逆くの字状とくの字状の羽状文が施文され、口唇部に



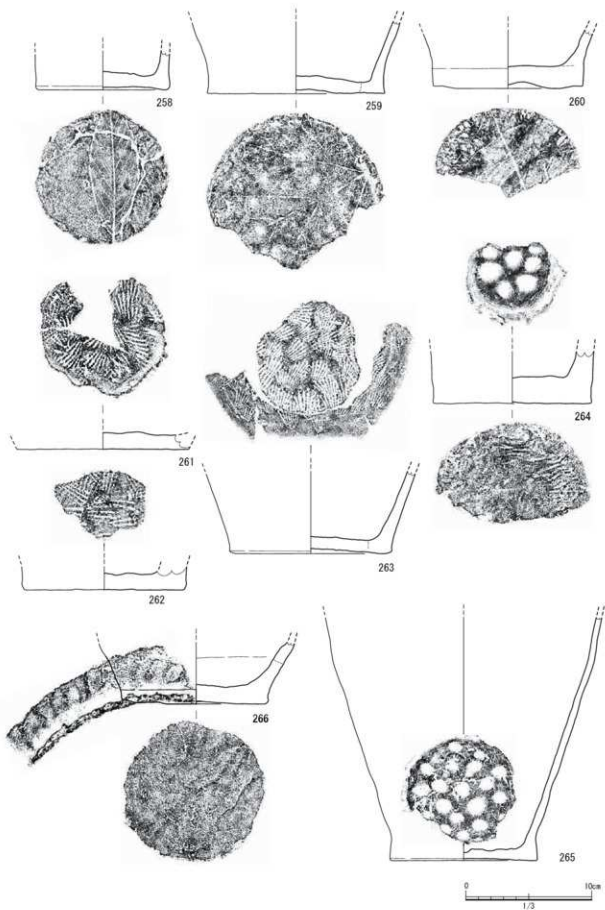
第54図 5区 縄文土器（後期初頭24）



第55図 5区 縄文土器（後期初頭 25）



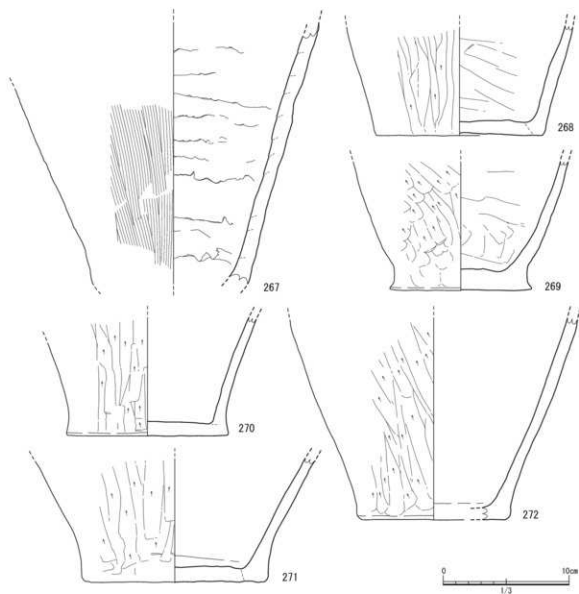
第56図 5区 縄文土器(後期初頭26)



第57图 5区 縄文土器 (後期初頭 27)

は突起が付く。229は左側に凹線を長楕円形に施文、右側に横位の凹線と縦位の凹線を施文しており、把手は粘土紐を二つ合わせたもの。口唇部には粘土紐を重ねた突起が付く。230は凸帯を貼り付け、凸帯上に刻みというよりは凹点を施している。内面には凹線。胎土には雲母と思われる鉱物を多量に含む。231の把手は2本の粘土紐をX字状にしたもの。把手上には2条の凹線が入る。232は凹点が羽状に施文されており、口唇部に突起が付く。胎土には雲母と思われる鉱物を含む。233は無文。胎土には雲母と思われる鉱物を含む。234も無文。口唇部に2箇所穿孔がある。胴部は丁寧なナデ。胎土には角閃石を多く含む。

235～245は深鉢もしくは鉢の胴部下半から底部である。底部端部はやや八の字気味に張り出したものが多い。235・236・238・240・241は底部外面に鯨脊椎骨痕が残り、241は底部の成形がよくわかる資料。237は底部外面に丸い種子のような痕跡がある。239は底部端部に凹点のような刻みが入る。242は底部外面に敷物のような痕跡があるが判然としない。243は雑な凹線により渦状の文様が施文されている。244は刻みのような沈線が縦位、斜位に施されている。245は凹線が斜位もしくは三角形に施されている。内外面ともに赤彩されており、胎土には雲母と思われる鉱物を多量に含む。



第58図 5区 縄文土器（後期初頭28）

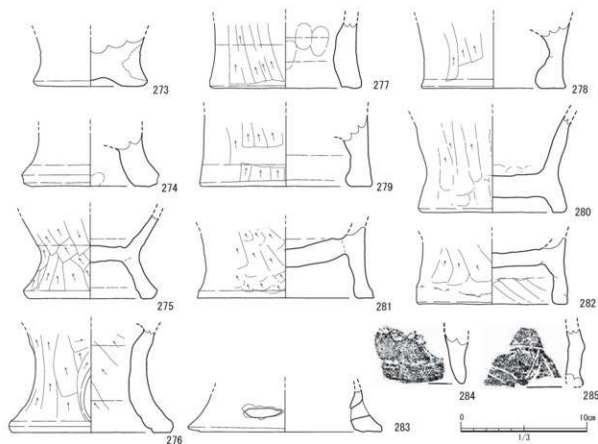
246～257は深鉢もしくは鉢の胴部下半から底部である。底部端部はやや八の字気味に張り出したものが多い。246～251・253・255は底部外面に鯨脊椎骨痕が残る。252は底部端部外面に鯨脊椎骨痕が残る。254は底部外面に工具と思われる痕跡が残る。256は底部外面の鯨脊椎骨痕を消しているのか、ミガキが施されている。257は底部外面に鯨脊椎骨痕らしきものがある。

258～266は深鉢もしくは鉢の胴部下半から底部である。258・259は底部外面に木の葉痕が残る。260は底部外面に木の葉痕と鯨脊椎骨痕が残る。261～263は底部内面に貝殻背圧痕が残る。264は底部内面に指頭圧痕、底部外面に鯨脊椎骨痕が残る。265は底部内面に指頭圧痕が残る。胎土には雲母と思われる鉱物を多量に含む。266は底部端部に指頭圧痕が明瞭に残り、底部外面は鯨脊椎骨痕をナデ消しているようにみえる。

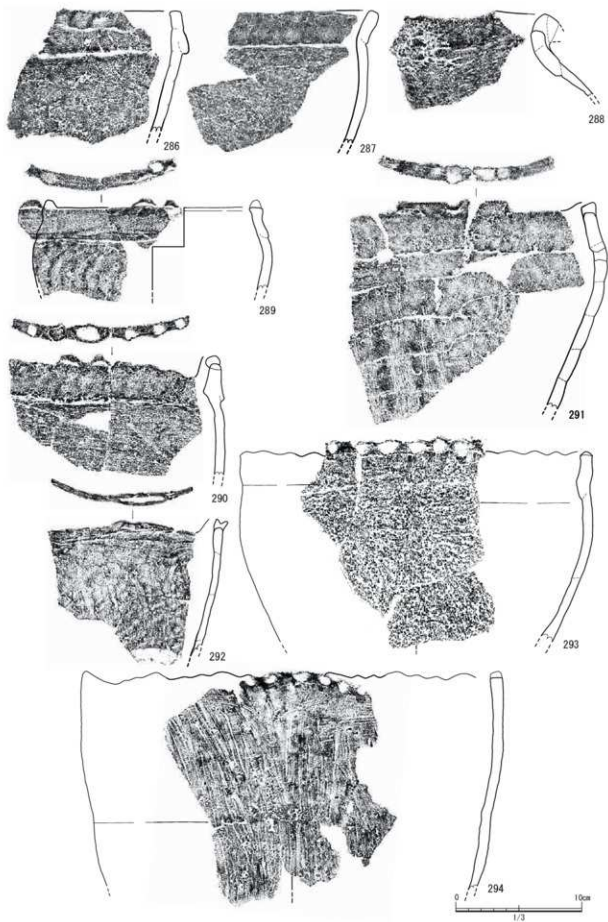
267～272は深鉢もしくは鉢の胴部下半から底部である。底部端部はやや八の字気味に張り出したものがある。胴部外面下半には縦位のケズリが施されており、胴部内面には粘土紐の輪積み痕が明瞭に残っている。

273～285は深鉢もしくは鉢の胴部下半から底部である。ここでは脚状のものを図示した。短くやや開き気味のもの、長くハの字状に開くものがある。外面は縦位のケズリを施したものが多い。283は横長の透かしが3箇所に入る。作りは雑である。284・285は脚部裾端部に2本の平行沈線による羽状文が施されている。

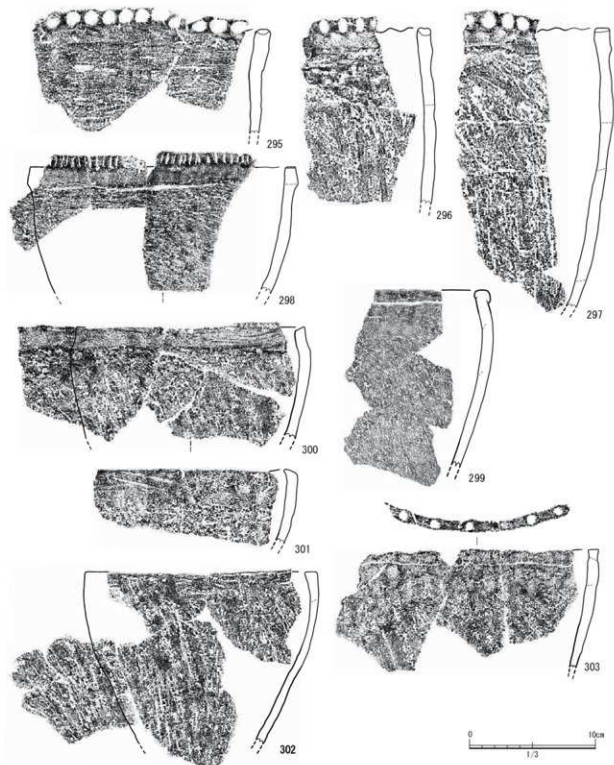
286～294は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部である。口縁部が帯状に肥厚するものが多い。粘土紐を貼り付けるか、口縁部の粘土紐は厚いものを使用するなどして、肥厚させているように見える。いずれも



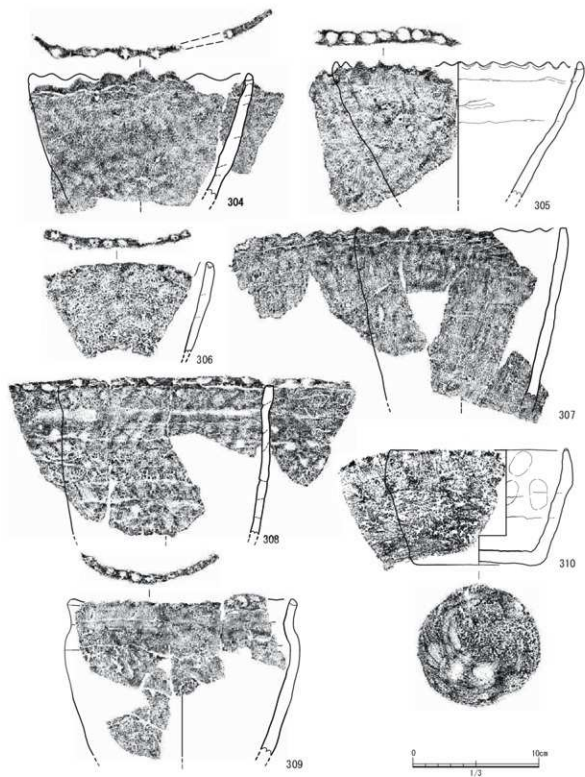
第59図 5区 縄文土器（後期初頭 29）



第60図 5区 縄文土器(後期初頭30)



第61図 5区 細文土器（後期初頭31）



第62図 5区 縄文土器（後期初頭32）

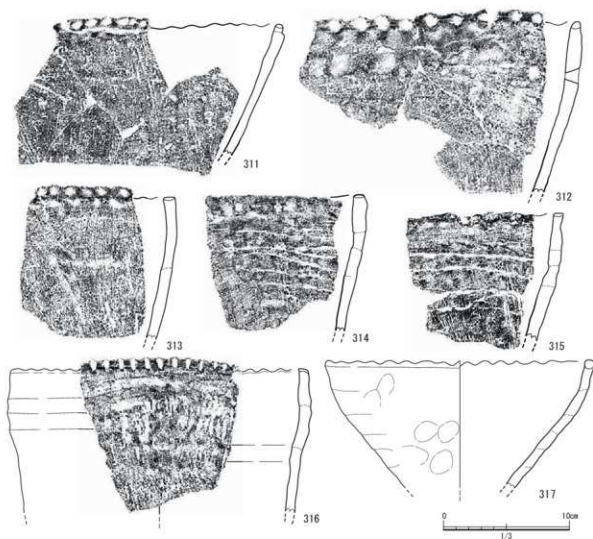
無文だが、291は胴部にハケメ状の工具痕が縦位に施されている。288～291は口唇部に突起が付く。292・293は口縁部の粘土紐を厚くし内面側を肥厚させている。294は胴部外面に縦位のケズリ、胴部内面は横位のナデが施されている。口唇部に突起が付く。

295～302は鉢もしくは深鉢の口縁部から胴部である。口縁部が帯状に肥厚する。口縁直下から胴部をケズリによって器壁を薄くし、口縁部を肥厚させているものが多い。口縁部は無文である。295～297・303は口唇部に凹点が施されている。298は口唇部に刻みが入る。299は口唇部に粘土紐を貼り付け肥厚させている。

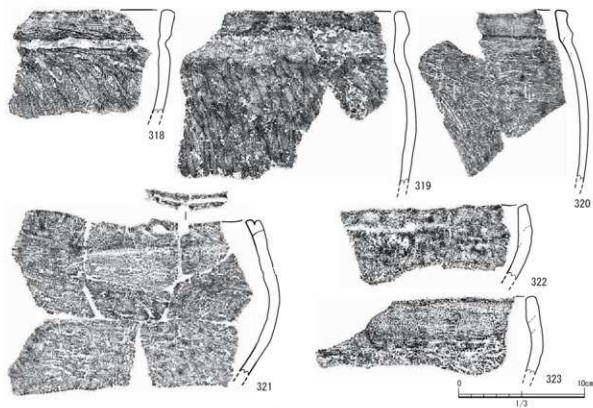
304～309は小型の鉢の口縁部から胴部下半である。口縁部は無文である。胴部内面に粘土紐の輪積み痕が残るものが多い。306は口唇部に竹管文のような凹点が施されている。310は小型の鉢で口縁部から底部まで残存していた。胴部内面には粘土紐の輪積み痕や指頭圧痕が明瞭に残る。

311～317は小型の鉢の口縁部から胴部下半である。口縁部は無文である。胴部内面及び胴部外面に粘土紐の輪積み痕が残るものが多い。311・317は口唇部に粘土紐を貼り付けている。312は1箇所穿孔孔されている。

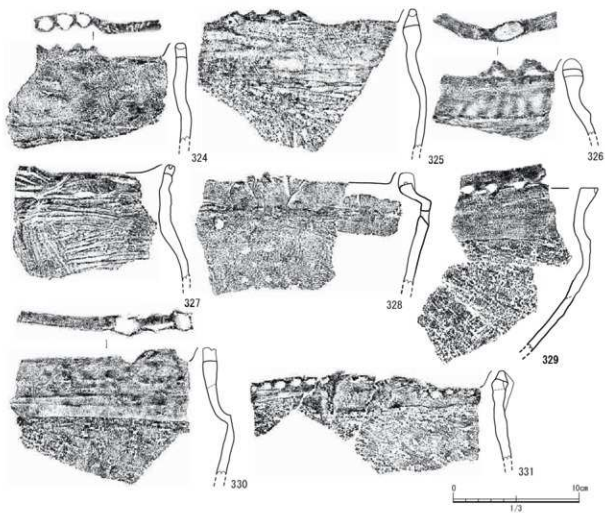
318～323は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部下半である。口縁部は無文である。318～321は口縁部が帯状に肥厚する。口縁直下から胴部をケズリによって器壁を薄くし、口縁部を肥厚させている。318・



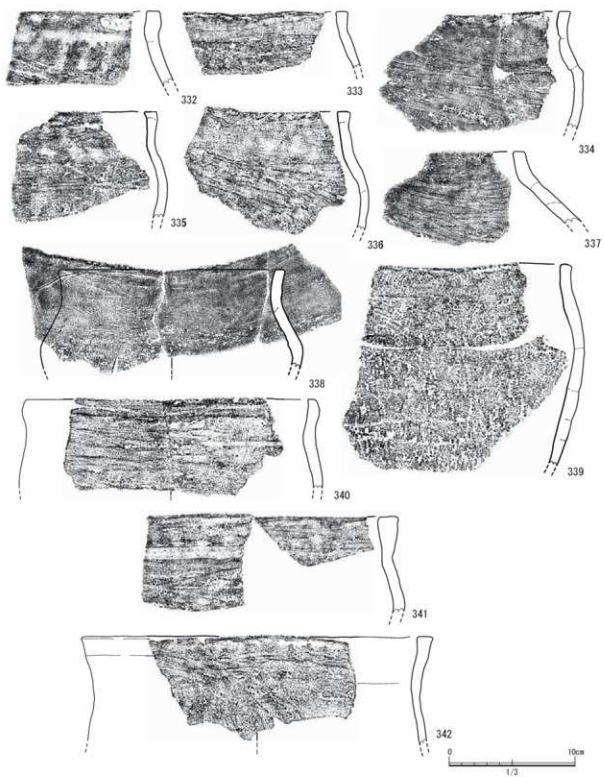
第63図 5区 縄文土器（後期初頭33）



第64図 5区 縄文土器（後期初頭 34）



第65図 5区 縄文土器（後期初頭 35）



第66図 5区 縄文土器（後期初頭36）

319は胎土に雲母と思われる鉱物を含む。321は口唇部に突起が付く。323は口縁部外面にはナデ、胴部外面にはケズリが施されており、口縁部と胴部を区別している。

324～331は鉢の口縁部から胴部下半である。口縁部は無文である。口縁部付近で内側に屈曲し、直線的に立ち上がるものが多い。口縁部は帯状に肥厚し、ナデが施されている。屈曲部より下半はケズリが明瞭に残る。324～328・330・331は口唇部に突起が付く。331は口唇部から口縁部に突起が付く。胎土には雲母と思われる鉱物を多量に含む。

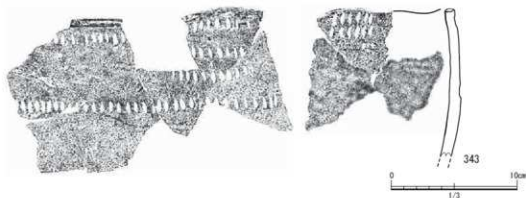
332～342は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部下半である。口縁部は無文である。口縁部付近で緩やかに内傾し、直線的に立ち上がるか、外反気味に立ち上がるものが多い。口縁部は帯状に肥厚し、ナデが施されている。胴部はケズリの後ナデとミガキが施されているものが多い。335・338は口縁部外面に赤彩がされているようにみえる。337は胎土に雲母と思われる鉱物を含む。342は胎土に滑石を多量に含んでいる。

3類 御手洗A式に比定できるもの

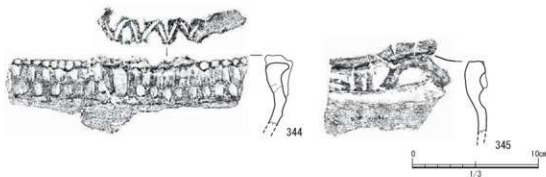
343は深鉢の口縁部から胴部である。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。内外面に爪形文が施される。口縁部に山形状の突起があり、突起部分の爪形文は外面で4段、内面で2段施されている。胴部外面は丁寧なナデが施されているが、4段目の爪形文の直下からは、ケズリの後ナデが施されているようである。

4類 北久根山式に比定できるもの

344は深鉢の口縁部から胴部である。口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はケズリが施されている。口縁部には断面V字形の凹点が2段施されている。口縁部から口唇部に突起が付き、上部には沈線によりW字状の文様が施文される。345は深鉢の口縁部から胴部である。口縁部文様帯が帯状に肥厚する。文様帯直下はナデが施されている。口縁部にはやや太い縦位の沈線と横位の沈線が施文されている。口縁部には二股の突起が付く。



第67図 5区 縄文土器（後期前葉）



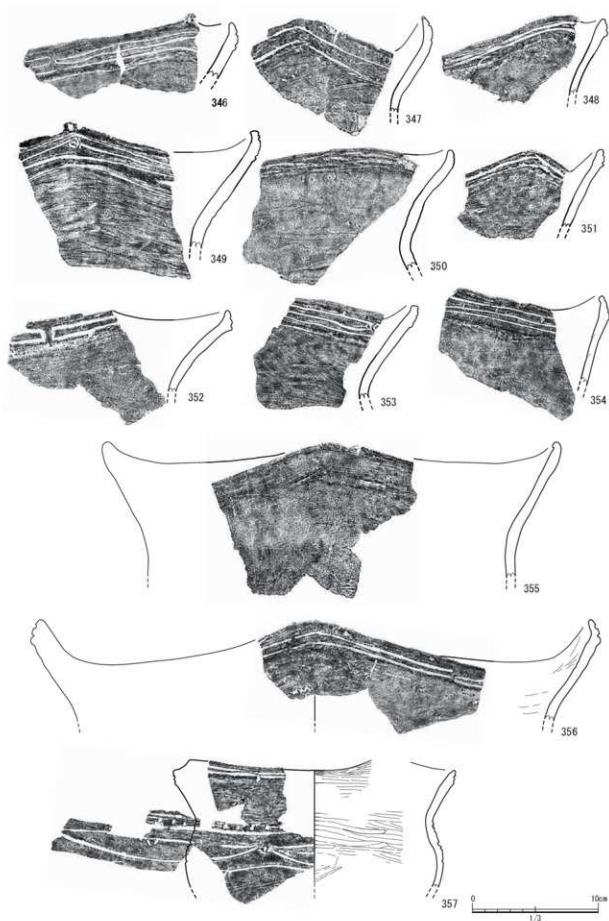
第68図 5区 縄文土器（後期中葉1）

5類 辛川式に比定できるもの

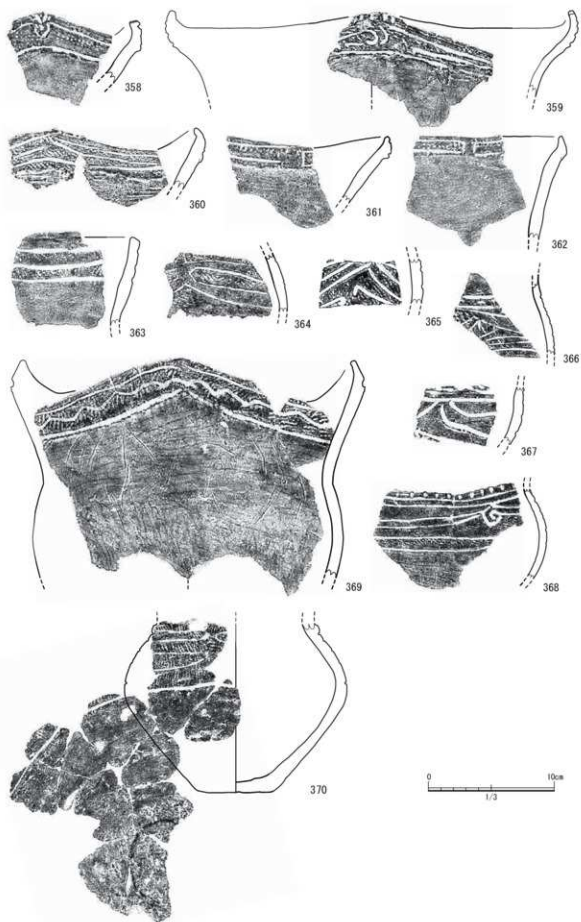
346～357は深鉢の口縁部から胴部下半である。口縁部はいずれも波状をなす。口縁部は小さく内湾しているものと、やや厚くしているものがある。346は口縁部に沈線が3条施される。内外面ともにミガキ。347は口縁部に沈線が2条施されており、胎土には角閃石を多く含む。348は口縁部に沈線が2条施される。内外面ともにミガキ。349は口縁部に沈線が3条、波頂部にいわゆる鈎弧文が施文される。口唇部に刻み。内外面ともにミガキ。350は口縁部に雑な沈線が3条施される。内外面ともにやや雑なミガキ。351は口縁部に沈線が2条、内外面ともにミガキ。352は口縁部に沈線が2条施され、縦位の刻みを入れることで方形に区画している。外面はミガキ。353・354は口縁部に沈線が3条施されている。355は口縁部が無文。ナデによって仕上げられている。胎土には角閃石や滑石と思われる鉱物を多く含む。356は口縁部に沈線が2条施されている。外面はミガキ、内面はナデ。357は小型の深鉢。口縁部に沈線が2条施される。頸部の屈曲は緩やかで、刺突列点文がめぐる。胴部には沈線が入り、口縁波頂部と波底部のライン下に鈎弧文が施文されている。内外面ともにミガキ。

358～368は深鉢もしくは鉢の口縁部から胴部下半である。口縁部は波状をなすものが多い。口縁部は小さく内湾しているものと、やや厚くしているものがある。沈線間には貝殻背圧痕文、いわゆる疑似縄文が施文されている。358は口縁部に貝殻背圧痕文を施文後、沈線が2条施されている。波頂部には鈎弧文が施文され、口唇部には刻みが入る。胎土には雲母と思われる鉱物を多く含む。内外面ともにミガキ。359は口縁部に貝殻背圧痕文を施文後、沈線が3条施されている。波頂部には雑な鈎弧文が施文され、口唇部には刻みが入る。内外面ともに雑なミガキ。360は口縁部に貝殻背圧痕文を施文後、沈線が3条施されている。361・362は口縁部に沈線が2条施した後、貝殻背圧痕文を施文している。胎土には雲母と思われる鉱物を含む。内外面ともにミガキ。363は口縁部に沈線が3条施した後、貝殻背圧痕文を施文している。深鉢ではなく鉢か。胎土は赤味を帯びている。364は沈線で区画した後、貝殻背圧痕文を施文している。内外面ともにミガキ。365は貝殻背圧痕文を施文後、沈線を施している。胎土は赤味を帯びる。366は沈線と貝殻背圧痕文を施文している。367は沈線が施されている。368は頸部に刻み目、胴部には沈線と鈎弧文が施文されている。沈線間には貝殻背圧痕文が施文されているようにみえるが判然としない。胎土には雲母と思われる鉱物を多く含む。内外面ともにミガキ。369は深鉢である。口縁部から胴部下半まで残存していた。頸部の屈曲は緩やかで口縁部は波状をなし、小さく内湾している。口縁部には貝殻背圧痕文を施文後、沈線を2条施文し、沈線間に山形状の沈線を施文している。胎土には角閃石と滑石と思われる鉱物を多く含む。外面はミガキ、内面はナデ。370は小型の鉢である。頸部から底部まで残存していた。胴部は緩やかに屈曲する。胴部上半には沈線を施した後、貝殻背圧痕文を施文している。外面はミガキ、内面はナデ。

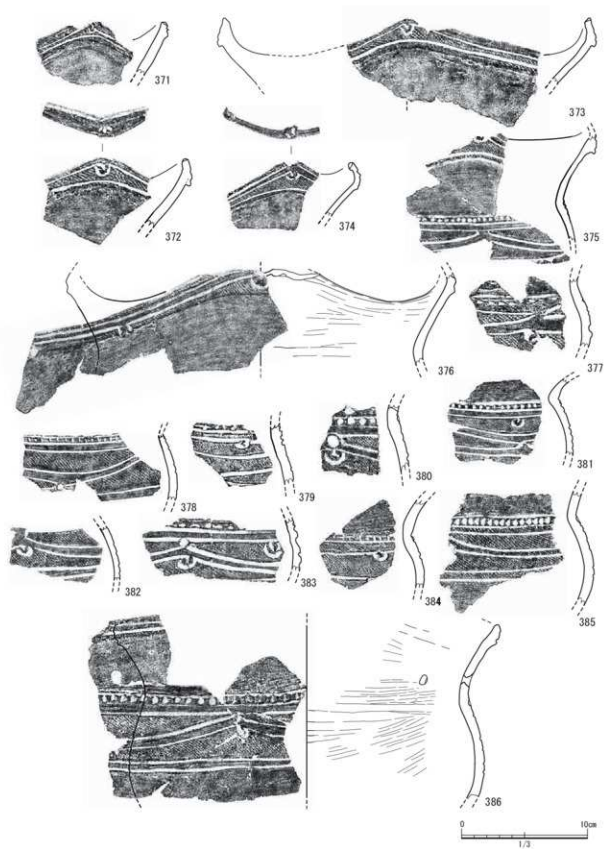
371～386は深鉢の口縁部から胴部下半である。口縁部はいずれも波状をなす。口縁部はやや厚くしているものが多い。371～373は口縁部に2段の縄RLを施文後、沈線を2条施している。波頂部には鈎弧文が施文される。口唇部には刻みが入る。胎土は黄色味を帯びている。内外面ともに丁寧なミガキ。374は口縁部に2段の縄RLを施文後、沈線を3条施している。波頂部には鈎弧文が施文される。口唇部には刻みが入る。内外面ともに丁寧なミガキ。375は口縁部に2段の縄RLを施文後、沈線を3条施している。波頂部には鈎弧文が施文されているようである。頸部の屈曲は緩やかなくの字状で、刺突列点文がめぐる。胴部は2段の縄RLを施文後、沈線を施している。内外面ともに丁寧なミガキ。376は口縁部に2段の縄RLを施文後、沈線を2条施している。沈線間の縄文は磨り消されている。波頂部には鈎弧文が施文されている。波底部には刻みが入る。胎土は黄色味を帯びている。内外面ともにミガキ。377～385は頸部に刺突列点文、胴部には2段の縄RLを施文後、沈線を施している。鈎弧文と凹点が施文されるものが多い。内外面ともにミガキ。378は胎土に雲母、379・385は胎土に角閃石を多く含んでいる。381は頸部がくの



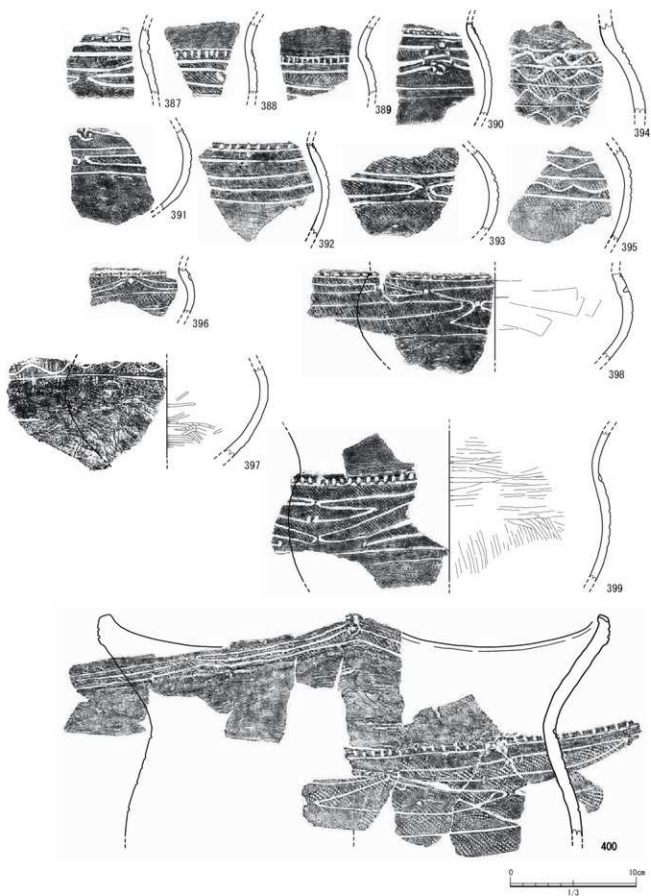
第69図 5区 縄文土器（後期中葉2）



第70図 5区 縄文土器 (後期中葉3)



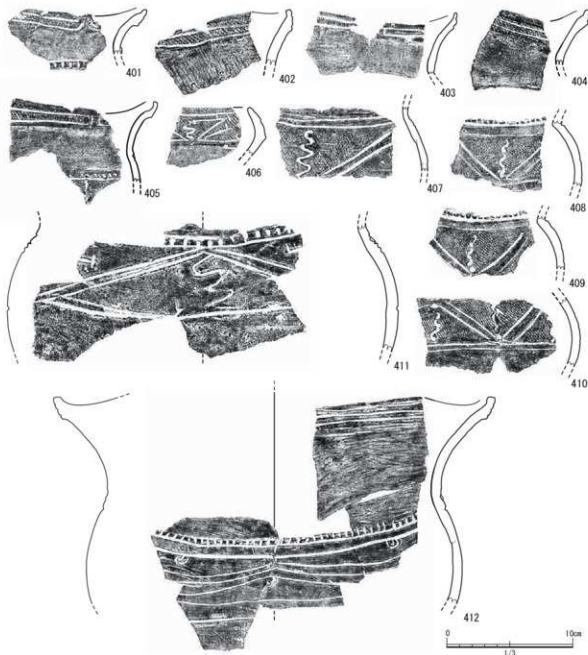
第71図 5区 縄文土器（後期中葉4）



第72図 5区 縄文土器 (後期中縄文5)

字状に屈曲する。386は口縁部から胴部下半が残存していた。口縁部に2段の縄RLを施文後、沈線を2条施している。沈線間の縄文は磨り消されている。頸部には刺突列点文と沈線がめぐる。胴部には2段の縄RLを施文後、沈線を施している。鈎弧文と凹点が施文される。頸部付近に1箇所穿孔がある。胎土は黄色味を帯びており、376と同一個体の可能性がある。

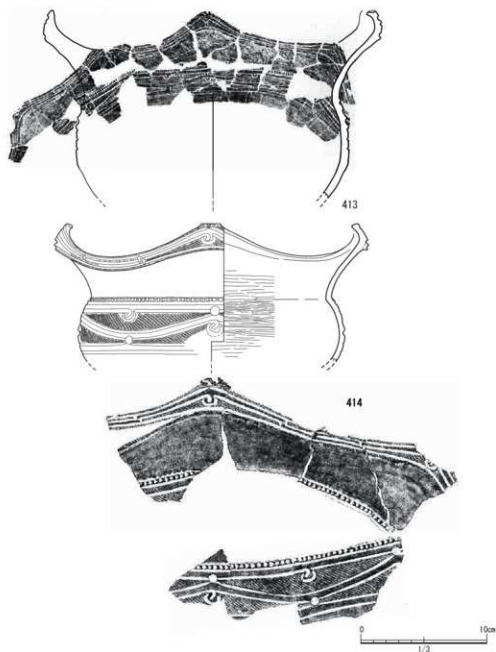
387～399は深鉢の頸部から胴部下半である。頸部に刺突列点文、胴部には2段の縄RLを施文後、沈線を施し、凹点が施文されるものが多い。内外面ともにミガキ。394・395は山形状の沈線が施されている。396は頸部付近に赤彩がみられる。399は頸部に刺突列点文、胴部には2段の縄RLを施文後、沈線を施している。内外面ともにミガキ。胎土には雲母と思われる鉱物を多く含む。400は深鉢の口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部は波状をなし、やや厚くしている。口縁部に2段の縄RLを施文後、沈線



第73図 5区 縄文土器（後期中葉6）

を3条施している。波頂部には鈎弧文が施文される。口唇部には刻みが入る。頸部には沈線と刺突列点文が施文される。胴部には2段の縄RLを施文後、沈線と鈎弧文を施文している。内外面ともにミガキ。頸部の屈曲は緩やかである。

401～405は口縁部から頸部である。口縁部は波状をなし、やや厚くしている。口縁部に2段の縄RLを施文後、沈線を2条施している。頸部には沈線と刺突列点文がめぐる。内外面ともにミガキ。405は縄文ではなく貝殻背圧痕文の可能性もあるが判然としない。406は口縁部破片である。2段の縄RLを施文後、沈線と刺突を施しており、垂下曲線もみられる。内外面ともに丁寧なミガキ。407～410は頸部から胴部下半である。頸部には沈線もしくは沈線と刺突列点文がめぐる。胴部には2段の縄RLを施文後沈線を施したものが多く、いずれも沈線で三角形を描いた箇所から垂下曲線が施文されている。408～410は胎土に雲母と思われる鉱物を多く含み、411は胎土に角閃石を多く含む。412は口縁部から胴部下半が残存



第74図 5区 縄文土器（後期中葉7）

していた。口縁部に沈線が3条施される。頸部の屈曲は緩やかで、刺突列点文がめぐる。胴部には沈線が入り、鈎弧文が施文されている。内外面ともにミガキ。頸部の屈曲は緩やかである。357に類似した土器である。

413は口縁部から胴部下半が残存していた。口縁部は波状をなし4単位で厚くしている。口縁部には2段の縄R Lを施文後、3条の沈線が施されている。波頂部には鈎弧文が施文され、口唇部には刻みが入る。頸部には沈線と刺突列点文がめぐる。胴部は2段の縄R Lを施文後、沈線で区画している。波頂部と波底部のライン下に鈎弧文と鈎手文が交互に施文されている。内外面ともにミガキ。頸部の屈曲は緩やかで、胎土には角閃石や雲母と思われる鉱物が見られる。414は口縁部から胴部下半が残存していた。口縁部は波状をなし、おそらく4単位と思われる。口縁部は厚くしており、2段の縄R Lを施文後、3条の沈線が施されている。波頂部には鈎弧文が施文され、口唇部には刻みが入る。口縁部の縄文は、鈎手文を境に磨消しが交互に繰り返される。頸部には沈線と刺突列点文がめぐる。胴部は2段の縄R Lを施文後、沈線で区画している。波頂部と波底部のライン下に鈎弧文と凹点が交互に施文されている。内外面ともに丁寧なミガキ。頸部の屈曲はくの字状。

415～417は口縁部破片である。口縁部は波状をなし、小さく内湾しているものと、やや厚くしているものがある。2段の縄R Lを施文後、2条もしくは3条の沈線を施している。415は胎土に雲母と思われる鉱物を含む。418から424は口縁部から頸部である。いずれも平口縁。口縁部は2段の縄R Lを施文し、2条ないし3条沈線を施すものが多い。419は縄文ではなく貝殻窪痕文の可能性もあるが判然としない。内外面ともにミガキ。425は口縁部から頸部が残存していた。口縁部は波状をなし、やや厚くしている。沈線を施文後、2段の縄R Lを施文している。波頂部には鈎手文、波底部には凹点を施文している。口唇部には刻みが入る。頸部には刺突列点文がめぐる。内外面ともに丁寧なミガキ。頸部の屈曲はくの字状。胎土には雲母と思われる鉱物を多く含む。426～427は頸部から胴部下半である。頸部には沈線と刺突列点文がめぐる。胴部には沈線が施されている。胎土には角閃石を多く含む。ただし426の刺突列点文は凹点に近い。428は口縁部から胴部上半まで残存していた。口縁部は平口縁としたが、波状口縁の可能性もある。口縁部はやや厚くしている。2段の縄R Lを施文後、沈線を2条施している。頸部の屈曲は緩やか。内外面ともにミガキ。429～434はいずれも底部である。やや上げ底気味のものや平底のものがある。外面はミガキが施されている。

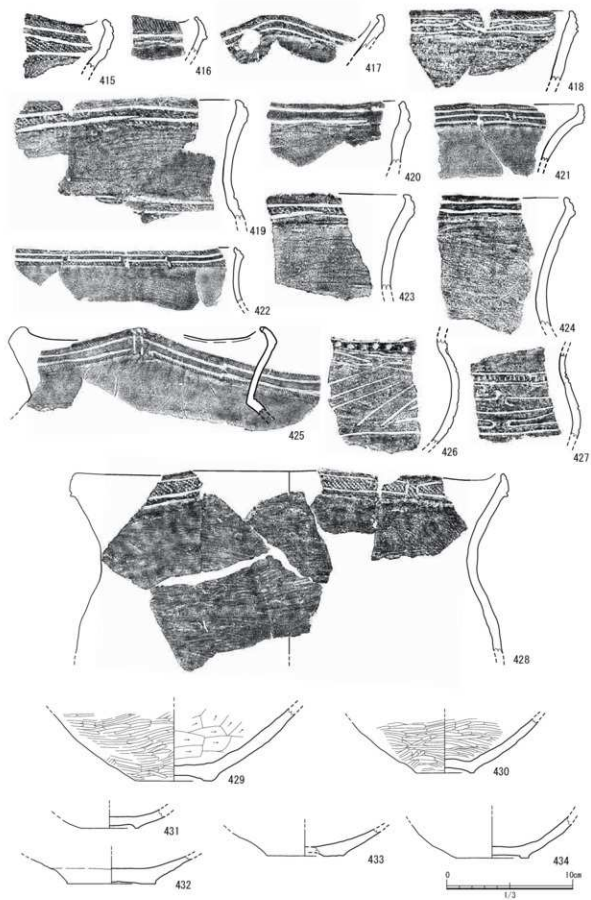
435～438は口縁部から胴部下半である。いずれも磨消縄文系土器が多量に見つかった地点から出土したためここで図示した。いずれも内外面ともにミガキ。435は口縁部をやや厚くしている。頸部の屈曲は緩やかなくの字状を呈する。436は平口縁。437は口縁部が波状をなす。頸部の屈曲は緩やか。438は口縁部が小さく内湾している。頸部の屈曲は緩やか。胎土に角閃石を含む。いずれも内外面ともにミガキ。

第Ⅲ群 後期の土器

1類 明確な帰属時期が不明のもの

439は口縁部破片。外面に沈線が渦状をなす。440は口縁部から胴部が残存していた。外面に沈線が八の字状に施文されている。沈線間には円形の刺突が繰り返される。口唇部には突起が二つ付く。胎土には滑石を多く含んでいる。441は口縁部から胴部下半が残存していた。口縁部には竹管文が2段施文されている。口唇部には粘土紐を重ねた突起が付く。口縁部はナデ。胴部はケズリの後ナデ。阿高式系に伴う可能性があるが、いずれも時期の特定ができなかった。出土層位や地点から後期と思われるためここに図示した。

442～447は鉢の口縁部から胴部の破片である。442～444は口唇部に、445～447は胴部にいずれも2段の縄R Lが施文されている。443・444は内外面ともにミガキ。447は胎土に雲母と思われる鉱物を

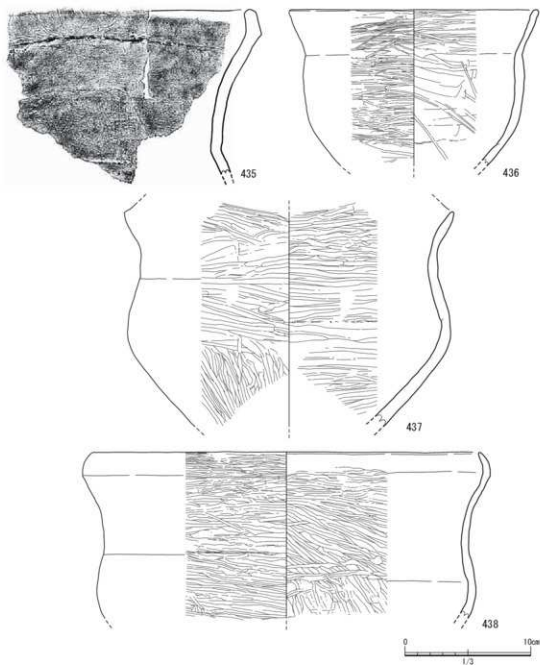


第75図 5区 縄文土器(後期中葉8)

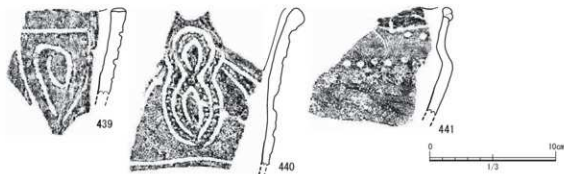
含む。445 と 447 は浅い沈線らしきものが施されている。磨消縄文系土器に伴う可能性があるが、いずれも時期の特定ができなかった。出土層位や地点から後期と思われるためここに図示した。

448 ～ 451 は深鉢の口縁部破片である。口唇部および口縁部に凸帯をもつ。凸帯上には刻みというよりは凹点を施している。448・449 は胎土には雲母と思われる鉱物を含む。230 と同じく阿高式系に伴う可能性があるが、いずれも時期の特定ができなかった。晩期と思われるが、出土層位や地点から後期の可能性もあるためここに図示した。

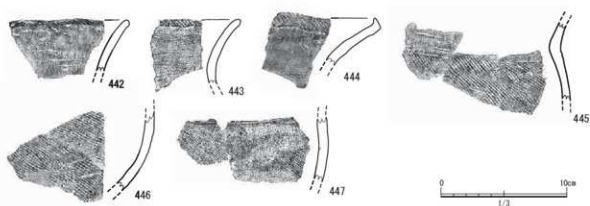
452 ～ 458 は浅鉢の口縁部破片である。452 は口唇部に突起が付く。内面に沈線と凹点が施されている。沈線間には貝殻背圧痕文が施文されている。胎土には雲母と思われる鉱物を含む。内外面ともにミガキ。453 は口唇部に突起が付く。内面に沈線で三角形を連続させ、三角形内に2段の縄 R L を施文している。



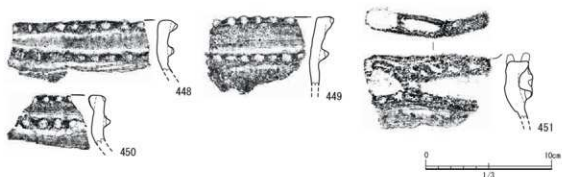
第76図 5区 縄文土器（後期中葉9）



第77図 5区 縄文土器(後期1)



第78図 5区 縄文土器(後期2)



第79図 5区 縄文土器(後期3)

胎土には雲母と思われる鉱物を含む。内外面ともにミガキ。454は内面に沈線を2条施している。口唇部よりの沈線は山形をなす。沈線間には貝殻背圧痕文が施文されている。内外面ともにミガキ。455は内面に丸い突起が付く。突起には貝殻背圧痕文が施文されている。丸い沈線間にも細かい貝殻背圧痕文らしきものがみられるが判然としない。内外面ともにミガキ。456は外面に沈線と円形の刺突文が施文されている。沈線間には貝殻背圧痕文が施文される。口唇部に突起が付き、突起上には外面と同じ文様が施文されている。内外面ともにミガキ。459は内面に波形の隆帯が付く。内外面ともにミガキ。460は452に類似するが沈線のみで貝殻背圧痕文と凹点がない。内外面ともにミガキ。457は浅鉢の胴部破片と思われる。内面に沈線と凹点が施文されている。沈線間には貝殻背圧痕文が施文されている。文様構成は452に類似する。胎土には雲母と思われる鉱物を含む。内外面ともに丁寧なミガキ。458は台付浅鉢の可能性ある。内面に沈

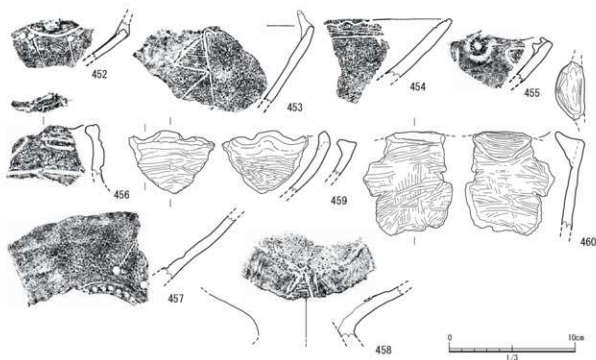
線が施されており、おそらく453のような三角形をなすものと思われる。三角形内には貝殻脊圧痕文が施文されている。内外面ともにミガキ。磨消縄文系土器に伴う可能性があるが、いずれも時期の特定ができなかった。出土層位や地点から後期と思われるためここに図示した。

第IV群 後期後半から晩期

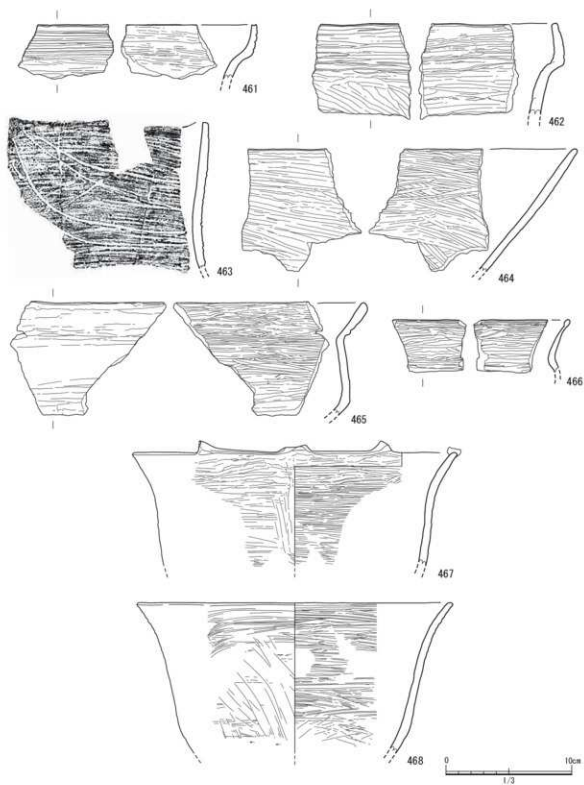
1類 古閑式から黒川式に比定できるもの

461～462は口縁部破片である。口縁部外面に平行沈線が施されている。内外面ともにミガキ。463～464は深鉢もしくは鉢の口縁部である。外面は貝殻条痕調整。内面はミガキ。463は外面に沈線で文様が施文されている。胎土も明るため当該期ではない可能性もある。465は深鉢もしくは鉢の口縁部である。外面は貝殻条痕調整後ナデ。内面はミガキ。466は鉢の口縁部破片と思われる。口唇部が丸みを帯びる。内外面ともにミガキ。467～468は深鉢の口縁部から胴部が残存していた。口縁部は緩やかに外反する。外面は貝殻条痕調整、内面は貝殻条痕調整後にミガキと思われる。胎土には角閃石を含む。467は口唇部に突起が付く。

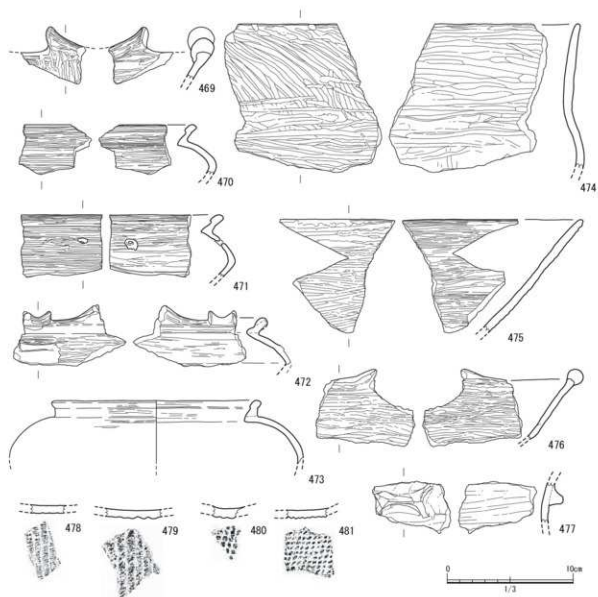
469～473は浅鉢の口縁部から胴部である。内外面ともにミガキ。469・472は口縁部にリボン状突起が付く。471は1箇所穿孔がある。474は深鉢の口縁部から胴部である。内外面ともにミガキ。胎土には角閃石を含む。出土層位や地点から後期の可能性も残る。475は鉢の口縁部である。外面は貝殻条痕調整。内面は丁寧なミガキ。476は鉢の口縁部である。外面は貝殻条痕調整。内面は丁寧なミガキ。口唇部にリボン状突起が付く。477は浅鉢の胴部破片と思われる。外面に突起が付く。478～481はいわゆる組織痕土器である。478・479は外面に型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕がみられる。480・481も外面に型離れ材に由来すると考えられている網目の圧痕がみられる。いずれも小片であり、正確な部位はわからなかった。



第80図 5区 縄文土器（後期4）



第81図 5区 縄文土器 (後期後半～晩期1)



第82図 5区 縄文土器（後期後半～晩期2）

⑥土製品（第83図）

本遺跡からは、縄文時代のもと考えられる土製品（有孔土器片、土器片鍾、土製円盤）が出土している。とりわけ、土製円盤は多量に出土しており、白川沿いに立地する本遺跡の特徴の一端を示しているものと考えられる。ここでは、遺構外から出土した土製品について、器種ごとに説明をおこなう。

なお、分類については黒橋貝塚（高木・村崎編 1998）の報告を参考にした。

A 有孔土器片（第83図）

有孔土器片は、残存状態が比較的良好であった9点を図示した。483・484・485・487は土器片の周囲を打ち欠き、もしくは打ち欠いた後、やや研磨して円形に成形したものである。482・486・488・489・490は土器片をそのまま利用したものである。いずれも中央または端部よりの位置に穿孔している。483・487・488・489は両面から穿孔したことがわかる資料である。端部に若干の窪みが認められる資料については、土器片鍾としての使用が想定される。

484・485は胎土に滑石が混入しており、凹線文と刺突文が施文された土器片である。489は凹線文を施文した肥厚した口縁部破片である。488は無文の肥厚した口縁部破片である。いずれも南福寺式あるいはその前後の時期と思われる土器片である。482はりボン状突起のついた口縁部破片である。黒川式と思われる土器片である。483は2箇所穿孔し、1箇所穿孔途中となっている。

B 土器片鍾（第83図）

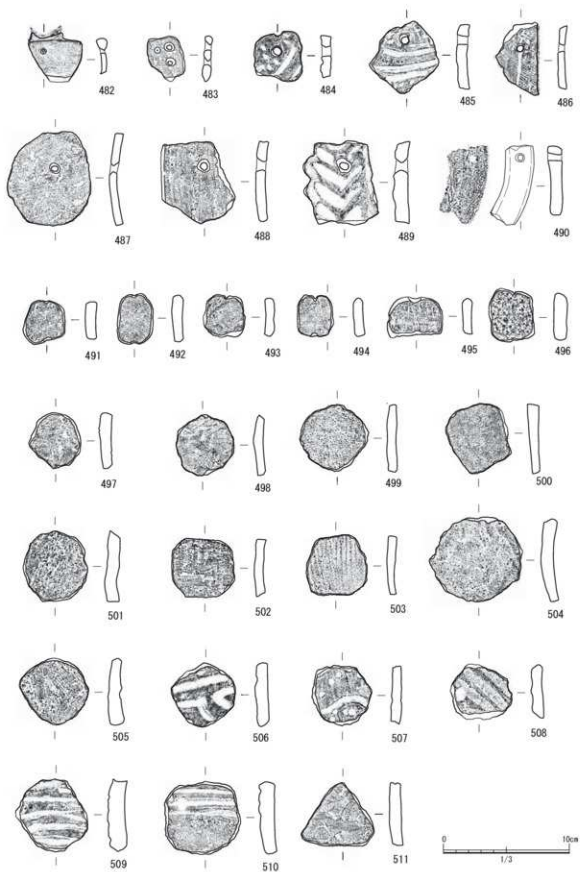
土器片鍾は、残存状態が比較的良好であった6点を図示した。491～496は土器片の周囲を打ち欠いた後やや研磨して、円形もしくは楕円形に成形したものである。両端に摺り切りで溝を入れている。485は成形後に1/2程が欠損したものである。摺り切りで上側と左側に2箇所の溝が入られている。また、欠損した下側にも溝らしき窪みが認められることから、欠損後に、再度土器片鍾として使用された可能性もある。

C 土製円盤（第83図）

土製円盤は15点を図示した。497～511は土器片の周囲を打ち欠いた後、やや研磨して、円形に成形したものである。485は土器片の周囲を打ち欠いた後、研磨して三角形に整形したものである。いずれもその他の加工は見られない。

508は胎土に滑石が混入しており、凹線文が施文された土器片である。506・509・510は凹線文と刺突文が施文された土器片である。いずれも南福寺式あるいはその前後の時期と思われる土器片である。

497は外面の一部に鮮やかな赤彩が認められる資料である。



第83図 5区 土製品 出土遺物実測図

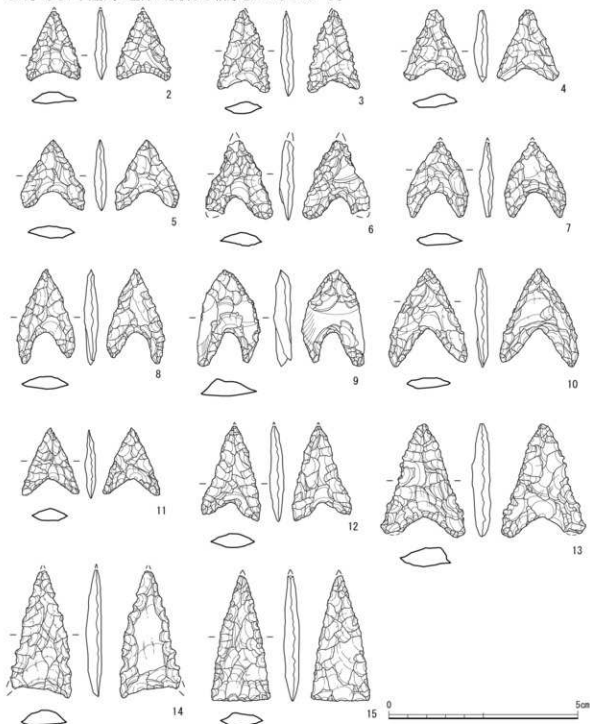
⑦石器 (第84図～第99図)

本遺跡からは、縄文時代のもと考えられる石器が多数出土している。遺構内から出土した石器については、前項で説明している。ここでは、遺構外から出土した石器類について、器種ごとに説明をおこなう。

なお、分類についてはワクド石遺跡(古森編 1994)・沖松遺跡(古城編 1996)・黒橋貝塚(高木・村崎編 1998)の報告を参考にした。

A 打製石鏃 (第84図)

打製石鏃は残存状態が比較的良好であった14点を図示した。その形態から凹基式と平基式の二つに分類した。さらに凹基式の基部の形状から細分をおこなっている。



第84図 5区 石鏃出土遺物実測図

I a類 (2・3・4・14)

全体の形態は二等辺三角形をした凹基式の石鏃である。袈りは浅く緩いアーチ形を呈する。石材は2が黒曜石、3・4・14が安山岩である。

I b類 (5・6・7・8・9)

全体の形態は二等辺三角形をした凹基式の石鏃である。袈りは深いアーチ形を呈する。石材は6・9が黒曜石、5・7・8が安山岩である。

I c類 (10・11・12・13)

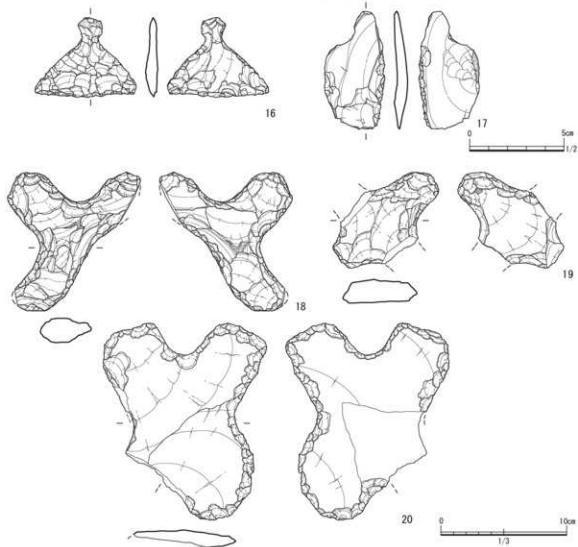
全体の形態は二等辺三角形をした凹基式の石鏃である。袈りは三角形を呈する。石材は11・12・13が黒曜石、10が安山岩である。

II類 (15)

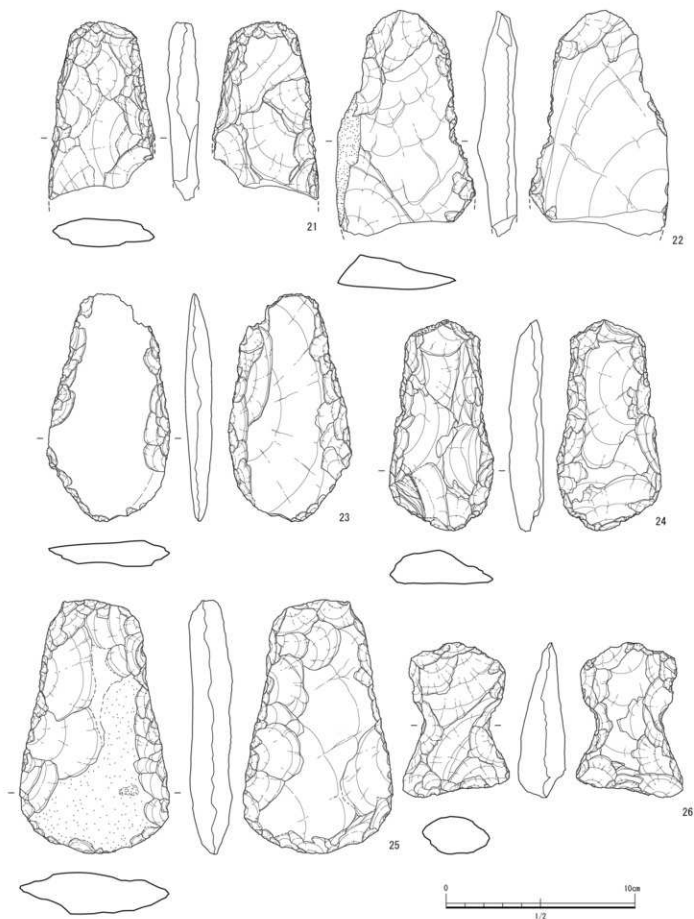
全体の形態は二等辺三角形をした細長い平基式の石鏃である。先端部を欠損、調整は丁寧である。石材は黒曜石である。

B 石匙 (第85図)

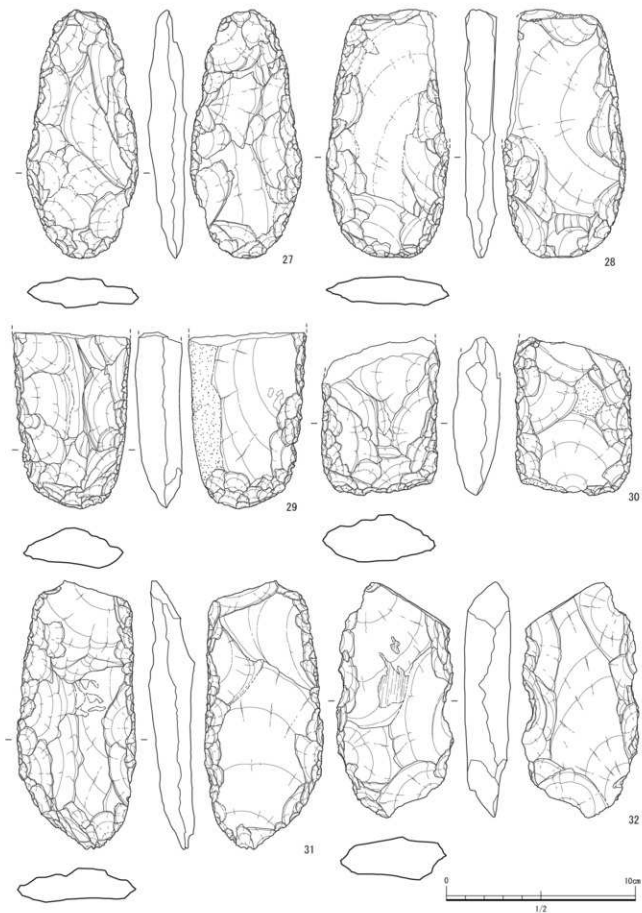
石匙は2点を図示した。16は横形の石匙である。刃部は細かく調整されている。石材は安山岩。17は縦形の石匙。調整が施されるのは部分的で未製品と思われる。石材は安山岩である。



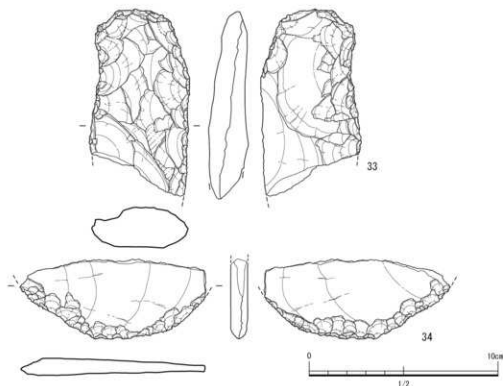
第85図 5区 石匙・十字形石器 出土遺物実測図



第86图 5区 打製石斧 出土遺物実測図(1)



第87図 5区 打製石斧 出土物実測図(2)



第88図 5区 打製石斧 出土遺物実測図(3)

C 十字形石器 (第85図)

十字形石器は3点を図示した。18は挟りが3箇所認められる三叉形の十字形石器である。表面中央部と右側縁に擦れ痕がある。本来は四叉形で欠損後に三叉形として再加工した可能性もある。石材は緑色片岩。19は挟りが4箇所認められ、完形であれば四叉形の十字形石器である。端部のうち1箇所は極端に短い。欠損後の再加工かどうかはわからない。端部の付け根に擦れ痕があり、光沢を持っている。石材は安山岩。20は挟りが4箇所認められる四叉形の十字形石器である。全体的に扁平。石材は安山岩である。

D 打製石斧 (第86図～第88図)

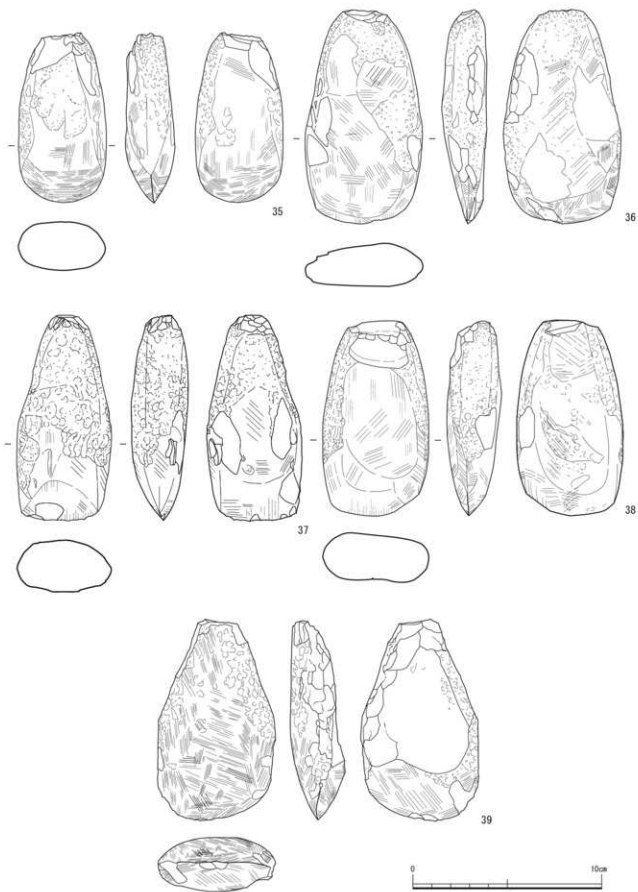
打製石斧は残存状態が比較的良好であった14点を図示した。21～25の形態は楕円形を呈する。石材は安山岩。21・22は刃部が欠損している。23の自然面には擦れによる光沢が見られる。24の刃部付近は擦れ痕がある。26の形態は挟りが両側縁にある。分銅形を呈する。石材は安山岩。27・28・29・30の形態は短冊形を呈する。石材は安山岩。刃部付近は磨滅するものが多い。31・32・33はおそらく短冊形を呈するものと思われるものである。33の石材は玄武岩で他の石材は安山岩である。34は欠損しているため形態は不明。大型の石器になる可能性がある。石材は安山岩である。

E 磨製石斧 (第89図～第96図)

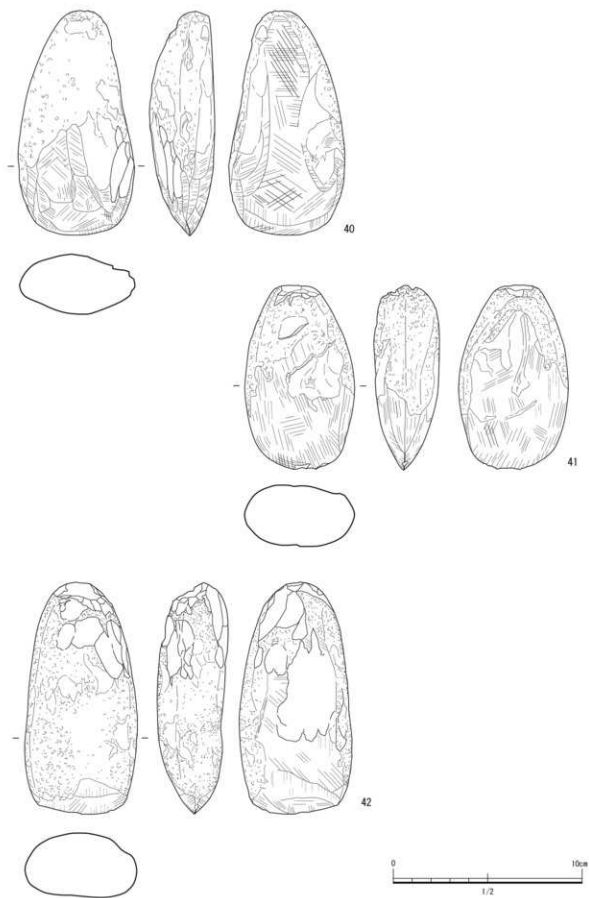
磨製石斧は残存状態が比較的良好であった32点を図示した。その形態、大きさ、厚みから六つに分類した。

I類 (35・36・37・38・39・40・41・42)

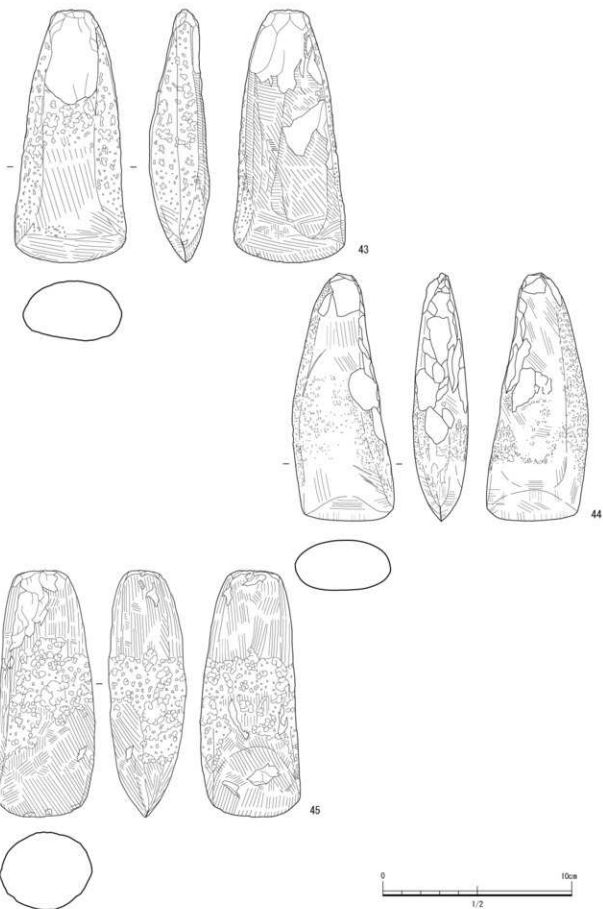
全体の形態は中張らみの二等辺三角形を呈する。最大幅は中位にあり、刃部は両刃で直線に近いが円刃のものもある。厚みはかなりあり、断面形は楕円形に近いものである。石材は40・42が蛇紋岩、ほかは安山岩である。



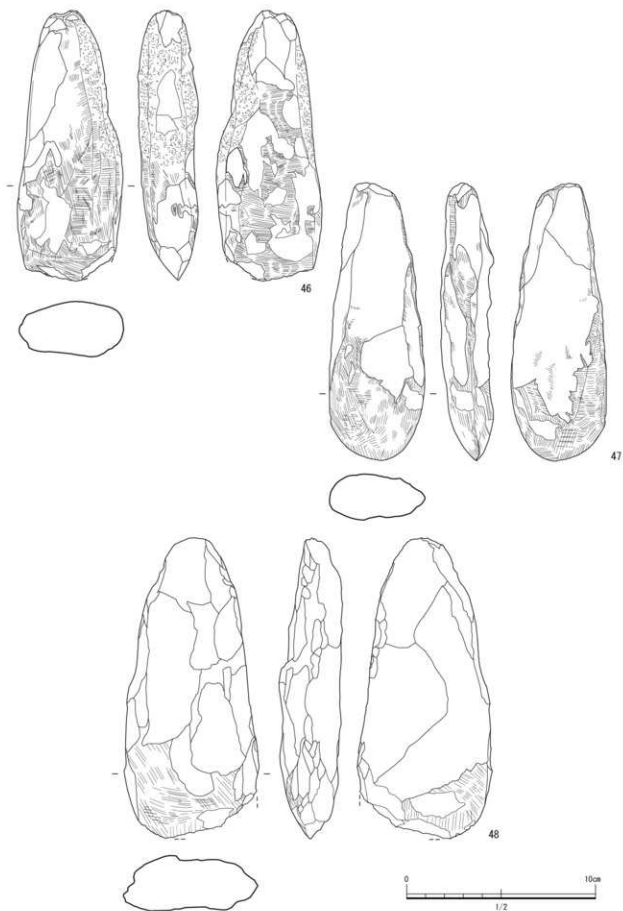
第89図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(1)



第90图 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(2)



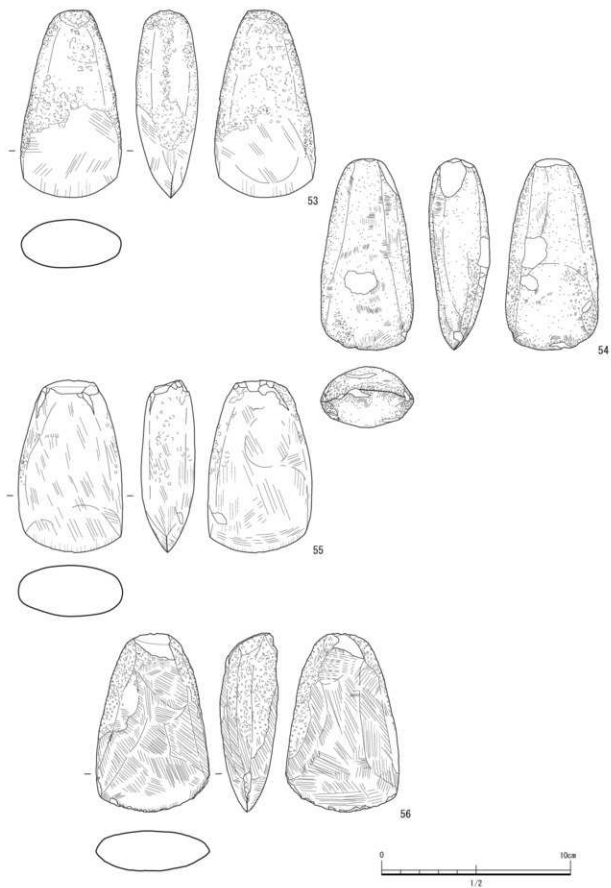
第91图 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(3)



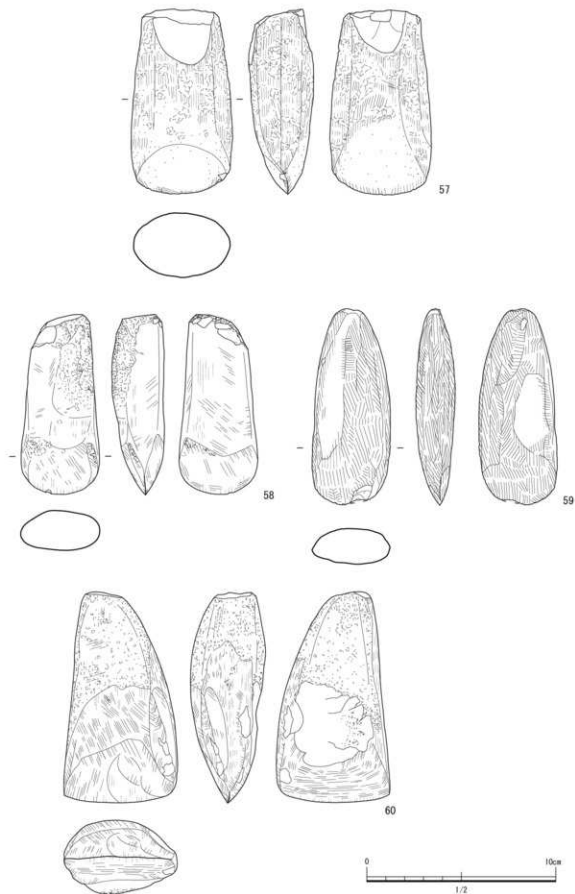
第92图 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(4)



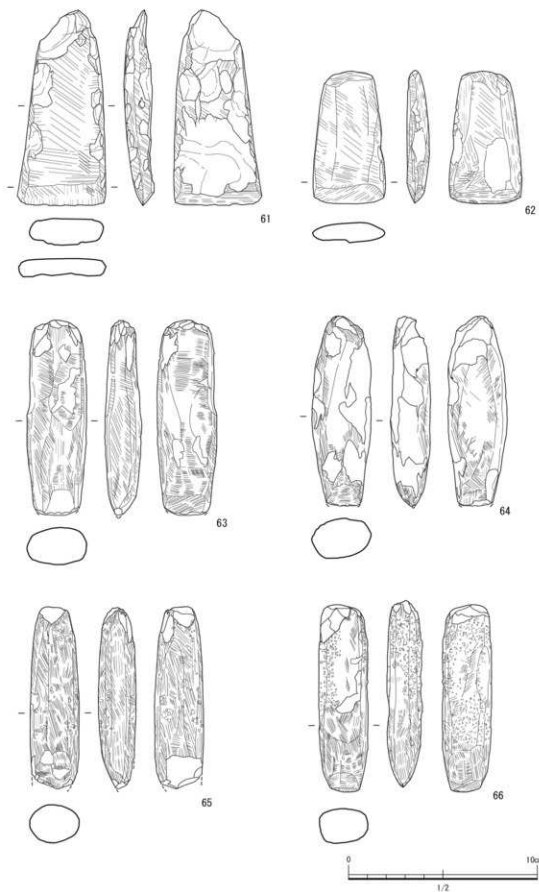
第93图 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(5)



第94图 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(6)



第95図 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(7)



第96图 5区 磨製石斧 出土遺物実測図(8)

II類 (43・44・45・46・47・48)

全体の形態は細長い二等辺三角形を呈する。最大幅は刃部に近いところにある。厚みは厚く、断面形は楕円形もしくは円形に近いものである。石材は45・46・47・48が蛇紋岩、ほかは安山岩である。

III類 (49・50・51・52)

全体の形態は長方形に近いいわゆる短冊形を呈する。刃部は両刃で円刃に近いが、直線に近いものもある。51・50のように扁平で薄く断面形は方形に近いものと、49・52のように厚く断面形は方形に近いものがある。石材は50が蛇紋岩、ほかは安山岩である。

IV類 (53・54・55・56・57・58・59・60)

全体の形態は短い二等辺三角形を呈する。最大幅は刃部に近いところにある。断面形は方形ぎみの楕円形。II類に類似した資料である。石材はいずれも安山岩である。

V類 (61・62)

全体の形態は細長い二等辺三角形を呈する。最大幅は刃部に近いところにある。扁平で薄く断面形は方形に近い。61は片刃で使用痕と思われる縦傷がみられることから、横斧としての使用が想定される。石材は蛇紋岩である。62は61に形態が類似するが、刃部に61ほど明瞭な使用痕はみられなかった。石材は安山岩である。

VI類 (63・64・65・66)

全体の形態は長方形に近く、幅が短く細長いものである。石材は63・64が蛇紋岩、65・66は安山岩である。

F 磨石・敲石 (第97図)

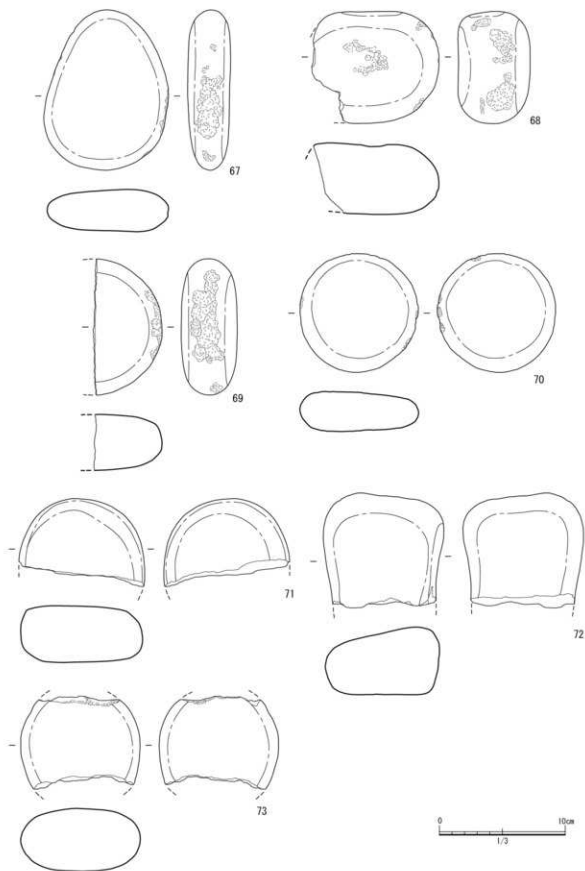
磨石・敲石は残存状態が比較的良好であった7点を図示した。67～73は磨・敲石である。いずれも表裏の広い平坦面を磨石として使用。敲打痕は端部に集中的にみられる。69の石材は砂岩で、ほかの石材は安山岩。71は磨石である。全体に磨石としての使用痕が顕著。使用した部分は若干黒く変色している。1/2ほど欠損しているため、磨・敲石の可能性もある。石材は安山岩。72は磨石である。全体に磨石としての使用痕が顕著であり、上端部は局部的ににぶい光沢がみられる。端部は欠損している。石材は安山岩である。

G 石皿・台石 (第98図)

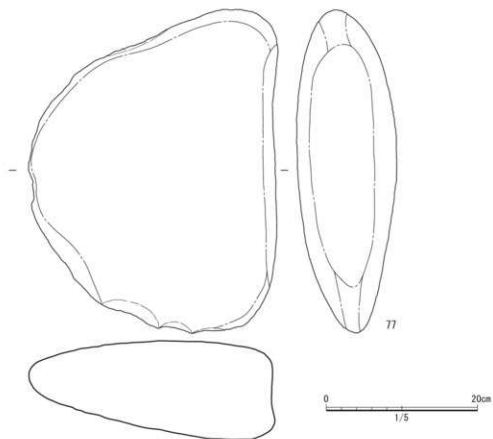
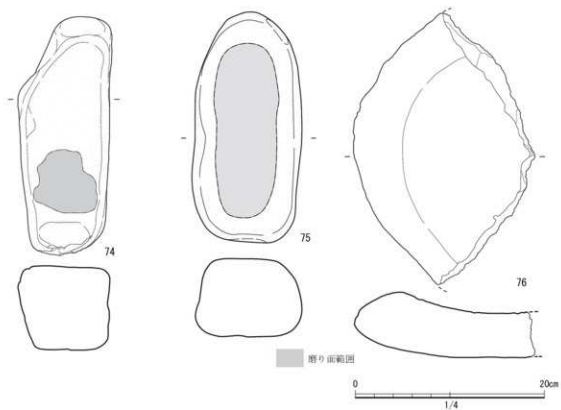
石皿・台石は残存状態が比較的良好であった4点を図示した。74・75は表面の使用が顕著である。76は3/4程が欠損していた。表面の使用が顕著であり、皿状に深く窪んでいる。石材は砂岩である。77はほぼ完形。表面中央の使用は顕著で黒く変色している。右側面は使用により5cmほど窪んでいる。発掘作業時に右側面を上にして地面に突き刺さった状態で出土した。表裏の両面にも使用が認められるが、最終的には右側面を使用して廃棄された可能性がある。石材は安山岩である。

H 石鍾 (第99図)

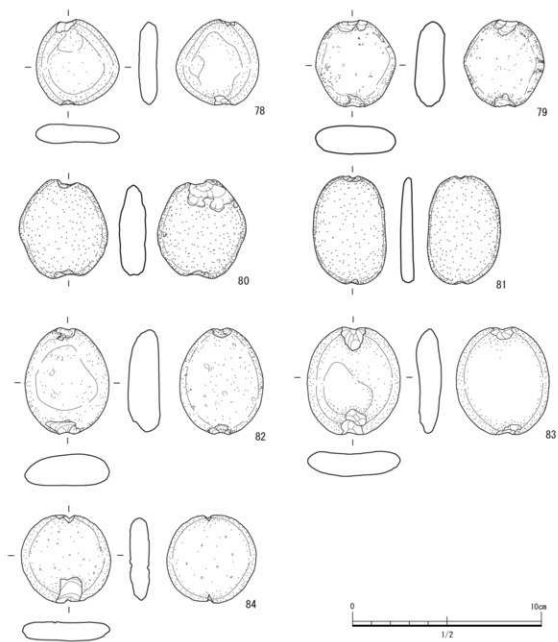
石鍾は7点を図示した。78～83は磔の長軸両端に小剥離で組掛け部を作り出したものである。素材は扁平な小磔を利用している。石材は安山岩である。84は磔の長軸両端に切り込みと小剥離を併用し、組掛け部を作り出したものである。上端は切り込みのみ。素材は扁平な小磔を利用している。石材は安山岩である。



第97图 5区 磨石·砾石出土遗物实测图



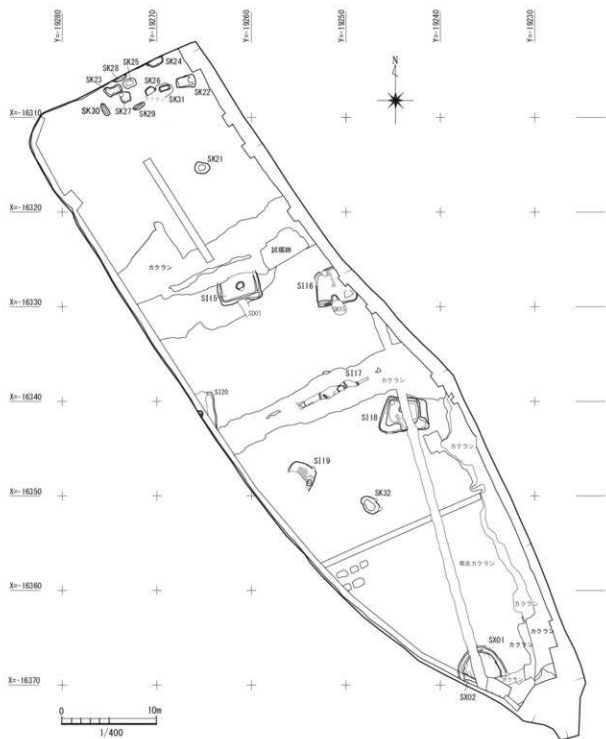
第98図 5区 遺構外出土石器実測図



第99図 5区 石錘出土遺物実測図

(2) 弥生時代の遺構・遺物

調査5区における弥生時代の検出遺構は、竪穴建物6軒、土坑12基、円形周溝遺構1基、不明遺構1基である。調査区内における、それぞれの遺構の分布には偏りがみられる。土坑12基のうち10基が調査区北側に集中的に分布している。また北側に分布する土坑は、長方形もしくは長楕円形の傾向が高いように見受けられる。一方、竪穴建物5軒は調査区中央にまとまって分布している。不明遺構1基と重複するが、



第100図 託麻弓削遺跡群5区 遺構配置図 (S=1/400) - 弥生 -

円形周溝遺構は調査区南端に分布している。遺構配置に関する若干の検討は総括にゆずるが、各遺構の古地に特徴が認められるようである。

整理作業では、他時期の遺構と同じく、各遺構の時期について、検出面、出土遺物、遺構の構造等も含めて検討を行ったが、平成27年度5区の調査担当者の所見を最も重視し、弥生時代前期から中期と想定した。

そのため、整理担当者として時期認定に疑問の余地が残るものについては、文章中にその旨記載することとした。

なお、重複関係の認められる遺構の前後関係は、前→後で記述している。

①竪穴建物跡（第101図～第106図）

SI15（第101図）

SI15は3226・3225グリッドに位置している。遺構の規模は、建物北側が後世の擾乱により削平されているため推定ではあるが、長軸約4.52m、短軸約3.08m、検出面からの深さ約32cmを測る。平面形態は残存部分からほぼ隅丸方形を呈するものと思われる。建物埋土は2層に分層している。建物に伴う遺構として建物中央で炉の可能性のある土坑（旧PO51）を1基検出している。炉の深さは約24cmを測り、埋土は2層に分層している。土層断面図から炉と床面を一度作り直しているように見えるが、調査時の所見は不明確であった。主柱穴は見つかっていない。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が埋土各層から出土している。出土量は弥生土器が多い傾向にある。ここでは2点を図示した。512は壺の口縁部破片である。口唇部に刻目が施されている。内外面ともにヨコナデ。513は壺の口縁部破片である。口縁部が大きく外反する。内面はハケメ調整。いずれも弥生時代前期から中期のものと思われる。

SI16（第102図）

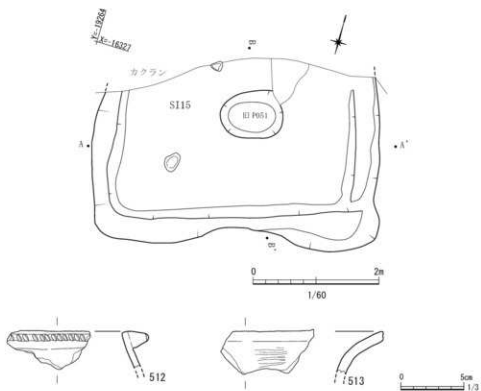
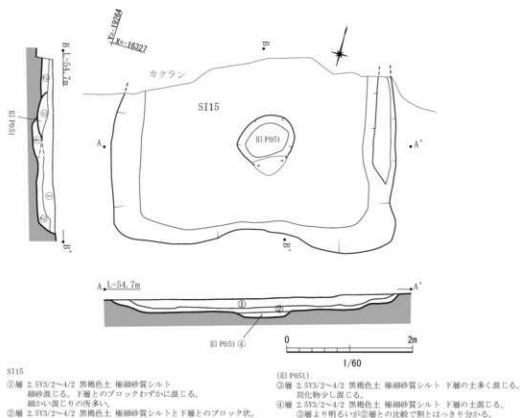
SI16は3226・3225グリッドに位置している。建物北側が古代の土坑SK15と重複している。前後関係はSI16→SK15である。遺構の規模は、建物北東側が調査区外に広がるため推定ではあるが、長軸約4.25m、短軸約4.0m、検出面からの深さ約22cmを測る。平面形態はほぼ隅丸方形を呈するものと思われる。建物埋土は2層に分層している。建物の北側で硬化した床面を確認しており、建物の南西側はやや深くなるようである。主柱穴は見つかっていない。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が多く出土しているが、実測可能なものではなく、検出面及び遺構の構造から当該期の遺構と推定している。

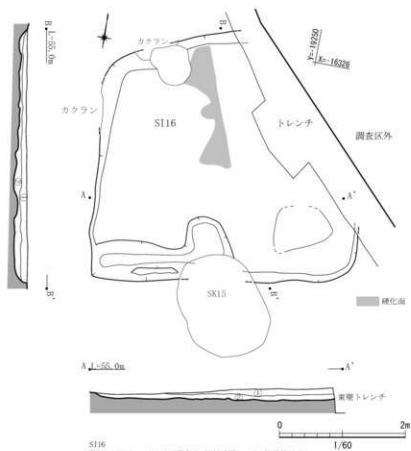
SI17（第103図）

SI17は3325・3324グリッドに位置している。建物北側と南側が後世の擾乱により削平されており、正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約40cmを測る。平面形態は、残存部分から円形を呈するものと推測されるが、他の建物跡を参考にするとややいびつな隅丸方形の可能性も捨てきれない。建物埋土は2層に分層している。建物に伴う遺構として炉の可能性のある土坑（旧PO49）を1基検出している。炉の深さは約10cmを測り、埋土は1層としている。建物西側で硬化した床面、建物東側でベッド状施設を確認している。調査時の所見から、ベッド状施設は床面上に土を盛って構築したものようである。主柱穴は見つかっていない。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が多く出土しているが、床面近くで出土した514は遺構検出面及び遺構の状況から、当該期の遺構と推定している。514は小型の壺である。口縁部に3箇所穿孔が確認できる。

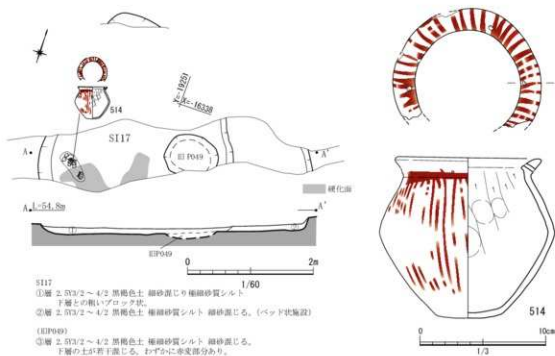


第101図 5区 SI15 遺構・出土遺物実測図



- S116
 ①層 2.0Y4/2~3/2 暗灰黄色土 極細砂質シルト 細砂混じる。
 かなり砂っぽく色調薄い。
 ②層 2.0Y4/2 暗灰黄色土 極細砂質シルト 細砂混じる。
 下層との層界甚だ不明瞭。
 シミのようになっている所も多い。

第102図 5区 S116 遺構実測図



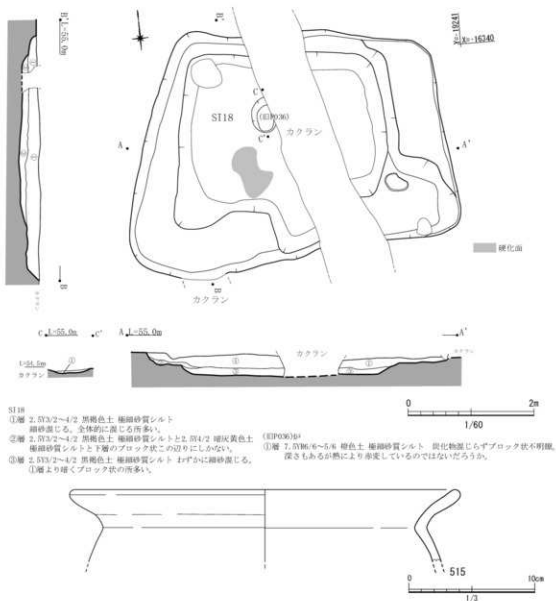
- S117
 ①層 2.0Y3/2~4/2 黒褐色土 細砂混じり極細砂質シルト
 下層との粗いブロック状。
 ②層 2.0Y3/2~4/2 黒褐色土 極細砂質シルト 細砂混じる。(ベット状施設)
 (EIP049)
 ③層 2.0Y4/2~4/2 黒褐色土 極細砂質シルト 細砂混じる。
 下層の土が若干混じる。わずかに赤皮部分あり。

第103図 5区 S117 遺構・出土遺物実測図

口縁部は1/4ほど欠損しているが、その配置状況から、本来は4箇所穿孔されていた可能性がある。底部はやや丸底ぎみ。胴部中央で内側に「くの字」状に屈曲し、頸部から再び「くの字」状に口縁部が開く。赤彩による帯状の文様が口縁部及び胴部には縦方向に、頸部には横方向に施文されている。類似した資料が沱麻弓削遺跡群調査3区（古城編 2016）で出土している。内外面には煤が付着していた。弥生時代中期のものと思われる。

SI18（第104図）

SI18は3424・3324グリッドに位置している。建物中央が南北方向の攪乱により破壊されている。遺構の規模は、長軸約5.25m、短軸約3.95m、検出面からの深さ約35cmを測る。平面形態はいびつな隅丸長方形を呈する。建物土は3層に分層している。建物に伴う遺構として建物中央で炉（旧P036）を1基検出している。炉の深さは約8cmを測り、埋土は1層としている。炉の南側で硬化した床面、建物東側と西側でベッド状の高まりを確認している。調査時の所見から、ベッド状施設はSI17とは異なり、竪穴掘削時に地山を削り出し構築しているようである。主柱穴は見つかっていない。



第104図 5区 SI18遺構・出土遺物実測図

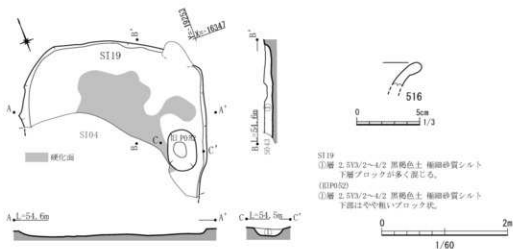
遺物は縄文土器、弥生土器の破片が埋土各層から多く出土しているが、遺構検出面、遺構の構造から、当該期の遺構と推定している。515は裏の口縁部から胴部破片である。頸部で「くの字」状に屈曲し、口縁部は直線的に大きく開く。内外面ともにヨコナデが施されている。弥生時代中期のものと思われる。

SI19 (第105図)

SI19は3425グリッドに位置している。建物南西側が古代の遺構SI04と重複している。前後関係はSI19→SI04である。遺構の規模は、建物南西側が重複しているため推定ではあるが、長軸約3.28m、検出面からの深さ約16cmを測る。本調査区で確認された当該期の堅穴建物としては、やや小規模なものである。

平面形態は隅丸方形を呈するものと推測される。建物埋土は1層としている。建物に伴う遺構として、土坑(旧P052)を検出している。深さは約12cmを測り、埋土は1層としている。建物の中央で硬化した床面を確認している。主柱穴は見つかっていない。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が多く出土している。遺構検出面、遺構の構造から、当該期の遺構と推定している。516は口縁部破片である。裏と思われる。口唇部が若干肥厚し、内外面ともにヨコナデが施されている。弥生時代中期のものと思われる。

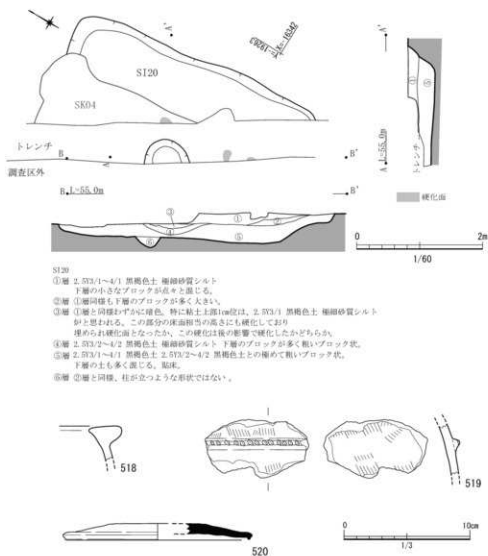


第105図 5区 SI19遺構・出土遺物実測図

SI20 (第106図)

SI20は3326・3426グリッドに位置している。SK04に破壊されている。前後関係はSI20→SK04である。西側が調査区外に広がるため正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約46cmを測る。平面形態は残存部分から、隅丸長方形を呈する可能性がある。建物埋土は6層とした。実測図を見るかぎり、掘方掘削後、貼床とし、⑤層上面を床面としているようである。床面中央に竈が位置している。が埋土からは646が出土しているが、竈は古代の土坑SK04と重複した位置にあり、646の大部分はSK04出土の破片である。したがって、646は本来SK04に伴うものの可能性が高い。平面形態、竈の位置、弥生土器も出土していることなどから、当該期の遺構と推定している。

出土遺物は、埋土から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。ここでは土器3点を図示した。518は裏の口縁部破片である。519は裏の胴部破片。突帯は刻目をもつ。内外面ともにハケメ調整。いずれも弥生時代前期から中期のものと思われる。520は須恵器の蓋である。繰り返しになるが、本来はSK04に伴う可能性がある。



第106図 5区 SI20 遺構・出土遺物実測図

②土坑 (第107図~第110図)

SK21 (第107図)

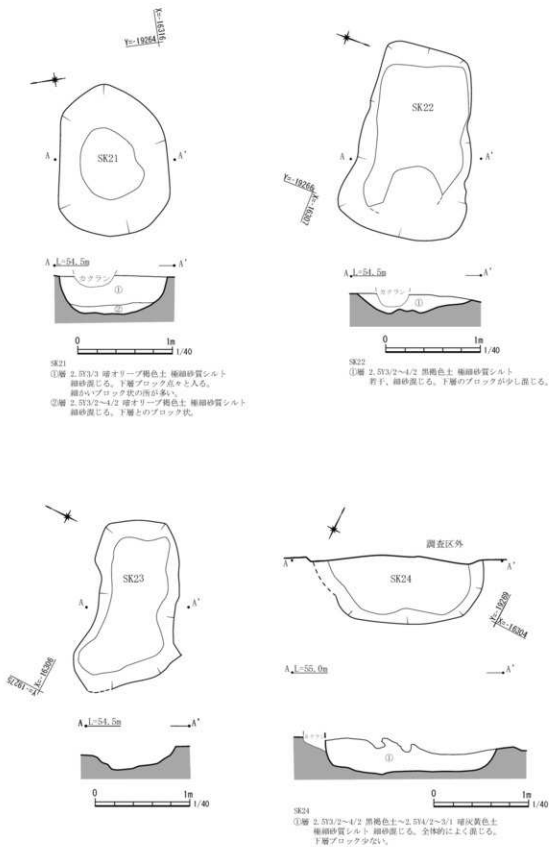
SK21は3126グリッドに位置する。遺構規模は長軸約1.60m、短軸約1.18m、検出面からの深さ約40cmを測る。平面形態はややいびつな楕円形、断面形態は台形状を呈する。埋土は2層に分層している。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土している。出土量は縄文土器が多い傾向にあるが、平成27年度5区調査担当者は、検出面から当該期の遺構と推定している。ただし、調査区北側に分布する土坑と平面形態が異なるうえに、土坑が集中した範囲からも外れるため、時期は遡る可能性も想定される。

SK22 (第107図)

SK22は3026グリッドに位置する。遺構規模は長軸約2.02m、短軸約1.36m、検出面からの深さ約22cmを測る。平面形態はややいびつな長方形、断面形態は皿状を呈する。埋土は1層としている。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は極めて少ない。実測可能な遺物がなく、検



第107図 5区 SK21・22・23・24 遺構実測図

出面から当該期の遺構と推定している。

SK23 (第107図)

SK23は3027グリッドに位置する。遺構規模は長軸約1.78m、短軸約1.12m、検出面からの深さ約16cmを測る。平面形態はいびつな長方形、断面形態は皿状を呈する。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は極めて少ない。実測可能な遺物がなく、検出面から当該期の遺構と推定している。

SK24 (第107図)

SK24は3026・3027グリッドに位置する。遺構規模は、遺構北側が調査区外に広がるため推定ではあるが、長軸約1.50m、検出面からの深さ約16cmを測る。平面形態は楕円形を呈するものと推測され、断面形態は台形状を呈する。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は極めて少ない。実測可能な遺物がなく、検出面から当該期の遺構と推定している。

SK25 (第108図)

SK25は3027グリッドに位置する。遺構規模は長軸約1.38m、短軸約0.96m、検出面からの深さ約28cmを測る。平面形態はややいびつな楕円形、断面形態は台形状を呈する。埋土は1層としている。

遺物は弥生土器の破片が出土しているが、出土量は極めて少ない。実測可能な遺物がなく、検出面から当該期の遺構と推定している。

SK26 (第108図)

SK26は3027グリッドに位置する。遺構規模は、遺構南側が後世の擾乱により掘削されているため推定ではあるが、長軸約1.10m、検出面からの深さ約18cmを測る。平面形態は残存部分から隅丸長方形、断面形態は皿状を呈するものと推測される。埋土は1層としている。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は極めて少ない。実測可能な遺物がなく、検出面から当該期の遺構と推定している。

SK27 (第108図)

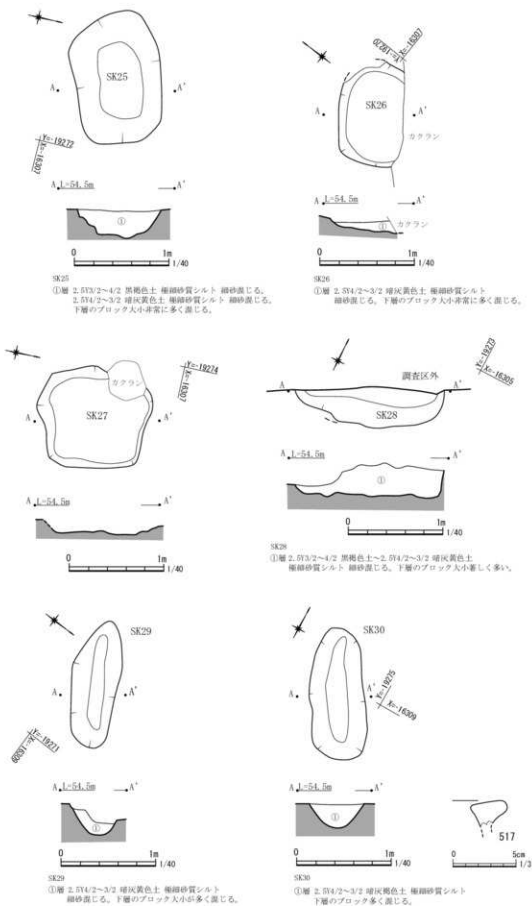
SK27は3027グリッドに位置する。遺構北西部が擾乱されている。遺構規模は長軸約1.22m、短軸約1.06m、検出面からの深さ約36cmを測る。平面形態はいびつな円形もしくは方形、断面形態は皿状を呈するものと推測される。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は弥生土器が多い傾向にある。実測可能な遺物がなく、検出面から当該期の遺構と推定している。

SK28 (第108図)

SK28は3027グリッドに位置する。遺構規模は、遺構北側が調査区外に広がるため推定ではあるが、長軸約1.22m、短軸約1.08m、検出面からの深さ約14cmを測る。平面形態はややいびつな方形を呈するものと推測され、断面形態は台形状を呈する。埋土は1層としている。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は極めて少ない。実測可能な遺物がなく、検



第108図 5区 SK25・26・27・28・29・30 遺構・出土遺物実測図

出面から当該期の遺構と推定している。

SK29 (第108図)

SK29は3027グリッドに位置する。遺構規模は、長軸約1.36m、短軸約0.52m、検出面からの深さ約34cmを測る。平面形態は長楕円形、断面形態は皿状を呈するものと推測される。埋土は1層としている。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は極めて少ない。実測可能な遺物がなく、検出面から当該期の遺構と推定している。

SK30 (第108図)

SK30は3027グリッドに位置する。遺構規模は、長軸約1.38m、短軸約0.58m、検出面からの深さ約26cmを測る。平面形態は長楕円形、断面形態は皿状を呈するものと推測される。埋土は1層としている。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は極めて少ない。検出面から当該期の遺構と推定している。517は裏の口縁部破片である。内外面ともにヨコナデが施される。弥生時代中期のものと思われる。

SK31 (第109図)

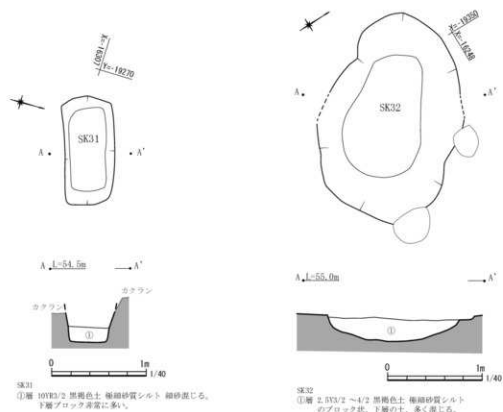
SK31は3026グリッドに位置する。遺構規模は、長軸約1.24m、短軸約0.58m、検出面からの深さ約34cmを測る。平面形態は長方形、断面形態は台形状を呈する。埋土は1層としている。遺構上部が攪乱されているため、本来の掘り込み面は検出面よりも上面と推測される。

出土遺物が少ないため、土坑が集中的に分布する範囲で検出したことから当該期の遺構と推定している。ただし、縄文時代後期以降と推測される人骨が出土した土城墓と類似した形態をとるため、時期は遡る可能性も想定される。

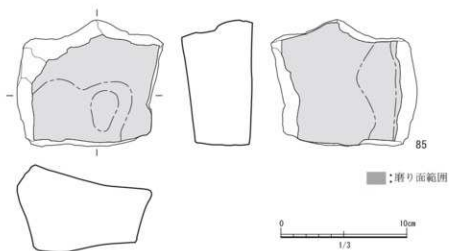
SK32 (第109図・第110図)

SK32は3524グリッドに位置する。遺構規模は、長軸約2.42m、短軸約1.66m、検出面からの深さ約30cmを測る。平面形態はややいびつな楕円形、断面形態は皿状を呈する。埋土は1層としている。遺構東側が一部攪乱されている。

遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土しているが、出土量は縄文土器が多い。検出面から当該期の遺構と推定している。ただし、調査区北側に分布する土坑と平面形態が異なるうえに、土坑が集中した範囲からも外れるため、時期は遡る可能性も想定される。ここでは残存状況の良い石器を図示した。85は砥石である。



第109図 5区SK31・32遺構実測図



第110図 5区SK32出土遺物実測図

③円形周溝遺構（第111図）

SX01（第111図）

SX01は3623グリッドに位置している。遺構北側が不明遺構SX02と重複している。前後関係はSX02→SX01である。調査区西壁横に設定したトレンチや視乱の影響により遺構の半分近くが消失している。そのため推定ではあるが、長径約6.40m、短径約5.12m、溝の幅約0.68m、深さ約60cmを測る。

平面形態は楕円形を呈するものと推測され、溝の断面形態は台形状を呈する。埋土は2層に分層している。

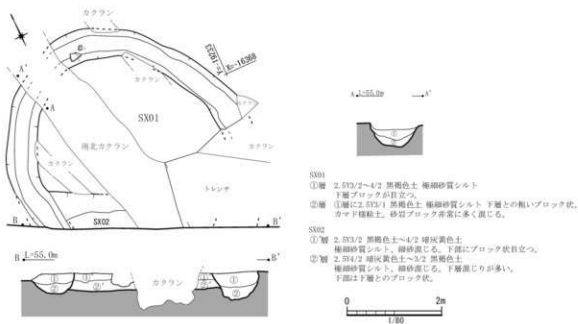
遺物は縄文土器、弥生土器の破片が出土している。検出面及び県内で見つかる円形周溝遺構の時期から、当該期の遺構と推定した。

④不明遺構（第111図）

SX02（第111図）

SX02は3623グリッドに位置している。遺構が円形周溝遺構SX01と重複している。前後関係はSX02→SX01である。視乱の影響もあり遺構の大部分が失われているうえに、調査区西壁横に設定したトレンチ内で見つかったため、遺構の全容はわからない。検出面からは深さ約36cmを測る。埋土は2層に分層している。円形周溝遺構に壊された竪穴建物の可能性もあるが、推測の域をでない。

出土遺物はなく、検出面から当該期の遺構と推定している。



第111図 5区 SX01・02遺構実測図

⑤遺構外出土遺物（第112図～第115図）

5区の遺構外からは多くの遺物が出土している。現地調査では遺構外の出土遺物は、いずれもグリッド名、層位名を付けて取り上げている。整理作業の過程で種別、時期別に分類し、周辺遺構から出土した遺物との接合作業を行っている。ここでは、遺構出土遺物と接合しなかった土器31点、石器2点を図示した。土器は、弥生時代前期から中期を主体とし、一部後期のものが含まれる。

521～529・533は甕の口縁部破片である。521は口縁部に煤が付着。523は胴部に低い突帯が1条巡る。

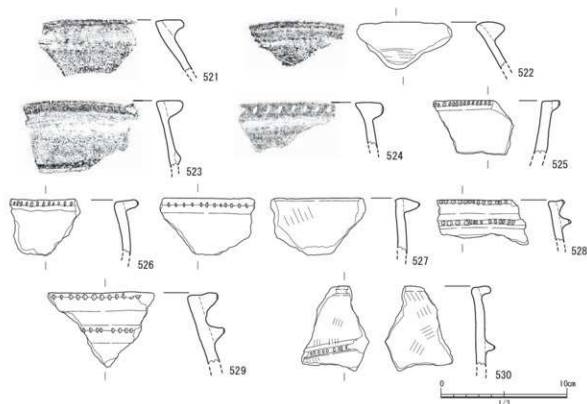
524・529・533・535は甕の口縁部から胴部破片であり、口唇部及び突帯に刻目をもつものである。524は口唇部に浅く丸みをおびた刻目をもつ。525は刻目の間隔が密である。528は口縁部直下に突帯が巡る。533は口唇部と胴部の2条の突帯に細かな刻目をもつ。531と532は刻目の間隔が密である。532は胴部の突帯が剥がれたような痕跡があり、胎土、調整が類似する。531と同一個体の可能性がある。535は刻目が細く深く施されている。536・538は甕の口縁部破片。536は甕の口縁部から胴部破片で胴部に沈線が1条巡る。539・540は甕の口縁部から胴部破片。539は内面、540は外面のハケメ調整が明瞭。

541・542は甕の胴部破片である。内外面ともにハケメ調整。刻目突帯を巡らす。刻目の間隔は疎。541の刻目はハケメ調整の工具による刻目か。544・545は甕の口縁部破片。口縁端部が内側に突出する。

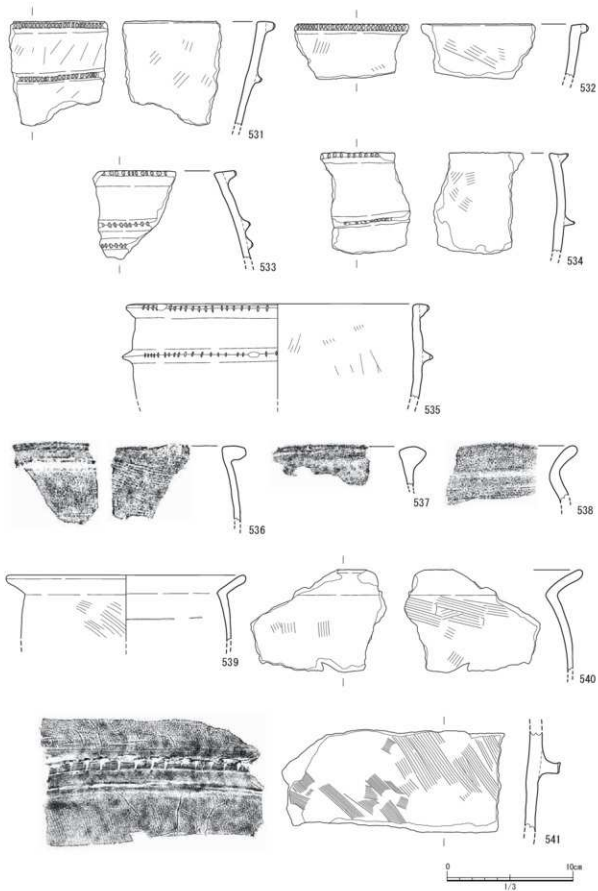
546・547は壺の口縁部から胴部破片。頸部から「くの字」状に屈曲する。内外面ともにハケメ調整。548・549は壺の口縁部から胴部で、頸部下に断面三角形の突帯が巡る。口縁部はヨコナデ。548は内面、549は外面のハケメ調整が明瞭で、いずれも丁寧なつくり。

550は甕の脚台部と思われる。外面はハケメ調整。内面に煤が付着している。551は脚部である。内外面ともに丁寧なミガキが施されている。当該期のものとしたが、縄文時代の可能性もある。

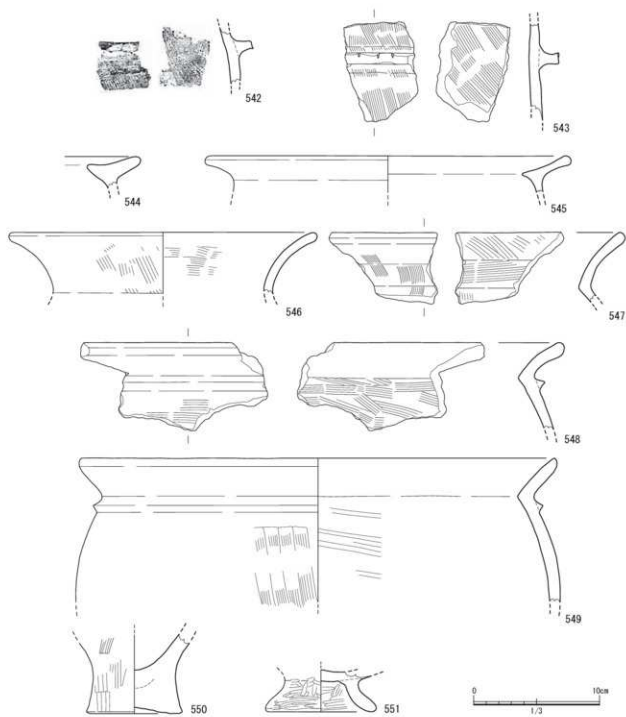
石器86は粘板岩製の石庖丁で未製品と思われる。背は直線的で、刃部は湾曲する。刃部は両面とも丁寧に磨かれている。石器87は砂岩製の砥石である。全体的に磨かれているが、砥面に明瞭なくぼみをもつ。今回、当該期のものとして図示したが、別時期の可能性もある。



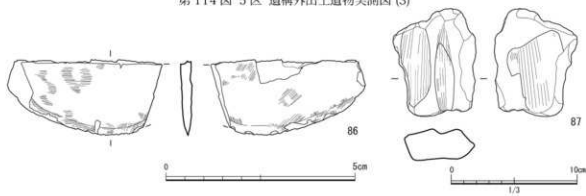
第112図 5区 遺構外出土遺物実測図(1)



第113图 5区 遺構外出土遺物実測図(2)



第114图 5区 遺構外出土遺物実測図(3)



第115图 5区 遺構外出土遺物実測図(4)

(3) 古代の遺構・遺物

調査5区における古代の主要な検出遺構は、掘立柱建物1棟、竪穴建物14軒、土坑20基、溝状遺構2条である。調査区内における、それぞれの遺構の分布には、弥生時代同様に偏りがみられる。竪穴建物は調査区を南東から北西方向に走る溝状遺構より西側に集中的に分布している。一方、ビット状の遺構は溝状遺構より東側に分布しており、土坑は調査区内に点在している状況が看取される。

3425・3525グリッドで検出した竪穴建物群は重複関係が激しいため、遺構認定やその前後関係に曖昧な部分が残っている。遺物の帰属遺構に正確さを欠いている可能性がある。整理作業では、各遺構について、検出面、出土遺物、遺構の構造等を含めて検討を行っているが、他時期の遺構と同じく、平成27年度5区の調査担当者の所見を最も重視した。そのため、整理担当者として疑問の余地が残るものについては、文章中にその旨記載することとした。

なお、重複関係が認められる遺構の前後関係は、前→後で記述している。

①掘立柱建物跡(第117図)

SB01(第117図)

SB01は3325・3326・3425・3426グリッドに位置している。南側は上面が削平されているが、概ね良好に遺存していた。建物規模は桁行3間・梁行2間である。建物の主軸方位はN-2°Eであり、座標北よりやや西に振れる。柱穴は径約40～80cm、検出面からの深さ約35～70cmを測る。柱穴の下端レベルは一定しない。柱痕跡は確認されていない。建物内側のSK03は本遺構に伴う可能性もあるが判然としない。

552は柱穴PO35から出土した土師器の甕もしくは壺の口縁部破片である。内面は緩いヘラケズリ、外面はハケメ調整が施されている。

②竪穴建物跡(第118図～第132図)

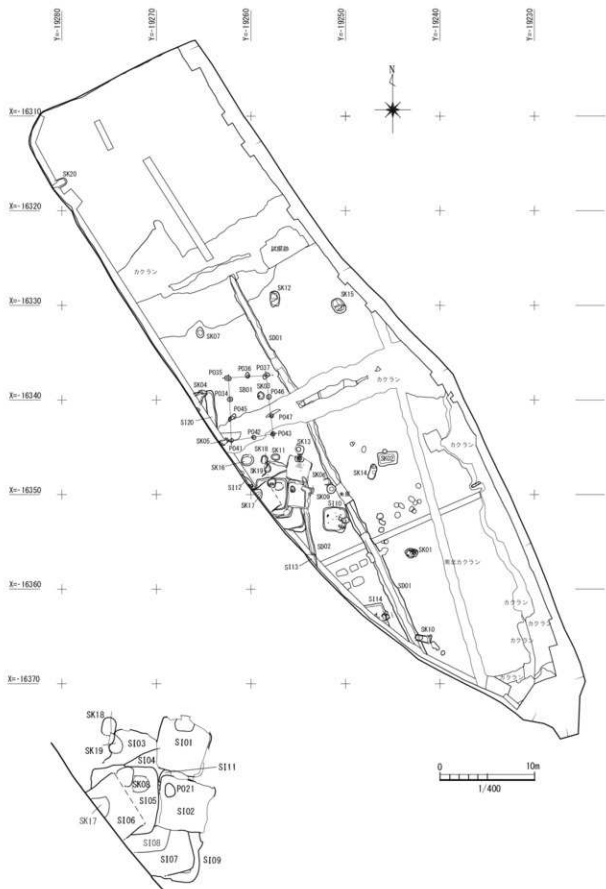
SI01(第118図)

SI01は3525グリッドに位置している。攪乱やSD02によりかなり破壊されている。遺構の規模は長軸約2.82m、短軸約2.56m、検出面からの深さ約16cmを測る。平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物埋土は1層とした。建物に伴う遺構としてカマドを検出している。カマドは西袖が一部残っていた。カマドは北側に造り付けられている。建物中央、カマドの前面の狭い範囲に硬化面が広がっている。柱穴を検出することはできなかった。

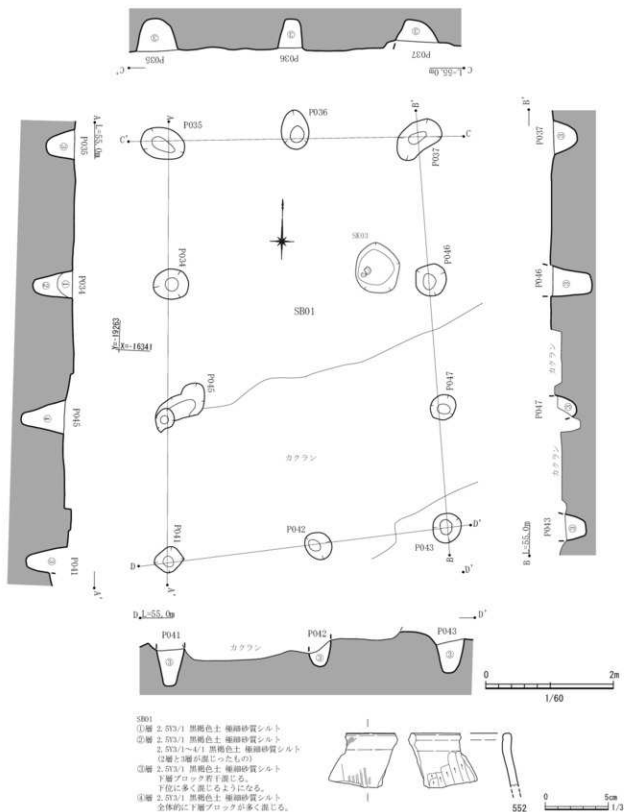
出土遺物は、カマド燃焼部や埋土から土師器が出土している。ここでは土器5点を図示した。553は土師器の甕もしくは鉢と思われる。口縁部は内外ともにヨコナデ。内面はヘラケズリ。外面はハケメ調整で、煤が付着している。554は土師器の鉢である。口縁部は緩やかに外反する。口縁部はヨコナデ。外面は明瞭なハケメ調整。内面は横方向のヘラケズリが施される。555・556は土師器の甕である。いずれも口縁部はヨコナデ。外面はハケメ調整。555の内面のヘラケズリは緩い。758は土製品。土師器の再利用か。

SI02(第119図)

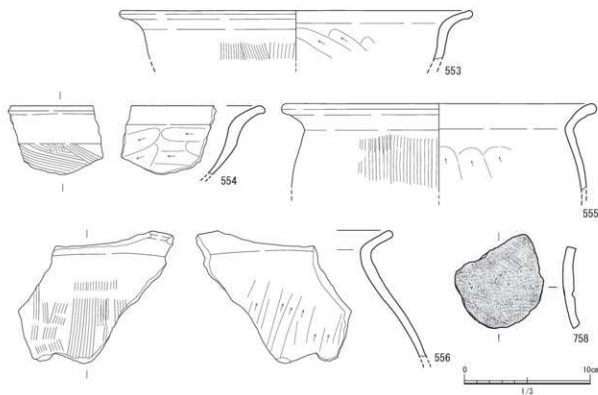
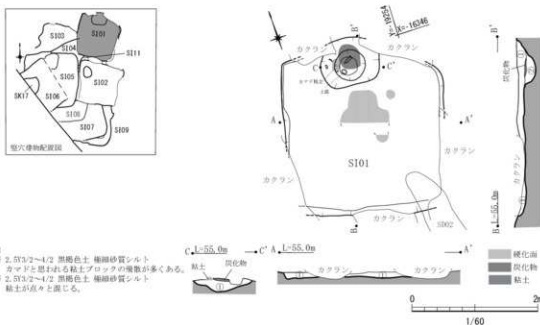
SI02は3425・3525グリッドに位置している。攪乱やSI05により一部が破壊されている。遺構の規模は長軸約2.72m、短軸約2.52m、検出面からの深さ約25cmを測る。平面形態はほぼ隅丸方形を呈する。建物埋土は2層とした。建物に伴う遺構として旧PO21を検出している。



第116図 託麻弓削跡群 5区 遺構配置図 (S=1/400) - 古代 -



第117図 5区 SBO1 掘立柱建物跡・出土遺物尖測図



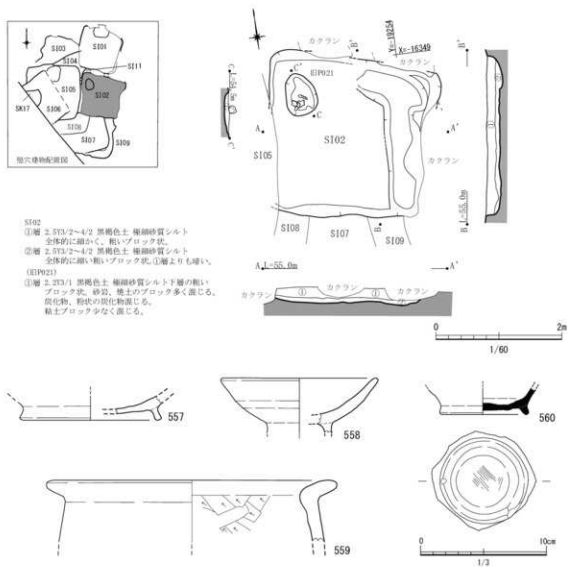
第118図 5区 S101 遺構・出土遺物実測図

出土遺物は、埋土から土師器・須恵器が出土している。また、旧 P021 から土師器の甕の胴部破片が出土しているが、ここでは4点のみを図示した。557・558は土師器の椀である。高台は貼り付け高台。557は内外面ともに煤が付着している。557は外面、558は内外面ともに赤彩されている。559は土師器の甕である。口縁部から胴部の一部が残存していた。口縁部はやや屈曲気味に開き、内外面ともにヨコナデ。胴部内面にヘラケズリが施されている。560は須恵器の椀である。高台は貼り付け高台。底部には板状の圧痕のようなものが見られる。

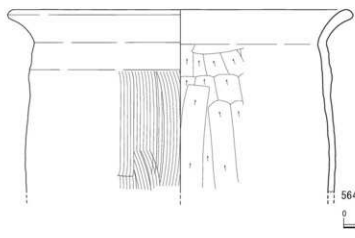
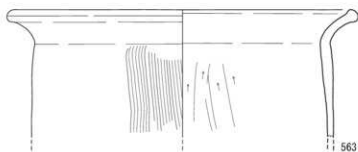
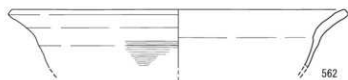
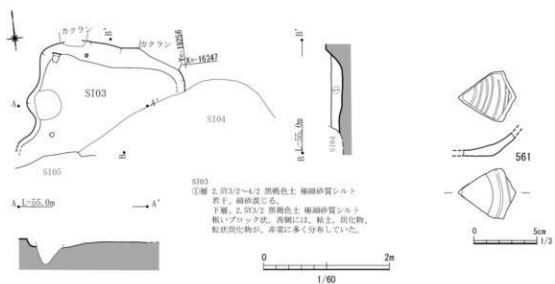
SI03 (第120図)

SI03は3425グリッドに位置している。建物北側がSI05・SI04と重複しているため、正確な大きさは解らない。遺構の規模は検出面からの深さ約25cmを測る。平面形態は残存部分から、隅丸方形を呈する可能性がある。建物土は1層とした。建物に伴う遺構は検出していない。

出土遺物は、埋土から土師器が出土している。ここでは土器4点を図示した。561は土師器の杯である。底部から杯部の一部が残存していた。内外面に回転ヘラミガキが施されている。562は土師器の鉢と思われる。口縁部から胴部の小片である。口縁部はヨコナデ。内面はヘラケズリ、外面はハケメ調整が施されている。563・564は土師器の甕である。口縁部から胴部上半が残存していた。胴部外面に縦方向のハケメ調整、胴部内面に縦方向のヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施されている。いずれも胴部外面に煤が付着している。



第119図 5区 SI02 遺構・出土遺物実測図

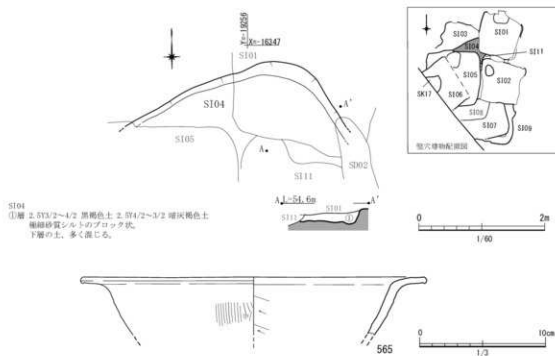


第120図 5区 S103 遺構・出土遺物実測図

SI04 (第121図)

SI04は3425グリッドに位置している。建物がSI05・SI11・SI01・SD02と重複しているため、正確な大きさは解らない。検出面からの深さ約25cmを測る。平面形態は残存部分から、隅丸方形を呈する可能性がある。建物土は1層とした。建物に伴う遺構は検出していない。

出土遺物は、埋土から土師器が出土している。ここでは土器1点を図示した。565は土師器の裏と思われる。口縁部から胴部の一部が残存していた。口縁部はヨコナデ。体部内面は斜め方向のヘラケズリ、外面はハケメ調整が施されている。外面に煤が付着している。



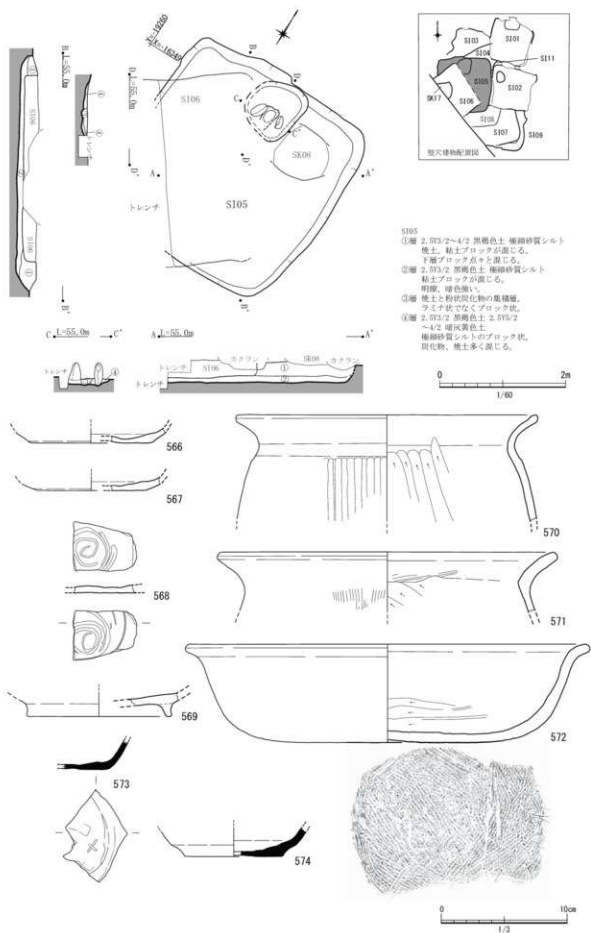
第121図 5区 SI04 遺構・出土遺物実測図

SI05 (第122図)

SI05は3425グリッドに位置している。建物はSI06と重複している。遺構の前後関係はSI05→SI06と思われる。

遺構の1/6程度が西側の調査区外に広がる。遺構の規模は長軸約3.35m、短軸約3.30m、検出面からの深さ約38cmを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。建物土は2層とした。建物に伴う遺構としてカマドの燃焼部と推定される土坑を検出している。推定カマド燃焼部は北側に造り付けられており、カマド袖芯に用いたと推測される礫が出土している。燃焼部埋土には、炭化物・焼土が多く混じっている。

出土遺物は、埋土から土師器・須恵器が出土している。ここでは土器9点を図示した。566・567・568は土師器の杯である。底部の一部が残存していた。567は内外面に赤彩が施されている。568は内外面に回転ヘラミガキが施されている。569は土師器の椀である。高台は貼り付け高台。内外面に赤彩が施される。570・571は土師器の甕である。胴部外面に縦方向のハケメ調整、胴部内面にヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。571のハケメ調整は粗い。572は土師器の鉢である。口縁部から胴部上半は内外面ともにヨコナデ。底部から胴部下半の外面にはハケメ調整、内面はヘラケズリが施されている。573は須恵器の杯である。底部から杯部下半が残存していた。底部はヘラ切り後未調整のようである。

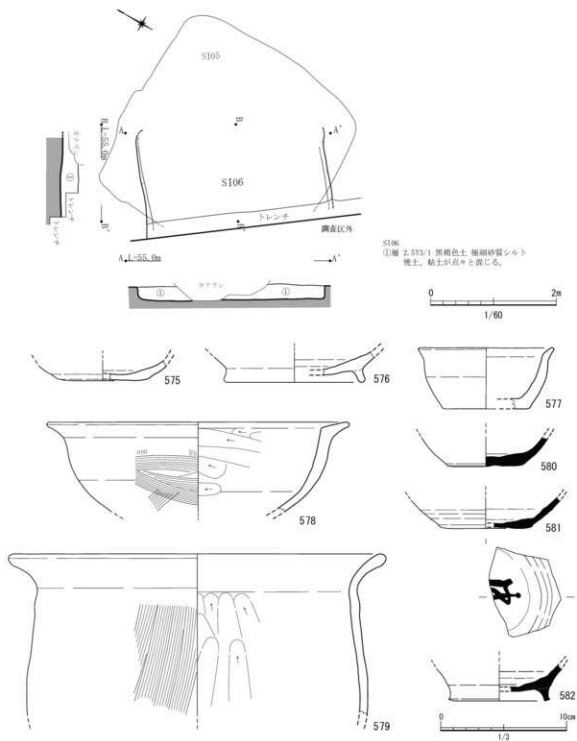


第122図 5区 S105 遺構・出土遺物実測図

SI06 (第123図)

SI06は3425・3525グリッドに位置している。SI05を破壊し構築されているが、北西側の壁が検出できていない。また北東側が調査区外に広がるため正確な大きさが解らない。検出面からの深さは約28cmを測る。平面形態は残存部分から、隅丸方形を呈する可能性がある。建物埋土は1層とした。建物に伴う遺構は検出していない。

出土遺物は、埋土から土師器・須恵器が出土している。ここでは土器8点を図示した。575は土師器の



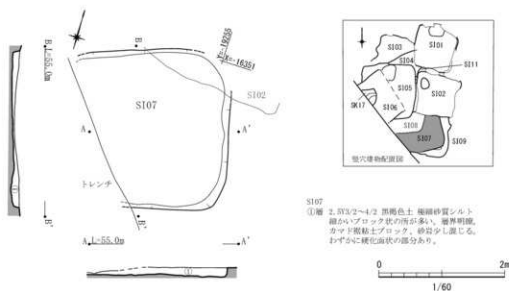
第123図 5区 SI06遺構・出土遺物実測図

杯である。底部は回転ヘラ切り後未調整のようである。内外面ともに赤彩されている。576は土師器の椀である。高台は貼り付け高台。底部に煤が付着している。二次使用によるものか。577は土師器の小型の鉢か。外面に煤が付着。578は土師器の鉢である。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、内面は横方向のヘラケズリが施されている。579土師器の甕である。胴部外面に縦方向のハケメ調整、内面にヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施される。口縁部は内外面ともに煤が付着している。580・581は須恵器の杯である。581の底部に墨書が見られるが、文字の判読はできなかった。582は須恵器の椀である。高台は貼り付け高台。胎土がやや赤味を帯びている。

SI07 (第124図)

SI07は3525グリッドに位置している。SI09を破壊し構築されている。一方、北側がSI02・SI08により破壊されている。前後関係はSI09→SI07→SI08である。また南西側が調査区外に広がるため正確な大きさが解らない。検出面からの深さは約15cmを測る。平面形態は残存部分から、隅丸方形を呈する可能性がある。建物埋土は1層とした。建物に伴う遺構は検出していない。

出土遺物はなく、重複関係等から当該期の遺構と推定している。



第124図 5区 SI07遺構実測図

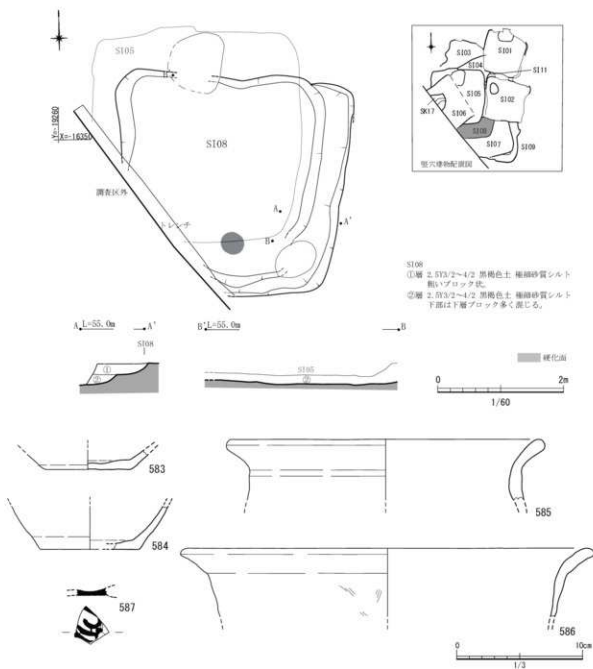
SI08 (第125図)

SI08は3525グリッドに位置している。SI07を破壊し構築されている。一方、北側がSI06・SI05・SI02により破壊されている。前後関係はSI07→SI08→SI05である。

遺構の規模は長軸約3.62m、短軸約3.50m、検出面からの深さ約32cmを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。建物埋土は2層とした。建物に伴う遺構として硬化面を検出しているが、極めて小さな範囲である。また、建物東側が段上を呈するが、これは本来棚状に構築されたものか、拡張に伴うものか、別遺構に伴うものか、調査のものに原因があるのか判然としない。

出土遺物は、埋土から土師器・須恵器が出土している。ここでは土器5点を図示した。583は土師器の杯である。底部は回転ヘラ切り後、雑なナデ。584も杯と思われるが別器種の可能性もある。585は土師

器の裏。586は土師器の鉢である。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、内面は横方向のヘラケズリが施されている。口唇部に煤が付着している。587は須恵器の杯の底部と思われる小片。底部外面は回転ヘラ切り。墨書が見られるが、文字の判読はできなかった。

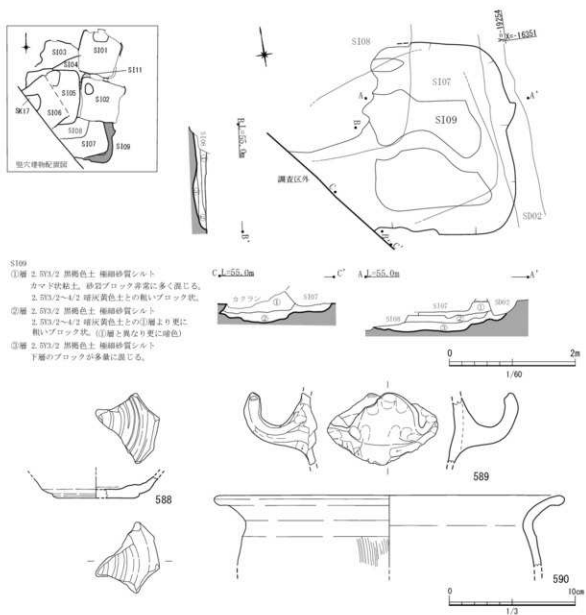


第125図 5区 S108 遺構・出土遺物実測図

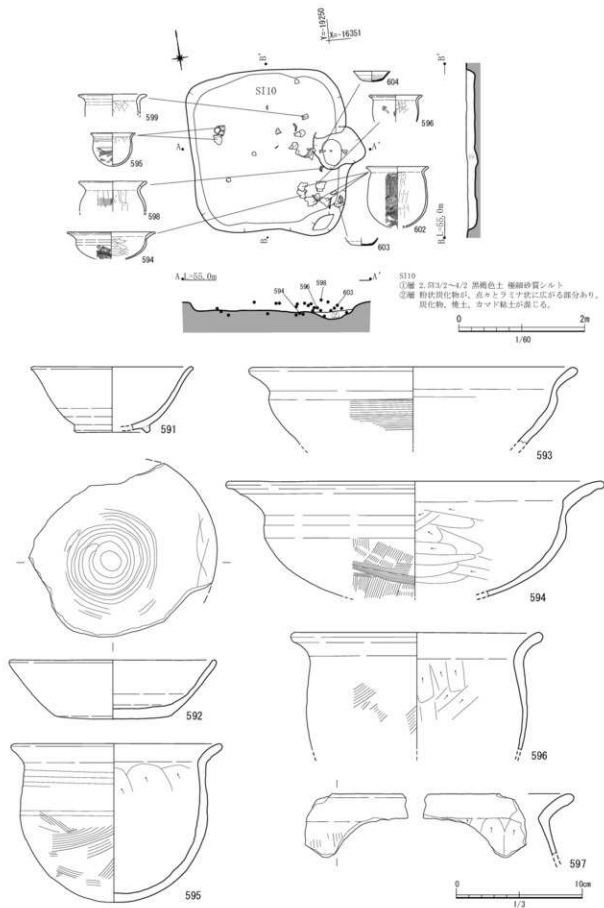
SI09 (第126図)

SI09は3425・3525グリッドに位置している。SI07・SD02に破壊されている。前後関係はSI09→SI07・SD02である。北西側が調査区外に広がるため正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約46cmを測る。平面形態は残存部分から、隅丸長方形を呈する可能性がある。建物埋土は3層とした。実測図を見るかぎり、床面はかなりいびつである。本来このような遺構なのか、調査に原因があるのか判然としない。竪穴建物かどうか疑わしいところがある。建物に伴う遺構は検出していない。

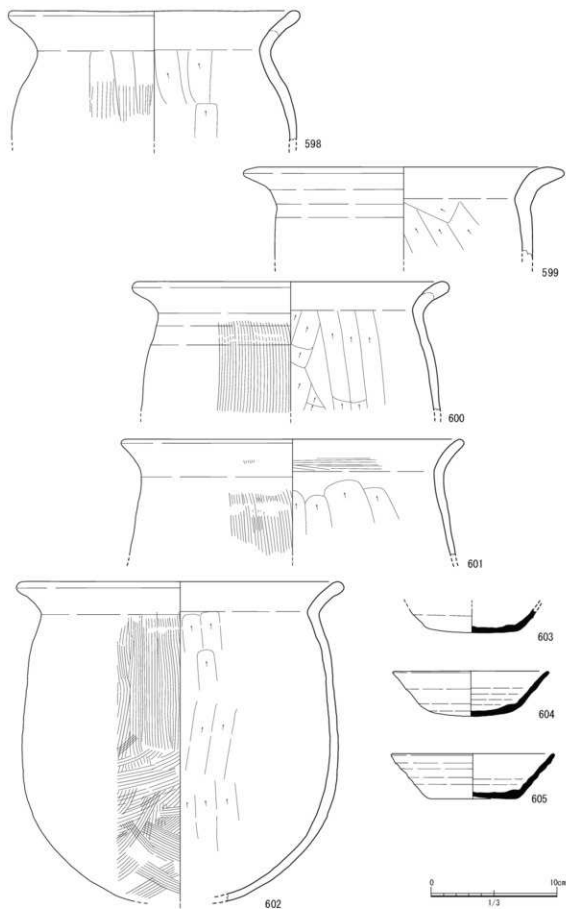
出土遺物は、埋土から土師器が出土している。ここでは土師器3点を図示した。588は土師器の杯である。底部の内外面に回転ヘラミガキが施される。589は土師器の甑の把手部である。内面には縦方向のヘラケズリが施される。590は土師器の甕である。胴部外面に縦方向のハケム調整、内面に緩いヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施される。内面には煤が付着している。



第126図 5区 SI09 遺構・出土遺物実測図



第127図 5区 S110 遺構・出土遺物実測図(1)



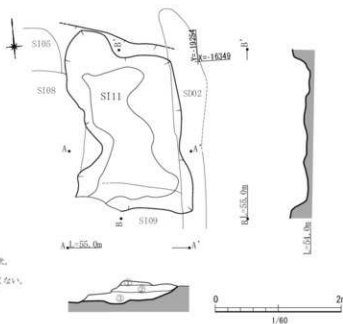
第128图 5区 S110出土遺物実測図(2)

SI10 (第127図・第128図)

SI10は3525・3526グリッド、竪穴集中部から東側へ2mほど離れて位置している。遺構の規模は、長軸約2.75m、短軸約2.52m、検出面からの深さは約15cmを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。建物埋土は2層とした。主軸方位はN-89°Eである。

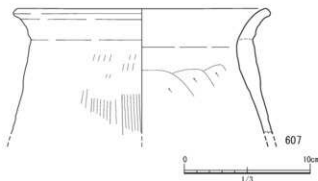
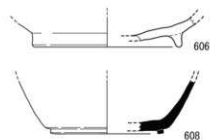
建物に伴う遺構としてカマドの燃焼部と推定される土坑を検出している。土坑埋土には粘土が混じるため、本来はカマドが構築されていたものと思われる。推定カマド燃焼部は東側に造り付けられている。ここでは垂直分布を断面図にドットで投影し示している。

出土遺物は、土坑前面、建物北東側において埋土や床面を中心に土師器や須恵器が多量に出土している。ここでは垂直分布を断面図にドットで投影し示している。土器15点を図示した。591は黒色土器の椀である。口縁部から高台部まで残存していた。高台は貼り付け高台。内面はヘラミガキが施される。体部外面下半は回転ヘラケズリ。内面に黒化処理が施されている。いわゆる九州系の黒色土器A類である。592は土師器の杯である。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、内面は回転ヘラミガキ。器面がやや磨滅しているため赤彩されているのか判然としない。593・594は土師器の鉢である。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、内面は横方向のヘラケズリが施されている。内外面ともに煤が付着している。595は土師器の小型の甕である。3/4程残存していた。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、



SI11

- ①層 2.5V3/2~4/2 黒褐色土 極細砂質シルト
下層のブロック多く含む。粗いブロック状。
②層 2.5V3/2~4/2 黒褐色土 極細砂質シルト
下層につれて下層のブロック混じるが多くない。
③層 2.5V3/2~4/2 黒褐色土 極細砂質シルト
ブロック状。
下層につれて下層の土が多くなる。



第129図 5区 SI11 遺構・出土遺物実測図

内面はヘラケズリが施されている。内外面ともに煤が付着している。596は595同様にやや小型の甕と思われる。597～602は土師器の甕である。概ね、口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリが施されている。口縁部付近に煤が付着するものが多い。599は口縁部がやや屈曲気味に開くもの。602は口縁部から底部まで1/2程残存していた。胴部最大径は胴部下位になる。胴部下半は乱雑なハケメ調整。603～605は須恵器の杯である。603・604の底部は回転ヘラ切り後、雑なナデ。605の底部は回転ヘラ切り後未調整である。

SI11 (第129図)

SI11は3425グリッドに位置している。SD02をはじめ各遺構によりほぼ全面的に破壊されており、竪穴建物かどうかとも疑わしい状況である。正確な大きさや平面形態は全く解らない。検出面からの深さは約35cmを測る。建物に伴う遺構は検出していない。

出土遺物は、埋土から土師器や須恵器が出土している。ここでは土器3点を図示した。606は土師器の椀である。高台は貼り付け高台。内外面ともに赤彩されている。607は土師器の甕である。胴部外面に縦方向のハケメ調整、内面にヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。口縁部は短い。608は須恵器の椀か。高台は貼り付け高台。器面がやや磨滅している。

SI12 (第130図)

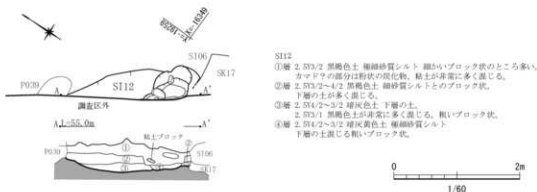
SI12は3426グリッド、遺構の大部分が調査区外に広がり、ほぼ調査区壁面だけで確認できている状況のため、正確な大きさや平面形態は解らない。埋土に粘土を含むため、カマド付の竪穴建物の可能性がある。検出面からの深さは約53cmを測る。埋土は4層とした。

出土遺物は、土師器、須恵器、縄文土器の小片が出土しているが、図化に耐えうる遺物はなかった。

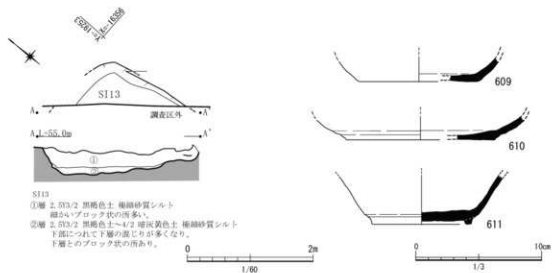
SI13 (第131図)

SI13は3525グリッドに位置している。大部分が調査区外に広がり、ほぼ調査区壁面だけで確認できている状況のため、正確な大きさは解らない。平面形態は、コーナー部分を検出していることから隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈することが推測される。検出面からの深さは約43cmを測る。埋土は2層とした。

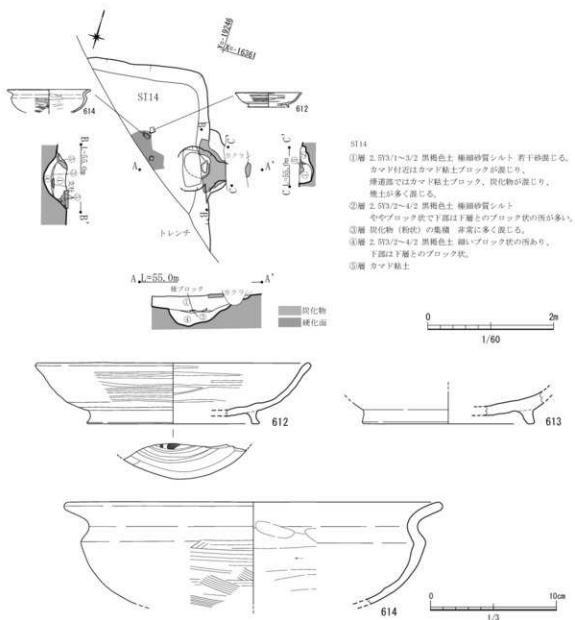
出土遺物は、埋土から土師器や須恵器が出土している。壁面の埋土①層から土師器の甕の頸部から胴部破片が出土しているが、ここでは須恵器を3点のみ図示した。609・610は須恵器の杯の底部破片である。610の底部は回転ヘラ切り後未調整のようである。611は須恵器の椀である。高台は貼り付け高台。底部はナデ。口縁部に向かって緩やかに外反するようである。



第130図 5区 SI12 遺構実測図



第131図 5区 SI13 遺構・出土遺物実測図



第132図 5区 SI14 遺構・出土遺物実測図

SI14 (第132図)

SI14は3624グリッドに位置している。大部分が調査区外に広がるため、正確な大きさはわからない。平面形態は、コーナー部分を検出していることから隅丸方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは約45cmを測る。埋土は4層とした。建物に伴う遺構としてカマドを検出している。カマドは比較的残りがよかったようで、煙道部分も確認されている。カマド内からは石製の支柱と思われるものが出土した。カマドの前側では硬化面を確認している。

出土遺物は、埋土から土師器や須恵器が出土している。ここでは3点図示した。612は土師器の椀である。高台は貼り付け高台。内外面は赤彩されており、回転ヘラミガキが施される。非常に丁寧な作り。底部外面にわずかに墨書の痕跡があるが判読できない。カマド前側の硬化面付近で出土。613も土師器の椀である。高台は貼り付け高台。614は土師器の鉢である。口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、内面は横方向のヘラケズリが施されている。内外面ともに煤が付着している。カマド前側の硬化面で出土した。

③土坑 (第133図～第143図)

SK01 (第133図～135図)

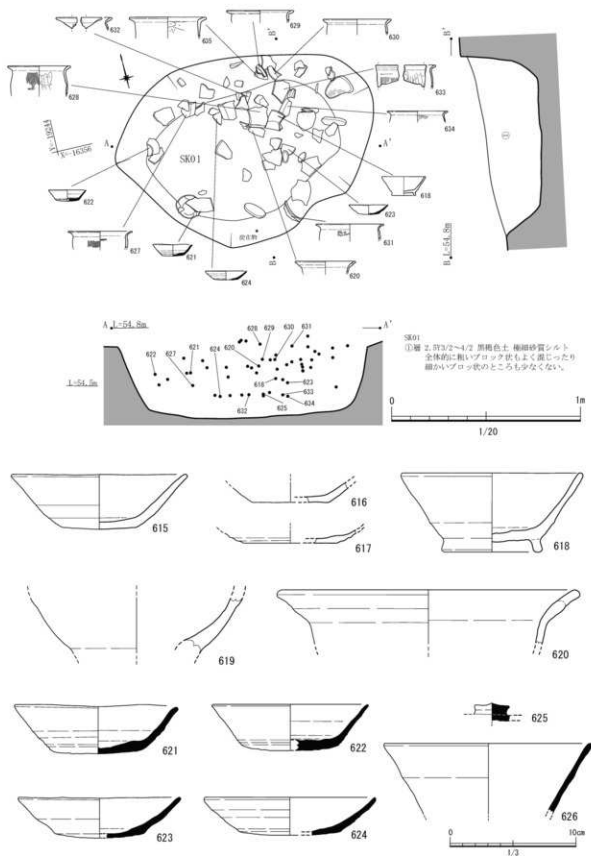
SK01は3524グリッドに位置している。遺構の規模は長軸約1.40m、短軸約1.0m、検出面からの深さ約38cmを測る。平面形態はややいびつな楕円形、断面形態は台形状を呈する。埋土は1層とした。

出土遺物は、埋土から土師器や須恵器が出土している。土坑内でも北側に多く分布する。ドットマップを見るかぎり、平面分布は土坑内北側にやや集中する傾向がある一方、垂直分布に偏りはなく、土坑底面よりやや上から散在していることが看取される。土坑構築後、一定の時間が経過したのち、土器が廃棄され始めた可能性もあるが、発掘作業時の掘り過ぎの可能性もある。埋土からは接合しなかった土師器の甕の胴部破片が多数出土しているが、ここでは土器21点を図示した。615・616は黒色土器の杯である。615は口縁部から底部まで1/4程残存していた。体部外面下半は回転ヘラケズリ、内面はヘラミガキ。内面に黒化処理が施されている。いわゆる九州系の黒色土器A類である。616は小片ではあるが、体部外面下半は回転ヘラケズリ、内面はヘラミガキ、底部は回転ヘラ切り後未調整のようである。内面に黒化処理が施されている。いわゆる九州系の黒色土器A類である。617は土師器の杯である。内外面ともに赤彩されている。618は土師器の椀である。高台は貼り付け高台。内外面ともに赤彩。胎土に雲母と思われる鉱物を多く含む。口縁部に煤が付着している。619は土師器の壺か。胴部の破片のため器種が正確にわからない。外面に煤が付着している。620は土師器の甕の口縁部破片と思われる。胎土に角閃石を多く含む。621～624は須恵器の杯である。621は完形。底部は回転ヘラ切り後ナデ。622～624は口縁部から底部まで1/5程残存していた。624は胎土に雲母と思われる鉱物を多く含む。625は須恵器の蓋の擬宝珠形つまみの小片。626は須恵器の椀の体部か。胎土に長石を多く含む。628～635は土師器の甕の口縁部から胴部破片。口縁部は内外面ともにヨコナデ、内面はヘラケズリ。胴部外面はハケメ調整が明瞭なものと不明瞭なものがある。627は胎土に雲母と思われる鉱物、628・633・634は胎土に角閃石を多く含む。635は口縁部が屈曲気味に開く。厚手。

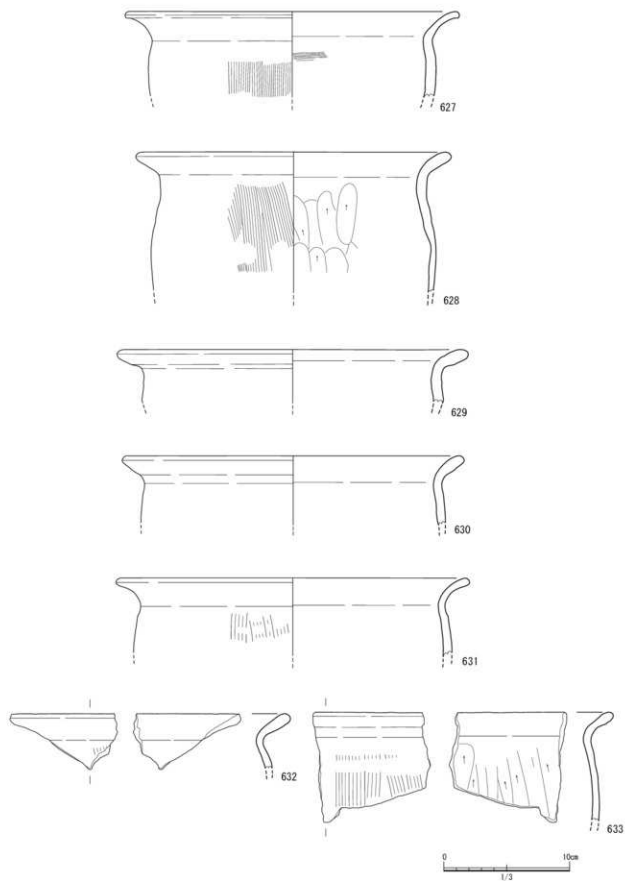
SK02 (第136図)

SK02は3424グリッドに位置している。遺構の規模は長軸約2.08m、短軸約1.42m、検出面からの深さ約43cmを測る。平面形態はやや長方形を呈する。埋土は3層とした。

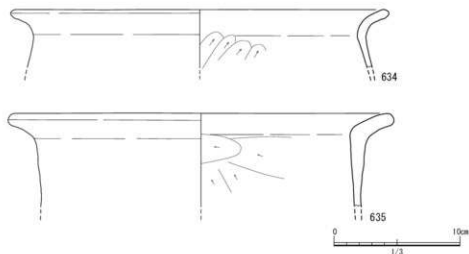
出土遺物は、埋土①層から土師器が出土している。ここでは土器6点を図示した。636～641は土師器



第133図 5区 SK01遺構・出土遺物実測図(1)



第134图 5区 SK01出土遺物実測図(2)



第135図 5区 SK01出土遺物実測図(3)

の杯である。いずれも胎土に雲母と思われる鉱物を含み、内外面に赤彩が施されている。636は底部回転ヘラ切り後ナデ。底部外面にわずかに墨書の痕跡があるが判読できない。637～640は底部回転ヘラ切り後、雑なナデ。641は口縁部内外面に油煙が付着している。灯明皿として使用されたものか。

SK03 (第137図)

SK03は3325グリッド、掘立柱建物SB01の内側に位置している。遺構の規模は径約0.80m、検出面からの深さ約15cmを測る。平面形態は円形を呈する。埋土は1層とした。

出土遺物は、土師器や須恵器が出土している。ここでは土器2点を図示した。642は土師器の甕である。口縁部から胴部下半が残存していた。口縁部はヨコナデ、胴部上半外面は縦方向のハケメ調整で下半外面は斜め方向の乱雑なハケメ調整。胴部上半内面は縦方向のヘラケズリが施されている。胴部最大径は胴部の中位から下位にある。643は須恵器の杯である。口縁部は直線的に開く。底部は回転ヘラ切り後、雑なナデ。土坑底面から出土した。

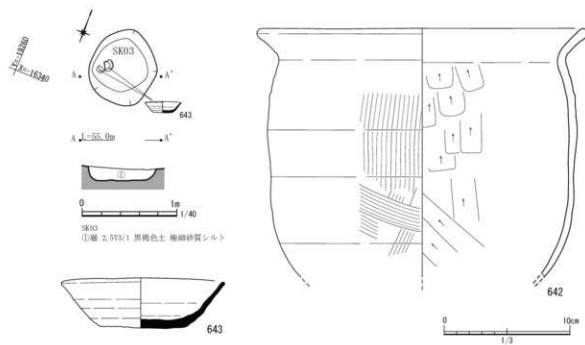
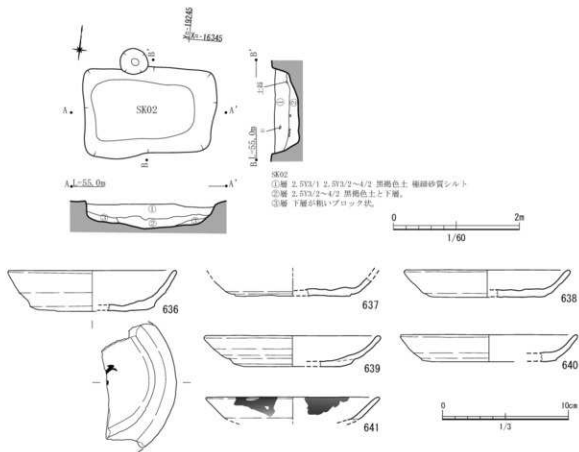
SK04 (第138図)

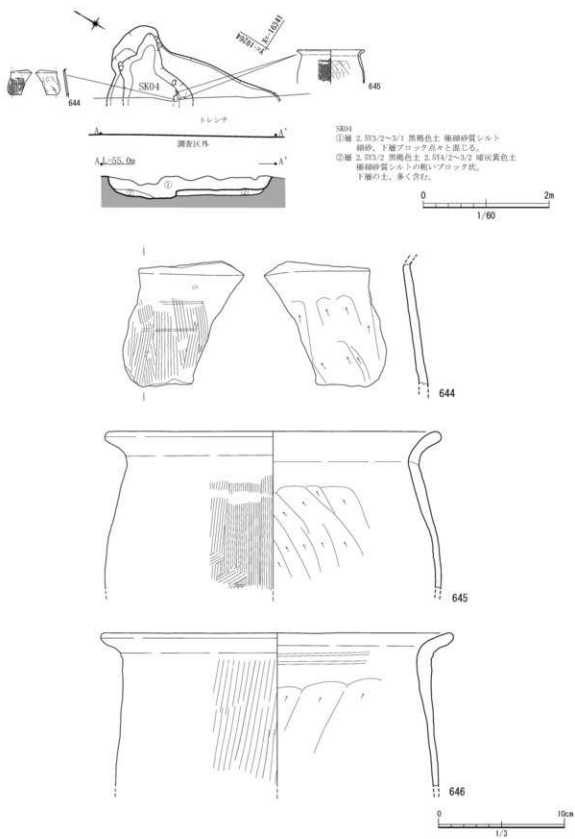
SK04は3326・3426グリッドに位置している。SI20を破壊している。前後関係はSI20→SK04である。西側が調査区外に広がるため正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約35cmを測る。平面形態は残存部分から、いびつな隅丸方形を呈する可能性がある。建物埋土は2層とした。

出土遺物は、土師器が出土している。ここでは3点を図示した。644は土師器の甕の胴部破片。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ。645・646は土師器の甕である。口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部はヨコナデ、外面は縦方向のハケメ調整、内面は斜め方向のヘラケズリ。外面に煤が付着している。前節のとおり、646はSI20の伊理土から一部が出土しているが、多くの破片は本遺構に伴うものである。したがって本来SK04に帰属するものと考えた。胎土には角閃石を多く含んでいる。

SK05 (第139図)

SK05は3426グリッドに位置している。全体的に攪乱により破壊されているため正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約40cmを測る。残存部分から平面形態は楕円形を呈するものと推定される。埋土は2層とした。





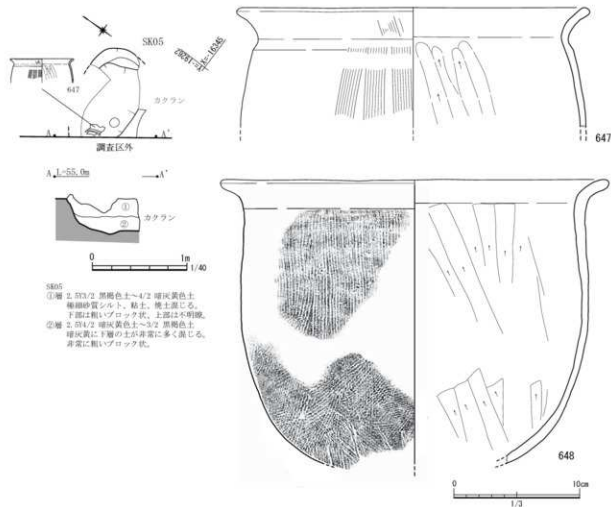
第138図 5区 SK04 遺構・出土遺物実測図

出土遺物は、土師器が出土している。ここでは土器2点を図示した。647・648は土師器の甕である。647は口縁部から胴部上半が残存していた。口縁部はヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケメ調整、胴部内面はやや斜め方向のヘラケズリが施される。外面に煤が付着している。648は口縁部から胴部下半が残存していた。口縁部はやや強く外反する。口縁部はヨコナデ、胴部上半外面は縦方向のハケメ調整で下半外面は斜め方向の乱雑なハケメ調整。胴部上半内面はやや斜め方向のヘラケズリが施される。口縁部に煤が付着する。胴部最大径は胴部中位から下位にあり、底部は丸味を帯びるようである。

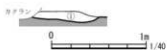
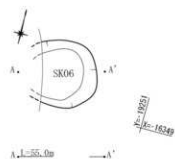
SK06 (第140図)

SK06は3425グリッドに位置している。西側が覆乱により破壊されているため正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約12cmを測る。平面形態は楕円形を呈するものと推定される。埋土は1層とした。

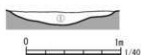
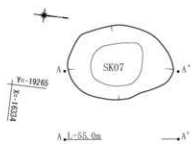
出土遺物は土師器が出土している。ここでは1点を図示した。649は土師器の杯である。底部は回転ヘラ切り後、雑なナデ。内面に煤が付着しており、赤彩されているように見える。胎土に雲母と思われる鉱物を含む。



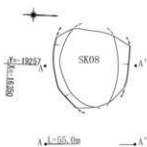
第139図 5区 SK05 遺構・出土遺物実測図



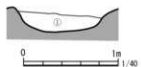
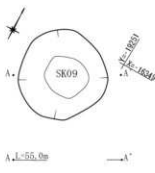
SK06
①層 2.0/4.2 褐色土 極細砂質シルト
炭化物・焼土は少ないが、全体的に散じる。



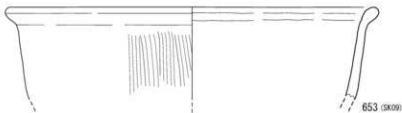
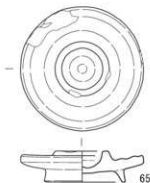
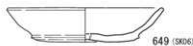
SK07
①層 2.0/3.1 黒褐色土 極細砂質シルト
2.5/3.1~4.1 黒褐色土 極細砂質シルトとのブロック状。
焼土ブロック極めて多く入る部分あり。



SK08
①層 2.0/3.2~4.2 黒褐色土 極細砂質シルト
カマドに使われるような粘土ブロックが散じる。



SK09
①層 2.0/3.1~3.2 褐色土 極細砂質シルト
炭化物・焼土多くないが、全体的に散じる。



第140図 5区 SK06・07・08・09 遺構・出土遺物実測図

SK07 (第140図)

SK07は3326グリッドに位置している。遺構の規模は長軸約1.12m、短軸約0.80m、検出面からの深さ約14cmを測る。平面形態は楕円形を呈する。埋土は1層とした。

出土遺物は、土師器や須恵器が出土している。ここでは土器2点を図示した。650は土師器の椀の小片である。高台は貼り付け高台。651は土師器の裏の口縁部破片。口縁部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリが施される。

SK08 (第140図)

SK08は3425グリッド、SI05の上面に位置している。西側と東側が攪乱により破壊されているため正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約15cmを測る。平面形態は楕円形を呈するものと推定される。埋土は1層とした。

出土遺物は、土師器が出土している。ここでは土器1点を図示した。652は土師器の托である。ほぼ完形。高台は貼り付け高台と思われる。内外面ともに全面的に赤彩されているが、上部の研磨された部分のみ赤彩されていない。したがって欠損部分を研磨し、再使用しているものと思われる。

SK09 (第140図)

SK09は3425グリッドに位置している。遺構の規模は径約0.96m、検出面からの深さ約26cmを測る。平面形態は円形を呈する。埋土は1層とした。

出土遺物は、土師器や須恵器が出土している。ここでは土器1点を図示した。653は土師器の鉢と思われる破片である。口縁部は短い。外面はハケメ調整、内面はナデが施される。

SK10 (第141図)

SK10は3624グリッドに位置している。SD02を破壊している。前後関係はSD02→SK10である。遺構の規模は長軸約1.56m、短軸約0.70m、検出面からの深さ約68cmを測る。平面形態は北東隅が張り出すややいびつな長方形を呈する。埋土は1層とした。西側が極端に深くなるが、本来の形なのか、上部から掘り込まれたものなのか、樹根等を掘り過ぎたものなのか解らない。出土遺物がないため、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

SK11 (第141図)

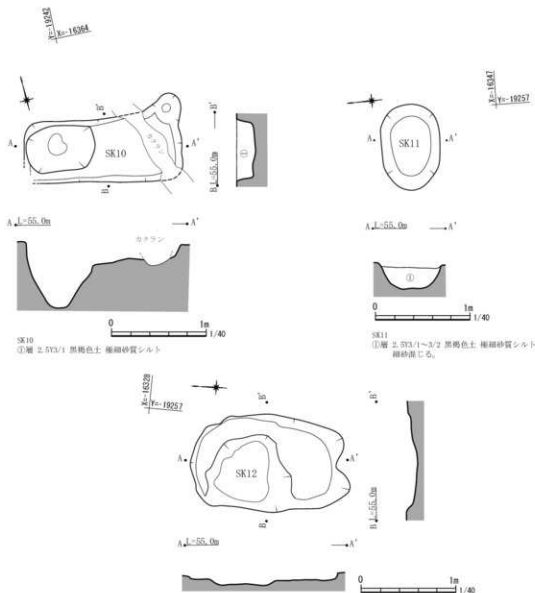
SK11は3425グリッドに位置している。遺構の規模は長軸約0.90m、短軸約0.63m、検出面からの深さ約26cmを測る。平面形態は楕円形を呈する。埋土は1層とした。出土遺物がないため、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

SK12 (第141図)

SK12は3225グリッドに位置している。遺構の規模は長軸約1.64m、短軸約1.04m、検出面からの深さ約12cmを測る。平面形態は楕円形を呈する。埋土は不明。底面はややいびつ。実測可能な遺物はないが、土師器の小片が少量出土していることから当該期の遺構とした。

SK13 (第142図)

SK13は3425グリッドに位置している。西側が攪乱により破壊されているため正確な大きさは解らない。



第141図 5区 SK10・11・12 遺構実測図

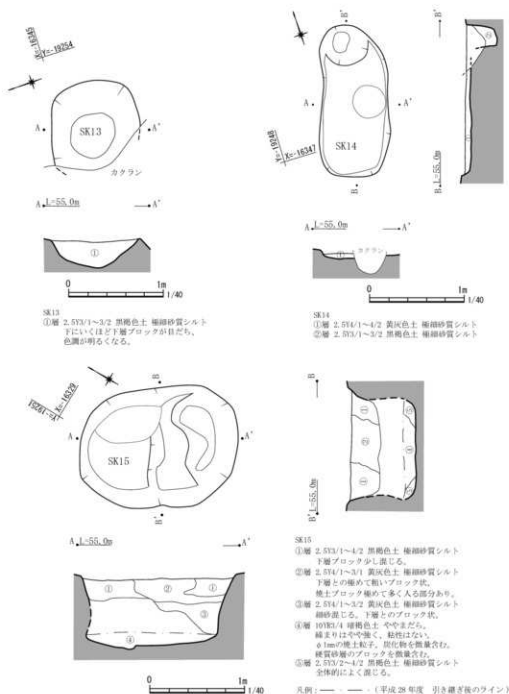
検出面からの深さは約32cmを測る。平面形態は楕円形を呈するものと推定される。埋土は1層とした。出土遺物がないため、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

SK14 (第142図)

SK14は3424グリッドに位置している。遺構の規模は長軸約1.60m、短軸約0.76m、検出面からの深さ約34cmを測る。平面形態は楕円形を呈する。埋土は2層とした。北側が極端に深くなるが、本来の形なのか、上部から掘り込まれたものなのか、樹根等を掘り過ぎたものなのか解らない。出土遺物は、土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器の小片が少量出土しているが、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

SK15 (第142図)

SK15は3225グリッドに位置している。遺構の規模は長軸約1.76m、短軸約1.32m、検出面からの深さ約78cmを測る。平面形態は楕円形を呈する。埋土は5層とした。平成28年度に調査を引き継いだとこ



第142図 5区 SK13・14・15遺構実測図

ろ、完掘されていなかったため、実測図を追加することとなった。したがって土層図に抜けが生じている。御容赦願いたい。

埋土からは骨片が出土しているが、時期を特定できる出土遺物はなかったため、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

SK16 (第143図)

SK16は3426・3425グリッドに位置している。遺構の規模は長軸約1.34m、短軸約1.18m、検出面からの深さ約29cmを測る。平面形態は楕円形を呈する。埋土は1層とした。出土遺物は、土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器の小片が出土しているため、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期

の遺構とした。

SK17 (第143図)

SK17は3425グリッドに位置している。SIO5・SIO6に破壊されている。前後関係はSK17→SIO5→SIO6である。また西側が調査区外に広がるため正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約28cmを測る。平面形態は楕円形を呈するものと推定される。埋土は1層とした。出土遺物がないため、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

SK18 (第143図)

SK18は3425グリッドに位置している。SK19に破壊されている。前後関係はSK18→SK19である。残存部分から遺構の規模は、長軸約0.90m、短軸約0.68m、検出面からの深さは約26cmを測る。平面形態は楕円形を呈するものと推定される。埋土は1層とした。出土遺物がないため、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

SK19 (第143図)

SK19は3425グリッドに位置している。SK18を破壊している。前後関係はSK18→SK19である。西側が攪乱により破壊されているため、正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約18cmを測る。平面形態は楕円形を呈するものと推定される。埋土は1層とした。出土遺物は、土師器・縄文土器の小片が出土しているため、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

SK20 (第143図)

SK20は3127グリッドに位置している。西側が調査区外に広がるため正確な大きさは解らない。検出面からの深さは約36cmを測る。平面形態は長楕円形を呈するものと推定される。埋土は1層とした。平成27年度5区調査担当者によると溝状遺構の可能性がある。出土遺物は、弥生土器・縄文土器の小片が出土しているが、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。

④溝状遺構 (第144図)

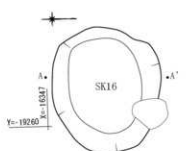
SD01 (第144図)

SD01は3226・3326・3325・3425・3524・3624グリッドに位置している。調査区を南東から北西方向に走る。遺構の規模は、最大幅約1.40m、検出面からの深さは約30cmを測る。埋土は3層とした。前述のとおり、本遺構の西側に竪穴建物群が分布し、ピット状の遺構は東側に分布することから区画溝の可能性はある。

SD02 (第144図)

SD02は3525・3625グリッドに位置している。調査区西側で南から北方向に走る。SIO1の一部を破壊し、SIO2に破壊されている。実測図をみても正確な重複関係が解らない遺構であり、前後関係は不明瞭な部分が残る。遺構の規模は、長さ約9.0m、最大幅約0.6m、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は1層とした。

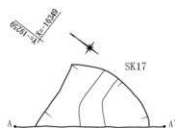
出土遺物は、土師器・縄文土器の小片が出土しているが、平成27年度5区調査担当者の所見を重視し、当該期の遺構とした。



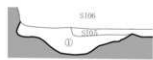
A' L=55.0m



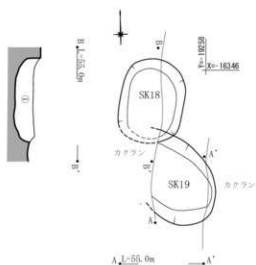
0 1m 1/40

SK16
①層 2.5Y3/2 黒褐色土 極細砂質シルト
全体的に粗い。

A' L=55.0m



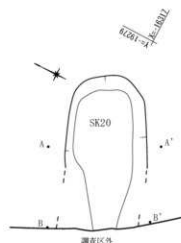
0 1m 1/40

SK17
①層 2.5Y3/2 黒褐色土~4/2 暗黄灰色土
2.5Y3/2 黒褐色土~4/2 暗黄灰色土 (やや粗い)
とのブロック状。下層の土が混じる。

A' L=55.0m



0 1m 1/40

SK18
①層 2.5Y3/2 黒褐色土 極細砂質シルト
全体的に非常に粗いブロック状。
下層の混じり少ない。SK19
①層 2.5Y3/2~4/2 黒褐色土 極細砂質シルト
炭化物・焼土・白色粘土が点々と混じる。
ブロック大きい。

A' L=55.0m



B' L=55.0m



0 1m 1/40

SK20
①層 2.5Y3/2~4/2 黒褐色土 極細砂質シルト 細砂状になる。
下層の混じり少ない。下層ブロック点々と入る。
暗色強い。

第143図 5区 SK16・17・18・19・20 遺構実測図

⑤遺構外出土遺物（第145図～第152図）

654は土師器の蓋の擬宝珠形つまみの小片。内外面ともに赤彩が施されている。655～663は土師器の杯。655は底部回転ヘラ切り後未調整。内外面に赤彩が施されている。656は体部外面下半に手持ちのヘラケズリが施されている。胎土には雲母と思われる鉱物を含む。内外面は赤彩。657は内面に、663は内外面ともに回転ヘラミガキが施されている。いずれも内面は赤彩。658は胎土に雲母と思われる鉱物を含む。内外面の赤彩は不明瞭。659は底部回転ヘラ切り後ナデ。内面は赤彩。胎土に雲母と思われる鉱物を含む。660は内外面赤彩。661は底部回転ヘラ切り後複雑ナデ。662は底部回転ヘラ切り後複雑ナデ。内外面に赤彩が施され、胎土に雲母と思われる鉱物を含む。664～667は土師器の杯。口縁部はほぼ直線的に開く。形態はほぼ同一。内外面ともに回転台を用いて成形していることがよくわかる資料。666の底部はヘラ切り後未調整、他は雑なナデ。668・672は土師器の杯。底部外面に墨書されているが判読はできない。

670・671は土師器の杯もしくは椀の口縁部破片。外面に墨書されているが判読できない。669は黒色土器の杯もしくは椀の口縁部破片。内面に黒化処理が施されている。いわゆる黒色土器A類。外面に墨書されているが判読できない。673は黒色土器の椀。高台は貼り付け高台。内面に黒化処理が施されている。674～681は土師器の椀。高台はいずれも貼り付け高台。678は内面に油煙がみられる。灯明皿としての使用が想定される。681の高台は長い。

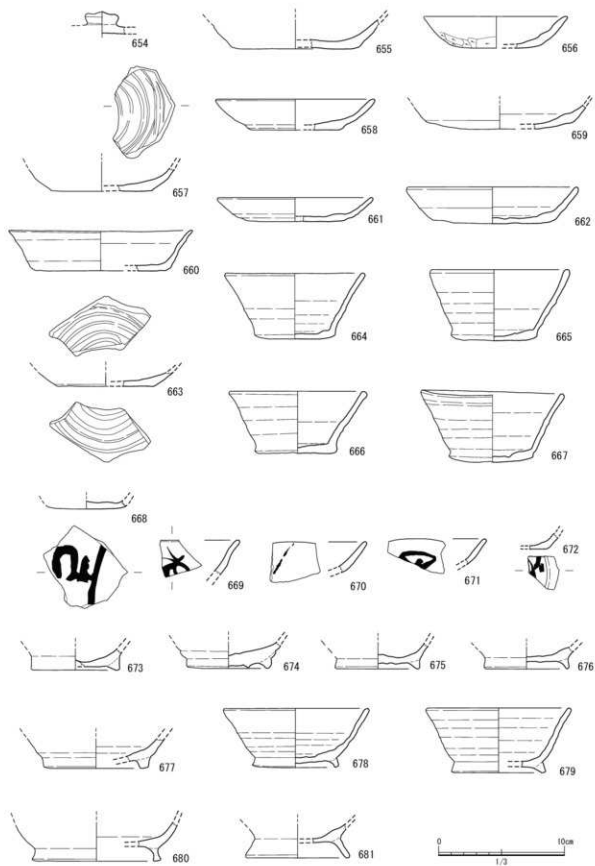
682は土師器の皿。底部は回転ヘラ切り後未調整。内外面に赤彩が施されている。684・685・686は土師器の鉢。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整、体部内面は横方向のヘラケズリが施されている。いずれも煤が付着している。686は胎土に角閃石を多く含む。683は土師器の小型の壺か。胴部上半はナデ、胴部内面下半は粗いヘラケズリ、胴部外面下半はヘラケズリが施されている。687・688は土師器の小型の甕と思われる。689～701は土師器の甕。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケメ調整、胴部内面はヘラケズリが施される。690・701の口縁部は屈曲気味に開きやや厚手。690の口縁部内面にハケメ調整か。702は土師器の甕か。外面は縦方向のハケメ調整が施されている。703も土師器の甕か。外面は横方向のハケメ調整が施される。704・705は土師器の甕。705の口縁部は屈曲気味に開く。706は土師器の甕の把手部である。内面には縦方向のヘラケズリが施される。708は土師器の甕の把手部の可能性がある。外面下半に煤が付着している。707は土製支脚もしくは、土師器の甕の棧かと思われる。全体はヘラケズリにより整えられている。胎土には雲母と思われる鉱物を含む。全体的に煤が付着している。709は移動式カマドの焚口部の底と思われる。内面は外面に比べて灰色に変色している。被熱によるものと推測される。

710～713は須恵器の蓋。711は天井部につまみが剥離した痕跡が残る。712は擬宝珠形つまみが付く。714～724は須恵器の杯である。底部は回転ヘラ切り後未調整、もしくは回転ヘラ切り後複雑ナデが施されている。725～736は須恵器の椀。高台はいずれも貼り付け高台。728・729の内面は磨減しており、転用皿として使用が推測される資料。730の高台先端には板状の圧痕が見られる。737・738は須恵器の皿。739・740は須恵器の壺。口縁部から肩部破片。740の胴部には内外面ともにタタキ目が明瞭に残る。

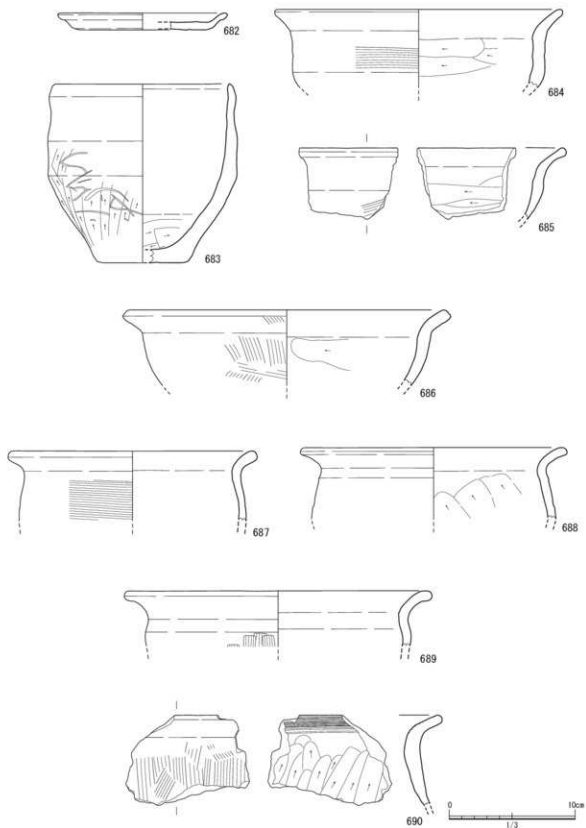
743・744は土製の紡錘車である。743は土器片を研磨しているようで、当初の調整痕がみられる。土師器の甕等の底部を再利用しているものと思われる。胎土に雲母と思われる鉱物を含む。744は半分が欠損していた。欠損部をみると孔に回転穿孔等による加工がみられないため、土器片を再利用しているわけではないようである。

88は石帯の破片と思われるが、欠損しているため特定できない。黒色で側面は丁寧に研磨され鏡面のようになっている一方、表面は未加工のようにみえる。また孔の部分が丸みを帯びていることから、未製品の可能性がある。

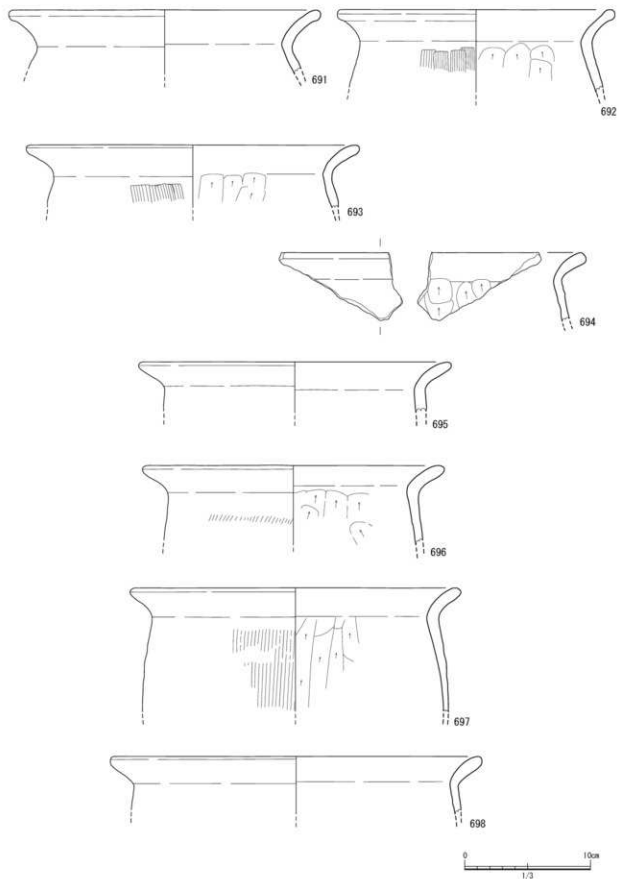
745は須恵質の蓋。擬宝珠形つまみが付く。746は須恵質の壺の口縁部。全体的に自然釉がかかる。



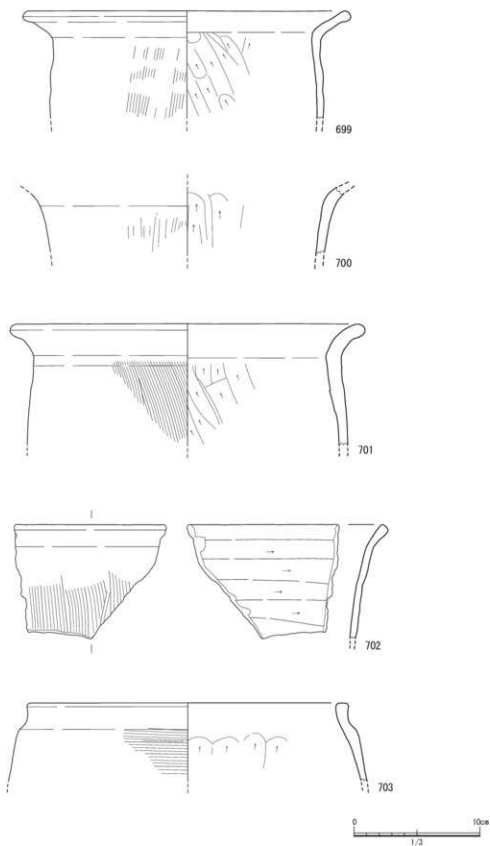
第145図 5区 遺構外出土遺物実測図(1)



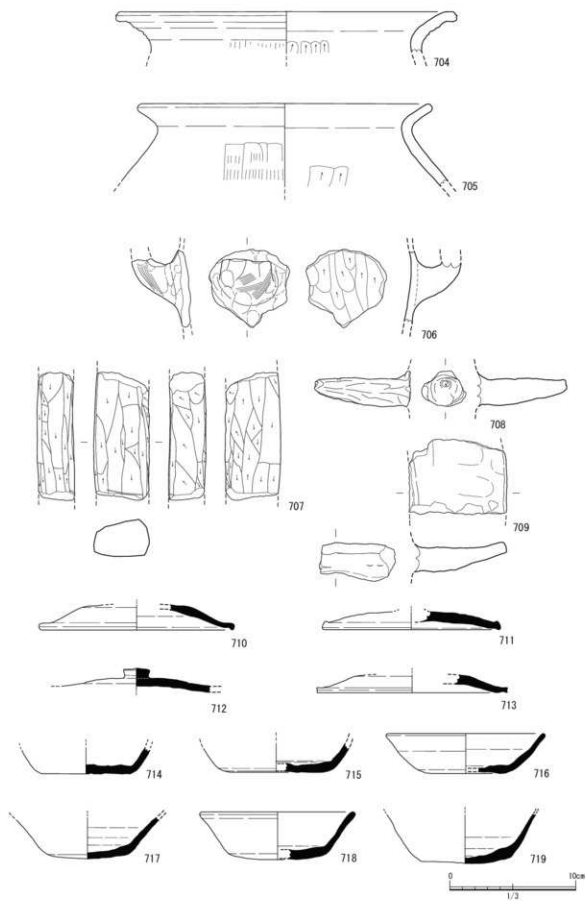
第146图 5区 遺構外出土遺物実測図(2)



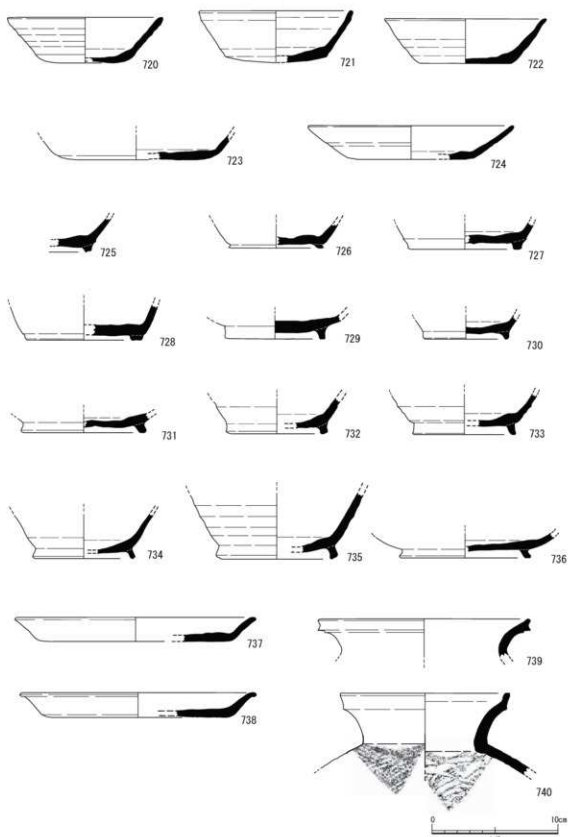
第147图 5区 遺構外出土遺物実測図(3)



第148图 5区 遺構外出土遺物実測図(4)



第149図 5区 遺構外出土遺物実測図(5)



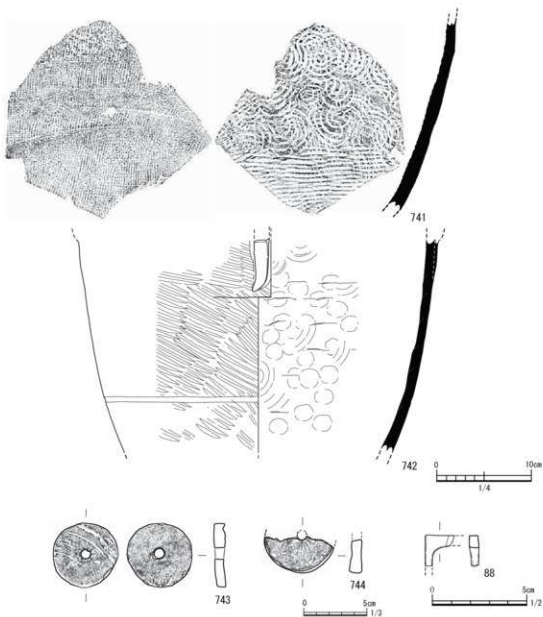
第150图 5区 遺構外出土遺物実測図(6)

747は須恵質の壺の口縁部から胴部破片。胴部外面に火漉。748・749は須恵質の壺の胴部破片。突帯に打ち欠いた痕跡がある。同一個体か。751は壺の胴部下半から底部破片。外面に自然釉がかかる。752は陶器の壺の破片。753は壺の胴部破片。胴部に緑色を帯びた灰色の自然釉がかかる。754は須恵質の底部破片。器種は不明。自然釉がかかる。755は石製の勾玉。やや緑色を帯びている。

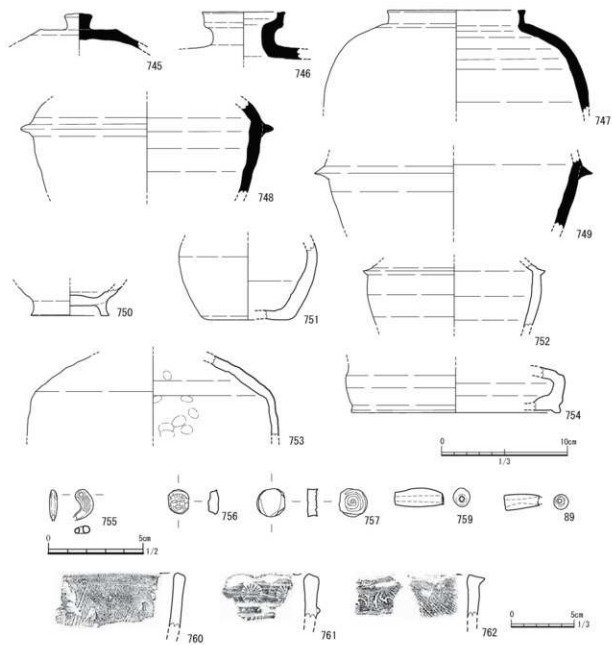
756・757はいわゆる泥面子である。756は芥子面で大黒天と思われる。757は面打で渦巻文様。裏面及び側面は赤彩されている。

759は土鍾、89は石鍾で、両側から穿孔されている。

760は瓦質の摺鉢である。761・762は瓦質の火鉢と思われる。761の外面には菊印花、762の外面には三巴文がみられる。



第151図 5区 遺構外出土遺物実測図(7)



第152图 5区 古代以降出土遗物实测图

表5 5区土器観察表-續文-

横須 番号	遺物 番号	種別	器種	出土地点		法 量(km)	調査			内面	外面	色調		胎土	備考	図録 番号
				クワット	層位		点上げ 番号	口徑	底徑			器高	内面			
19	1	縄文土器	鉢	SLO1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20
	2	縄文土器	鉢	SLO1	—	No.1822	—	—	—	ヨコナテ、ケズリ残ナデ	ケズリ残ナデ	—	—	—	—	
21	3	縄文土器	深鉢	SLO3	—	No.1823	—	—	—	ケズリ	ナデ	—	—	—	—	
22	4	縄文土器	鉢	SLO4	—	No.1809 No.1810	—	—	—	ケズリ残ナデ、ナデ	ナデ	—	—	—	—	
23	5	縄文土器	鉢	SLO4	—	No.1883	—	—	—	ケズリ残ナデ	ケズリ残ナデ	—	—	—	—	
24	6	縄文土器	浅鉢	SK34 PO70	3525	No.1884	—	—	—	ケズリ残ナデ	ケズリ残ナデ	—	—	—	—	
30	7	縄文土器	鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ、ケズリ残ナデ	ミガキ半残ナデ	—	—	—	—	
9	9	縄文土器	鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
10	10	縄文土器	鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
11	11	縄文土器	浅鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
12	12	縄文土器	浅鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
31	13	縄文土器	鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
14	14	縄文土器	浅鉢	PO65	3424	5-2層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
15	15	縄文土器	鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
16	16	縄文土器	把手	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
17	17	縄文土器	深鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
18	18	縄文土器	深鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
19	19	縄文土器	深鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
21	21	縄文土器	深鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
22	22	縄文土器	深鉢	PO65	3424	5-3層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
23	23	縄文土器	深鉢	PO65	3424	5-2層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
24	24	縄文土器	深鉢	PO65	3424	5-2層	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	—	—	

標記 番号	種別	図種	出土地点		法量(cm)			調査			色調		胎土	備考
			遺跡名	グリッド	層位	発土 番号	口徑	底径	高さ	外周	内周	内面		
25	縄文土器	鉢	—	3425	5-2層	—	—	—	三ガキナ、ナズリ兼ナガキナ、ナズリ	ナズリ兼ナガキナ	にぶい、赤褐色 5YR4/4	にぶい、赤褐色 5YR4/4	石炭、黒石、骨母	□胎部:白点文 □胎部:5字文、赤点文
26	縄文土器	深鉢	—	3326	5-2層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	黒褐色 2.5Y6/6	石炭、骨母、砂粒	□胎部:白点文、赤点文 □胎部:5字文、赤点文	
27	縄文土器	深鉢	—	3424	5-3層	—	—	ナズリ、ナズリ兼ナズリ	ナズリ	ナズリ	にぶい、黒褐色 10YR5/4	石炭、黒石、骨母	□胎部:白点文、赤点文 □胎部:5字文	
28	縄文土器	深鉢	—	3324	5-3層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	明赤褐色 5YR5/6	石炭、黒石、骨母	□胎部:白点文 □胎部:5字文	
29	縄文土器	深鉢	—	3424	5-3層	—	—	ナズリ、ナズリ兼ナズリ、ミガキ	ナズリ兼ナズリ、ミガキ	ナズリ兼ナズリ、ミガキ	にぶい、黒褐色 2.5YR6/3	石炭、黒石、骨母	□胎部:5字文	
30	縄文土器	深鉢	—	3326	5-2層	—	—	ナズリ兼ナズリ	ナズリ兼ナズリ	ナズリ兼ナズリ	にぶい、黒褐色 2.5YR6/3	石炭、黒石、骨母	□胎部:5字文	
31	縄文土器	鉢	—	3324	5-3層	0(6.8)	—	ヨコナズリ、ナズリ兼ナズリ	ヨコナズリ、ナズリ兼ナズリ	相模川産、ナズリ	にぶい、黒褐色 10YR6/2	石炭、黒石、砂粒	□胎部:白点文、5字文	
32	縄文土器	鉢	相模川産 3624	3323	—	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	にぶい、黄褐色 10YR6/4	黒石、骨母、砂粒	□胎部:白点文 □胎部:5字文	
33	縄文土器	鉢	—	3624	5-1,2層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	黒褐色 5YR4/6	石炭、砂粒	□胎部:赤点文 □胎部:5字文	
34	縄文土器	鉢	—	3425	—	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	にぶい、黒褐色 10YR5/2	黒石、角閃石、砂粒	□胎部:白点文 □胎部:5字文、斜行突眼	
35	縄文土器	深鉢	—	3127	6層	—	—	ミガキナ、ナズリ兼ナズリ、ナズリ	ナズリ兼ナズリ	ナズリ	にぶい、黒褐色 2.5YR4/4	石炭、黒石、骨母	□胎部:5字文、斜行突眼	
36	縄文土器	鉢	—	3323	5-3層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	黒褐色 2.5YR6/6	石炭、骨母	□胎部:白点文、斜行突眼	
37	縄文土器	深鉢	—	3624	5-1,2層	—	—	ナズリ、ナズリ兼ナズリ	ナズリ兼ナズリ	ナズリ	灰褐色 7.5YR4/2	石炭、骨母、砂粒	□胎部:白点文、斜行突眼	
38	縄文土器	深鉢	相模川産	—	5層	—	—	ナズリ、ナズリ兼ナズリ	ナズリ	ナズリ	灰褐色 10YR4/2	石炭、骨母、砂粒	□胎部:白点文、斜行突眼	
39	縄文土器	鉢	—	3324	5-2層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	灰褐色 2.5Y6/2	黒石、骨母、砂粒	□胎部:白点文、赤線	
40	縄文土器	深鉢	相模川産 3711	3623	4-5層	—	—	ナズリ兼ナズリ、ミガキナ	ナズリ兼ナズリ	ナズリ	明赤褐色 2.5YR5/6	石炭、黒石、砂粒	□胎部:白点文 □胎部:5字文	
41	縄文土器	深鉢	—	3323	5-3層	—	—	ナズリ兼ナズリ	ナズリ兼ナズリ	ナズリ	明赤褐色 2.5Y4/2	石炭、角閃石、砂粒	□胎部:白点文 □胎部:5字文	
42	縄文土器	深鉢	—	3323	5-3層	—	—	ナズリ兼ナズリ	ナズリ兼ナズリ	ナズリ	にぶい、黄褐色 2.5Y6/3	石炭、骨母、砂粒	□胎部:白点文 □胎部:5字文	
43	縄文土器	深鉢	—	3323	5層	—	—	ナズリ、ナズリ	ナズリ	ナズリ	にぶい、黒褐色 2.5Y7/4	石炭、骨母、砂粒	□胎部:白点文、赤線	
44	縄文土器	深鉢	—	3325	5-2層	—	—	ナズリ、ナズリ兼ナズリ	ナズリ兼ナズリ	ナズリ	黒褐色 2.5YR3/2	石炭、骨母、砂粒	□胎部:白点文、赤線	
45	縄文土器	深鉢	—	3325	5-3層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	赤褐色 10YR4/6	石炭、黒石、角閃石	□胎部:白点文、赤線	
46	縄文土器	浅鉢	—	3323	5-3層	1037	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	にぶい、黄褐色 10YR5/6	黒石、砂粒	□胎部:白点文、赤線	
47	縄文土器	鉢	—	3424	5-2層	—	—	ミガキナ	ミガキナ兼ナズリ	ミガキナ兼ナズリ	明赤褐色 7.5YR5/6	黒石、砂粒	□胎部:白点文、赤線	
48	縄文土器	深鉢	—	3126	5-2,3層 1層下	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	赤褐色 5YR4/8	黒石、砂粒	□胎部:白点文、赤線	
49	縄文土器	浅鉢	東沢原 相模川産	3423	5-2層	0(2.8)	—	ナズリ、ミガキナ、ナズリ兼ナズリ	ミガキナ、ナズリ兼ナズリ	ミガキナ、ナズリ兼ナズリ	赤褐色 10YR4/6	黒石、石炭、角閃石、骨母	□胎部:白点文、赤線	
50	縄文土器	鉢	—	3326	5-1層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	赤褐色 5YR4/8	にぶい、黄褐色 10YR6/3	石炭、黒石、骨母	□胎部:赤線あり

施設番号	種別	経緯	遺構	出土地点		法 量 (cm)	調査			色 調		土 質	備考	図説番号			
				遺構名	グリッド		層位	点上げ番号	口徑	経徑	長さ				外 周	内 周	外 面
39	98	縄文土器	深鉢	—	3423	5-3層	No.928	—	—	—	—	—	—	30	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文		
	99	縄文土器	深鉢	—	3523	5-2層	No.157	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文		
	100	縄文土器	深鉢	—	3326	5-1層 5-2層	No.638	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文		
	101	縄文土器	深鉢	—	3423	5-123層	No.52.55 3318.871	(23.5)	—	—	—	—	—	—	30	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	102	縄文土器	深鉢	—	3524	5-2層	No.179	—	—	—	—	—	—	—	30	石炭、角閃石、黒石、曹母、白磁文、突起あり	
	103	縄文土器	深鉢	—	3325	5-2層	No.609	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、角閃石、曹母、白磁文	
	104	縄文土器	深鉢	—	—	4.5層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、角閃石、曹母、白磁文 (方形溝)	
	105	縄文土器	深鉢	—	3525	5-3層	No.1163 1167	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	106	縄文土器	深鉢	—	3334 3325	5-3層下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	107	縄文土器	深鉢	—	3523	5層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	29	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文
40	108	縄文土器	深鉢	—	3523	5-3層	No.1058	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	109	縄文土器	深鉢	5076	3524	5-3層	No.1157 1273	—	—	—	—	—	—	—	—	30	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文
	110	縄文土器	深鉢	—	3523	5-3層	No.875 804	(31.0)	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	111	縄文土器	浅鉢	—	3423	5-1層	No.51	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	112	縄文土器	鉢	—	3526	5-1層	No.381	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	113	縄文土器	深鉢	—	3523	5-3層	No.804	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	114	縄文土器	深鉢	—	3523	5-2層	No.1029	—	—	—	—	—	—	—	—	29	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文
	115	縄文土器	深鉢	—	3326	5-2層	No.601	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	116	縄文土器	深鉢	—	3424	5-2層	No.103	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	117	縄文土器	深鉢	—	3424	5-2層	No.187	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
42	118	縄文土器	深鉢	—	3424	5-3層	No.1148 1149	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	119	縄文土器	深鉢	—	3426	5-2層	No.449	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	120	縄文土器	深鉢	—	3523	5-2層	No.97	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
	121	縄文土器	深鉢	—	3524	5-1層 5-2層	No.281	—	—	—	—	—	—	—	—	石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	
																石炭、黒石、曹母、角閃石、白磁文	

植物番号	種別	園種	出土地点		法量(cm)		調査			色調		動土	備考				
			遺跡名	グリッド	層位	番号	口径	底径	高さ	外周	内周			内面			
42	縄文土器	鉢	5076	3524	5-3層	No.1138	—	—	ケズリ残ナシ	外周	内周	石灰、赤石、角礫石、骨母	口筒部：白点文、縞刷線模あり 口筒部：白点文、縞心線模、縞文、白点文、白線文、縞文、斜線文、白点文、半灰、片灰文、口筒部：竹管				
														底径 259R42	外周 107R5/4	内周 107R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R43	外周 759R43	内周 759R43	内面 縞 759R43
														底径 107R42	外周 107R42	内周 107R42	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R3	外周 259R3	内周 259R3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R4	外周 259R4	内周 259R4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 107R7/6	外周 107R7/6	内周 107R7/6	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 107R7/6	外周 107R7/6	内周 107R7/6	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6	外周 259R6	内周 259R6	内面 縞 59R6
														底径 759R6/4	外周 759R6/4	内周 759R6/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/1	外周 259R5/1	内周 259R5/1	内面 縞 259R5/1
														底径 59R4	外周 59R4	内周 59R4	内面 縞 59R4
43	縄文土器	深鉢	3425	—	—	No.602	—	—	ケズリ残ナシ	外周	内周	石灰、赤石、角礫石、骨母	口筒部：白点文、縞刷線模あり 口筒部：白点文、縞心線模、縞文、白点文、白線文、縞文、斜線文、白点文、半灰、片灰文、口筒部：竹管				
														底径 259R3/2	外周 259R3/2	内周 259R3/2	内面 縞 759R4
														底径 107R5/2	外周 107R5/2	内周 107R5/2	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/4	外周 259R5/4	内周 259R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/3	外周 259R5/3	内周 259R5/3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6	外周 259R6	内周 259R6	内面 縞 259R6
														底径 259R5/4	外周 259R5/4	内周 259R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/3	外周 259R5/3	内周 259R5/3	内面 縞 259R5/3
														底径 259R4	外周 259R4	内周 259R4	内面 縞 759R4
														底径 107R6/3	外周 107R6/3	内周 107R6/3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6/4	外周 259R6/4	内周 259R6/4	内面 縞 259R6/4
														底径 107R7/6	外周 107R7/6	内周 107R7/6	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
44	縄文土器	深鉢	3423	—	—	No.1087	—	—	ケズリ残ナシ	外周	内周	石灰、赤石、角礫石、骨母	口筒部：白点文、縞刷線模あり 口筒部：白点文、縞心線模、縞文、白点文、白線文、縞文、斜線文、白点文、半灰、片灰文、口筒部：竹管				
														底径 259R3/2	外周 259R3/2	内周 259R3/2	内面 縞 759R4
														底径 107R5/2	外周 107R5/2	内周 107R5/2	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/4	外周 259R5/4	内周 259R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/3	外周 259R5/3	内周 259R5/3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6	外周 259R6	内周 259R6	内面 縞 259R6
														底径 259R5/4	外周 259R5/4	内周 259R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/3	外周 259R5/3	内周 259R5/3	内面 縞 259R5/3
														底径 259R4	外周 259R4	内周 259R4	内面 縞 759R4
														底径 107R6/3	外周 107R6/3	内周 107R6/3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6/4	外周 259R6/4	内周 259R6/4	内面 縞 259R6/4
														底径 107R7/6	外周 107R7/6	内周 107R7/6	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
45	縄文土器	深鉢	3423	—	—	No.1087	—	—	ケズリ残ナシ	外周	内周	石灰、赤石、角礫石、骨母	口筒部：白点文、縞刷線模あり 口筒部：白点文、縞心線模、縞文、白点文、白線文、縞文、斜線文、白点文、半灰、片灰文、口筒部：竹管				
														底径 259R3/2	外周 259R3/2	内周 259R3/2	内面 縞 759R4
														底径 107R5/2	外周 107R5/2	内周 107R5/2	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/4	外周 259R5/4	内周 259R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/3	外周 259R5/3	内周 259R5/3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6	外周 259R6	内周 259R6	内面 縞 259R6
														底径 259R5/4	外周 259R5/4	内周 259R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/3	外周 259R5/3	内周 259R5/3	内面 縞 259R5/3
														底径 259R4	外周 259R4	内周 259R4	内面 縞 759R4
														底径 107R6/3	外周 107R6/3	内周 107R6/3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6/4	外周 259R6/4	内周 259R6/4	内面 縞 259R6/4
														底径 107R7/6	外周 107R7/6	内周 107R7/6	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
46	縄文土器	深鉢	3425	—	—	No.967	—	—	ケズリ残ナシ	外周	内周	石灰、赤石、角礫石、骨母	口筒部：白点文、縞刷線模あり 口筒部：白点文、縞心線模、縞文、白点文、白線文、縞文、斜線文、白点文、半灰、片灰文、口筒部：竹管				
														底径 259R3/2	外周 259R3/2	内周 259R3/2	内面 縞 759R4
														底径 107R5/2	外周 107R5/2	内周 107R5/2	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/4	外周 259R5/4	内周 259R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/3	外周 259R5/3	内周 259R5/3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6	外周 259R6	内周 259R6	内面 縞 259R6
														底径 259R5/4	外周 259R5/4	内周 259R5/4	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R5/3	外周 259R5/3	内周 259R5/3	内面 縞 259R5/3
														底径 259R4	外周 259R4	内周 259R4	内面 縞 759R4
														底径 107R6/3	外周 107R6/3	内周 107R6/3	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母
														底径 259R6/4	外周 259R6/4	内周 259R6/4	内面 縞 259R6/4
														底径 107R7/6	外周 107R7/6	内周 107R7/6	内面 石灰、赤石、角礫石、骨母

遺跡番号	種別	種	遺跡名	出土地点		法 量 (cm)	調 製		色 調		土 質	備 考		
				ウインド	層位		外 置	内 置	外 置	内 置				
146	縄文土器	深鉢	—	3425	5-2層	No.307	—	ナテ	—	浅黄 2577/4	明赤褐 2577/6	石灰、砂粒	□陶器：ナテ口縁 □陶器：胎土質、白点文	
147	縄文土器	鉢	—	3426	5-2層	No.462	—	ナテ	—	浅黄 2577/4	深黄 2576/2	石灰、砂粒	□陶器～□陶器：白点文 □陶器～□陶器：白点文	
148	縄文土器	深鉢	—	3426	5-2層	No.451	—	ケズリ残ナテ	—	明赤 2578/5b	にぶい黄褐 10785/4	石灰、	□陶器～□陶器：白点文 □陶器～□陶器：白点文	
149	縄文土器	深鉢	—	3423	5-3層	No.744	—	ナテ、ケズリ残ナテ	—	橙 5786/8	橙 7378/66	石灰、黄母、黒石、	□陶器：白点文 内面：粘土残ナテ	
46	150	縄文土器	鉢	—	3426	5-2層	No.625	—	ケズリ残ナテ	—	橙 5786/6	黒石、角閃石	□陶器：白点文、□陶器：白点文 □陶器：白点文、□陶器：白点文	
151	縄文土器	深鉢	—	3426	5-2層	No.621	—	ケズリ残ナテ	—	相沢黄 2574/2	相沢 2574/4	石灰、	□陶器～□陶器：白点文	
152	縄文土器	深鉢	—	3426	5-2層	No.448	—	ケズリ残ナテ、ナテ	—	橙 10784/1	にぶい黄褐 10785/4	石灰、	□陶器～□陶器：白点文	
153	縄文土器	深鉢	—	3423	6層	No.1484	—	ナテ	—	深黄 2578/2	深黄 2576/2	石灰、黒石、	□陶器～□陶器：白点文	
154	縄文土器	深鉢	—	3423	—	—	—	ナテ、ケズリ残ナテ、ケズリ残ナテ、ミガキ、ナテ	—	相 75784/3	相 75784/4	石灰、黒石、	□陶器：胎土質、□陶器：胎土質 □陶器：胎土質、□陶器：胎土質	
155	縄文土器	深鉢	—	3425	5-1層	No.307	—	ケズリ残ナテ	—	黄褐 25783/2	黄 10784/4	石灰、	□陶器～□陶器：白点文	
156	縄文土器	深鉢	—	3425	5-1層	No.417	—	ナテ、ケズリ残ナテ	—	黄褐 25783/2	にぶい黄褐 5784/4	石灰、黒石、	□陶器：胎土質、□陶器：胎土質 □陶器：胎土質、□陶器：胎土質	
157	縄文土器	深鉢	—	3425	—	No.1897	—	ナテ、ケズリ残ナテ	—	黄褐 10783/2	にぶい黄褐 10785/4	石灰、	□陶器：白点文	
158	縄文土器	深鉢	—	—	4.5層	—	—	ナテ、ケズリ残ナテ	—	にぶい黄褐 10785/4	にぶい黄褐 10785/4	石灰、	□陶器：白点文	
47	159	縄文土器	深鉢	—	3425	5-2層	No.341	—	ケズリ残ナテ	—	浅黄 2577/3	にぶい黄褐 10785/3	石灰、	□陶器：白点文 □陶器：胎土質、□陶器：胎土質
160	縄文土器	深鉢	—	3126 3426	6層	—	—	ナテ	—	黄 10782/1	浅黄 2577/3	石灰、角閃石、砂粒	□陶器：白点文、□陶器：胎土質 □陶器：白点文、□陶器：胎土質	
161	縄文土器	鉢	—	3425 3426	5-2層	No.312	—	ナテ	—	相 10783/3	橙 5786/6	石灰、角閃石、砂粒、	□陶器：胎土質、□陶器：胎土質 □陶器：胎土質、□陶器：胎土質	
162	縄文土器	浅鉢?	—	3426	5-1層	No.474	—	ナテ	—	にぶい黄褐 10785/3	黄 2578/3	石灰、	□陶器～□陶器：白点文、 □陶器～□陶器：白点文	
163	縄文土器	深鉢	5070	3423	5-3層	No.922	—	ナテ、ミガキ、ケズリ残ナテ	—	にぶい黄褐 10785/4	黄 2578/3	石灰、	□陶器～□陶器：白点文、 □陶器～□陶器：白点文	
164	縄文土器	鉢	—	3423	5-3層	No.886	—	ナテ、ミガキ、ケズリ残ナテ	—	明赤褐 5784/3	明赤褐 5785/6	石灰、	□陶器：胎土質、□陶器：胎土質 □陶器：胎土質、□陶器：胎土質	
165	縄文土器	深鉢	—	3426	5-1層	No.300	—	ケズリ	—	にぶい黄褐 1077/4	浅黄 2577/4	石灰、	□陶器～□陶器：白点文	
166	縄文土器	鉢?	SK11	3425	4-2層	—	—	ナテ	—	明赤褐 5785/6	明赤褐 5785/6	石灰、	□陶器～□陶器：白点文	
167	縄文土器	鉢	—	3423	5層	—	—	ナテ、ミガキ、ケズリ残ナテ	—	にぶい黄褐 5784/4	にぶい黄褐 5785/4	石灰、	□陶器～□陶器：白点文	
168	縄文土器	深鉢	—	3424	5-2層	No.225	—	ナテ、ミガキ、ケズリ残ナテ	—	相 73784/3	明赤褐 5785/6	石灰、	□陶器～□陶器：白点文	
169	縄文土器	深鉢	—	3423 3424	5-2層 5-12層	No.1031	—	ケズリ残ナテ、ナテ	—	にぶい黄 73784/4	明赤褐 5785/6 にぶい黄 73784/4	石灰、	□陶器～□陶器：白点文、 □陶器～□陶器：白点文、 内面：粘土土質	

標記番号	種別	種	遺跡名	出土地点		法	法	遺	調査			色	土	備考	
				グリッド	層位				口徑	径	厚				内
51	194	縄文土器	鉢	3326	5-2層	No.526 503	-	-	ナギ、ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	内	外	内	石灰、黒石、長石、赤土、角閃石、長石、雲母、砂粒	口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	195	縄文土器	鉢	3323	5-1層	No.21 1677	-	-	ナギ、ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	赤土、角閃石、長石、雲母、砂粒	口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	196	縄文土器	鉢	3423	5-1層	-	-	-	ナギ	ナ	ナ	外	内	赤土、角閃石	口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	197	縄文土器	深鉢	3326 3325	5-1層 4-1層 4-5層	No.436 433 423	(287)	-	ミカキ、ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	198	縄文土器	深鉢	3326	5-2層 4-5層	No.602	(316)	-	ナギ、ミカキ、ケズリ 残ナリ、ミカキ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
52	199	縄文土器	深鉢	3325	5-1層	No.366 364	-	-	ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	200	縄文土器	深鉢	3323	5層+7層 5-3層	No.1065	-	-	ナギ、ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	201	縄文土器	深鉢	3324	5-2層	No.497	-	-	ミカキ、ケズリ残ナリ、 ミカキ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	202	縄文土器	深鉢	3325	5-1層	No.421	-	-	ナギ、ケズリ	ナ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	203	縄文土器	深鉢	-	5層	-	-	-	ナギ、ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	204	縄文土器	深鉢	3325	4-5層 5-2層	No.667	(291)	-	ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	205	縄文土器	鉢	3424	5-3層	No.985	-	-	ケズリ残ナリ、ミカキ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	206	縄文土器	鉢	3323	5-3層	No.785 808/809	(190)	-	ケズリ残ナリ、ミカキ	ナ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	207	縄文土器	深鉢	-	5層	-	-	-	ナギ、ケズリ残ナリ、 ミカキ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	208	縄文土器	鉢	3425	5-2層	No.287	-	-	ナギ、ケズリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	209	縄文土器	深鉢	3324	5-2層	No.516	-	-	ナギ、ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	210	縄文土器	深鉢	3327	-	No.1782 1821 1779	(380)	-	ナギ、ナギ、ナギ、ナギ	ナ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	211	縄文土器	深鉢	3326	5-1層	No.382	-	-	ナギ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	212	縄文土器	深鉢	3424	5-2層 4-1層	No.14	(237)	-	ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
	213	縄文土器	深鉢	3423	5-1層	-	-	-	ケズリ残ナリ	ナ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり
214	縄文土器	鉢	3324	5-1層	No.1279	-	-	ミカキ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり	
215	縄文土器	深鉢	3323	5-3層	No.1097 972	-	-	ケズリ残ナリ	ケズリ残ナリ	ナ	内	外	石灰、黒石、長石、雲母、砂粒	口部部：一部粘土層を2本 層も含むわがた波状の突起状 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり 口部部：白濁文、突起あり	

標記 番号	種別	器種	出土地点		法量 (cm)		調査			色調		胎土	備考		
			遺跡名	位置 ・点上げ 番号	口径	口径	高さ	内径	外径	内径	外径				
55	239	縄文土器 鉢	—	3325 5-2層	—	—	ナテ	ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	初目		
	240	縄文土器 深鉢	—	3524 5-2層	No.946	14.0	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	ナテ	縄75YR6/6 黒縄25YR3/1	縄75YR6/6 黒縄25YR6/4	石灰、角閃石、長石、 磁石、赤石、角閃石、 磁石	底部・胎骨兼骨髄、外壁に 腐付、内面に灰層		
	241	縄文土器 深鉢 (底部)	西縁 1/2片	—	5-3層	(14.9)	ケズリ兼ナテ	ケズリ兼ナテ	ナテ、胎面任直	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石、 磁石	底部・胎骨兼骨髄 内面に灰層	
	242	縄文土器 深鉢	—	3323 5-3層	No.1104	11.0	ケズリ兼ナテ、胎面任直	ケズリ兼ナテ、胎面任直	ナテ、胎面任直	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、角閃石、磁石	押除文、粘土層み上げ層	
	243	縄文土器 鉢	—	3325 5-2層	No.610	—	ナテ、ミナギ	ナテ、ミナギ	ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	赤石、石灰	—	
	244	縄文土器 鉢	—	3326 5-2層 3層下	No.658	(9.4)	ケズリ	ケズリ	ミナギ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石	層に灰層	
	245	縄文土器 深鉢	—	3325 5-3層	No.1240	(14.4)	ナテ	ナテ	ナテ	赤10R4/6・に赤2 赤縄25YR4/4	赤10R4/6・に赤2 赤縄25YR4/4	石灰、赤石、磁石、 角閃石	凹縁文、外壁に赤土層み 上げ		
	246	縄文土器 鉢	—	—	埋土1層	(11.1)	ナテ	ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	底部・胎骨兼骨髄		
	247	縄文土器 深鉢	—	3424 5-3層	No.1153	(12.9)	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	ナテ	ナテ	赤縄5YR4/8	赤縄5YR4/8	石灰、赤石、角閃石	底部・胎骨兼骨髄	
	248	縄文土器 深鉢	—	3423 5-1層	No.6	(13.6)	ケズリ兼ナテ兼ナテ、 ナテ	ケズリ兼ナテ兼ナテ、 ナテ	ナテ	ナテ	赤縄5YR4/8	赤縄5YR4/8	石灰、赤石、磁石	底部・胎骨兼骨髄、粘土層 み上げ	
	249	縄文土器 深鉢 (底部)	—	3127 3128	No.62	11.8	ケズリ兼ナテ、ヨコナ テ、胎面任直	ケズリ兼ナテ、ヨコナ テ、胎面任直	ナテ、胎面任直	胎面縄10YR6/6	胎面縄10YR6/6	石灰、赤石、角閃石、 磁石	底部・胎骨兼骨髄、黒新直	—	
	250	縄文土器 鉢	—	3425 5-2層	No.301	(12.3)	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	ナテ、胎面任直	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	底部・胎骨兼骨髄	
	251	縄文土器 鉢	—	3326 5-2層	No.301	—	ナテ	ナテ	ナテ	縄25Y7/4	明赤縄25Y6/6	赤石、石灰、赤石、 磁石	底部・胎骨兼骨髄		
	56	252	縄文土器 深鉢	—	3425 5-3層	No.1188	13.1	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	縄5YR6/6	縄5YR6/6	石灰、赤石、角閃石	底部・胎骨兼骨髄の上に乗 り、外壁に灰層	
		253	縄文土器 深鉢	—	—	4.5層	(12.6)	ケズリ兼ナテ、ミナギ	ケズリ兼ナテ、ミナギ	ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	底部・胎骨兼骨髄、内外面 に腐付
		254	縄文土器 鉢	—	3425 3層	No.61	(10.7)	ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	底部・胎骨兼骨髄
		255	縄文土器 深鉢	—	3423 5-2層	—	(14.2)	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	ナテ	ナテ	赤縄10YR6/2 縄75YR6/6	赤石、石灰、赤石、 磁石	底部・胎骨兼骨髄	
		256	縄文土器 深鉢 (底部)	—	3424 5-3層	—	14.6	ケズリ兼ナテ、ミナギ	ケズリ兼ナテ、ミナギ	ナテ	ナテ	明赤縄5YR5/6 縄75YR6/6	明赤縄5YR5/6 縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石、 磁石	—
		257	縄文土器 深鉢 (底部)	—	—	4-1層	—	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	胎面加部任直
		258	縄文土器 深鉢	—	3326 5-2層	No.527	(10.2)	ケズリ兼ナテ	ケズリ兼ナテ	ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	底部・木の炭任直
259		縄文土器 深鉢 (底部)	—	3323 5層	—	(14.0)	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	ナテ、胎面任直	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	底部・木の炭任直 穿孔(1ヶ所)	
260		縄文土器 深鉢	—	3326 5-2層	No.635	(11.8)	ケズリ兼ナテ、ナテ	ケズリ兼ナテ、ナテ	ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	赤石、石灰	胎面	
261		縄文土器 鉢	—	3325 5-1層 3326 5-2層	No.458 631/664	(13.6)	—	—	胎面：ナテ	胎面：ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	赤石、磁石	内面に白粉任直(二枚貝 の腐付)	
57	262	縄文土器 深鉢	—	3426 5-2層	No.291	(12.4)	ケズリ兼ナテ	ケズリ兼ナテ	胎面任直	胎面任直	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	底部・胎骨兼骨髄	
	263	縄文土器 深鉢	—	—	No.112	(12.8)	ケズリ兼ナテ	ケズリ兼ナテ	胎面任直	胎面任直	明赤縄25YR5/6	明赤縄25YR5/6	石灰、赤石、角閃石	底部・胎骨兼骨髄	
	264	縄文土器 深鉢	—	—	No.1665	(12.6)	ケズリ兼ナテ	ケズリ兼ナテ	ナテ	ナテ	縄75YR6/6	縄75YR6/6	石灰、赤石、角閃石	胎面に土による点状文	

標記 番号	建物 番号	種別	図種	出土地点		法量(cm)		調査			土質	備考	図面 番号		
				遺跡名	グリッド	層位	発見 番号	口徑	深径	高さ				外周	内周
57	265	縄文土器	深鉢	—	3326	5-1層 5-2層	No.545	—	(11.6)	—	ケズリ後ナズ、ミガキ、 ナズ	ケズリ後ナズ、ミガキ、 ナズ	石炭、赤石、角閃石、 燧石	内面塗布に指頭瓦	—
	266	縄文土器	深鉢	—	3624	5-1層 5-2層	No.102	—	11.4	—	ケズリ後ナズ、指頭瓦 底	ケズリ後ナズ、指頭瓦 底	赤石、角閃石、砂粒	粘土層から上り直	43
	267	縄文土器	深鉢	—	3336	5-1層 5-2層	No.622 725	—	—	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	石炭、赤石、角閃石、 燧石	粘土層から上り直	45
	268	縄文土器	深鉢	—	3622	—	—	—	(13.2)	—	ケズリ後ミガキ、指頭 瓦	ケズリ後ミガキ、指頭 瓦	石炭、燧石	—	44
58	269	縄文土器	深鉢	—	—	5-2層 5-3層	No.495	—	(11.2)	—	ケズリ、ナズ	ケズリ、ナズ	石炭、赤石、 角閃石、燧石	一面白成	42
	270	縄文土器	深鉢	—	—	—	No.855	—	12.9	—	ケズリ、ナズ	ケズリ、ナズ	石炭、赤石	—	—
	271	縄文土器	深鉢	—	3325	5-2.3層 3層	—	—	(14.2)	—	ケズリ、ナズ、指頭瓦 底	ケズリ、ナズ、指頭瓦 底	石炭、赤石、角閃石、 燧石	—	44
	272	縄文土器	深鉢	—	3323	5-3層	No.783	—	(11.4)	—	ケズリ、ナズ、指頭瓦 底	ケズリ、ナズ、指頭瓦 底	石炭、赤石、角閃石	—	—
	273	縄文土器	台付鉢	—	3426	5-1層	No.398	—	8.9	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	燧石、赤石、 角閃石	粘土層	—
	274	縄文土器	台付鉢	—	3424	—	No.192	—	(10.6)	—	ヘラケズリ、ナズ	ヘラケズリ、ナズ	赤石、燧石、 角閃石	—	—
	275	縄文土器	台付鉢	—	3324	5-1層	No.352	—	(9.8)	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	石炭、赤石、角閃石、 燧石	通かしあり	45
	276	縄文土器	台付鉢?	—	—	4-5層	—	—	(12.6)	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	燧石、赤石、 角閃石	—	—
	277	縄文土器	台付鉢	—	—	4-1層 5-3層 1層下	No.942 943	—	(11.6)	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	燧石、赤石、 角閃石	—	—
	278	縄文土器	台付鉢	—	3624	5-1.2.3層	—	—	(11.2)	—	ケズリ後ナズ、指頭瓦 底	ケズリ後ナズ、指頭瓦 底	石炭、砂粒	—	—
59	279	縄文土器	台付鉢	—	—	5層	—	—	(13.2)	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	石炭、砂粒	—	—
	280	縄文土器	深鉢	—	—	4.5層	—	—	(11.2)	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	赤石、角閃石	—	—
	281	縄文土器	深鉢	—	—	5-1層 5-2層	No.28	—	(14.0)	—	ケズリ、ナズ	ケズリ、ナズ	白色粒、角閃石	胴白の産地に任直あり	—
	282	縄文土器	深鉢	—	—	—	No.822	—	11.6	—	ケズリ	ケズリ	石炭、赤石、角閃石	—	—
	283	縄文土器	不明	東西 1.5分	3323 3423	5層 5-2.3層	—	—	—	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	石炭、赤石、角閃石、 燧石	胴面に有孔(1.3×0.5)、全体 向に付着	—
	284	縄文土器	鉢	—	—	4-1層	—	—	—	—	ミガキナズ、ミガキ後ナズ	ミガキナズ、ミガキ後ナズ	石炭、砂粒	口縁部に付着、外壁に直 付着	—
	285	縄文土器	鉢	—	3325	5-2層	No.540	—	—	—	指頭瓦、ナズ、蓋合	指頭瓦、ナズ、蓋合	石炭、角閃石、 燧石	—	45
	286	縄文土器	深鉢	—	3325	6層	—	—	—	—	指頭瓦、ナズ、ケズリ、 指頭瓦	指頭瓦、ナズ、ケズリ、 指頭瓦	赤石、角閃石、 燧石	—	—
	287	縄文土器	深鉢	—	—	5-3層	No.862	—	—	—	ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	赤石、燧石、 角閃石	—	—
	288	縄文土器	鉢	—	3323	5-2層	No.1023 1026	—	—	—	ナズ、ケズリ後ナズ	ケズリ後ナズ	石炭、角閃石、燧石、 燧石	口縁部、深径あり、胴手尾 は、口縁部、粘土層から上り 直	—
289	縄文土器	浅鉢	—	3425	5-3層	No.1048	—	(16.8)	—	指頭瓦	指頭瓦	石炭、赤石、燧石	口縁部、深径あり、胴手尾 は、口縁部、粘土層から上り 直	—	

標記 番号	種別	器種	遺跡名	出土地点		法 量 (cm)	調査			色調		胎土	備考
				グロット	層位		口徑	口径	高さ	外周	内周		
60	290	縄文土器	鉢	325	5-12層 No.279 5-3層	1168	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、角閃石、長石、 雲母	口唇部：白点文、縦状突起あり
	291	縄文土器	深鉢	325	5-3層	-	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、角閃石、長石、 雲母	口唇部：一部突起あり 口唇部：粘土層の上より 剥き出し、外周に深凹 溝あり
	292	縄文土器	深鉢	-	5-3層	No.856	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、角閃石、砂粒	口唇部：一部突起あり、凹 溝あり
	293	縄文土器	深鉢	-	層土1層 5-3層	No.1540 1146	06.80	-	-	黒褐色	黒褐色	長石、石炭、雲母、 砂粒	口唇部：白点文
	294	縄文土器	深鉢	323	層土1層 5-3層	No.935	03.4	-	-	黒褐色	黒褐色	長石、石炭、角閃石、 雲母、砂粒	口唇部：白点文
	295	縄文土器	深鉢	325	5-2層	No.563	-	-	-	黒褐色	黒褐色	角閃石、長石、雲母、 砂粒	口唇部：白点文
	296	縄文土器	深鉢	324	5-1層	No.1085	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 角閃石	口唇部：白点文、口縁部：粘 土層か上げ、縁部部に凹 みあり
	297	縄文土器	深鉢	3425	-	No.845	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、角閃石、砂粒	口唇部：凹状突起あり、凹 溝あり
	298	縄文土器	鉢	323	5-2層	No.71 72	21.0	-	-	黒褐色	黒褐色	角閃石、白色粒	-
	299	縄文土器	深鉢	324	5層	-	18.0	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 砂粒	-
	300	縄文土器	浅鉢	326	5-1層	-	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 砂粒	-
	301	縄文土器	浅鉢	323	5-1層	No.1679	18.2	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 砂粒	-
61	302	縄文土器	深鉢	323	5-1層	No.1679	18.2	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 砂粒	-
	303	縄文土器	深鉢	326	5-1層	-	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 砂粒	口唇部：白点文、粘土貼付
	304	縄文土器	浅鉢	326	5-3層	No.718	19.5	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、角閃石、 雲母	口唇部：赤褐色口縁部 口唇部：白点文、内外面深 凹溝、内面に粘土層 付着
	305	縄文土器	浅鉢	326	5-3層	No.718	19.5	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、角閃石、 雲母	口唇部：白点文、内外面深 凹溝、内面に粘土層 付着
	306	縄文土器	鉢	326	5-1層	No.442	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、雲母、砂粒	口唇部：白点文
	307	縄文土器	浅鉢	-	5-3層	No.1120 1132	16.7	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 角閃石	口唇部：白点文 口唇部：粘土層のみ上げ
	308	縄文土器	鉢	3125	6層	No.1727 1736	17.0	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 角閃石	口唇部：白点文、内面の口 縁付部に深凹溝あり
	309	縄文土器	鉢	326	5-2層	No.571	17.3	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 砂粒	口唇部：白点文
	310	縄文土器	浅鉢	3225 326	5-2層 5-3層	No.1198 606	14.1	9.6	(9.1)	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 砂粒	口唇部：竹管文(窪みの先端 より竹管の工具の跡) 口唇部：粘土層のみ上げ
	311	縄文土器	鉢	324	5層	-	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、角閃石、 雲母	口唇部：白点文、粘土貼付 口唇部：白点文、竹管文 口唇部：粘土層
	312	縄文土器	深鉢	3126	6層	No.1759 1758	-	-	-	黒褐色	黒褐色	角閃石、砂粒	口唇部：白点文 口唇部：粘土層あり
	62	306	縄文土器	鉢	326	5-1層	No.442	-	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、雲母、砂粒
307		縄文土器	浅鉢	-	5-3層	No.1120 1132	16.7	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 角閃石	口唇部：白点文 口唇部：粘土層のみ上げ
63	308	縄文土器	鉢	3125	6層	No.1727 1736	17.0	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 角閃石	口唇部：白点文、内面の口 縁付部に深凹溝あり
	309	縄文土器	鉢	326	5-2層	No.571	17.3	-	-	黒褐色	黒褐色	石炭、長石、雲母、 砂粒	口唇部：白点文

標記 番号	遺物 番号	種別	図種	出土地点		法量(cm)			調整			色調			胎土	備考	図説 番号
				遺物名	グリッド	層位	発土 番号	口徑	底径	高さ	外周	内周	内面	外面			
364	縄文土器	深鉢	918	—	埋1層	—	—	—	ナブ、ミガキ	ナブ	ミガキ、ナブ	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	角閃石、白色粒	同層位所在遺文、土層	48	
365	縄文土器	深鉢	—	3523	—	—	—	—	—	—	ミガキ、赤色粒	にぶい黄褐色 7.5YR7/4	にぶい黄褐色 7.5YR7/3	角閃石、赤石	埋込縄文(同層位所在遺文、土層)		
366	縄文土器	深鉢	—	3524	—	—	—	—	—	—	ナブ	黒褐色 7.5YR3/2	黒褐色 7.5YR4/3	白色粒、赤色粒	同層位所在遺文、土層		
367	縄文土器	深鉢	—	3524	埋土2層	—	—	—	ナブ	ミガキ	赤褐色 2.5YR4/8	赤褐色 2.5YR5/6	白色粒、赤石、黒石	同点、土層	—		
368	縄文土器	深鉢	—	3524	3層下	—	—	—	ミガキ	条線のミガキ	黒褐色 2.5Y3/2	黒褐色 2.5Y4/2	赤石、黒石、角閃石、赤石、白色粒	同層位、土層	48		
369	縄文土器	深鉢	—	3524	4-1層 3層上	—	—	—	ミガキ	ナブ	民衆層 2.5Y5/2	民衆層 2.5Y5/2	白色粒	同層位所在遺文(同層位所在遺文、土層)	49		
370	縄文土器	深鉢	—	3623	4-1層	—	4.9	—	ミガキ	指頭状瓦、ナブ	民衆層 10YR5/2	埋込 10YR4/1	角閃石、白色粒	埋込縄文(同層位所在遺文、土層)	—		
371	縄文土器	深鉢	—	3425	4-1層	—	—	—	ミガキ	ナブ	にぶい黄褐色 10YR6/4	明赤褐色 2.5YR5/6	角閃石、赤石、黒石、白色粒	同層位、赤石、口縁、縄文、土層	—		
372	縄文土器	深鉢	—	3425	3層	—	—	—	ミガキ、接合痕	ミガキ	黒褐色 2.5Y7/6	明赤褐色 10YR7/6	角閃石、赤石、石、白色粒	同層位、赤石、口縁、縄文、土層	—		
373	縄文土器	深鉢	—	3524	3層下	—	(29.0)	—	ミガキ	ミガキ	明赤褐色 2.5Y7/6	明赤褐色 2.5Y7/6	角閃石、赤石	同層位、赤石、口縁、縄文、土層	50		
374	縄文土器	深鉢	—	3126	4-1層	—	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 2.5YR4/4	明赤褐色 2.5YR3/3	角閃石、白色粒	同層位、赤石、口縁、縄文、土層	—		
375	縄文土器	深鉢	—	—	1~3層 3層上	—	—	—	ミガキ	ミガキ	民衆層褐色 10YR4/2	民衆層 10YR4/1	角閃石、白色粒	同層位、赤石、口縁、縄文、土層	—		
376	縄文土器	深鉢	—	3524	4-1層 4-2.3層	—	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	角閃石、赤石	同層位、赤石、口縁、縄文、土層	—		
377	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	—	—	ナズリ、ナブ	ナズリ、ナブ	黒褐色 2.5Y3/1	相沢黄 2.5Y4/2	角閃石、赤石	同層位、縄文、刺突列点、土層	51		
378	縄文土器	深鉢	—	3524	4-2層	—	—	—	ミガキ	ミガキ	民衆層 2.5Y6/2	相沢黄 10YR3/1	角閃石、赤石	同点、刺突列点、縄文、土層	50		
379	縄文土器	深鉢	—	3425	4-1層	—	—	—	—	—	黒褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR4/1	赤石、白色粒、白色粒	同層位、縄文、刺突列点、土層	—		
380	縄文土器	深鉢	—	3425	4-1層	—	—	—	ミガキ	ナブ、ミガキ	黒褐色 10YR3/1	にぶい黄褐色 10YR6/4	白色粒、小石	同層位、刺突列点、縄文、土層	51		
381	縄文土器	深鉢	—	3425	3層 1~3層	—	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	角閃石、赤石、白色粒	同層位、刺突列点、縄文、土層	50		
382	縄文土器	深鉢	—	3623	3層	—	—	—	ミガキ	ナブ	黒褐色 10YR3/1	にぶい黄褐色 10YR4/1	角閃石、赤石、白色粒	同層位、縄文、土層	51		
383	縄文土器	深鉢	—	3425	4-1層	—	—	—	ミガキ	ナブ	民衆層 2.5YR4/2	黒褐色 7.5YR3/3	角閃石、赤石、白色粒	同層位、刺突列点、縄文、土層	51		
384	縄文土器	深鉢	—	3523	3層	—	—	—	ミガキ	ミガキ	黒褐色 7.5YR3/1	黒褐色 7.5YR3/1	赤石、白色粒	同層位、縄文、刺突列点、土層	50		
385	縄文土器	深鉢	—	3523	3層	—	—	—	ミガキ	ナブ	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	赤石、赤色粒	刺突列点、縄文、土層	51		
386	縄文土器	深鉢	—	3524	4-2.3層	—	(30.4)	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 10YR6/4	明赤褐色 10YR6/6	赤石、角閃石、白色粒	赤石、口縁、同層位所在遺文(同層位所在遺文、土層)	50		
387	縄文土器	深鉢	—	3425	4-1層	—	—	—	ミガキ、接合痕	ミガキ	にぶい黄褐色 2.5Y6/4	にぶい黄褐色 2.5Y6/4	赤石、角閃石、白色粒	縄文、刺突列点、土層	51		

横断 番号	連続 番号	種別	種	遺構名	出土部位		法		調査			色調	土	備考	
					グリッド	高さ	口徑	径	位置	外置	内置				内置
76	437	縄文土器	深鉢	—	3024	4-2層下	—	—	ミガキ	—	—	—	—	—	灰緑口縁、一部合成、外置に流行
	438	縄文土器	深鉢	—	3023	4-1層 0.11	(0.08)	—	ミガキ	—	—	—	—	—	外置に流行
	439	縄文土器	深鉢	—	3125 3126	1層下溝	—	—	ナズリ ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	口縁部一部突起あり、縁部斜縁文、鼻文、灰
	440	縄文土器	深鉢	—	3023	4-3層	No.1608 760	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
77	441	縄文土器	鉢	—	3023	5-2層	No.73	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	442	縄文土器	深鉢	南北 南北	3024	—	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	443	縄文土器	深鉢	—	3130 3131 3132	4-1層 4-2層 4-2層	—	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	444	縄文土器	浅鉢	517	—	2層	—	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
78	445	縄文土器	深鉢	—	3024	4-2層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	446	縄文土器	深鉢	—	3024	4-3層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	447	縄文土器	深鉢	—	3024	4-1層1 4-2層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	448	縄文土器	深鉢	—	3026	4-1層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
79	449	縄文土器	深鉢	—	3026	5-2層	No.529	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	450	縄文土器	深鉢	—	—	5-2層	No.536	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	451	縄文土器	深鉢	—	3025	5-1層 5-2層	No.445 666	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
	452	縄文土器	鉢	—	3025	4-1層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
453	縄文土器	浅鉢	—	—	—	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒	
454	縄文土器	浅鉢	—	3025	3層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒	
455	縄文土器	深鉢	—	3023	—	No.1073	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒	
456	縄文土器	浅鉢	515	3025 3026	—	No.444 3026	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
457	縄文土器	浅鉢	—	—	—	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
458	縄文土器	台付鉢?	—	3025	3層	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
459	縄文土器	浅鉢	518	3024 3024	—	—	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒
460	縄文土器	鉢?	—	3025	5-3層	No.1172	—	ナズリ	ナズリ	ナズリ	—	—	—	—	石灰、青母、角閃石、砂粒

地区 番号	建物 番号	種別	図種	出土地点		法量(cm)			調査			土質	備考	図面 番号	
				遺構名	グリッド	層位	発見 番号	口徑	直径	高さ	外周				内周
81	461	縄文土器	深鉢	—	352A	3層	—	—	—	ミガキ	ナデ、ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/3	灰石、角閃石	平行状配列	56
	462	縄文土器	深鉢	—	342A	3層	—	—	ナデ裏ミガキ	ナデ裏ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/4	灰石、角閃石	平行状配列	—	
	463	縄文土器	深鉢	—	—	表土	—	—	ケズリ裏ナデ、ミガキ	条痕調整	にぶい黄褐色 5YR6/6	石灰、角閃石、 黒厚石片	口縁部：流線文、外周に環状 付着		57
	464	縄文土器	浅鉢	—	—	—	—	—	同縁条痕	ミガキ	地沢 10YR4/1	灰石、角閃石 (+ 黒厚石片)	—	—	
	465	縄文土器	鉢	—	—	表土	—	—	ミガキ、ナデ	ミガキ	地沢 10YR4/1	灰石、角閃石	—		—
	466	縄文土器	深鉢	5001	—	埋1層	—	—	ミガキ	ミガキ	地沢 10YR4/1	灰石、角閃石	—	—	
	467	縄文土器	深鉢	—	342S	5-1層 2層下 3層	(26.4)	—	同縁条痕、ナデ	ミガキ	黒濁 7.5YR3/1	角閃石、灰石	—		—
	468	縄文土器	深鉢	—	342S	2層下 3層下	(25.0)	—	条痕調整球ナデ、ケズ リ	ミガキ	ナデ7層 2.5Y4/4	石灰、角閃石、黒石	—	—	
	469	縄文土器	浅鉢	—	3426	3層	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 5YR6/3	石灰、角閃石、 白色粒	口縁部：リボン状突起		57
	470	縄文土器	浅鉢	東西 部瓦	342S	—	—	—	ミガキ	ミガキ	地沢 10YR4/1	石灰、角閃石	—	—	
471	縄文土器	浅鉢	—	342S	3層	—	—	ミガキ	ミガキ	黒濁 2.5Y3/1	角閃石、灰石	—	—		
472	縄文土器	浅鉢	—	342A	—	—	—	ミガキ	ミガキ、ナデ	黒濁 7.5YR3/1	石灰、角閃石	—		—	
473	縄文土器	深鉢	—	342S	4-1層	No.18	(16.0)	—	ミガキ	黒濁 2.5Y7/3～黒 灰 2.5Y4/1	灰黄濁 2.5Y6/2	石灰、角閃石、 黒石	口縁部：リボン状突起		—
474	縄文土器	深鉢	—	362A	3層	—	—	ミガキ	ミガキ	黒濁 2.5Y7/3	石灰、角閃石、 黒石	—	—		
475	縄文土器	浅鉢	瓦輪 1/4	332S	1層	—	—	同縁条痕	ミガキ	黒濁 10YR3/1	灰濁 7.5YR4/2	角閃石、灰石		—	—
476	縄文土器	浅鉢	—	—	—	—	—	条痕調整球ミガキ	ミガキ	黒濁 10YR3/1	濁 7.5YR4/4	石灰、角閃石	口縁部：リボン状突起	—	
477	縄文土器	—	—	342A	1層下	—	—	ナデ	ナデ	地沢色 10YR4/1	にぶい黄褐色 2.5Y6/3	角閃石、黒石	リボン状突起		57
478	縄文土器	浅鉢	—	312P	1層下溝	—	—	同縁部	ケズリ裏ナデ、ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/4	石灰、黒石、 雲母	—	—	
479	縄文土器	鉢	—	3326	3層	—	—	同縁部	ケズリ裏ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	石灰、角閃石	—		—
480	縄文土器	鉢	—	352A	1層	—	—	同縁部	ミガキ	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	石灰、角閃石	—	—	
481	縄文土器	鉢	—	352A	4-1層	—	—	同縁部	ミガキ	明黄濁 2.5Y7/6	黒 10Y2/1	石灰、角閃石	黒色顔料土器?		—

探頭 番号	種別	高層	出土地点		法量(cm・g)			調整			色調		胎土	備考	図説 番号	
			遺跡名	グリッド	層位	地上げ 番号	長さ	幅	孔径	厚さ	重さ	外重				内重
506	土製品	土製円盤	5076	3524	-	No.1278	5.0	5.2	-	1.0	29.2	ナデ	にぶい黄 23Y6/4	灰石、角閃石	凹線文 外周：凹点文、凹線文、 一部凹線あり	58
507	土製品	土製円盤	-	3426	1層	-	4.7	4.7	-	0.8	24.0	ナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英 黒石、石英、角閃石、 雲母、黒石	凹線文、一部凹線あり	
508	土製品	土製円盤	-	3424	5-3層	-	4.3	4.9	-	0.9	23.6	ナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英	凹線文、一部凹線あり	
509	土製品	土製円盤	3523	-	6層	No.818	5.7	5.7	-	1.4	54.6	ナデ	にぶい赤黒 5Y6/4	灰石、石英、雲母	外周：凹線文、凹点文、 一部凹線あり	
510	土製品	土製円盤	-	3127	6層	-	5.8	6.0	-	1.3	51.7	ナデ	赤黒 5Y6/4	灰石、石英、角閃石、 雲母	外周：凹線文、凹点文、 一部凹線あり	
511	土製品	土製円盤	-	3524	4-2層	-	5.0	5.8	-	1.0	32.9	ナデ 円平	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英、角閃石、 雲母	凹線文、一部凹線あり	

表7 5区土器調整表・学生-

探頭 番号	種別	高層	出土地点		法量(cm)			調整			色調		胎土	備考	図説 番号	
			遺跡名	グリッド	層位	地上げ 番号	口径	底径	高さ	外重	内重	外重				内重
101	弥生土器	甕	515	-	埋土2層	-	-	-	-	-	-	ヨコナデ	黒灰 2.5Y6/4	黒石、石英、 白色粒	凹線文	59
513	弥生土器	甕	515	-	埋土2層	-	-	-	-	-	-	ナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英	凹線文	
103	弥生土器	甕	517	-	埋土1層	No.1	11.3	5.2	12.8	ナデ	ナデ	ハケメ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英、 角閃石	凹線文、一部凹線あり	59
514	弥生土器	甕	517	-	埋土1層	-	30.4	-	-	-	-	ヨコナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英	凹線文、一部凹線あり	
105	弥生土器	甕	519	-	-	-	-	-	-	-	-	ヨコナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石	凹線文	-
516	弥生土器	甕	519	-	-	-	-	-	-	-	-	ヨコナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石	凹線文	
108	弥生土器	甕	530	-	-	-	-	-	-	-	-	ヨコナデ	黒灰 2.5Y7/3	灰石、石英	凹線文	-
518	弥生土器	甕	520	-	埋土2層	-	-	-	-	-	-	ヨコナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英	凹線文	
106	弥生土器	甕	520	-	-	-	-	-	-	-	-	ハケメ ナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英	凹線文	-
519	弥生土器	甕	520	-	-	-	-	-	-	-	-	ヨコナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英	凹線文	
520	須恵器	甕	520	-	埋土1層	-	-	-	-	-	-	ヨコナデ	黒灰 5Y7/2	灰石、赤色粒	凹線文	-
521	弥生土器	甕	-	3125 3126	1層下層	-	-	-	-	-	-	ナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英	凹線文、凹線あり	
522	弥生土器	甕	-	3027 3126	5-3層	-	-	-	-	-	-	ヨコナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英、 雲母	凹線文、凹線あり	60
523	弥生土器	甕	-	3125 3126	1層下層	-	-	-	-	-	-	ナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、石英、 角閃石	凹線文、凹線あり	
112	弥生土器	甕	-	-	墓土	-	-	-	-	-	-	ナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、角閃石、 雲母	凹線文、凹線あり	60
524	弥生土器	甕	-	-	墓土	-	-	-	-	-	-	ナデ	にぶい黄緑 10Y6/4	灰石、角閃石、 雲母	凹線文、凹線あり	
525	弥生土器	甕	-	3524	1層	-	-	-	-	-	-	ナデ	明黄緑 10Y6/6	灰石、角閃石	凹線文	60
526	弥生土器	甕	-	3623	南北 溝北	-	-	-	-	-	-	ナデ	にぶい黄緑 2.5Y6/4	灰石、角閃石	凹線文	

標記 番号	種別	経緯	遺物名	出土地点		法 量(cm)	調査 経緯	調査			出土	備考
				クワッド	層位			口徑	外径	内径		
112	527	弥生土器	甕	3423	—	—	—	ヨコナテ	ハケメ、ヨコナテ	深溝 1098B/3	金雲母、長石	即日発着
	528	弥生土器	甕	—	埋土1層	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	深溝 2577/3	金雲母、長石、石英	即日発着 SO1(ウツクド付層の)に混入
	529	弥生土器	甕	3226	—	—	—	ヨコナテ	子	にぶい、赤土層 5YR5/4	長石、角閃石、石英	即日発着、深溝2集 外面に厚付層
	530	弥生土器	甕	3423	—	—	—	ハケメ、ヨコナテ	ハケメ、ナテ	深溝 2573/1	長石、石英	即日発着、深溝2集 外面に厚付層
	531	弥生土器	甕	3225	1層	0250	—	ハケメ、ヨコナテ	ハケメ、ナテ	にぶい、黄土層 10YR6/3	長石、角閃石、雲母	即日発着
	532	弥生土器	甕	3224	埋土3層	—	—	ハケメ、ヨコナテ	ハケメ、ナテ	にぶい、黄土層 10YR7/4	長石、石英	即日発着
	533	弥生土器	甕	—	—	—	—	ハケメ、ヨコナテ	ハケメ、ナテ	にぶい、黄土層 2.5Y6/3	長石、石英	即日発着、深溝3集 外面に厚付層
	534	弥生土器	甕	3126	—	0460	—	ナテ、ヨコナテ	ハケメ、ナテ	昭徳 2.5Y5/2	長石、石英	即日発着
	535	弥生土器	甕	3424	4-1層	0232	—	ナテ、ヨコナテ	ナテ、ヨコナテ	にぶい、黄土層 10YR6/4	長石、石英、角閃石	即日発着、深溝2集、内外 面に厚付層、(外面に赤土層 あり)
	536	弥生土器	甕	—	—	0357	—	ナテ、ヨコナテ	ナテ	昭徳 2.5Y5/2	長石、石英	即日発着
	537	弥生土器	甕	3027	—	—	—	ヨコナテ、ナテ	ナテ	深溝 2.5Y6/2	雲母、長石、石英、角閃石	口縁部：深溝あり
113	538	弥生土器	甕	3425	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	にぶい、黄土層 10YR6/3	長石、石英	—
	539	弥生土器	甕	3226	1層下溝	0186	—	ヨコナテ、ハケメ、ナ	ヨコナテ、ナテ	深溝 2.5Y7/4	金雲母、石英	外面に厚付層
	540	弥生土器	甕	3125 3126	1層下溝	—	—	ヨコナテ、ハケメ、ナ	ヨコナテ、ハケメ、ナ	昭徳 2.5Y4/1	金雲母、石英、長石	内外面に厚付層 外面に厚層
	541	弥生土器	甕	—	埋土1層	—	—	ハケメ	ハケメ	昭徳 10YR7/6	金雲母、長石、石英	即日発着
	542	弥生土器	甕	3622	—	—	—	ハケメ	ハケメ	にぶい、黄土層 10YR6/3	長石、石英、金雲母	即日発着
	543	弥生土器	甕	3424	4-1層	—	—	ハケメ	ハケメ	深溝 2.5Y7/3	金雲母、長石	即日発着
	544	弥生土器	甕	3226	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	深溝 2.5Y7/3	雲母、角閃石、石英	—
	545	弥生土器	甕	3126 3127	1層	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	深溝 2.5Y7/3	長石、石英	—
	546	弥生土器	甕	3125 3126	1層下溝	0239	—	ハケメ、ヨコナテ	ハケメ、ヨコナテ	にぶい、黄土層 10YR6/4	長石、石英	—
	547	弥生土器	甕	3424	3層	—	—	ハケメ、ナテ、ヨコナ	ハケメ、ナテ	深溝 2.5Y7/4	石炭、輝石	—
	548	弥生土器	甕	3424	3層	—	—	ヨコナテ、ハケメ	ヨコナテ	深溝 10YR8/4	雲母	—
114	549	弥生土器	甕	3126 3225	1層下溝	—	—	ヨコナテ、ハケメ	ヨコナテ、ハケメ	昭徳 10YR8/1	長石、石英、角閃石	外面に厚付層
	550	弥生土器	甕	3125 3126	1層下溝	—	—	ヨコナテ、ハケメ	ナテ、ヨコナテ	深溝 10YR8/1	雲母、長石、角閃石、 白色土	—
	551	弥生土器	高坪(彫)	3425	4-1層	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい、黄土層 5YR5/4	雲母、長石	彫付部

表 8 5 区土器観察表・古代

調査 番号	種別	器種	出土地点		法量(cm)			調整			色調			胎土	備考	図面 番号
			遺跡名	グリッド 順位	出土 番号	口徑	底径	高	外面	内面	内面	外面	内面			
117	552	土師器 甕 <small>の</small> 壺 5001 (P035)	—	—	—	—	—	—	ハケメ、ヨコナデ	ナデ、ヨコ工具による ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	金雲母、長石、石英	外面に赤泥?	—
118	553	土師器 鉢 <small>の</small> 壺 501	—	—	—	—	—	—	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ後ヘラケズリ	横 2.5YR6/6	横 2.5YR6/6	横 2.5YR6/6	長石、石英	内外面に黒行層	61
	554	土師器 鉢 501	—	—	—	—	—	—	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ後ヘラケズリ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	内外面に黒行層	
	555	土師器 壺 501	—	—	—	—	—	—	ハケメ、ナデ後ヨコナ デ	ヨコナデ後ヘラケズリ、 ナデ	横 5Y6/ 横 5Y6/6	横 5Y6/ 横 5Y6/6	横 5Y6/ 横 5Y6/6	長石	口部に黒行層	
	556	土師器 壺 501	—	—	—	—	—	—	ハケメ、ナデ、ナデ	ナデ、ケズリ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石、雲母	内外面に赤泥あり	
	557	土師器 瓶 502	—	—	—	(11.2)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石、石英、角閃石	内外面に黒行層	
119	558	土師器 瓶 502	—	—	—	(12.2)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	雲母、長石、角閃石	胎行層、内外面に赤泥	—
	559	土師器 壺 502	—	—	—	(21.6)	—	—	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横 2.5YR6/6	横 2.5YR6/6	横 2.5YR6/6	金雲母、長石	—	—
	560	土師器 瓶 502	—	—	—	—	6.8	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石、白色粒	横行層	—
	561	土師器 杯 503	—	—	—	—	—	—	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石、白色粒	内外面に赤泥あり	—
120	562	土師器 鉢 503	—	—	—	(26.4)	—	—	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ケズリ後ナ デ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	雲母、長石、石英	外面に黒行層	—
	563	土師器 壺 503	—	—	—	(26.6)	—	—	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	雲母、長石、石英	—	—
	564	土師器 壺 503	—	—	—	(26.6)	—	—	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ヘラケズリ後ナ デ	横 2.5YR6/6	横 2.5YR6/6	横 2.5YR6/6	長石	—	61
121	565	土師器 壺 504	—	—	—	(27.0)	—	—	ナデ、ハケメ後ナデ	ナデ、ヘラケズリ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	—	—
122	566	土師器 杯 505	—	—	—	(8.2)	—	—	ナデ	ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	雲母、白色粒	内外面に赤泥あり	—
123	567	土師器 杯 505	—	—	—	(8.7)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	雲母、長石	—	—
124	568	土師器 杯 505	—	—	—	(11.5)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	雲母、白色粒	—	—
	569	土師器 瓶 505	—	—	—	(23.8)	—	—	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ケズリ後ナ デ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	雲母、角閃石	内外面に赤泥あり	—
	570	土師器 壺 505	—	—	—	(26.4)	—	—	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ、ヘ ラケズリ	横 2.5YR6/6	横 2.5YR6/6	横 2.5YR6/6	雲母、長石、石英	—	—
	571	土師器 壺 505	—	—	—	(21.4)	—	—	ハケメ、ナデ	ケズリ、ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	外面に黒行層	61
	572	土師器 鉢 506	—	—	—	(7.6)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	—	—
125	573	土師器 杯 505	—	—	—	(7.0)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	—	—
	574	土師器 杯 506	—	—	—	(10.8)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	—	—
	575	土師器 瓶 506	—	—	—	(10.6)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	—	—
126	576	土師器 鉢 506	—	—	—	(7.0)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	—	—
127	577	土師器 鉢 506	—	—	—	(7.0)	—	—	皿配ナデ	皿配ナデ	横 5YR6/6	横 5YR6/6	横 5YR6/6	長石	—	—

標記番号	種別	産種	出土地点		法量(km)		調整		色調		胎土	備考	
			遺跡名	グリッド	層位	出土番号	口径	底径	器量	外置			内置
578	土師器	鉢	506	—	No.1層	—	(23.6)	—	ハケム、ヨコナ	ヨコナ、ハラケズ	黒黒 10YR3/1	黒黒 10YR4/1	外置に磨付層
579	土師器	甕	506	—	埋土1層	—	(29.0)	—	ハケム、ヨコナ	ヨコナ、ハラケズ	に公溝黒 10YR6/4	に公溝黒 10YR6/4	外置に磨付層
123	580	須恵器	506	—	埋土1層	—	(6.0)	—	黒赤、ハラケズ	黒赤ナ	黒赤 10YR5/1	黒赤 10YR5/1	磨付に磨みあり
581	須恵器	杯	506	—	埋土1層	—	(7.0)	—	黒赤ナ、黒赤ナ	黒赤ナ、黒赤ナ	黒赤 10YR5/1	黒赤 10YR5/1	磨付に磨みあり
582	須恵器	杯	506	—	埋土1層	—	(8.0)	—	黒赤ナ、黒赤ナ	黒赤ナ、黒赤ナ	黒赤 10YR5/1	黒赤 10YR5/1	磨付に磨みあり
583	土師器	杯	508	—	埋土2層	—	(6.6)	—	黒赤ナ、黒赤ナ	黒赤ナ、黒赤ナ	に公溝黒 10YR/4	黒赤、赤色粒	外置に磨付層
584	土師器	杯	508	—	埋土2層	—	(7.8)	—	黒赤ナ	黒赤ナ、ナ	黒赤 2.5Y7/4	黒赤	—
585	土師器	甕	508	—	埋土2層	—	(24.8)	—	ヨコナ	ヨコナ	に公溝黒 10YR/4	黒赤、黒赤	—
586	土師器	鉢	508	—	埋土2層	—	(31.6)	—	ハケム、ヨコナ	ヨコナ	に公溝黒 10YR/4	黒赤、黒赤	—
587	須恵器	杯	508	—	埋土2層	—	—	—	黒赤ナ	黒赤ナ	黒赤 2.5YR6/1	黒赤	外置に磨付層
588	土師器	杯	509	—	埋土1層	—	(6.0)	—	黒赤ナ	黒赤ナ	黒赤 2.5YR6/1	黒赤	外置に磨付層
589	土師器	瓶(匣形)	509	—	埋土2層	—	(27.0)	—	ハラケズ、ナ	ハラケズ	黒赤	黒赤	—
590	土師器	甕	509	—	埋土2層	—	(27.0)	—	ヨコナ、ハケム	ハラケズ	黒赤	黒赤	—
591	黒色土師器	瓶	510	—	—	—	(12.4)	(5.6)	黒赤ナ	ナ	黒赤	黒赤	内面に磨付層
592	土師器	杯	510	—	—	No.5	(16.0)	8.5	ハラミガキ	ナ	黒赤	黒赤	外置に磨付層
593	土師器	鉢	510	—	埋土1層	—	(25.8)	—	ナ、ヨコナ	ナ、ヨコナ	黒赤	黒赤	外置に磨付層
594	土師器	鉢	510	—	—	No.21	(29.8)	—	ヨコナ、ハケム	ヨコナ	黒赤	黒赤	外置に磨付層
595	土師器	小甕	510	—	—	—	16.3	—	ヨコナ、ハケム	ヨコナ	に公溝黒 10YR6/4	黒赤	外置に磨付層
596	土師器	甕	510	—	埋土1層	—	(19.2)	—	ハケム、ナ	ヨコナ	黒赤	黒赤	—
597	土師器	甕	510	—	埋土1層	—	(11.0)	—	ハケム、ナ	ヨコナ	黒赤	黒赤	—
598	土師器	甕	510	—	—	No.16	(11.0)	—	ヨコナ	ヨコナ	黒赤	黒赤	—
599	土師器	甕	510	—	—	No.2	(23.0)	—	ヨコナ	ヨコナ	黒赤	黒赤	—
600	土師器	甕	510	—	—	No.15	(24.0)	—	ヨコナ、ハケム	ヨコナ	黒赤	黒赤	外置に磨付層
601	土師器	甕	510	—	—	No.27	(26.6)	—	ハケム	ヨコナ	黒赤	黒赤	外置に磨付層
602	土師器	甕	510	—	—	No.20,22,24,25	(25.0)	—	ヨコナ	ヨコナ	黒赤	黒赤	外置に磨付層

地区 番号	遺物 番号	種別	図種	出土地点		法量(cm)		跡象			色調		動土	備考	図面 番号	
				遺物名	グリッド 位置	土上げ 番号	口徑	底径	高さ	外 裏	内 裏	外 裏				内 裏
128	603	須恵器	杯	S10	—	—	—	6.8	—	—	底径 2.5/7/1	灰白 2.5/7/1	備母、角閃石、長石	備母、角閃石、長石	備母、角閃石、長石	65
	604	須恵器	杯	S10	—	No.17	(12.1)	7.0	3.5	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	雲母、長石	雲母、長石		
	605	須恵器	杯	S10	—	No.29	12.8	7.0	3.6	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	雲母、長石、輝石	雲母、長石、輝石		
	606	土師器	衝	S11	—	—	(11.6)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	内外面に赤土あり	内外面に赤土あり		
129	607	土師器	甕	S11	—	—	(19.6)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	角閃石、赤色土、赤褐色土	角閃石、赤色土、赤褐色土		
	608	須恵器	瓶	S11	—	—	(8.6)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	角閃石、長石、白色土	角閃石、長石、白色土		
	609	須恵器	杯	S13	—	—	(9.4)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	白色土	白色土		
131	610	須恵器	杯	S13	—	—	(11.8)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	角閃石、長石、白色土	角閃石、長石、白色土		
	611	須恵器	衝	S13	—	—	(7.8)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	白色土	白色土		
	612	土師器	衝	S14	—	No.1	(21.6)	13.7	4.8	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	備母、赤色土	備母、赤色土	64	
132	613	土師器	瓶	S14	—	—	—	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	備母、赤色土	備母、赤色土		
	614	土師器	鉢	S14	—	—	(29.3)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	備母、赤石	備母、赤石		
	615	黒色土器	杯	S001	—	—	(13.7)	(5.8)	4.3	—	底径 3/6/1	黒 3/6/1	長石、赤褐色土	長石、赤褐色土	63	
	616	黒色土器	杯	S001	—	—	(6.0)	—	—	—	底径 3/6/1	黒 3/6/1	雲母、長石、白色土	雲母、長石、白色土		
	617	土師器	杯	S001	—	—	(7.4)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	角閃石	角閃石		
	618	土師器	衝	S001	—	No.36	(14.2)	(7.6)	6.3	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	角閃石	角閃石	63	
	619	土師器	壺の腹	S001	—	—	—	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	備母、長石、角閃石	備母、長石、角閃石		
133	620	土師器	甕	S001	—	No.34	(23.2)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	角閃石	角閃石	67	
	621	須恵器	杯	S001	—	No.20	12.9	7.4	3.9	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	備母、長石、白色土	備母、長石、白色土		
	622	須恵器	杯	S001	—	No.22	12.2	7.8	3.7	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	長石	長石	63	
	623	須恵器	杯	S001	—	No.42	(12.6)	(7.0)	3.2	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	長石、角閃石、白色土	長石、角閃石、白色土		
	624	須恵器	杯	S001	—	No.50	(13.4)	(8.0)	3.0	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	備母、角閃石、石炭、赤褐色土	備母、角閃石、石炭、赤褐色土		
	625	須恵器	壺 (2重み)	S001	—	—	—	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	角閃石、白色土	角閃石、白色土		
	626	須恵器	衝	S001	—	—	(16.4)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	長石	長石		
134	627	土師器	甕	S001	—	No.51	(26.0)	—	—	—	底径 3/6/1	灰 3/6/1	備母、長石、角閃石	備母、長石、角閃石	67	

標記番号	種別	図種	出土地点		口徑	直径	法長(cm)	調整			色調			胎土	備考
			遺構名	グリッド				層位	点上げ番号	外周	内周	外面	内面		
134	628 土師器 甕	5001	—	—	No.4	027	—	ハケム、ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	横5YR6/6	横2.5YR6/4	横2.5YR7/6	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	外面に附け付
	629 土師器 甕	5001	—	—	No.27	(27.2)	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	—	
	630 土師器 甕	5001	—	—	No.28	(26.6)	—	ヨコナデ	ヨコナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/6	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	—	
	631 土師器 甕	5001	—	—	No.14	(27.2)	—	ハケム、ヘラケズリ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	—	
	632 土師器 甕	5001	—	—	No.46	—	—	ヨコナデ、ハケム	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	—	
	633 土師器 甕	5001	—	—	No.43	—	—	ヨコナデ、ハケム、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	—	
	634 土師器 甕	5001	—	—	No.44	(29.1)	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	—	
	635 土師器 甕	5001	—	—	No.53	(29.6)	—	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	—	
	636 土師器 杯	5002	—	—	埋土1層	(13.4)	(9.0)	凹配ナデ、黒部、凹配ヘラケズリ、ナデ	凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	内外面に赤色あり	
	637 土師器 杯	5002	—	—	埋土1層	(9.2)	(9.2)	凹配ナデ、黒部、凹配ヘラケズリ、ナデ	凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	内外面に赤色あり	
	638 土師器 杯	5002	—	—	埋土1層	(13.0)	(9.0)	凹配ナデ、黒部、凹配ヘラケズリ、ナデ	凹配ナデ、見込みナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	内外面に赤色あり	
	639 土師器 杯	5002	—	—	埋土1層	(13.8)	(9.3)	凹配ナデ、黒部、凹配ヘラケズリ、ナデ	凹配ナデ、見込みナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	内外面に赤色あり	
	640 土師器 杯	5002	—	—	埋土1層	(13.8)	(10.6)	凹配ナデ、黒部、凹配ヘラケズリ、ナデ	凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	内外面に赤色あり	
641 土師器 杯	5002	—	—	埋土1層	(13.5)	—	凹配ナデ	凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	内外面に赤色あり		
137	642 土師器 甕	5003	3325	—	—	(25.6)	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤石、角閃石	—	
643 土師器 杯	5003	—	—	No.1	12.7	6.4	凹配ナデ、凹配ヘラケズリ、黒部、ヘラケズリ	ナデ、凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤石	—		
644 土師器 甕	5004	—	—	No.2	—	—	ハケム、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤石、角閃石	内外面に赤色あり		
645 土師器 甕	5004	—	—	No.13	(26.2)	—	ヨコナデ、ハケム	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤石、角閃石	—		
646 土師器 甕	5004	—	—	埋土1層	No.2.5	(27.1)	凹配ナデ	凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤石、角閃石	—		
139	647 土師器 甕	5005	3426	—	—	(27.1)	—	ハケム、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石	外面に附け付	
648 土師器 甕	5005	3426	—	—	(30.6)	—	ヨコナデ、ハケム	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石	—		
649 土師器 杯	5006	—	—	—	(12.3)	(8.6)	黒部、凹配ヘラケズリ、ナデ	凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	9 面に中環、後半内面に附け付		
650 土師器 甕	5007	—	—	—	—	—	凹配ナデ	凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石、石炭	—		
140	651 土師器 甕	5007	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石	—		
652 土師器 甕	5008	—	—	—	9.4	6.1	凹配ナデ	凹配ナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤母、長石、角閃石	上面に赤色あり		
653 土師器 甕	5009	—	—	—	(29.0)	—	ハケム、ヨコナデ	ヨコナデ	横2.5YR7/6	横2.5YR7/4	横2.5YR7/6	赤石、角閃石	内外面に赤色あり		

橋号 番号	種別	橋名	出土地点		点上げ 番号	口徑	法 量(km)	調整			色調		土	備考	回数 番号
			グリッド 番号	層位				外置	内置	外置	内置				
679	土砂橋	瓶	3425	1層下	—	(110)	(7.2)	51	回転子	回転子	樽25R6/6 樽25R6/6	樽25R6/6 樽25R6/6	角閃石、長石、石英、粘付層付	—	—
145	680	土砂橋	瓶	—	3424	—	(9.6)	—	回転子 ナ	回転子 ナ	樽51R6/6~ 樽51R6/6 樽51R2/1	樽51R6/6 樽51R2/1	雲母、角閃石、長石 に赤泥、粘付層付	—	—
681	土砂橋	瓶	—	3525	1層	—	(8.0)	—	ナ、漆(へら切り)後 ナ	ナ	樽75R7/6	樽75R7/6	長石 粘付層付	—	—
682	土砂橋	面	瓶乱	—	3425	—	(10.0)	13	回転子 ナ	回転子	樽5R6/6	樽5R6/6	長石、石英	内外面に赤泥あり	65
683	土砂橋	小型橋?	溝	1層下	—	(13.8)	(7.2)	141	ケズリ後ナ ナ	ケズリ後ナ ナ	樽5R6/6 樽5R6/6	樽5R6/6 樽5R6/6	角閃石、長石、石英 角閃石、白色泥 白色泥	外置に層付層、断面にへ 内置に層付層	—
146	684	土砂橋	東西 瓶乱、2	—	—	—	—	—	ヨコナテ、ハケメ	ヨコナテ	樽2.5Y6/3	樽2.5Y6/3	雲母	外置に層付層	—
685	土砂橋	鉢	—	—	—	—	—	—	ヨコナテ、ハケメ	ヨコナテ	樽2.5Y6/3	樽2.5Y6/3	角閃石、赤褐色泥、 白色泥	外置に層付層	—
686	土砂橋	鉢	東西 瓶乱、2	—	—	—	—	—	ヨコナテ、ハケメ	ヨコナテ	樽2.5Y6/3	樽2.5Y6/3	角閃石、赤褐色泥、 白色泥	外置に層付層	—
687	土砂橋	小型橋	—	—	3425	—	(19.2)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R7/6	樽5R7/6	角閃石	外置に層付層	—
688	土砂橋	小型橋	—	—	3425	—	(23.8)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R7/6	樽5R7/6	角閃石、赤色泥、 白色泥	外置に層付層	—
689	土砂橋	裏	—	—	3525	—	(20.6)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R7/6	樽5R7/6	長石、角閃石	内面に赤泥あり	—
690	土砂橋	裏	—	—	—	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	角閃石、石英	—	—
691	土砂橋	裏	—	—	3525	—	(24.2)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	長石	—	—
692	土砂橋	裏	東西 瓶乱	—	—	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	長石	—	—
693	土砂橋	裏	—	—	3425	—	(26.0)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	雲母、角閃石、石英	外置に層付層	67
147	694	土砂橋	東西 瓶乱、2	1層	—	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	雲母、角閃石、石英	—	—
695	土砂橋	裏	—	—	3525	—	(24.3)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R7/4	樽5R7/4	雲母、角閃石、長石	—	—
696	土砂橋	裏	—	—	3525	—	(23.0)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R7/4	樽5R7/4	雲母、長石、粗い石 角閃石、輝石、石英、 角閃石	—	—
697	土砂橋	裏	—	—	3525	—	(26.2)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	角閃石、長石、石英	—	—
698	土砂橋	裏	表土	—	—	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	角閃石、長石	—	—
699	土砂橋	裏	表土	—	—	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	角閃石、長石	外置に層付層	67
700	土砂橋	裏	—	—	—	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	雲母、長石	—	—
148	701	土砂橋	裏	—	3624	—	(26.9)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	長石、赤色泥	—	—
702	土砂橋	裏	—	—	3425	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	長石、角閃石、長石、 雲母、粘付層	—	—
703	土砂橋	裏	—	—	3525	—	(25.0)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	角閃石、石英	—	67
704	土砂橋	裏	東西 瓶乱、1	—	—	—	—	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	角閃石、長石	—	—
149	704	土砂橋	裏	—	—	—	(26.4)	—	ヨコナテ	ヨコナテ	樽5R6/6	樽5R6/6	角閃石、輝石	—	—

検出番号	種別	図種	出土地点		法量 (cm)		調整			色調		胎土	備考	図版番号		
			遺構名	グリッド	層位	点上げ番号	口径	口径	器量	外面	内面				外面	内面
731	須恵器	瓶	—	3425	3層	—	—	19(8)	—	底平ヘラ印り後ナデ	ナデ	相沢貫 2.5Y6/2	相沢貫 2.5Y6/2	角閃石、長石	貼付蓋台	—
732	須恵器	瓶	—	3425	1層下	—	—	17(3)	—	底平ナデ、ナデ	ナデ	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	紫石	貼付蓋台	—
733	須恵器	瓶	—	3425	1層下	—	—	18(0)	—	底平ナデ、ナデ	底平ナデ、見込みナデ	灰 5Y5/1	相沢貫 2.5Y6/2	紫石、白色粒	貼付蓋台	—
734	須恵器	瓶	表土	—	—	—	—	17(1)	—	底平ナデ、ナデ	底平ナデ、見込みナデ	灰黄 2.5Y6/2	底平ナデ 3Y6/2	金雲母、紫石	内蓋押付蓋下	—
735	須恵器	瓶	裏土 埋込3	3425	—	—	—	18(1)	—	底平ナデ、ナデ	底平ナデ	灰 3Y6/1	灰ナデ 3Y6/2	紫石、雲母	—	—
736	須恵器	瓶	—	3406	1層	—	—	110(2)	—	底平ナデ、底平ナデ	底平ナデ、見込みナデ	相沢貫 2.5Y6/2	相沢貫 2.5Y6/2	角閃石、長石	貼付蓋台	—
737	須恵器	皿	—	3525	1層	—	—	118(6)	1.9	底平ナデ	底平ナデ	灰 7.5Y5/1	相沢貫 3.5Y6/1	曜石	—	65
738	須恵器	皿	事變 前埋込	—	—	—	—	118(4)	1.40	底平ナデ、底平ナデ	底平ナデ、見込みナデ	灰白 3Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	紫石、角閃石、石英、 白色粒	—	—
739	須恵器	蓋	—	3425	1層下	—	—	116(6)	—	底平ナデ	底平ナデ	灰白 N7/1	灰黄 2.5Y7/2	紫石、石英、雲母、 砂粒	—	—
740	須恵器	蓋	埋込	3226	—	—	—	113(4)	—	ナデ、タタキ	ナデ、タタキ	相ナデ 灰 2.5Y5/4/1	灰ナデ 灰 10Y5/1	紫石、角閃石、石英、 砂粒	—	—
741	須恵器	壺	表土壁	—	—	—	—	—	—	ナデ、タタキ	底平ナデ、タタキ	灰黄 2.5Y6/2	相沢貫 2.5Y6/2	紫石、角閃石、石英	口縁部に 2～4mmの打ち 穴あり	—
742	須恵器	壺	—	—	—	—	—	—	—	平行タタキ	頸頭仔蓋、ナデ、揃て 鳳凰、雲台蓋	に少し赤味 5Y6/5/4	相沢貫 2.5Y6/2	紫石、角閃石、石英	—	—

表9 紡師車観察表

検出番号	遺物番号	種別	図種	出土地点		法量 (cm・g)			調整			色調		胎土	備考	図版番号	
				遺構名	グリッド	層位	点上げ番号	長さ	幅	孔径	器量	重量	外面				内面
151	743	土製品	紡師車	—	—	埋土1層	—	5.0	5.2	厚1.0 幅0.9	29.5	ミガキ	に少し赤味 10YR7/3	に少し赤味 10YR5/3	石英、砂粒	押痕あり、穿孔あり	—
	744	土製品	紡師車	—	3623	4-2層	—	2.9	5.5	—	16.1	ナデ入り後ナデ、ナ デ	に少し赤味 5YR6/4	明赤黄 5YR5/6	紫石、石英、雲母	穿孔あり	—

表 10 古代以降土器観察表

標記番号	遺物番号	種別	図種	出土地点		法量 (cm)			調整			色調		胎土	備考	図版番号
				遺物名	クワット	層位	発掘番号	口径	口径	高さ	外周	内周	内周			
745	須恵質	甕	西側トコ	3425	1層下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、角閃石、石英 黒玉磁器片つまみ	—
746	須恵質	甕	西側トコ	—	—	6(6)	—	—	—	—	—	—	—	—	石英、砂粒	—
747	須恵質	甕	東西側瓦.2	—	埋土1層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、砂粒	—
748	須恵質	甕	東西側瓦.3	3425	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、曹母、石英 朝鮮磁片 突帯あり	—
749	須恵質	甕	東西側瓦.2	—	埋土1層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英、砂粒	—
750	陶器	甕	東西側瓦.3	3425	—	6(2)	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英 内面に自然釉	—
751	陶器	甕	東西側瓦.3	3425	—	6(4)	—	—	—	—	—	—	—	—	角閃石、曹母 外面に自然釉	—
752	陶器	甕	東西側瓦.2	3624	1層下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、砂粒	—
753	陶器	甕	東西側瓦.2	—	埋土1層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英 外面に自然釉	—
754	須恵質	不明	—	3326	3層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、角閃石、石英 外面に自然釉	—
760	瓦葺土器	環鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英	—
761	瓦葺土器	火鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英、砂粒	—
762	瓦葺土器	火鉢	埋瓦	3423	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英 外面に紫花文あり 内面に三田瓦あり 口縁部に刺刺あり	—

表 11 玉類・土製品観察表

標記番号	遺物番号	種別	図種	出土地点		法量 (cm・g)			調整			色調		胎土	備考	図版番号		
				遺物名	クワット	層位	発掘番号	長さ	幅	口径	高さ	重量	外周				内周	内周
118	758	土製品	土製円盤	S01	—	—	7.3	7.1	—	0.8	47.9	—	—	—	—	—	—	長石、石英、曹母、 角閃石、砂粒
755	石函	勾玉	西側 埋土1層	—	—	1.6	1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	曹母あり、穿孔あり	
756	土製品	片子重	東西側 埋土1層	—	—	2.0	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	型押し	
757	土製品	瓦子重	東西側 埋土1層	—	—	2.2	2.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上面 溝巻状	
759	土製品	土埴	埋瓦	3423	—	—	3.9	1.5	0.4	1.5	—	—	—	—	—	—	—	長石、石英

表 12 石器観察表

神宮 番号	回蔵 番号	遺物 番号	器種	石材	計測値			重量 (g)	遺構 グリッド	層位 取上げNo	備 考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)				
84	68	2	石錐	黒曜石	1.80	1.45	0.30	0.52	東西溝状 遺構	埋土1層	先端部欠損。基本形態は凹基無蓋錐。1 a 錐。 裏面に素材剥離時の剥離面(ボシ面)が残る。平面形は二等辺三角形で挟りは2mm程度と浅い。挟りはゆるいアーチ形を呈する。表面裏面とも上半分は比較的大きさの整った連続した調整が施される。基部は裏面に見られる連続した調整の後表面側に短長い割線が施される。
		3	石錐	安山岩	2.15	1.40	0.30	0.77	3425	4-1層 No 17	先端部わずかに欠損。基本形態は凹基無蓋錐。1 a 錐。 平面形は二等辺三角形で挟りはアーチ形を呈し、2mm程度と浅い。左右両側縁に鋭角状を呈する。左右とも一側縁を連続的に調整したのち表面を凹凸させて反対側の側縁を連続的に剥離している。
		4	石錐	安山岩	1.90	1.70	0.35	0.88	3424	5-2層 No 229	完形。基本形態は凹基無蓋錐。1 a 錐。 平面形は二等辺三角形で先端部はやや丸みを帯びる。挟りはアーチ形を呈する。先端部の縁部は磨滅により濡れる。全体の調整は細かくないが整った大きさを連続して剥離される。
		5	石錐	安山岩	1.85	1.70	0.30	0.69	埋戻し 土取上げ	—	完形。基本形態は凹基無蓋錐。1 b 錐。 平面形はわずかに鋭角が高い二等辺三角形で先端部は鋭く尖る。挟りはアーチ形を呈する。表面右側上半分と裏面右側下半分は細かな連続した調整でこれ以外は剥離サイズがやや大きい。側部は一部縁が中央部で曲出し基部にはしっかりと挟りが作出される。
		6	石錐	黒曜石	2.05	1.75	0.35	1.07	3524	5層 No 1126	先端部、片側欠損。基本形態は凹基無蓋錐。1 b 錐。 平面形は二等辺三角形で挟りがしっかりと作出される。挟りはアーチ形を呈する。形状は左右対称ではなく右側縁中央に曲線があり左側縁はわずかにくぼむ。表面裏面の左側縁に細かく連続した調整が施される。裏面右側の上半分には連続した調整は見られない。
		7	石錐	安山岩	2.00	1.65	0.30	0.86	小溝 3325	1層下面	先端部欠損。基本形態は凹基無蓋錐。1 b 錐。 平面形は二等辺三角形で挟りがしっかりと作出される。挟りはアーチ形を呈し表面裏面とも基部には細かく連続した調整が施される。中央より上部部分はやや幅広で大きな割線が自立。割線は全体的に深く遺物の中央に達するよう細長い割線は少ない。
		8	石錐	安山岩	2.50	1.50	0.35	0.90	3425	4-2層	完形(ガリツ直前)。基本形態は凹基無蓋錐。1 b 錐。 平面形は二等辺三角形で挟りがしっかりと作出される。挟りはアーチ形を呈し左右下部の長さやや異なるものの調整は丁寧である。表面裏面とも側縁部は大きさを連続した調整が施される。
		9	石錐	黒曜石	2.50	1.70	0.40	1.38	3624	2層下面	完形。基本形態は凹基無蓋錐。1 b 錐。 表面左側縁に微細割線が残る裏面に素材剥離時の剥離面(ボシ面)が残る。挟りは深いアーチ形を呈する。鋭角剥片を素材として先端部及び基部を作出するが各剥離は大きさをまちまちで作り入る調整はない。表面裏面とも側縁への調整は部分的で表面右側縁には小割線が連続する。側縁部の調整が限られているため遺物全体の厚みが薄くしきれていない。
		10	石錐	安山岩	2.60	2.05	0.30	1.13	3425 3426	1層下面	完形。基本形態は凹基無蓋錐。1 c 錐。 平面形は二等辺三角形で挟りがしっかりと作出される。挟りは三角状を呈し側部の角は左右とも尖る。裏面に素材剥離時の剥離面(ボシ面)が残る。素材剥片が薄手であることから側縁の調整は全体に遠くで中央に達するよう細長い割線は見られない。
		11	石錐	黒曜石	1.80	1.50	0.30	0.42	3424	5-3層 No 1043	完形。基本形態は凹基無蓋錐。1 c 錐。 平面形は二等辺三角形で挟りは曲線的に作出され挟りの形状は三角状を呈する。調整は全体的に細かく表面左側縁の調整は連続した所定剥離。 黒曜石は光沢感があり灰色味のある黒色。
		12	石錐	黒曜石	2.50	1.55	0.35	0.94	3525	4-1層 No 3	先端部わずかに欠損。基本形態は凹基無蓋錐。1 c 錐。 平面形は二等辺三角形で挟りがしっかりと作出される。挟りは三角状を呈し左右の側部形状は対称ではなく右側縁が長い。側部先端は左右とも尖る。 表面は側縁部の短長い割線が遺物中央まで達し中央に縁ができる。裏面は表面と比べて平に調整される。
		13	石錐	黒曜石	3.00	2.25	0.50	2.10	3424	5層 No 1134	片側先端部欠損。基本形態は凹基無蓋錐。1 c 錐。 黒曜石は灰色がかっており透明感がある。平面形は二等辺三角形で挟りがしっかりと作出される。挟りは三角状を呈し側部は左右とも先端が尖らない。表面裏面及び上半分の側縁調整は連続的に施される。遺物中央に節理が新状に観察される。
		14	石錐	安山岩	3.35	1.60	0.40	1.87	溝槽	—	先端部、片側欠損。基本形態は凹基無蓋錐。1 a 錐。 平面形は楕圓い二等辺三角形で深い挟りが作出される。挟りはアーチ形を呈する。裏面中央に残る素材の剥離面から打点を基部方向に用いている事が分かる。表面上半分は磨滅で割線がぼけ厚みが整えられる。裏面は素材の平らな形状を生かしており短長い割線は見られない。
		15	石錐	黒曜石	3.30	1.55	0.35	1.78	トレンチ 3523	—	先端部欠損。基本形態は平基無蓋錐。0 錐。 平面形は楕圓い二等辺三角形で挟りは作出されない。表面左側縁と裏面左側縁は剥離形状が整っており連続的に剥離される。調整は丁寧で左右対称。

神宮 番号	回廊 番号	遺物 番号	器 種	石 材	計 測 値			重さ (g)	遺 積 グリッド	層 位 取上げNo.	備 考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)				
85	72	16	石彫	安山岩	4.20	5.35	0.65 つまみ 0.4 方部 0.2~ 0.3	10.85	3523	5-1層 No.12	完了。模型の石彫。 表面削つたみに自然面が残る。 裏面中央に素材の割れ面(ボジ面)が残ることから素材割 片を横位に用いて表面面に調整する。表面は遺物の中央ま で延びる縦長割れ面を残した後方部を細かく調整する。裏 面の調整は中央まで延びる。割れは少なく幅広の平坦な割 れが多い。最大厚の位置は中央よりやや下に位置する。
		17	石彫 (未製品)	安山岩	6.20	3.20	0.70	16.29	3425	1層下	完了。縮型の石彫。縦長割片を素材としこれを横位に用い て表裏面の一面に連続した割れ面を残す。調整が済んだ心 の部分は部分的に素材のボジ・ネ面は広く残る。つまみ部は割 片の側面形状をそのまま生かしたもので連続した調整ない。 素材割片の打面(自然面)や素材ボジ面のバルブは残る。 二次加工の状況から石彫の未製品である。
		18	十字形 石彫	緑色片 岩	10.90	10.60	1.90	171.59	3524	3層	2層部に欠損有り残りが3ヶ所認められ3文字の十字形石 彫。表裏面中央部と右側縁に磨り面あり。表面は最大厚部 分に割れ縁の磨減がある。右側縁に欠損は観察されないが 本来4文字で欠損の後3文字として再加工した可能性も捨て きれない。
		19	十字形 石彫	安山岩	7.60	8.40	1.90	124.05	—	—	幅部2ヶ所欠損。残りが4ヶ所。完成であれば4文字の石 彫である。残存する2ヶ所の幅部のうち1つは縁面に近い が欠損後の再加工であるかは不詳。表面は中央部とその近 くの割れ縁が磨減する。裏面は残存する幅部のつけ根部 分に磨れ痕があり広い光沢をもつ。
		20	十字形 石彫	安山岩	15.60	13.0	1.40	306.67	3523	4-2層 No.24	幅部を1ヶ所欠損。幅広の板状割片を素材とする。 表裏両面からの調整で残りが4ヶ所認められ幅部が十字形 になるよう作出される。残存している3層部のうち2層部 は形状が方形を呈し1層部はやや丸みを帯びる。厚みは全 体に扁平である。
86	68	21	打製石斧	安山岩	9.40	5.60	1.70	91.80	3226	5-3層	方部欠損。基本形態は方部欠損のため不明であるが残存形 態から最大幅が石斧下部に位置する短形であろうと思われ る。基部形状は先端に向かって縮くなる。側縁形状は方部 に向かって幅が縮小部に応じ広がる。 表裏面に使用によると思われる磨減面有り(割れ縁上が磨 減)。残存部分の厚みは扁平。
		22	打製石斧	安山岩	11.90	7.40	2.10	147.82	3525	4-1層	方部形状は短形。基本形態は全体形が二等辺三角形に近く最大幅 が下部に広がる短形である。基部形状は先端に向かって縮こ なり丸みをもつ。側縁右側は方部に近い部分で直曲し左 側は中央部分で直曲するため左右の形状は非対称である。 素材割片は横長の割片でこれを横位に用いて縁面に調整を 施しており表面に自然面。裏面に素材のボジ面が残存する。
		23	打製石斧	安山岩	12.05	6.55	1.40	120.39	3524	—	完了。基本形態は短形。最大幅が遺物の下部に位置し方部 形状は内側にちがひ。表面は縁面を加工しているが中央 には大きく自然面が残る使用による磨れで広い光沢をもつ。 裏面は左側下部の割れ縁が磨減する。裏面は素材のボジ面 が広く残る縦長割片を用いていることが分かる。素材のボ ジ面/バルブは調整により除去された部分には幅広の階段 状割れ縁が残る。
		24	打製石斧	安山岩	11.10	5.50	1.80	117.14	3325	3層	完了。基本形態は短形で最大幅が遺物の下部に位置する。 方部形状は先端に向かって尖る形を呈し方部先端の縁上が 磨減する。同様に左側縁の中央より下部は縁上に磨減する。 表面方部近くの階段状割れ縁はやや光沢がある。ルーペ を使用した肉眼観察で磨減が認められ使用に伴う磨れであ るとと思われる。
		25	打製石斧	安山岩	13.40	7.90	2.30	247.75	—	4-1層	完了。基本形態は短形。最大幅が遺物の下部に位置する。 方部形状は内側。表面は自然面が大きく残る。 自然面全体に磨れによる広い光沢があるが中央よりやや 上にはより光沢のある部分が見られる。裏面は方部に近い 部分で割れ縁の磨減が見られる。
		26	打製石斧	安山岩	8.20	5.60	2.50	93.83	3326	5-2層 No.508	完了。基本形態は分銅形。残りが遺物中位の両側面にある。 残りは左右側縁の縁につれが見られる。 基部の厚みは1cm以下で遺物の下部部分が最大厚となる。 裏面中央に延長し残る割れ縁は素材の割れ面である。
87	69	27	打製石斧	安山岩	13.10	5.90	2.00	138.76	3225	3層	完了。基本形態は全体が縮みの形の短形形の短縮と思われる。 遺物の最大幅は中央よりやや下に位置し基部及び方部 の形状はそれぞれ先端に向かって窄まる。基部・方部とも 平面形は丸みをもつ形で作出される。遺物下部の割れ縁上 と裏面方部付近の割れ縁上が磨減する。遺物の最大厚は中 央部分。基部と方部先端の厚みは1cm以下と比較的薄い。
		28	打製石斧	安山岩	13.10	6.50	1.70	176.8	3225	1層下/下	側縁部を一部欠損。基本形態は短形。遺物の最大幅は中 央よりやや下に位置する。基部及び方部形状はそれぞれ 先端に向かって窄まり方部は丸みをもつ。表面は中央の広 い割れ縁が磨減し裏面中央部分に割れ縁上が磨減する。素 材は横長の板状割片で裏面中央の広い割れ縁は素材のボ ジ・ネ面。裏面基部には自然面が残存する。

神田 番号	図版 番号	遺物 番号	器種	石材	計測値			遺構 グリッド	層位 取上げ高	備 考	
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)				
87	69	29	打製石片	安山岩	9.30	6.20	2.40	144.01	3624	4-1層	基部欠損。基本形態は短冊形。刃部形状は先端に向かって窄まりやや丸みを帯びる。表裏面に使用によると思われる磨減痕有り(割縁線上及び自然面が磨減)。 表面右半分に落差のある階段状割縁が観察される。
		30	打製石片	安山岩	8.35	6.20	2.50	149.53	3623	3層	基部欠損。基本形態は短冊形。刃部形状は直線的。 表面中央部に使用によると思われる磨減痕有り(縁のつずれ)。裏面側が一部を削いで概ね平坦な割縁であるのに対し表面側は階段状割縁により中央部分に厚みが生じる。裏面中央部と刃部に自然面が残る。
		31	打製石片	安山岩	14.20	6.30	2.40	206.39	3325	—	完形。基本形態は刃部が先端に向かって尖るものの短冊形の範疇か。左右割縁で屈曲する位置が異なるため刃部は左右対称とはならず遺物の縦軸に対して刃部はおよそ45度の角度を持つ。表裏面とも中央部及び刃部の割縁線上に磨減が見られる。裏面は平坦割縁で構成され表面は階段状割縁を帯び中央部に厚みを残す。
		32	打製石片	安山岩	12.40	6.15	2.40	220.15	3424	5-1層	完形。基本形態が他の石片と異なり明確な基準を提示できないがもとは短冊形か。全体形は左右両側ともやや湾曲し上下とも先端が尖っている。刃部角度が鋭角であるため使用により刃部が衝撃割断した可能性有り。表面中央に押れ痕が観察でき裏面刃部は部分的に割縁線が磨減する。上端には自然面が残存する。全体的にやや厚みがある。
88	68	33	打製石片	玄武岩	9.90	5.30	2.10	112.54	3326	5-3層	刃部欠損。基本形態は刃部が欠損しているため不明であるが残存部の形状から刃部手で直線的に成形された所製短冊形であると思われる。表裏面に使用によると思われる磨減痕有り(割縁線上が磨減)。表面は基部と中央部の節理面縁上が磨減する。裏面は基部に磨減が見られる。
		34	打製石片	安山岩	4.20	9.80	0.90	50.0	3524	3層	欠損のため全体形は不明。他の打製石片と異なり厚さは1cmに満たない。厚み平らな差割片の高麗部部に磨減した平坦割縁が磨される。仮に1/2程度欠損しているとしてもやや湾曲した幾何の刃部を持つ石類となりそれ以上が欠損しているとする刃部が平権内削の大型石片となる。
89	69	35	磨製石片	安山岩	8.95	4.60	2.60	170.36	3424	No 1173	基部欠損。I類。
		36	磨製石片	安山岩	11.30	6.20	2.40	244.37	3325	No 574	I類
		37	磨製石片	安山岩	10.80	5.0	3.0	221.34	3126	—	基部欠損。I類。
		38	磨製石片	安山岩	10.35	5.60	2.90	259.44	3225	5-2層 No 619	基部調整痕有り。I類。
		39	磨製石片	安山岩	10.65	6.20	2.85	232.98	3324	No 490	I類
90	69	40	磨製石片	蛇紋岩	11.80	6.15	3.45	318.80	3423	No 1645	I類
		41	磨製石片	安山岩	9.70	5.80	3.50	269.64	3325	No 594	I類
		42	磨製石片	蛇紋岩	12.3	5.95	3.8	386.26	3326	No 654	基部欠損。I類。
91	70	43	磨製石片	安山岩	13.3	5.9	3.15	328.63	3324	No 476	基部欠損。II類。
		44	磨製石片	安山岩	13.1	5.05	2.9	268.44	—	—	II類
		45	磨製石片	蛇紋岩	13.0	5.30	4.10	395.41	3227	5層 No 11	基部調整痕有り。II類。
92	69	46	磨製石片	蛇紋岩	14.30	5.50	3.20	339.40	3325	5・5-2層 No 583	刃部一部欠損。II類。
		47	磨製石片	蛇紋岩	14.60	5.10	2.80	257.82	3325	5・5-1層 No 583	基部調整痕有り。II類。
		48	磨製石片	蛇紋岩	15.90	7.20	3.30	420.16	3225	No 513	刃部一部欠損。II類。
93	71	49	磨製石片	安山岩	11.65	5.70	3.75	355.54	—	No 1	基部調整痕有り。II類。
		50	磨製石片	蛇紋岩 (190)	7.15	2.30	442.6	3523	5層 No 1039	刃部欠損。III類。	
		51	磨製石片	安山岩	12.20	4.80	2.20	192.77	3424	5層 No 343	基部調整痕有り。III類。
		52	磨製石片	安山岩	9.20	4.90	3.50	224.39	3225	No 1599	III類

神田 番号	回廊 番号	遺物 番号	器種	石材	計測値			重さ (g)	遺構 グリッド	層位 取上げNo	備 考	
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					
94	70	53	磨製石斧	安山岩	9.90	5.30	3.25	225.63	3423	—	基部欠損。IV類。	
		54	磨製石斧	安山岩	10.10	4.90	3.20	213.96	3425	5・5-3層 No 1182	刃部やや湾曲。鞘の刃の形状似。IV類。	
		55	磨製石斧	安山岩	9.10	5.50	2.85	218.22	3523	東壁 サブトレ	基部欠損。IV類。	
	95	70	56	磨製石斧	安山岩	9.40	6.00	3.10	232.44	3225	5層 No 514	刃部一部欠損。IV類。
			57	磨製石斧	安山岩	9.70	5.35	3.40	265.83	—	埋土2層	基部調整痕有り。IV類。
			58	磨製石斧	安山岩	9.50	4.15	2.80	159.08	—	No 33	IV類
96	71	59	磨製石斧	安山岩	10.30	4.15	2.10	124.30	3225	No 1639	IV類	
		60	磨製石斧	安山岩	11.10	6.0	3.90	346.06	3324	No 1	刃部やや湾曲。鞘の刃の形状似。IV類。	
		61	磨製石斧	蛇紋岩	10.40	4.65	1.60	91.28	3326	5-2層 No 502	片刃。V類。	
		62	磨製石斧	安山岩?	7.0	3.80	1.20	48.73	3523	5-2層 No 159	V類	
		63	磨製石斧	蛇紋岩	10.30	3.15	1.95	100.55	—	—	刃部欠損。VI類。	
		64	磨製石斧	蛇紋岩	10.00	3.1	1.90	96.25	3425	1層下小溝	基部・刃部一部欠損。 残存部に研磨痕あり。VI類。	
97	72	65	磨製石斧	安山岩	9.60	2.60	2.00	81.75	3225	No 1832	刃部欠損。VI類。	
		66	磨製石斧	安山岩	9.90	2.60	1.90	86.36	3326	5・5-1層 No 10	片刃に近い両刃? VI類。	
		67	磨石・磨石	安山岩	12.70	9.90	3.40	630.95	3227	6層 No 1522	三角形。扁平で平面形が三角形に近い自然礫を使用している。磨石として表面の広い平面面を使用しているが本来の形をとどめる。磨打痕は右端部に集中し磨打により本来の石の形状が数ミリ失われている。	
		68	磨石・磨石	安山岩	8.90	10.10	5.70	836.6	3127	6層	1/3欠損。厚みのある自然礫を使用している。平面形と側面形は四角形に近い。断面形は幅広い楕円形。表面中央部に2～3mm程度の凹みがあり磨打痕が右端部にも複数残る。磨石としての使用部位は磨打部分以外の全体で特に裏面中央部は他部位と比べよく使用されている(磨面がやや赤く変色)。	
		69	磨石・磨石	砂岩	10.80	5.50	4.50	382.3	3125	6層	1/2欠損。10cm強の円形で比較的扁平な自然礫を使用している。表面両面とも全体が使用されているが幅広い平面はもたない。端部に磨打痕が認められる。	
		70	磨石・磨石	安山岩	9.40	9.40	3.15	407.67	—	No 33	完形。平面形は楕円形を呈する。縁辺に部分的に磨打痕が観察される。表面面とも磨り面が認められ使用により面が扁平である。	
		71	磨石	安山岩	7.00	9.95	4.50	459.94	3326	6層	1/2欠損。平面形は楕円形を呈する。表面面とも本来の石の面を変色させるほど使用されており同時に平面をもつ。縁辺部分も使用により元の形が削られており平坦である。磨石に使用した部分は若干黒く変色している。	
		72	磨石	安山岩	9.10	9.50	5.35	832.2	3127	6層 No 1498	端部欠損。断面は四角形を呈する。全体に磨石としての使用痕が観察できる。特に上端部は線形的に凹凸光沢がある。完形時の形状は欠損により不明。	
		73	磨石・磨石	安山岩	7.40	9.45	5.00	599.1	3226	6層	上下端部欠損。平面形は楕円形を呈する。全体に磨石としての使用痕があり磨石に使用した部分は若干黒く変色する。表面は遺物中央部。裏面は中央部を除く部分に変色する。上下両端は欠損しており上端部は欠損後の磨きや磨りにより縁がつぶれる。	
		29	1	台石・石皿	安山岩	54.0	34.4	11.5	37000.0	SX03	—	表面面。側面とも使用により磨れている。
98	73	74	台石	安山岩	25.25	9.90	8.90	3403.40	3227	No 1528	一部磨り面有り	
		75	台石	安山岩	24.40	11.70	8.20	4447.80	3227	—	—	
		76	石皿	砂岩	28.70	19.20	6.90	3728.0	3424	5・5-2層 No 231	—	

検出 番号	回収 番号	遺物 番号	器 種	石 材	計 測 値				遺 構 グリッド	層 位 取上げNo	備 考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			
98	72	77	石皿	安山岩	427.0	330.0	132.50	19500.0	3424	No.1886	ほぼ完全。表裏面及び右側面を使用。表面中央部分は使用が顕著でその部分が黒く変色する。右側面は使用により面が深い部分で5mm程度くぼむ。表裏面の縁辺に欠けた痕があるが磨滅により縁が不明。
99	73	78	石鏃	安山岩	4.50	4.40	1.0	29.85	3524	3層 No.1326	長軸両端に小刻羅で紐掛け部を作り出し。
		79	石鏃	安山岩	4.60	4.20	1.55	39.78	—	埋土1層	
		80	石鏃	安山岩	5.20	4.70	1.40	40.7	3523	5-3層	完全。自然面残存。平面形は楕円形を呈する。小形の扁平な円錐を素材とし長軸の両端を打ち欠き抉り部が作出される。抉りの深さは3mm程度で両面から各1回または数回の打ち欠きを加えている。
		81	石鏃	緑色片岩	5.70	3.80	0.70	27.50	3425	5-1層	完全。自然面残存。平面形は楕円形を呈する。全体が磨滅。小形の深い円錐を素材とし長軸の両端を打ち欠き抉り部が作出される。抉りの深さは2mm程度で両面から各1回または数回の打ち欠きを加えている。
		82	石鏃	安山岩	5.60	4.45	1.70	61.80	3126	6層	
		83	石鏃	角閃石 安山岩	5.65	4.90	1.30	54.36	3523	—	長軸両端に小刻羅で紐掛け部を作り出す。
		84	石鏃	安山岩	4.65	4.70	1.0	23.79	3423	No.1657	上端に切り込み、下端は小刻羅及び切り込み。
110		85	砥石	砂岩	10.05	11.7	7.0	1014.0	SK32	—	表裏面とも全体的に磨滅
115		86	石志丁	鮫紋岩	4.0	8.2	0.55	29.39	3326	4-1層	表裏面に刻羅あり。残存する一部と刀部に研磨痕。
		87	砥石	砂岩	8.55	6.6	2.5	208.26	東西溝状 遺構南	埋土1層	表裏面に磨痕

表 13 石製品

検出 番号	回収 番号	遺物 番号	器 種	石 材	計 測 値				遺 構 グリッド	層 位 取上げNo	備 考	
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)				
151	—	88	新 (石部)	—	1.6~	1.6~	0.5	1.55	南北探丸 3324	—	磨痕あり	
152	—	89	石鏃	滑石	2.8	1.2	1.2	542	3524	No.1142		外面：ナデ、ミガキの調整。穿孔あり。孔径 縦0.3 横0.3 縦0.7 横0.6

第5章 自然科学分析

第1節 熊本市託麻弓削遺跡群5区出土の縄文人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：熊本県、縄文人骨、土坑墓、保存不良

はじめに

熊本県熊本市東区弓削町に所在する託麻弓削遺跡群5区（託麻弓削遺跡群）の発掘調査が白川の河川改修工事に伴って2015（平成27）年度におこなわれ、土坑墓から人骨が出土した。

熊本県では早い時期から縄文人骨の出土例が知られており、轟貝塚（鈴木、1918）、阿高貝塚（岡本、1929、田幡、1930、大森・木野田、1957、大森、1960）、御領貝塚（金間・他、1955）、かきわら貝塚（松野・他、1967）、沖の原遺跡（内藤、1973）、天岩戸岩陰遺跡（内藤・他、1978）、七ツ江カキワラ貝塚（松下・他、1986）などから出土した縄文人骨の報告例がある。また、2014（平成26）年には黒髪遺跡（熊本大学構内）からも縄文後期人骨が2体出土している。

今回、本遺跡から出土した縄文人骨については、骨の検出は可能であったが、骨質が脆弱化しており、その保存状態はきわめて悪く、人骨を取り上げ、計測や観察をおこなうことがほとんど不可能であった。現場でできる限り人骨の特徴などを詳細に観察し、取り上げることができた人骨については人類学的観察をおこなったので、その結果を報告しておきたい。



調査区全景

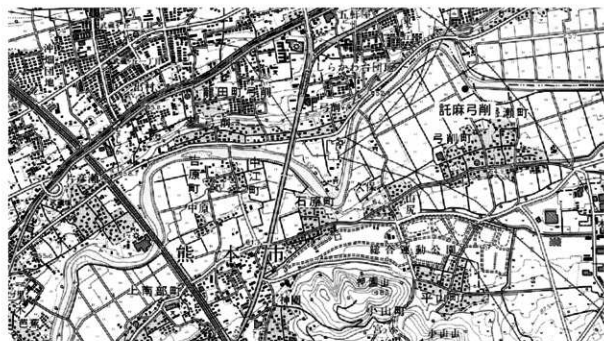


調査区近景

資 料

2015（平成27）年度の発掘調査で出土した人骨は表1に示すとおり4体であった。骨が検出された遺構は6箇所あったが、現場で精査したところ、2箇所から検出された骨は獣骨であった。S-070は食用に供された動物の骨が遺棄された遺構と思われる。4体の人骨はすべて成人骨である。性別を明らかにすることができたのは2体のみで、男性1体、女性1体である。各人骨の性別・年齢などを表2に示した。なお、年齢区分は表3のとおりである。4体のうち頭位が西を示すものが3体で1体のみが北東に頭位があったが、4体の例をみる限り、基本的には西頭位が卓越するようである。

なお、この4体の人骨は、考古学的所見より、縄文時代後期に属する人骨である。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig.1 Location of the place Takumayuge site, Kumamoto City, Kumamoto Prefecture)

表1 資料数 (Table 1. Number of materials)

成人			幼児	合計
男性	女性	不明		
1	1	2	0	4

表2 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

遺構番号	性別	年齢	備考 (埋葬姿勢、頭位)	
ST01	男性	不明	仰臥	西頭位
ST02	女性	不明	仰臥	北東頭位
ST03	不明	不明	仰臥	西頭位
ST04	不明	不明	仰臥	西頭位
S-070	—	—	獣骨	
S-102	—	—	獣骨	

表3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分		年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所 見

ST01 (男性・年齢不明)

埋葬遺構は土坑墓である。墓坑の平面プランは長楕円形と思われる。埋葬姿勢は仰臥である。頭位は西。残存していたのは、頭蓋、上腕骨(左)、前腕の骨(両側)、寛骨(両側)、大腿骨(右)、脛骨(両側)、腓骨(左)で、右側上腕骨と左側大腿骨を欠損しているが、これは後世の攪乱によるものと思われる。また、椎骨が痕跡状態で遺存していた。肘関節は両側とも緩く曲げている。右側は上腕骨を



ST01 出土状況

欠失しているが、前腕の骨が残っていたので、肘関節の様態を知ることができた。膝関節は両側とも強屈して立てている。墓坑底は平らではなく、背中から頭部にかけて緩やかに傾斜しており、頭部はやや高い位置にあった。人骨の保存状態は悪く、椎骨は痕跡的で、取り上げることができなかった。上腕骨や大腿骨の径はやや大きいのが、保存状態が著しく悪く、形態的な特徴を明らかにすることはできなかった。また、右側の大坐骨切痕の観察ができた。この角度は小さい。なお、左側上腕骨の最大長を現場で計測することができた。その推定値は約300mmである。この推定上腕骨最大長を用いて推定身長値を算出すると、157.46cm (Pearson式)、157.81cm (藤井式)となり、低身長であるが、縄文人の平均身長158cmと大差ない値である。

四肢骨の径がやや大きいことから、性別を男性と推定したが、縫合を観察することができなかったため、年齢は不明である。

ST02 (女性・年齢不明)

埋葬遺構は土坑墓である。墓坑の平面プランは長楕円形と思われる。埋葬姿勢は仰臥である。頭位は北東。残存していたのは頭蓋、上腕骨(右)、大腿骨(両側)、脛骨(右)にすぎない。肘関節の様態は不明であるが、膝関節を強屈して、下肢を左側に倒していた。歯が釘植した下顎骨を検出したが、その径は小さい。保存状態は著しく悪いが、大腿骨の径は小さい。下顎骨と大腿骨の径が小さいことから、性別を女性と推定した。年齢は不明である。



ST02 出土状況

ST03 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は土坑墓である。墓坑の平面プランは長楕円形と思われる。埋葬姿勢は仰臥である。頭位は西。残存していたのは頭蓋、上腕骨(両側)、前腕の骨(左)、大腿骨、脛骨であるが、右側上腕骨は痕跡的に検出されたにすぎない。左側肘関節は約100度に曲げられているが、右側は不明である。下肢骨は長軸を揃えて、重なった状態で検出された。一見下肢は膝関節を強屈して右側に倒しているようにみえたが、脛骨前縁の向きが逆になっていることがわかり、下肢骨は解剖学的姿勢を保っておらず、人為的に集骨されていた。下顎骨は歯槽の状態を観察することができたが、観察できた部分はすべて閉鎖していた。人骨の保存状態は著しく悪く、性別は不明である。また、年齢も不明である。



ST03 出土状況

ST04 (性別・年齢不明)

埋葬遺構は土坑墓である。墓坑の平面プランは長楕円形と思われる。埋葬姿勢は仰臥である。頭位は西。残存していたのは頭蓋と左右の大腿骨のみである。肘関節の様態は不明である。両側の大腿骨は立った状態で検出されたので、下肢は立膝状態だったと推測される。また、下肢は両側の膝を寄せるのではなく、開脚した状態であった。人骨の保存状態はきわめて悪く、性別を推測することはできなかった。年齢も不明である。



ST04 出土状況

要約

2015(平成27)年度におこなわれた熊本市東区弓削町に所在する託麻弓削遺跡群5区の発掘調査で、土坑墓から人骨が出土した。人骨の保存状態はあまりよくなかったが、出土例の少ない縄文後期人骨である。現場でできる限りの観察をするとともに、人骨の人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

1. 6基の遺構から骨が検出されたが、人骨は4基の土坑墓から出土した。残りの2基の遺構から検出された骨は獣骨であった。
2. この4体の人骨は、考古学的所見から、縄文時代後期に属する人骨である。
3. 4体とも成人骨で、男性は1体、女性は1体で、残りの2体は性別を明らかにすることができなかった。
4. 4体とも埋葬姿勢は仰臥である。肘関節の様態が観察できたのは2体(ST01、ST03)のみであったが、2体とも肘関節を緩く曲げていた。膝関節の様態が観察できたのは3体あるが、2体は強屈して立膝状態で(ST01・男、ST04・性別不明)、もう1体は強屈して左側に倒していた(ST02・女)。
5. 今回出土した縄文人骨は保存状態がかなり悪いものが多く、形質的な特徴を把握することができなかったが、1例について上腕骨から推定身長値を算出することができた。この男性の推定身長は157.46cm(Pearson式)で、縄文人の平均身長値を示した。出水貝塚から出土した縄文人や黒髪遺跡出土の縄文人はかなり小柄な縄文人であるが、本例の体格はそれほど小さくはないようである。

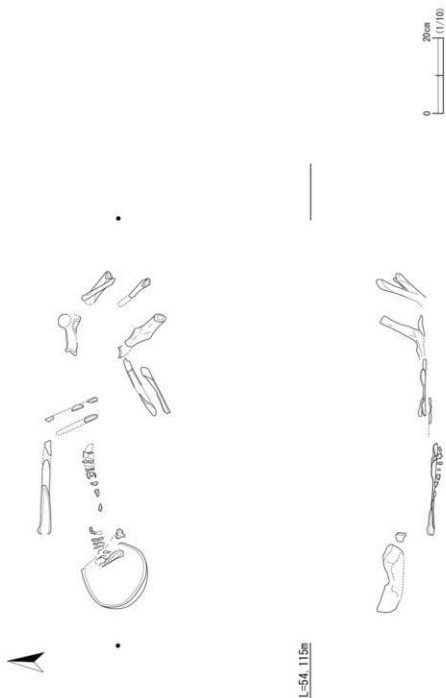
《参考文献》

1. 金岡丈夫・他、1955：熊本県下益城郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について。人類学研究、2：93-163。
2. 松下孝幸・他、1980：串島遺跡出土の人骨。串島遺跡(長崎県文化財調査報告書51)：133-135。
3. 松下孝幸・他、1980：五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨。白浜貝塚(福江市文化財調査報告

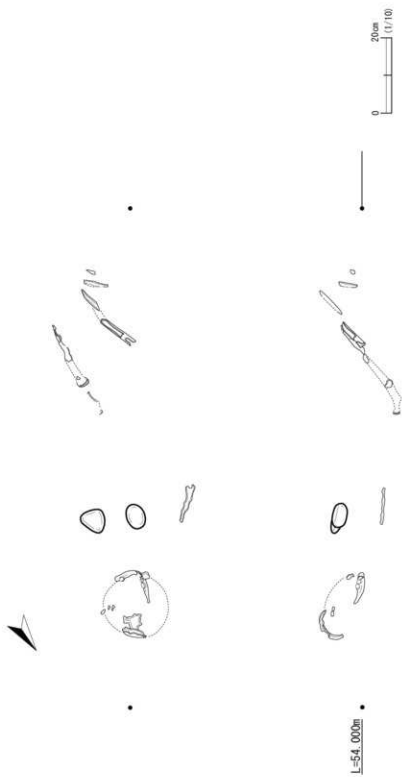
- 書2)：120-133.
4. 永井昌文、1965：福岡県遠賀郡山鹿貝塚人骨発掘概報。九州考古学、25、26：1-5.
 5. 松下孝幸・他、1983：佐賀県唐津市菜畑遺跡出土の人骨。菜畑遺跡（唐津市文化財調査報告5）：388-398.
 6. 松下孝幸、1984：鹿児島県知名町（沖永良部島）中甫洞穴出土の人骨。中甫洞穴（鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書）：33-58.
 7. 松下孝幸・他、1986：熊本県小川町七ツ江カキワラ貝塚出土の縄文時代人骨。七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚（熊本県文化財調査報告第79集）：39-70.
 8. 松野 茂・他、1967：肥後国上益城郡嘉島村六嘉かきわら貝塚出土人骨について。熊本医学会雑誌、41：41-52.
 9. 内藤芳篤、1973：沖の原遺跡の人骨。長崎大学解剖学第二教室。
 10. 内藤芳篤・他、1977：上焼田遺跡出土の人骨所見。指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書5）：74-78.
 11. 内藤芳篤、1977：粉洞穴出土の縄文時代人骨略報。大分県粉洞穴発掘調査概要一第1・2次調査一。考古学論叢、4：99-109.
 12. 内藤芳篤・他、1978：天岩戸岩陰遺跡出土の人骨について。菊池川流域文化財調査報告書（熊本県文化財調査報告31）：117-121.
 13. 岡本辰之輔、1929：肥後国下益城郡阿高貝塚人骨の人類学的研究（頭蓋骨に就いて）第一報。人類学雑誌、44（第一附録）：1-26.
 14. 岡本辰之輔、1929：肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚人骨の人類学的研究（其の二、四肢骨について）。人類学雑誌、44（第三附録）：77-105.
 15. 大森浅吉・他、1957：阿高貝塚人の下顎骨について。鹿児島医学会雑誌、30：408-421.
 16. 大森浅吉、1960：故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値。人類学研究、7（附録）：211-223.
 17. 大森浅吉・他、1960：薩摩国出水貝塚出土（昭和29年）の人骨について。鹿児島医学会雑誌、33：269-283.
 18. 鈴木文太郎、1918：肥後轟貝塚河内道明寺にて発掘せる人骨に就いて。人類学雑誌、33：59-66.
 19. 田幡丈夫、1930：肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚人骨の人類学的研究（其の三、骨盤骨に就いて）。人類学雑誌、45：425-433.

* Masami MATSUSHITA、** Takayuki MATSUSHITA

The Organization of Anthropological Research [N P O 法人・人類学研究機構]



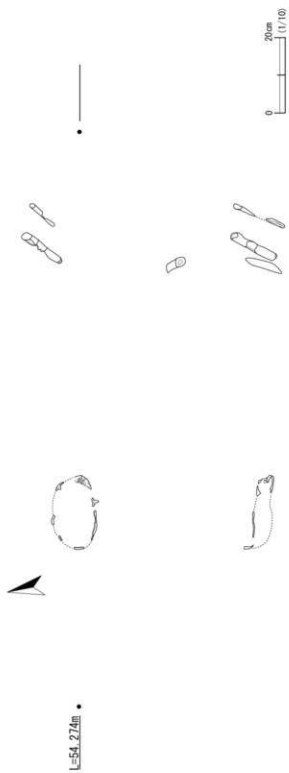
第2図 ST01 人骨の出土状況（埋葬姿勢）



第3図 ST02 人骨の出土状況 (睡眠姿勢)



第4図 ST03 人骨の出土状況(埋葬姿勢)



第5圖 ST04 人骨の出土状況（埋葬姿勢）

第6章 総括

熊本県教育委員会による託麻弓削遺跡群の発掘調査は、このたびの白川水系激甚災害対策特別緊急事業に伴うものが初となる。平成26年度に実施した調査1区から調査3区の調査成果については、既に報告しているとおりである（古城編2016）。

本章では、平成26年度から平成28年度にかけて実施した調査4区と調査5区の調査成果について、時代ごとに特徴的な遺構や遺物に絞って簡単ではあるが総括としてまとめてみたい。また、本章第3節において、これまでの熊本県教育委員会調査分も含めて、託麻弓削遺跡群の縄文時代の様相について若干触れることとする。

第1節 調査4区

調査4区では、遺構が確認されていない。発掘作業中、遺構と想定し調査を進めているが、最終的にはいづれも流れ込み、樹痕もしくは攪乱の一部との判断がくだされ、遺構と認定するには至っていないのは前述のとおりである。

しかし、土器等の遺物は、古代を中心に複数出土している。体部から底部まで残存していた土師器の杯はいずれも9世紀中葉から後半の所産と思われるものである。1点のみの出土ではあるが、黒色土器の椀はその特徴からいわゆる九州系の黒色土器A類であり、9世紀後半の所産と思われるものであった。土師器の椀は9世紀代、土師器の甕は9世紀前半代のもと思われるものであった。また土師器に比べ出土量の少なかった須恵器の杯は、9世紀中葉から10世紀初頭のもと思われる。したがって、その時期に幅はあるが9世紀代の生活域が4区周辺に存在したことは確かなようである。

また、少数ではあるが13世紀代と思われる龍泉窯系青磁が出土している。調査1区で12世紀代の龍泉窯系青磁が出土していることから、本遺跡群周辺に当該期の生活域が存在したようである。

第2節 調査5区

(1) 縄文時代

調査5区からは縄文時代後期の土器を主体に、大量の土器片が出土している。また、竪穴建物は検出できていないが、石組炬や土壇墓といった特徴的な遺構が検出されている。ここでは、縄文土器、石組炬、土壇墓に絞ってまとめてみたい。

縄文土器

今回の調査では、大量の縄文土器が出土した。基本土層3層から6層、とりわけ4層から5層において縄文時代後期の土器が大量に出土し、その数はコンテナ200箱を超える量である。前述のとおり、発掘作業では、平成27年度調査途中から出土位置の三次元情報（併せて出土層位とグリッド）を記録し取り上げているが、対象は全点ではないようで、層位だけ記録されているものやグリッドだけ記録されているものが多数存在する。そこで、報告書に図示した資料のみ、可能な範囲でその出土層位とグリッドを追及し作図したのが第153図～第160図である。今回は個体数ではなく、あくまでも破片点数でカウントし作図を試みた（なお、胴部下半から底部のみの資料は除外している）。第4章で図示した資料は、整理担当者が任意に選び出した資料ではあるが、本図により、ある程度の出土傾向を把握することはできると思う。

まず、第153図～第154図をみると、後期中葉の磨消縄文系の土器は、基本土層4層を中心に出土していることがわかる。出土したグリッドが不明なものも4層からの出土であった。出土したグリッドまでわか

るものでは 3425・3525・3523・3524 グリッドを中心に、調査区南側の西寄りに分布が集中している傾向が見て取れる。

次いで、第 155 図～第 157 図をみると後期初頭の阿高式系土器は、基本土層 5 層を中心に出土していることがわかる。出土したグリッドが不明なものも 4 層から 5 層の出土である。出土したグリッドまでわかるものでは 3325・3326・3423・3424・3523・3524 グリッドを中心に調査区中央から南側の東寄りに分布が集中する傾向が見て取れる。併せて、阿高式系土器に伴うと思われる無文土器（口縁部を肥厚させ、器面調整でも口縁部と胴部とを区別している土器が多い）は、第 158 図～第 159 図をみると基本土層 5 層を中心に出土していることがわかる。出土したグリッドまでわかるものでは 3325・3326・3523・3524 グリッドを中心に調査区中央と南側に分布が集中する傾向が見て取れる。おおよそ、阿高式系土器の分布状況と重なっており、特に出土点数の多いグリッドが共通していることがわかる。第 160 図をみると、少量出土した中津式や福田Ⅱ式土器は、基本土層 5 層、阿高式系土器の分布状況と重なっている。

これらのことから、調査区 5 区では、縄文時代後期中葉の磨消縄文系土器は基本土層 4 層、後期初頭の阿高式系土器は基本土層 5 層と、概ね層別的に出土していると言える。

なお、阿高式系土器は南福寺式土器が主体と考えられ、本来は細分が可能と思われるが、今回は出土資料の提示ということで御容赦願いたい。

石組炉

本調査区からは 4 基の石組炉を検出している。石組炉はどちらかといえば調査区壁際付近に点在し分布していた。第 4 章の繰り返しになるが、特徴としては、①人頭大もしくは拳大程度の大きさの敷石をもつこと、②敷石の周囲に扁平な石を斜めに立て円形に配して構築すること、③石の表面は赤色や黒色に変色しているものが多いことが共通している。また石組炉によっては、円形に配された扁平な石の表面に剥離が認められるものがある。以上のことから実際に炉として使用された石組炉と考えている。

前述のとおり、石組炉周辺の遺構検出作業は念入りに行ったが、竪穴建物と思われる掘り込みや柱穴の痕跡をみつけることはできなかった。したがって、屋内の遺構と言えし積極的な理由が見当たらない。消極的な理由ではあるが、4 基の石組炉は屋外のものと考えておきたい。

また、4 基の石組炉は託麻弓削遺跡群の基本土層で硬質砂層と呼称した基本土層 6 層を掘り込んで構築しており、縄文時代後期の遺物が多量に出土した層より下位で検出している。なかでも SLO3 は調査区西壁にかかるように検出されたが（第 21 図）、石組炉の石材の直上の位置から鯨骨椎骨痕が底部外面に確認できる土器片（第 21 図 3）が出土している。阿高式系土器の破片であり、本遺跡から多量に出土している南福寺式土器の深鉢の底部破片である可能性が高いと思われる。また SLO4 の花卉状に囲む石材の直上から出土した土器片（第 22 図 4）も縄文時代後期のものと思われるものである。熊本県下において石組炉が形成された初源は、ワクド石遺跡の三万田式期の住居とされるが（九州縄文研究会 2008）、石組炉からの出土遺物や石組炉周辺から出土した縄文土器から、4 基の石組炉は縄文時代後期のものと推測される。

土壇墓

本調査区からは 4 基の土壇墓を検出している。土壇墓は調査区中央に点在し分布していた。4 基とも平面形態は長楕円形を呈する。ST01 は主軸約 103cm、ST02 は主軸約 113cm、ST03 は主軸約 128cm、ST04 は主軸約 127cm と、約 100～130cm 程の規模に取まるものであり、ほぼ同規模といえる。埋葬姿勢はいずれも仰臥と共通している。性別の特定までできた遺構は ST01 と ST02 の 2 基だけであるが、いずれも単体埋葬と考えられている。

九州における縄文時代の出土人骨と埋葬を集めた坂本嘉弘氏によれば、九州の縄文時代後期・晩期と報告された出土人骨は40数遺跡200体近いとされる。埋葬姿勢がわかるものでは、仰臥屈葬が89例と最も多く、単体埋葬が圧倒的に多い。規模は、長軸140cm前後が一つの目安になると思われる(坂本2007)。本調査区で検出された土壌墓の状況は、主軸が若干短いもの、九州で多くみられる事例と共通している。

4基の土壌墓内から時期を特定できる遺物は出土していないが、遺構検出面、土壌墓周辺から出土する土器及び九州における埋葬人骨の検出事例を参考にすると、縄文時代後期の土壌墓と推測してよいのではないかと考えている。

小結

石組4基、土壌墓4基はいずれも基本土層6層上面において検出している。検出状況が最もわかりやすい石組SL03は、6層を掘り込んで構築しており、5層中に本来の掘削面があるものと想定される。土壌墓は九州で多くみられる事例に比べ主軸が若干短いこと、墓内に埋め戻された埋土は検出しづらいこと、などといった点から5層中に本来の掘削面を想定することができる。今回提示した出土傾向図によれば、5層は阿高式系土器が多量に出土している層位である。また、土壌墓が検出されたグリッドとも重なることがわかる。石組4基SL03に至っては阿高式系土器の底部をほぼ伴った状態で検出している。したがって、石組4並びに土壌墓は、阿高式系土器の時期に近い時期の遺構と想定してよいのではないかと考えている。

(2) 弥生時代

調査5区では竪穴建物6軒を検出している。攪乱等により破壊されている部分はあるが、次項で述べる古代の竪穴建物と異なり、複雑な重複関係は認められなかった。調査区中央に点在し分布している点も異なっている。竪穴建物6軒のうち4軒は、建物中央に炬を持つものである。平面形態は、隅丸方形もしくは隅丸長方形と想定されるものである。

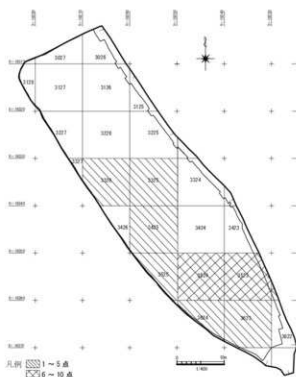
竪穴建物からは弥生土器が出土しているが、その数は決して多くはない。出土した弥生土器は概ね前期末から中期のものである。遺構外から出土した弥生土器も、概ね前期末から中期のものであった。縄文時代や古代に比べて遺物の出土量は少なかった。

遺構の重複関係が認められないため、時期の細分は難しいが、調査5区周辺に展開した弥生時代の集落は、概ね前期末から中期に限定されるようである。

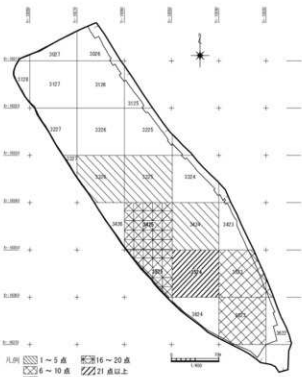
(3) 古代以降

調査5区では、竪穴建物14軒、掘立柱建物1棟を検出した。竪穴建物は重複関係が激しく、遺構認定やその前後関係に曖昧な部分が残っている。そこで、遺構として捉え易いカマドの有無に着目すると、竪穴建物14軒のうち、カマドを有するものは3軒、カマドの燃焼部と推定される土坑を有するものは1軒ある。これら4軒の遺構認定には、大きな問題はないものと考えている。この4軒の竪穴建物をもとに検討してみたい。

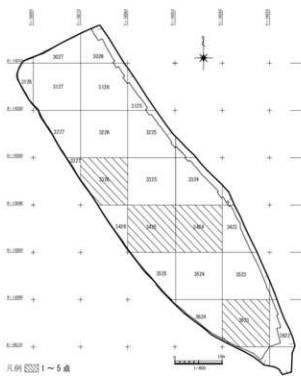
4軒の竪穴建物はいずれも平面形態が方形を呈するものである。比較的遺存状況が良好で規模を迫るものが3軒存在する。SI10は長軸約2.75m、SI01は長軸約2.82m、SI05は長軸約3.35mを測り、いずれも4m未満と小型の竪穴建物である。4軒の竪穴建物内から出土した土器には、回転ヘラミガキが施された土師器の杯や碗があり、概ね8世紀末から9世紀初頭の所産と考えられる。熊本県内でみつかるとこの時期の竪穴建物は4m未満の小型のものであり、出土遺物の傾向からも価値はないものと考えられる。



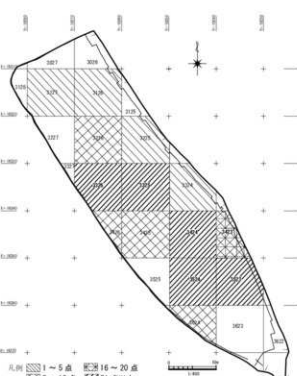
第153图 5区3層 (磨消縄文系) 実測图



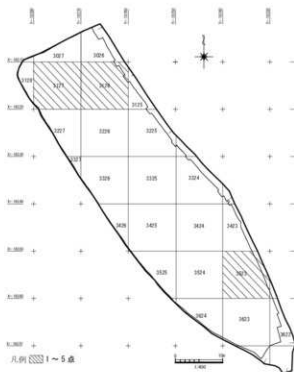
第154图 5区4層 (磨消縄文系) 実測图



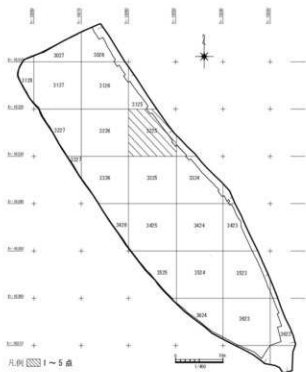
第155图 5区4層 (阿高式系) 実測图



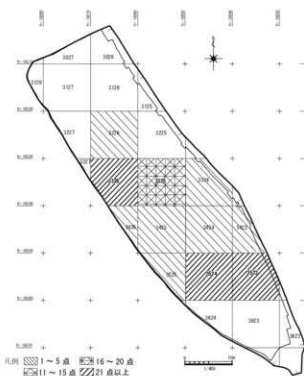
第156图 5区5層 (阿高式系) 実測图



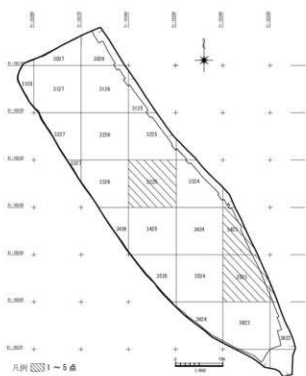
第157图5区6層(阿高式系)実測图



第158图5区4層(無文)実測图



第159图5区5層(無文)実測图



第160图5区5層(中津式・福田KⅡ式)実測图

また、カマドの方角に着目すると、東側にカマドを造りつけるのはSI14とSI10の2軒あり、北側にカマドを造りつけるのはSI05とSI01の2軒ある。東カマドの2軒は離れた場所に位置するが、北カマドの2軒は極めて隣接した位置にある。したがって、北カマドの竪穴建物は同時期とは考えづらく、二期には細分できそうである。

一方、掘立柱建物は、竪穴建物の集中した範囲からやや離れた北側に位置していた。当該期の竪穴建物と重複関係はなく、出土遺物は土師器の甕もしくは壺の口縁部破片1点であり、出土遺物からの時期比定は難しい。掘立柱建物の規模は桁行3間・梁行2間で、長軸はほぼ北向きである。熊本県内では、竪穴建物から掘立柱建物に「9世紀前半のうちに移行が完了していた」（網田1997）と考えられている。また当該期の掘立柱建物は、桁行3間・梁行2間で、長軸はほぼ北向きのものが多いとされる。

よって、調査5区周辺には、8世紀末から9世紀前半までに少なくとも二期に渡って、竪穴建物や掘立柱建物で構成される集落が展開していたものと推測される。

第3節 縄文時代の託麻弓削遺跡群

託麻弓削遺跡群の性格については、調査1区から調査3区の調査成果を踏まえて、既にまとめられている（古城編2016）。今回の調査4区と調査5区の発掘調査は、その成果に変更を迫るものではない。しかしながら、縄文時代については、若干の補足を行える部分がある。

もともと託麻弓削遺跡群は、昭和56年に「弓削宮原遺跡」と「弓削上古閑遺跡（トンノマエ（天神林）地点とイデミノ地点からなる）」を併せて託麻弓削遺跡群とされている。

昭和46年度に刊行された『熊本市東部地区文化財調査報告書』によれば、「弓削上古閑遺跡（トンノマエ地点）」の河川に近い場所で縄文時代後期の西平式土器や打製石斧、磨製石斧が表面採取されている（上野1973）。平成8年度に刊行された『新熊本市史』では辛川式土器が紹介されている（富田1997）。それぞれ同一の資料を指しているのかは不明だが、西平式として報告されている土器は、辛川式のことと推測される。「トンノマエ地点」は調査5区に隣接しているが、前節のとおり、今回の調査で縄文時代後期の磨消縄文系土器である辛川式土器がまとまって出土している。また、磨製石斧は図示する資料を絞っているが、実際はかなりの量が出土している。今回の調査成果は、かつての表面採取の結果を裏付けるものといえる。

一方、調査5区では黒色磨研土器や組織痕土器も出土しているが、阿高式土器や磨消縄文系土器の出土量に比較すれば、量的には限られている。調査2区は黒色磨研土器が主体であり、凸帯文土器も一定量出土しているとされる。『新熊本市史』によれば、「弓削宮原遺跡」は黒色磨研土器が主体である。

以上のことから、託麻弓削遺跡群における縄文時代後期初頭から中葉の生活域の主体は、「弓削上古閑遺跡」、現在の託麻弓削遺跡群の東側であり、縄文時代後期後半から晩期にかけての生活域の主体は「弓削宮原遺跡」、現在の託麻弓削遺跡群の西側であったことが推測される。

論文【引用・参考文献】

- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 九州縄文研究会編 2000 『九州の縄文住居』 九州縄文研究会
- 九州縄文研究会編 2002 『九州の縄文墓制』 九州縄文研究会
- 九州縄文研究会編 2008 『九州の縄文住居Ⅱ』 九州縄文研究会
- 九州縄文研究会編 2010 『九州の縄文時代中期土器を考える』 九州縄文研究会
- 九州縄文研究会編 2011 『九州における縄文時代後期前葉の土器』 九州縄文研究会
- 九州縄文研究会編 2017 『九州の縄文時代後期中葉土器』 九州縄文研究会
- 荒木隆宏 2003 「阿高式土器の細分と編年」『先史学・考古学論究Ⅳ』 龍田考古会
- 網田龍生 1994 「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究』 龍田考古会
- 網田龍生 1994 「肥後における回転台土師器の成立の展開」『中近世土器の基礎的研究』X 日本中世土器研究会
- 網田龍生 1997 「肥後における壑穴住居の終焉」『肥後考古』第10号 肥後考古学会
- 網田龍生 2001 「肥後における須恵器生産の終焉」『中世土器研究論集』中世土器研究会
- 網田龍生 2003 「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』 龍田考古会
- 石田由紀子 2007 「縄目文様を読む」『日本の美術』第498号 縄文土器後期 至文堂
- 石田由紀子 2008 「中津式・福田Ⅱ式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 乙益重隆・前川威洋 1969 「九州」『新版考古学講座』第3巻 雄山閣
- 小林久雄 1939 「九州の縄文土器」『人類学・先史学講座 11巻』(1967『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会所収)
- 坂本嘉弘 2007 「縄文-弥生移行期の葬制変化(九州)」『縄文時代の考古学』9 同成社
- 佐原 眞 1977 「石斧論—斧から縦斧へ—」『考古論集』(2005『佐原眞の仕事 道具の考古学』岩波書店所収)
- 佐原 眞 1981 「縄文施文法入門」『縄文土器大成』3 講談社
- 佐原 眞 1982 「石斧再論」『古文化論集』(2005『佐原眞の仕事 道具の考古学』岩波書店所収)
- 佐原 眞 1994 『斧の文化史』 東京大学出版会
- 鈴木道之助 1991 『図録 石器入門辞典 縄文』 柏書房
- 水ノ江和同 1993 「九州の緑帯土器」『古文化談叢』第30集(上) 古文化研究会
- 水ノ江和同 2005 「縄文時代の石斧研究」『石器原産地研究会会誌』5 石器原産地研究会
- 水ノ江和同 2009 「九州における縄文時代中期と後期の境界問題」『古文化談叢』第62集 古文化研究会
- 水ノ江和同 2008 「九州磨治縄文系土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 田中良之 1979 「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集 古文化研究会
- 田中良之 1981 「阿高式土器」『縄文時代の研究』第4巻 雄山閣
- 田中良之 1988 「阿高式土器様式」『縄文土器大観 中期Ⅱ』小学館
- 富井 眞 2008 「並木式・阿高式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 東 和幸 2008 「滑石混入土器」『縄文時代の考古学』7 同成社
- 松浦史浩 2008 「貝殻文」『縄文時代の考古学』7 同成社
- 宮地聡一郎 2008 「黒色磨研土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 宮地聡一郎 2008 「凸帯文系土器(九州地方)」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 渡辺 誠 2006 「熊本市上南部遺跡出土の組織痕土器について」『名古屋大学博物館報告』No.22

報告書・図録【引用・参考文献】

- 大平村教育委員会編 1990 『大平村文化財調査報告第5集 土佐井地区道跡』
- 大分県教育委員会編 1993 『宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）飯田二反田道跡』
- 太宰府市教育委員会編 2000 『太宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編一』 太宰府市教育委員会
- 熊本市教育委員会編 1973 『熊本市東部地区文化財調査報告書』 熊本市教育委員会
- 熊本市教育委員会編 1984 『吉原遺跡発掘調査報告書（昭和56・57年度）』 熊本市教育委員会
- 熊本市教育委員会編 1995 『熊本市埋蔵文化財調査年報』第1号 熊本市教育委員会
- 熊本市編 1996 『新熊本市史』資料編第1巻 熊本市
- 熊本市教育委員会編 2009 『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集』 熊本市教育委員会
- 熊本市教育委員会編 2016 『熊本市埋蔵文化財調査年報』第18号 熊本市教育委員会
- 富田絏一編 1986 『戸坂遺跡発掘調査報告書』 熊本市教育委員会
- 富田絏一編 1996 『北久根山』 肥後上代文化研究会
- 網田龍生編 1993 『大江遺跡群Ⅱ』 熊本市教育委員会
- 中里伸明編 2009 『戸坂遺跡Ⅱ』 熊本市教育委員会
- 三好栄太郎編 2014 『法王鶴遺跡Ⅰ』 熊本市教育委員会
- 古森政次編 1994 『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告第144集 熊本県教育委員会
- 池田明生編 2001 『石の本遺跡群』Ⅲ 熊本県文化財調査報告第194集 熊本県教育委員会
- 廣田静学編 2001 『石の本遺跡群』Ⅳ 熊本県文化財調査報告第195集 熊本県教育委員会
- 亀田 学編 2001 『梅ノ木遺跡群』Ⅱ 熊本県文化財調査報告第199集 熊本県教育委員会
- 中村幸弘編 2002 『石の本遺跡群』Ⅴ 熊本県文化財調査報告第205集 熊本県教育委員会
- 古城史雄編 2016 『託麻弓削遺跡群・中江遺跡』熊本県文化財調査報告第321集 熊本県教育委員会
- 山崎純男編 2007 『大矢遺跡』天草市文化財調査報告書第1集 天草市教育委員会
- 熊本県地質図編纂委員会編 2008 『熊本県地質図（10万分の1）』
- 東海大学校地内遺跡発掘調査団編 2003 『歴史と結びの考古学』

写 真 图 版



4区
調査区 北西→



4区
完掘状況 東→



4区
完掘状況 南→



4区
完掘状況 南→



4区
完掘状況 南→



4区
白色粘土完掘状況 西→



5区
完掘状況 南西→



5区
完掘状況 南→



5区
完掘状況 南→



5区
完掘状況 南東→



5区
完掘状況 北東→



5区 S101
石組の出土状況



5区 SL01
石組が完掘状況 南西→



5区 SL01
当初の石組が検出状況 北→



5区 SL01・SL02
石組が検出状況 南西→



5区 SL02
半截状況 北→



5区 SL02
石組の出土状況



5区 SL02
石組の完掘状況 北→



5区 SL03
石組¹検出状況 北東→



5区 SL03
石組¹完掘状況 東→



5区 SL04
石組¹検出状況 東→



5区 SL04
石組①検出状況 東→



5区 SL04・SK33
検出状況 西→



5区 SK33
石組①検出状況 東→



5区 SK33
第2面検出状況 南→



5区 ST01
人骨出土状況 東→



5区 ST01
人骨出土状況 北→



5区 ST02
人骨出土状況 南西→



5区 ST03
人骨出土状況 東→



5区 ST04
人骨出土状況



5区
人骨出土状况 西→



5区
人骨出土状况 北→



5区
兽骨出土状况



5区
獸骨出土狀況



5区 SX03
完掘狀況 西→



5区 遺構外
台石出土狀況



5区 SI15
完掘状況 西→



5区 SI16
完掘状況 東→



5区 SI17
遺物出土状況



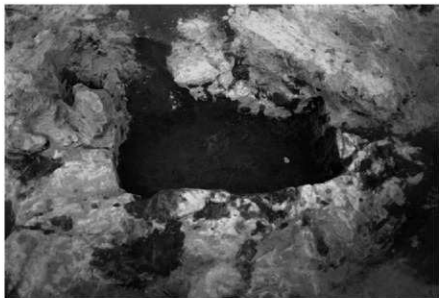
5区 SI18
完掘状況 東→



5区 SI19
完掘状況 南東→



5区 SI20
埋土②層上面掘削状況 南東→



5区 SK22
完掘状况



5区 SX01
完掘状况



5区 SI01・SI02
完掘状况 南→



5区 SI02(P021)
遺物出土状況 北西→



5区 SI05
埋土②層上面掘削状況 南→



5区 SI08・SI09
完掘状況



5区SI10
遺物出土状況



5区SI10
埋土③層上面掘削状況



5区SI13
完掘状況



5区 SI14
完掘状況



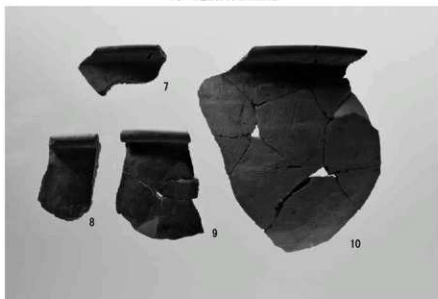
5区 SK01
遺物出土状況



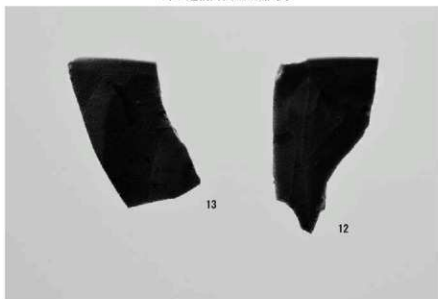
5区 SK02・SK14
完掘状況



4区 遺構外出土土器



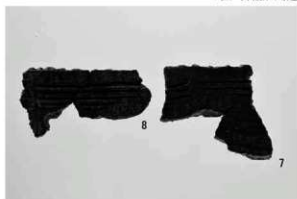
4区 遺構外出土土器 裏



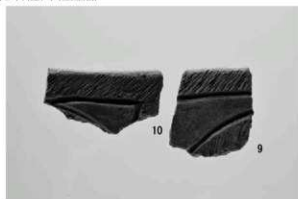
4区 出土 龍泉窯系青磁



5区 石組埴師周辺及び石組埴師出土土器



5区 縄文土器(前期)



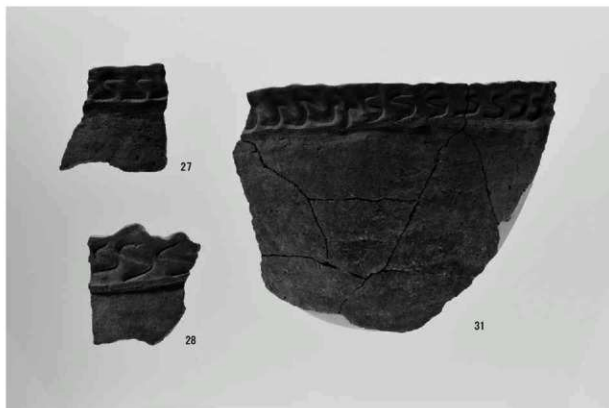
5区 縄文土器(後期初頭)



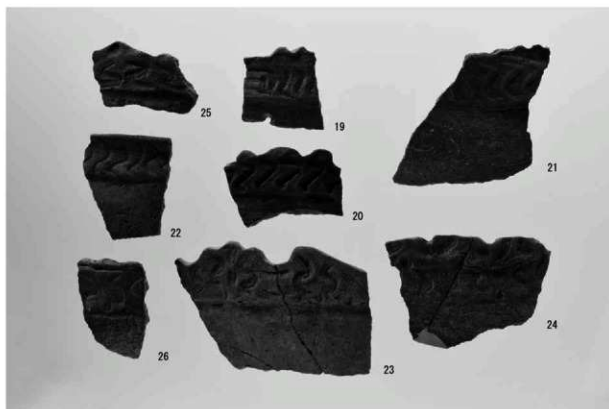
5区 縄文土器(後期初頭)



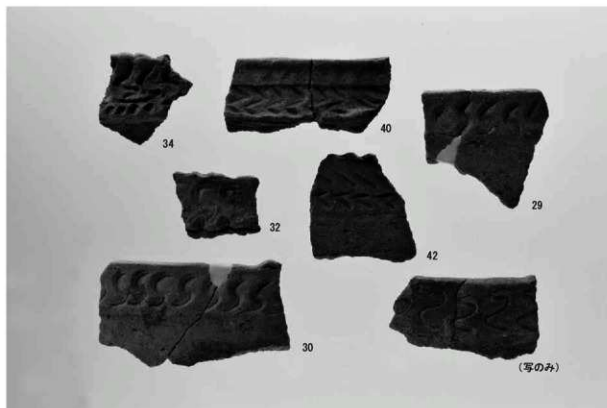
5区 縄文土器(後期初頭)



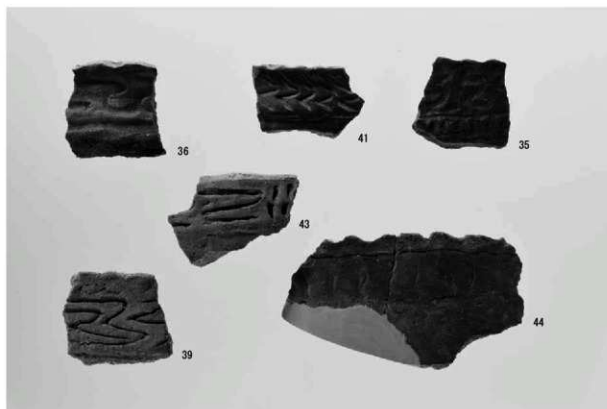
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



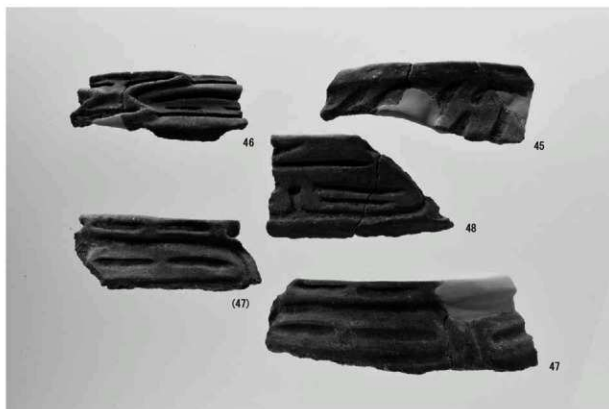
5区 縄文土器(後期初頭)



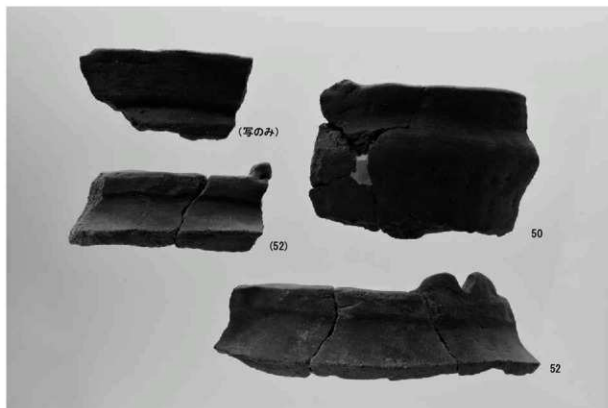
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



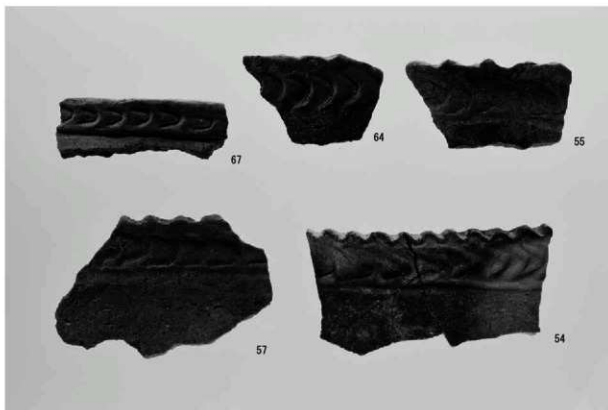
5区 縄文土器(後期初頭)



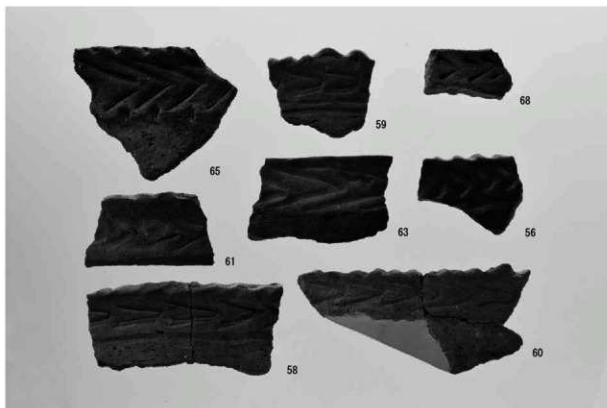
5区 縄文土器(後期初頭)



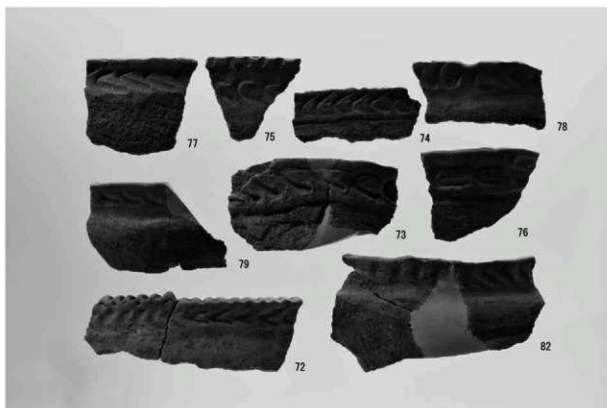
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



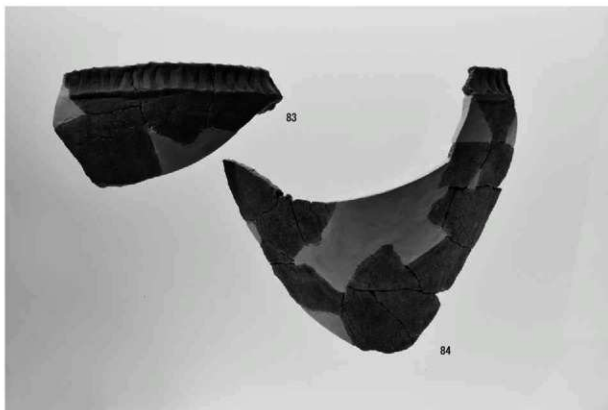
5区 縄文土器(後期初頭)



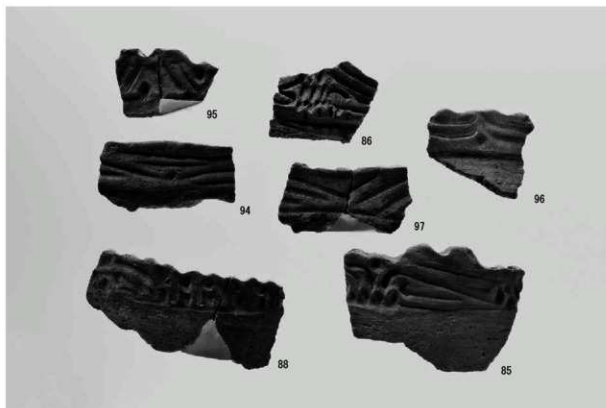
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



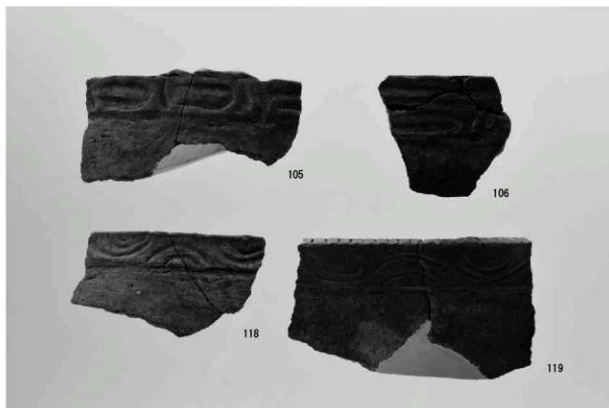
5区 縄文土器(後期初頭)



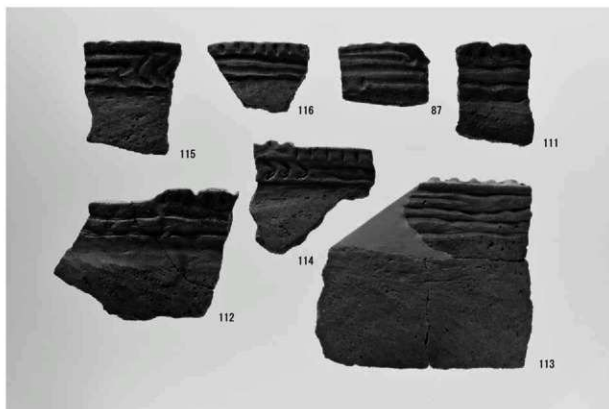
5区 縄文土器(後期初頭)



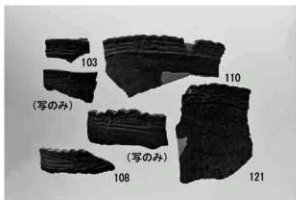
5区 縄文土器(後期初頭)



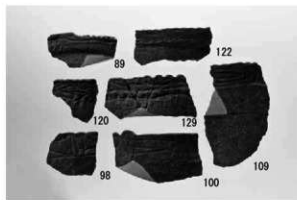
5区 縄文土器(後期初頭)



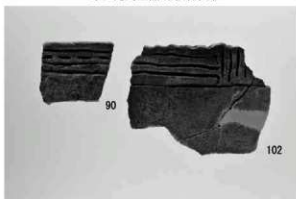
5区 縄文土器(後期初頭)



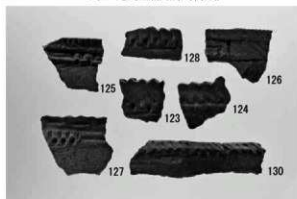
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



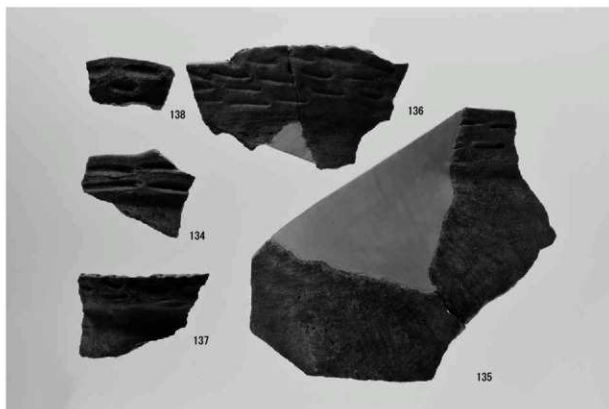
5区 縄文土器(後期初頭)



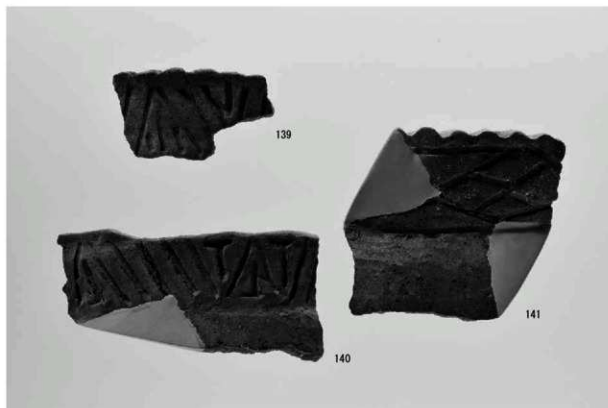
5区 縄文土器(後期初頭)



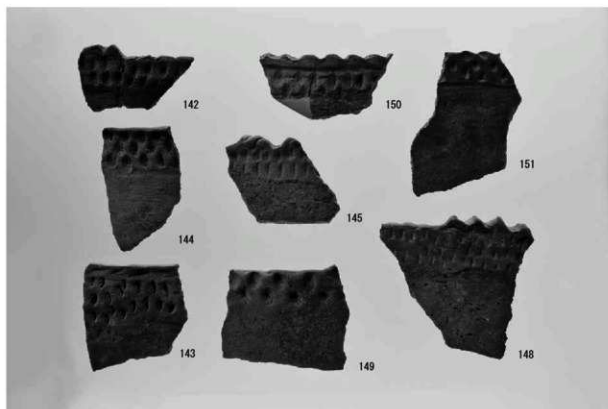
5区 縄文土器(後期初頭)



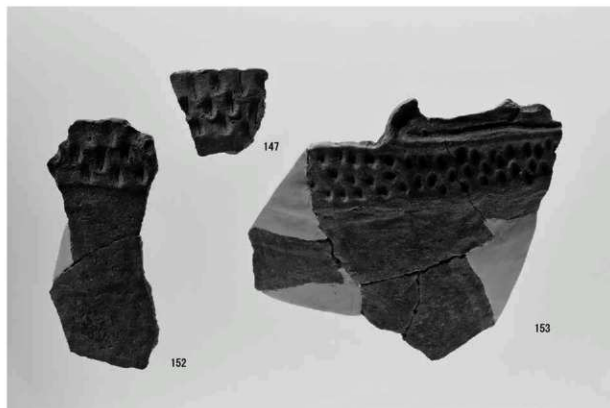
5区 縄文土器(後期初頭)



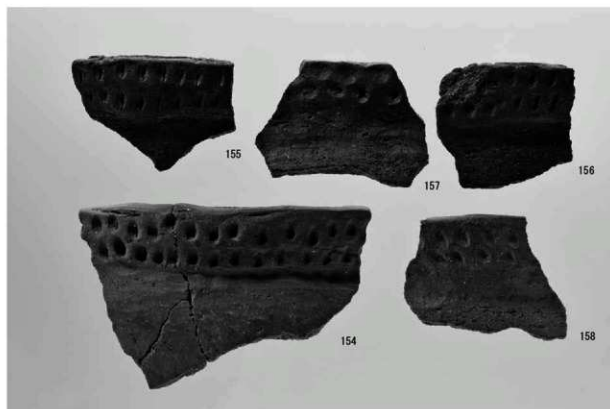
5区 縄文土器(後期初頭)



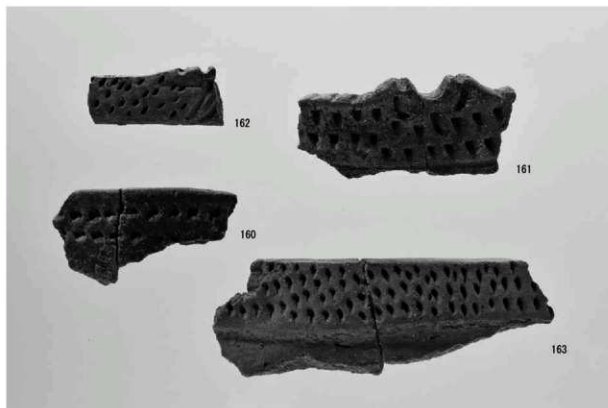
5区 縄文土器(後期初頭)



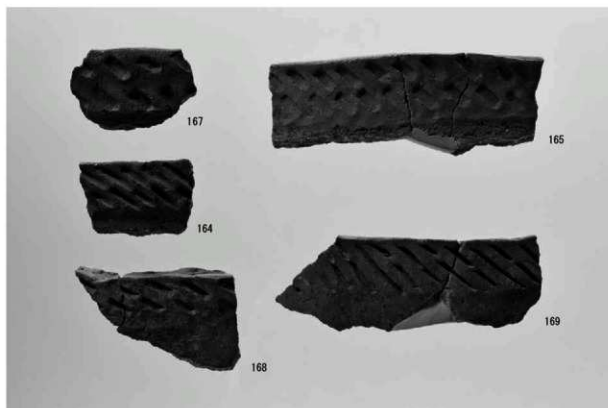
5区 縄文土器(後期初頭)



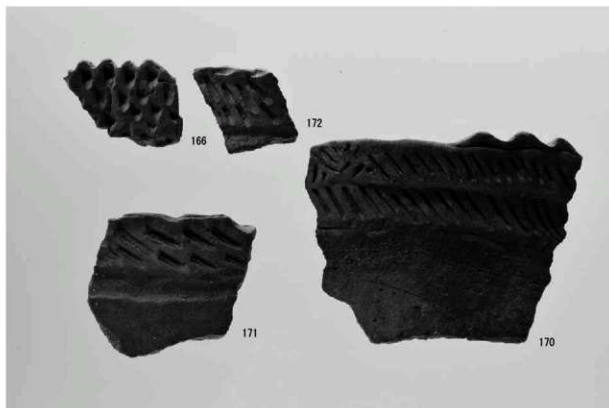
5区 縄文土器(後期初頭)



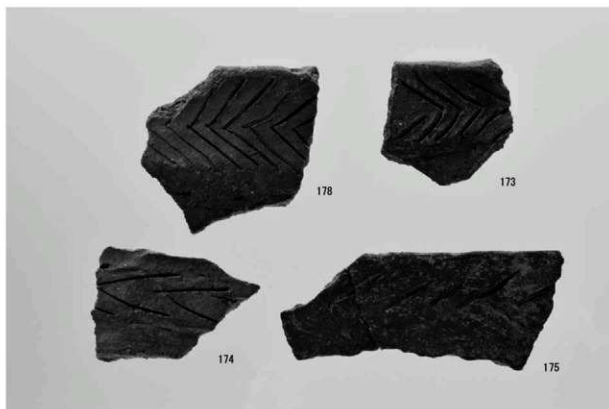
5区 縄文土器(後期初頭)



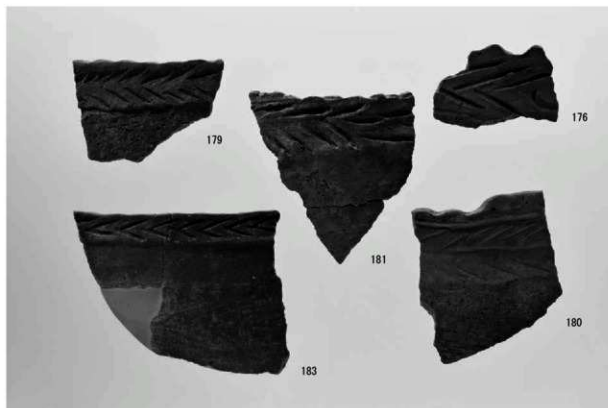
5区 縄文土器(後期初頭)



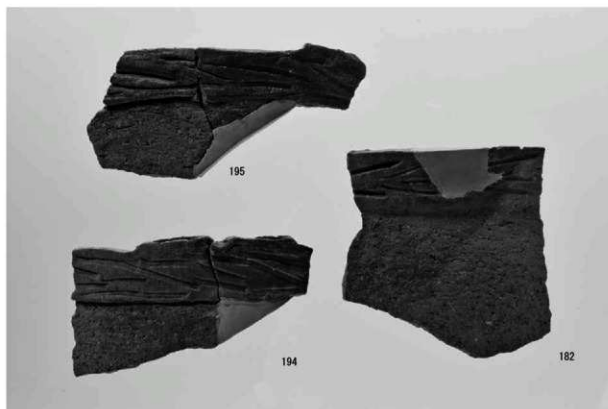
5区 縄文土器(後期初頭)



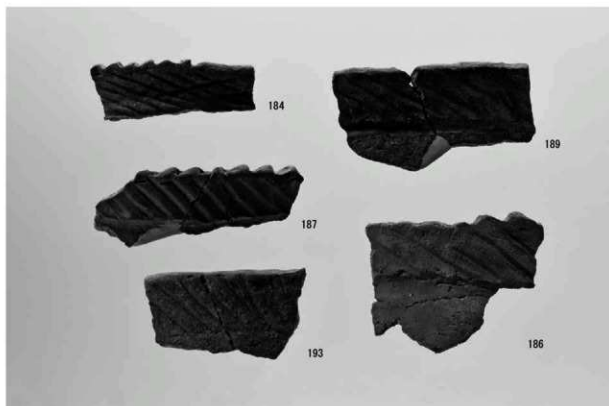
5区 縄文土器(後期初頭)



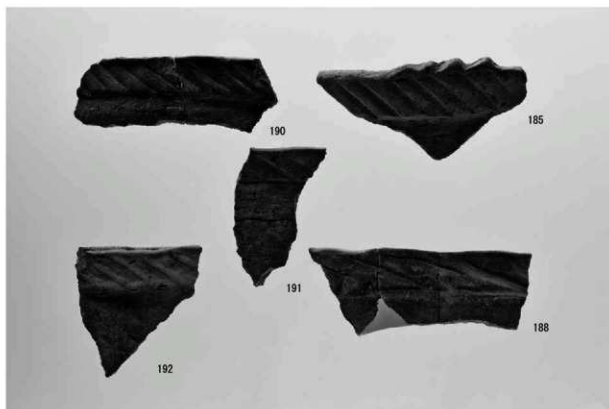
5区 縄文土器(後期初頭)



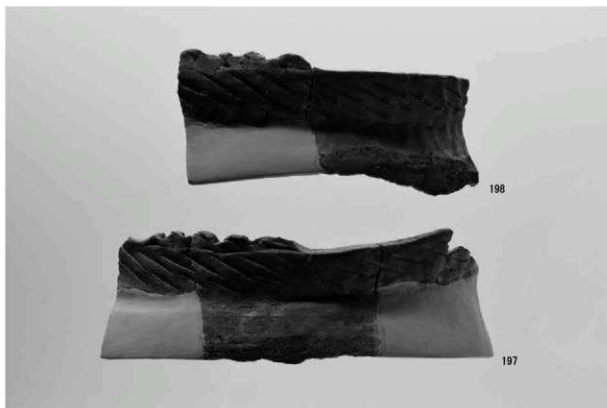
5区 縄文土器(後期初頭)



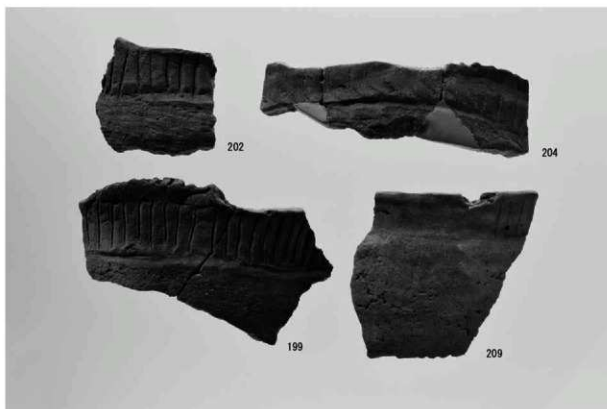
5区 縄文土器(後期初頭)



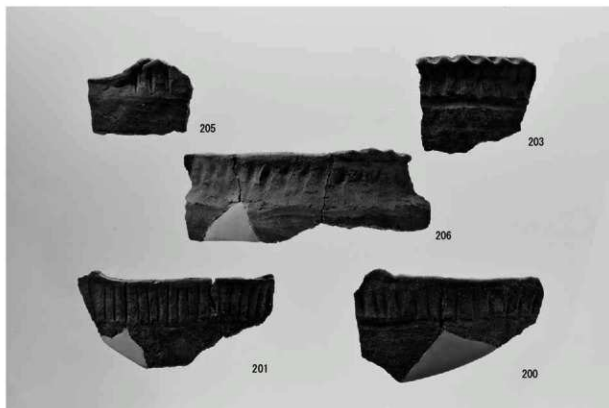
5区 縄文土器(後期初頭)



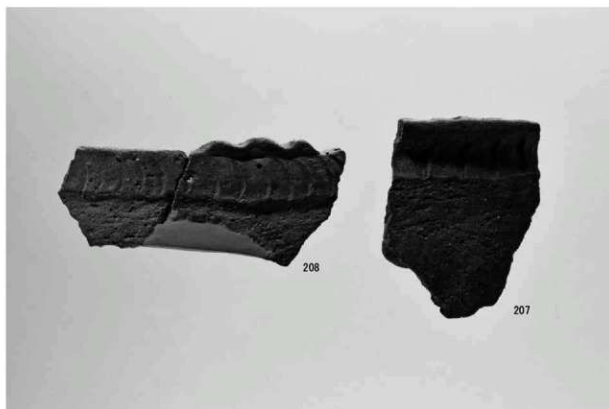
5区 縄文土器(後期初頭)



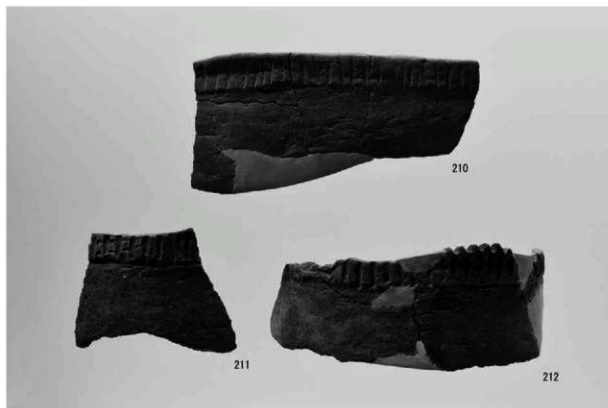
5区 縄文土器(後期初頭)



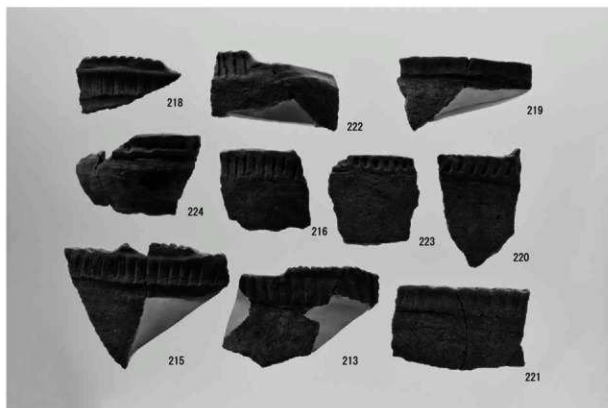
5区 縄文土器(後期初頭)



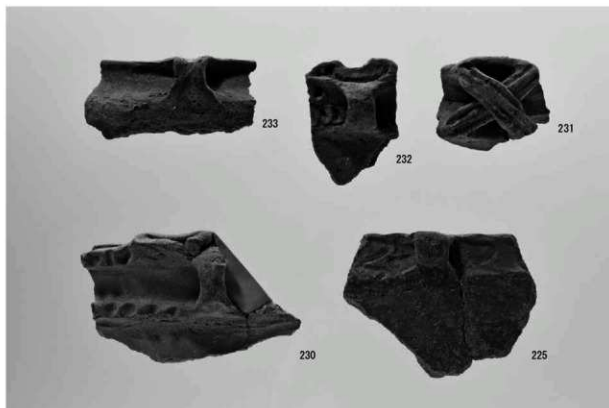
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



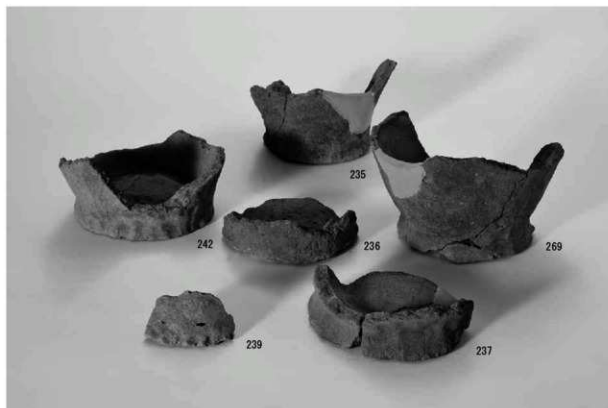
5区 縄文土器(後期初頭)



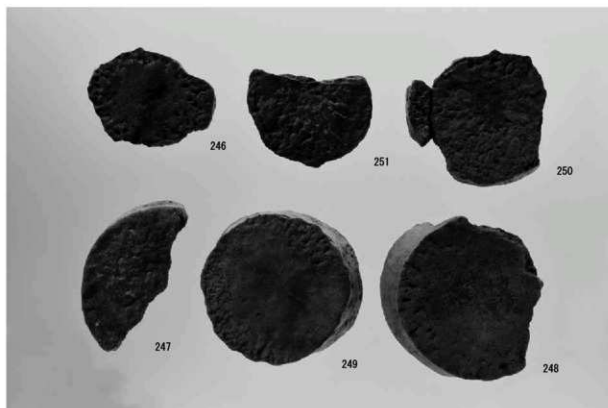
5区 縄文土器(後期初頭)



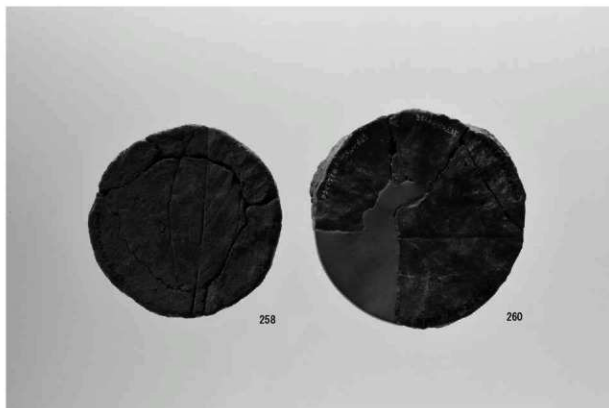
5区 縄文土器(後期初頭)



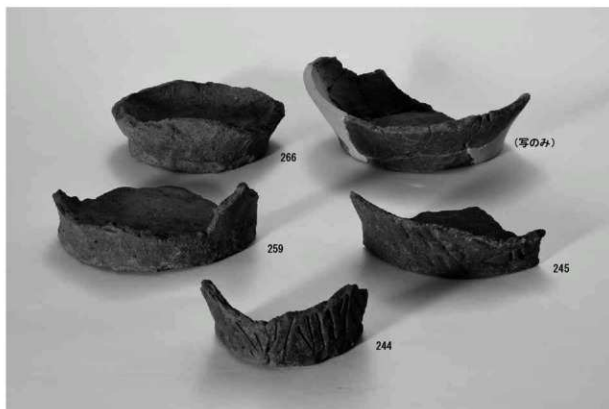
5区 縄文土器(後期初頭)



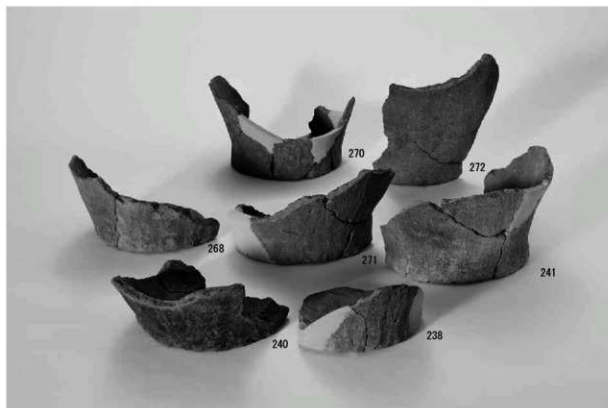
5区 縄文土器(後期初頭)



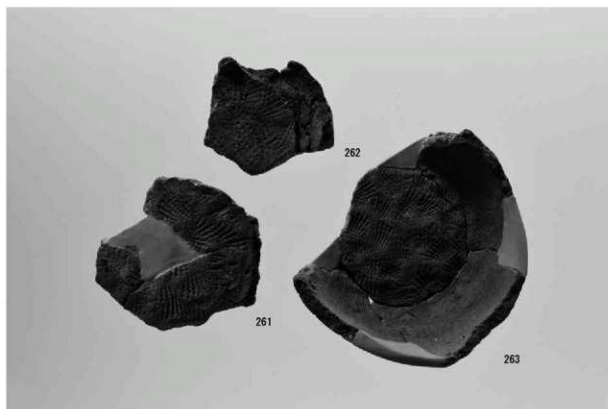
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



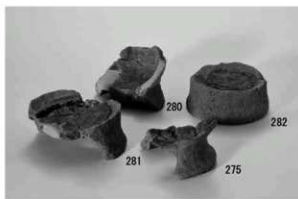
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



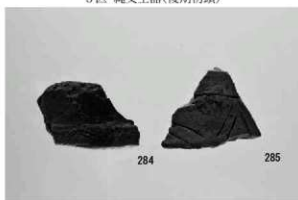
5区 縄文土器(後期初頭)



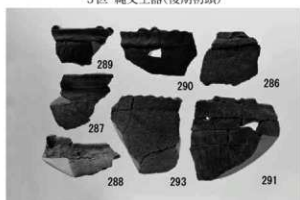
5区 縄文土器(後期初頭)



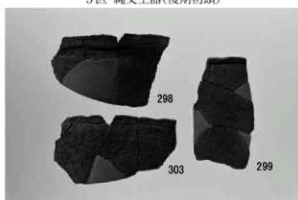
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



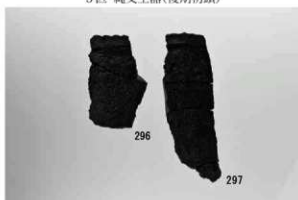
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



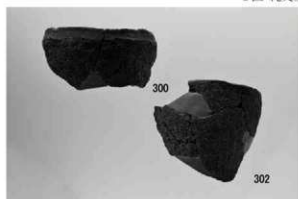
5区 縄文土器(後期初頭)



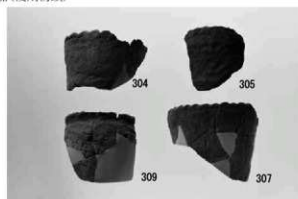
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



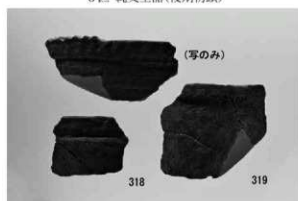
5区 縄文土器(後期初頭)



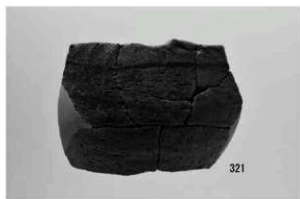
5区 縄文土器(後期初頭)



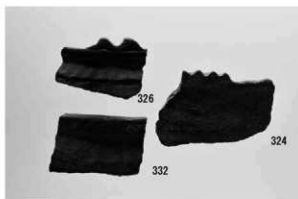
5区 縄文土器(後期初頭)



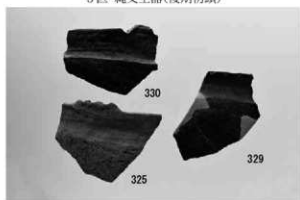
5区 縄文土器(後期初頭)



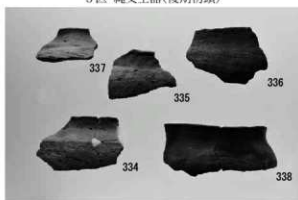
5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



5区 縄文土器(後期初頭)



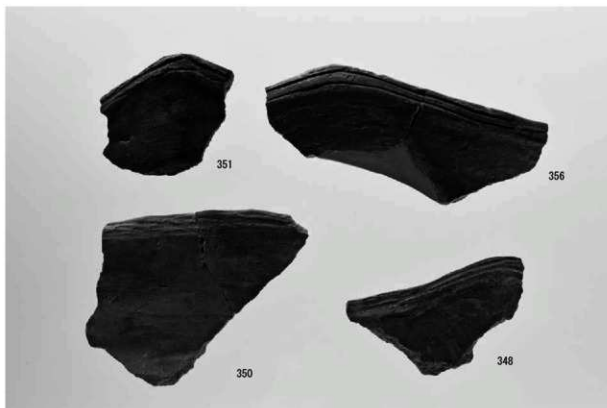
5区 縄文土器(後期前葉)



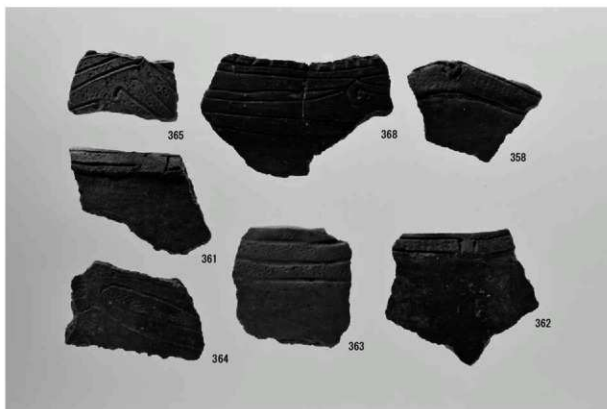
5区 縄文土器(後期中葉)



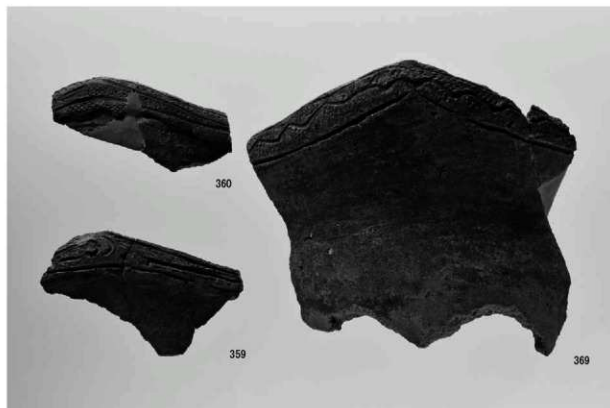
5区 縄文土器(後期中葉)



5区 縄文土器(後期中葉)



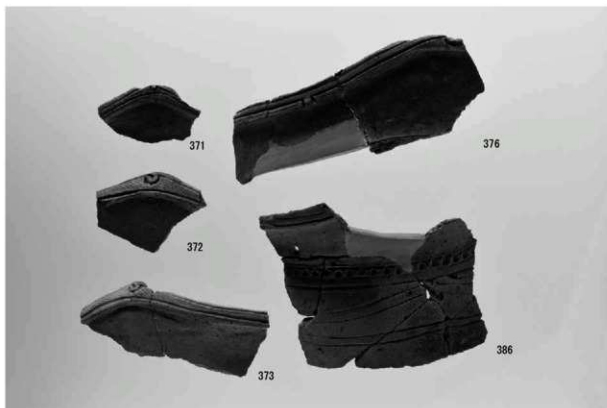
5区 縄文土器(後期中葉)



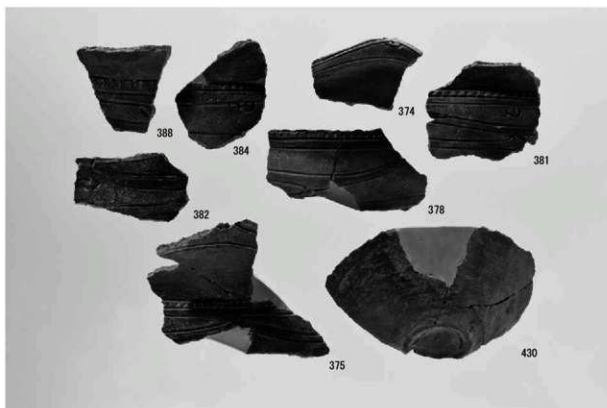
5区 縄文土器(後期中葉)



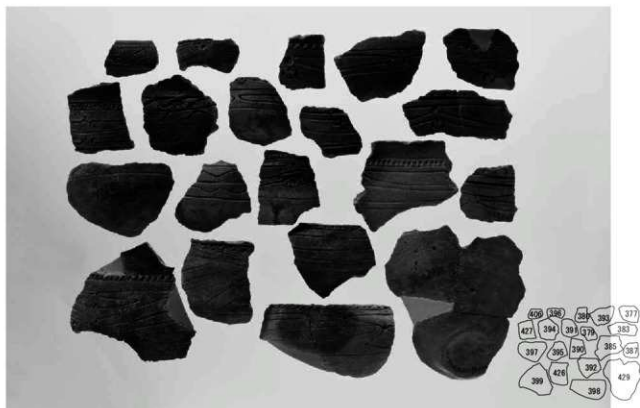
5区 縄文土器(後期中葉)



5区 縄文土器(後期中葉)



5区 縄文土器(後期中葉)



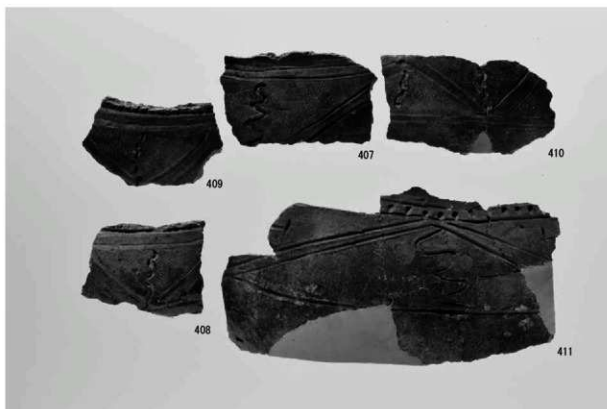
5区 縄文土器(後期中葉)



5区 縄文土器(後期中葉)



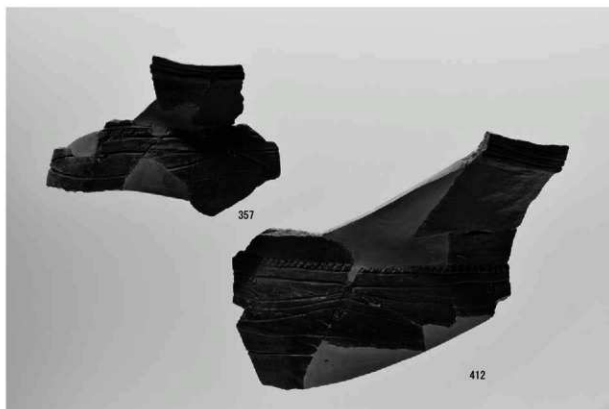
5区 縄文土器(後期中葉)



5区 縄文土器(後期中葉)



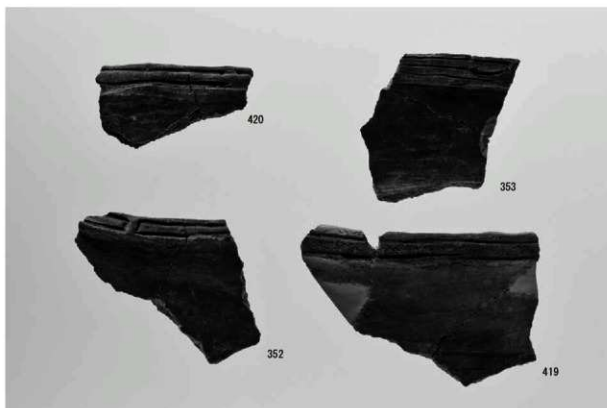
5区 縄文土器(後期中葉)



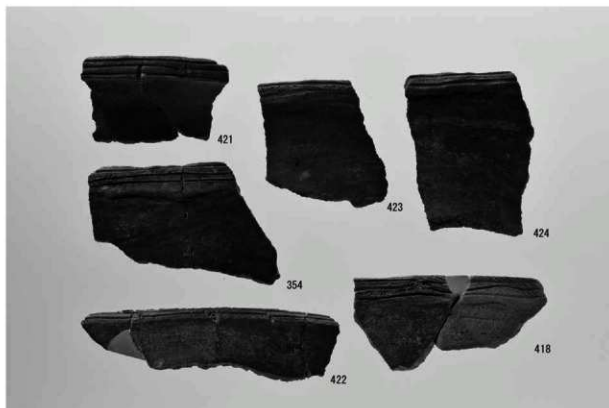
5区 縄文土器(後期中葉)



5区 縄文土器(後期中葉)



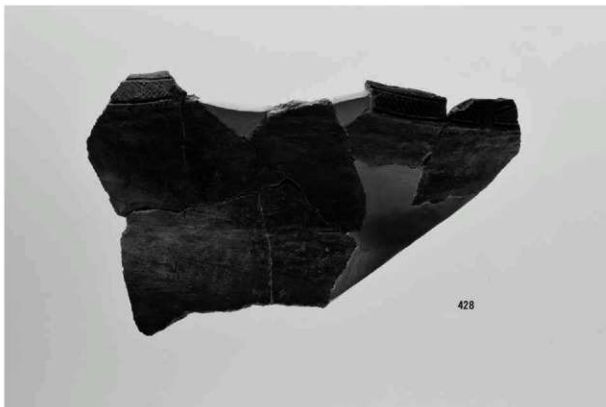
5区 縄文土器(後期中葉)



5区 縄文土器(後期中葉)



5区 縄文土器(後期中葉)



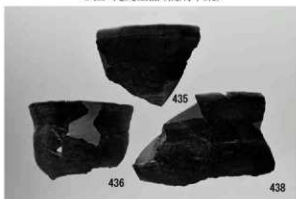
5区 縄文土器(後期中葉)



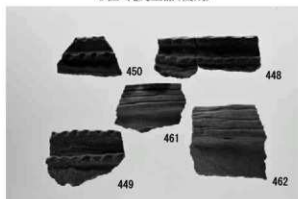
5区 縄文土器(後期中葉)



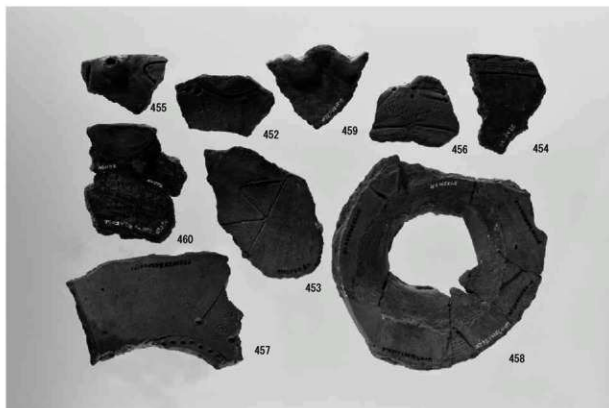
5区 縄文土器(後期)



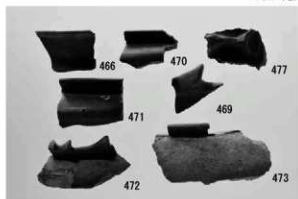
5区 縄文土器(後期中葉)



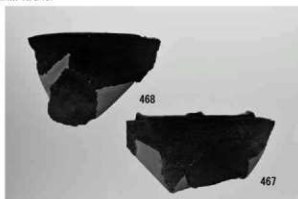
5区 縄文土器(後期)



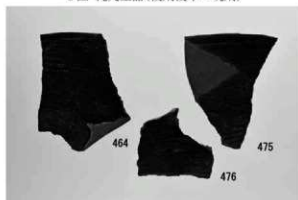
5区 縄文土器(後期)



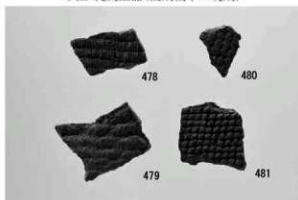
5区 縄文土器(後期後半～晩期)



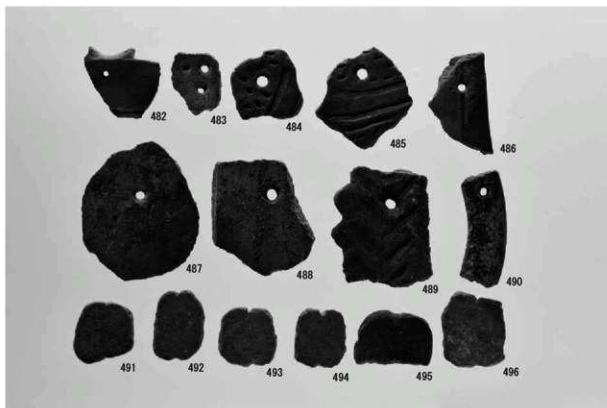
5区 縄文土器(後期後半～晩期)



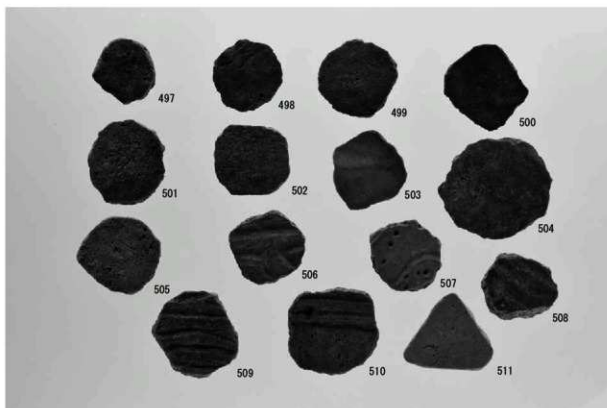
5区 縄文土器(後期後半～晩期)



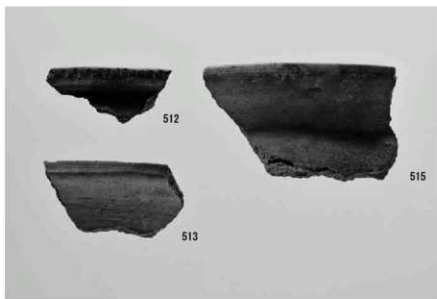
5区 縄文土器(晩期)



5区 出土 有孔土器片・土器片錘



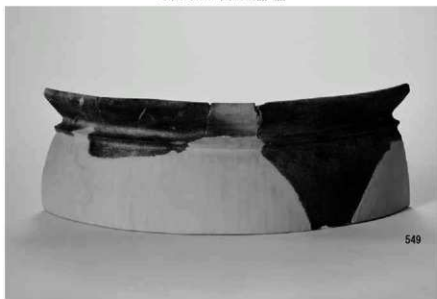
5区 出土 土製円盤



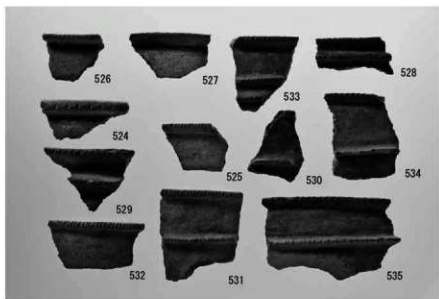
5区 SI15(No.512・No.513)・SI18(No.515) 出土土器 甗



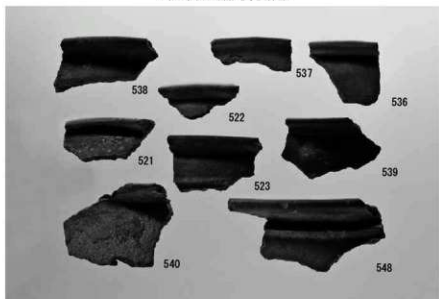
5区 SI17 出土土器 甗



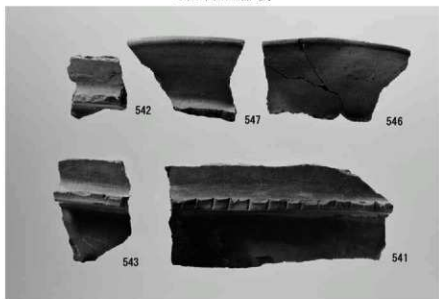
5区 遺構外出土土器 甗



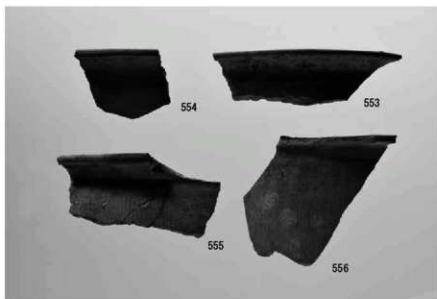
5区 出土土器 甗(刻目)



5区 出土土器 甗



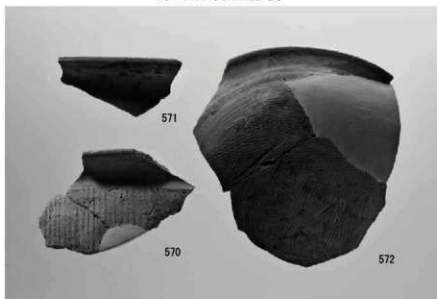
5区 出土土器 甗



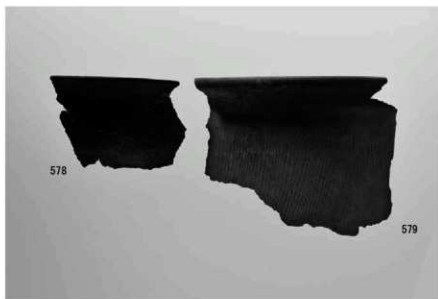
5区 S101 出土土器 甕



5区 S103 出土土器 甕



5区 S105 出土土器 甕



5区 SI06 出土土器



5区 SI10 出土土器 甕



5区 SK04 出土土器 甕



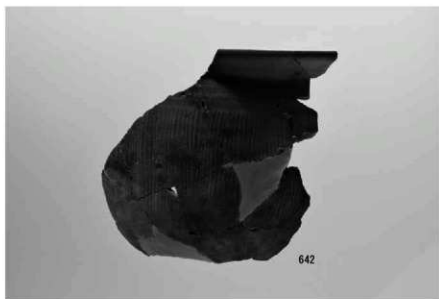
5区 SI14 出土土器 鉢



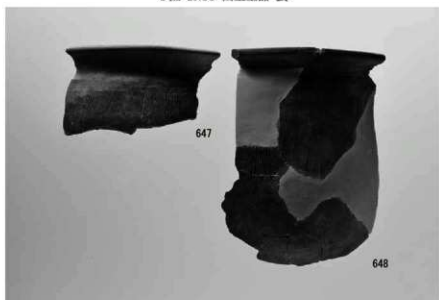
5区 SK01 出土土器



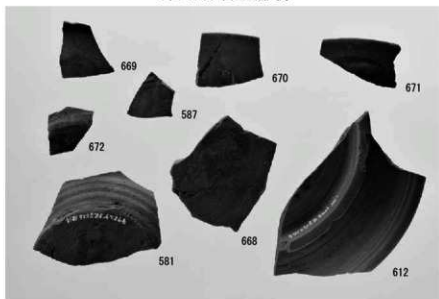
5区 SK08 出土土器 托



5区 SK03 出土土器 甕



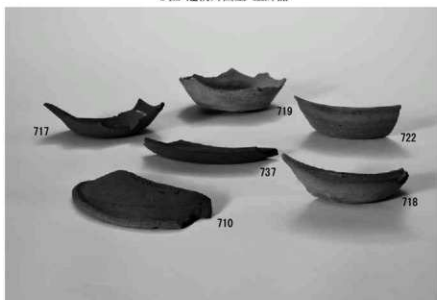
5区 SK05 出土土器 甕



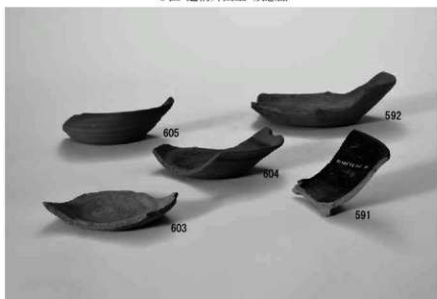
5区 出土 墨書土器



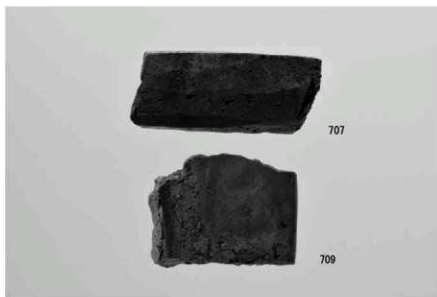
5区 遺構外出土 土師器



5区 遺構外出土 須恵器



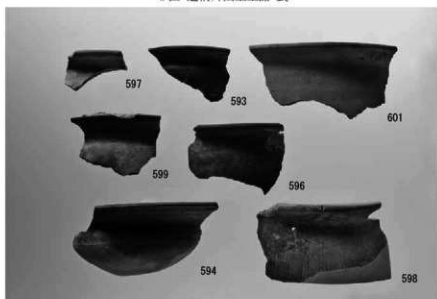
5区 遺構外出土土器



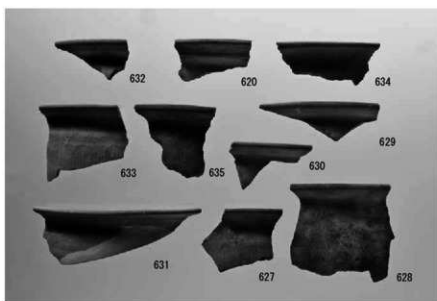
5区 支脚または甗の棧(No.707) カマドの底(No.709)



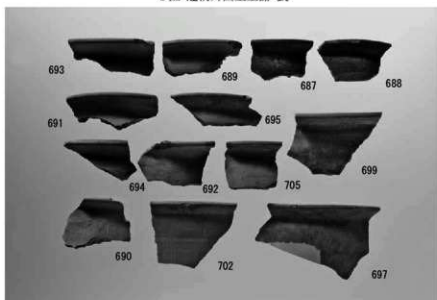
5区 遺構外出土土器 甗



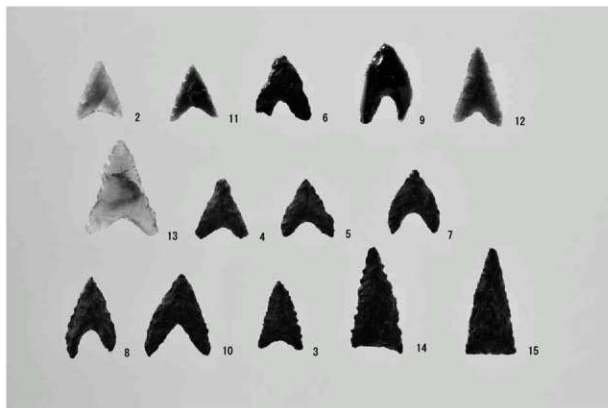
5区 遺構外出土土器 甗



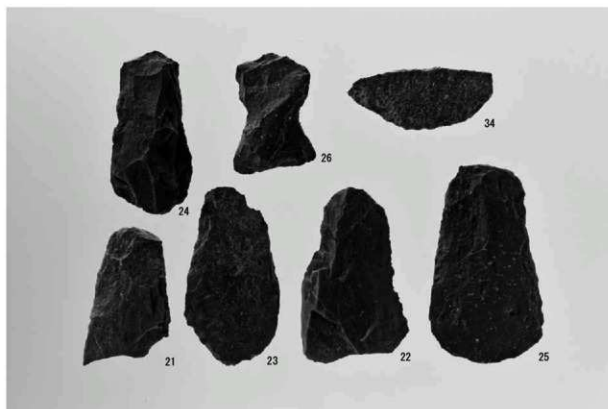
5区 道槽外出土土器 表



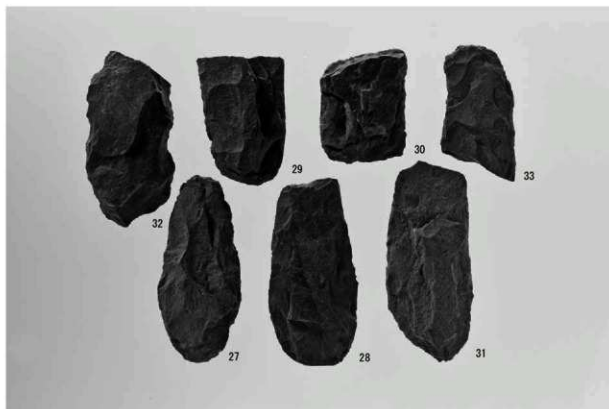
5区 道槽外出土土器 裏



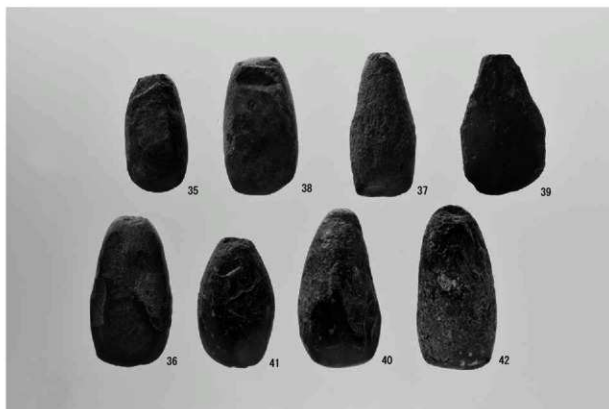
5区 出土石器 石鏃



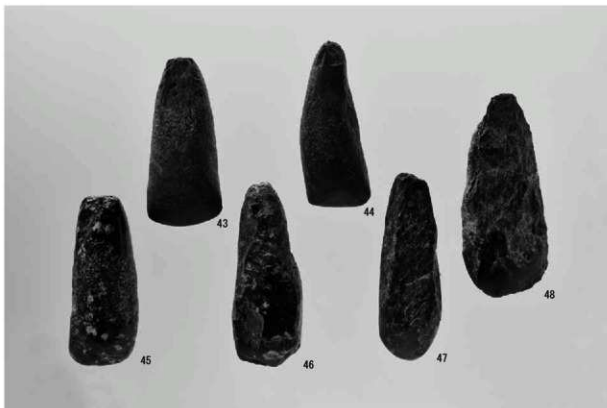
5区 出土石器 打製石斧



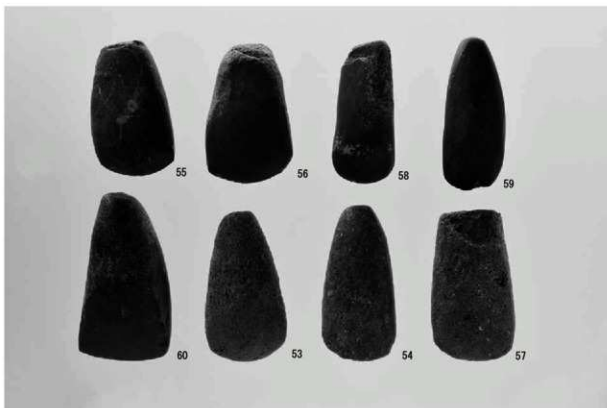
5区 出土石器 打製石斧



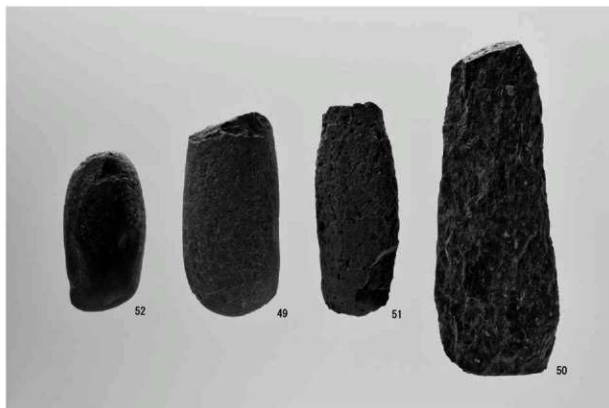
5区 出土石器 磨製石斧



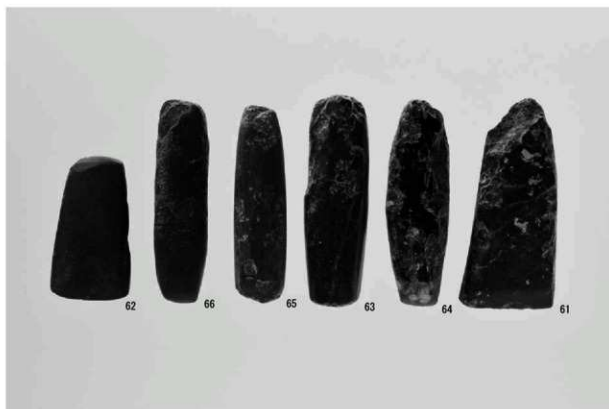
5区 出土石器 磨製石斧



5区 出土石器 磨製石斧



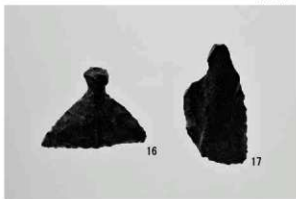
5区 出土石器 磨製石斧



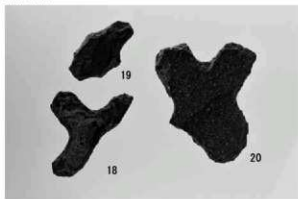
5区 出土石器 磨製石斧



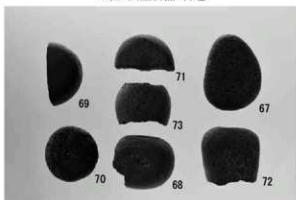
5区 出土石器 台石



5区 出土石器 石匙



5区 出土石器 十字形石器



5区 出土石器 磨石·敲石



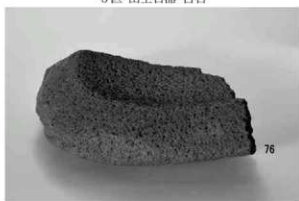
5区 出土石器 台石



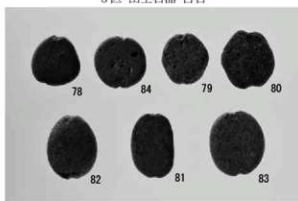
5区 出土石器 台石



5区 出土石器 台石



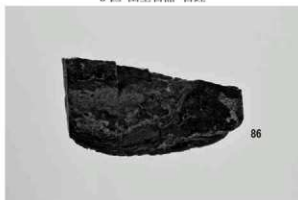
5区 出土石器 石皿



5区 出土石器 石锤



5区 SK32 出土石器 砥石



5区 出土石器 石磨丁



5区 出土石器 砥石

報告書抄録

ふりがな	たくまゆげいせきぐん
書名	託麻弓削遺跡群 2
副書名	白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (6)
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 331 集
編著者	坂井田端志郎 戸田紀美子 中川治
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒 862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号 TEL 096-383-1111 (代表)
発行年月日	2018 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
託麻弓削遺跡群 (調査 4 区)	熊本県 熊本市 東区	43201	677	33° 08' 48.1"	131° 12' 35.2"	20150309 ～ 20151009	1,890 m ²	記録保存 調査

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
託麻弓削遺跡群 (調査 5 区)	熊本県 熊本市 東区	43201	677	33° 08' 49.8"	131° 12' 22.8"	20150202 ～ 20160831	1,573 m ²	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
託麻弓削遺跡群	集落跡	縄文時代 弥生時代 古代	石組炉 土壇墓 竪穴建物 掘立柱建物 円形周溝遺構	縄文土器 弥生土器 打製石斧 磨製石斧 土師器 須恵器	

要約	<p>託麻弓削遺跡群は白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い記録保存を目的として発掘調査された遺跡である。当該調査区における主な成果を挙げる。</p> <p>縄文時代は主な遺構として石組炉 4 基、土壇墓 4 基を検出した。大量の縄文土器と磨製石斧、打製石斧等の石器類が出土している。</p> <p>弥生時代は主な遺構として竪穴建物 6 軒、円形周溝遺構 1 基を検出した。</p> <p>古代は竪穴建物 14 軒、掘立柱建物 1 棟を検出した。掘立柱建物への移行期とされる 9 世紀代のものと考えられる。</p>
----	---

熊本県文化財調査報告第 331 集

託麻弓削遺跡群 2

—白川河川敷甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (6)—

発行年月日 平成 30 年 3 月 31 日

編 集 熊本県教育委員会
発 行 〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
印 刷 ホープ印刷株式会社
製 本 〒861-8007 熊本県熊本市北区龍田弓削 1 丁目 4 番 12 号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第331集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：託麻弓削遺跡群2

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2019年8月30日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>